和田芳實著

石川啄木

―其生涯と藝術―

新しき明日の来るを信ずといふ
自分の言葉に
嘘はなけれど――

三芳屋書店

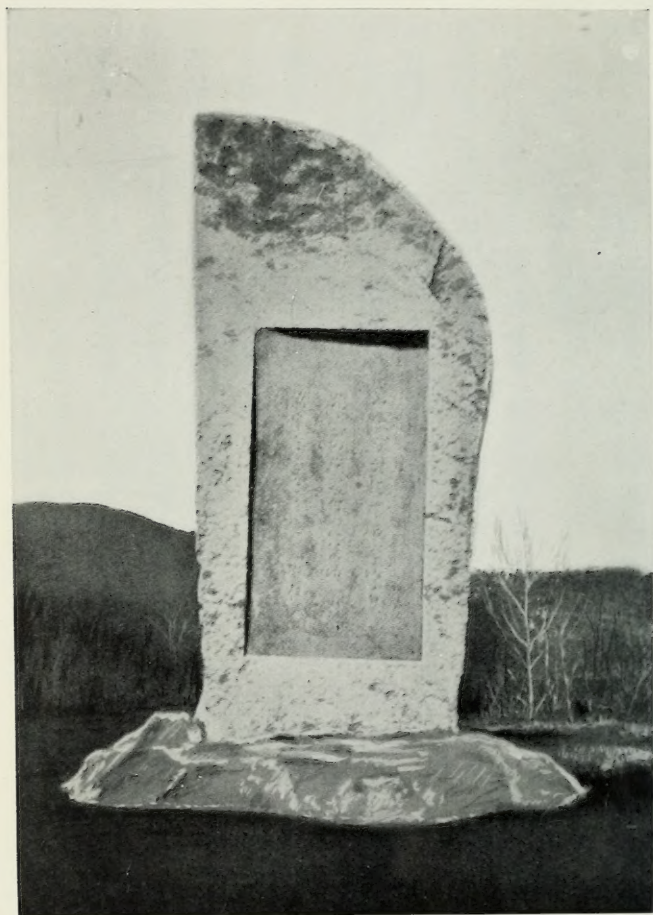
石川正雄序
和田芳實著

石川啄木

其生涯と藝術

東京 三芳屋書店發行

啄木夫妻

啄木歌碑

序

こんな序文があるかしら?

愚かしい俗人である私は、娑婆つ氣たつぷりなお世辭や、ゼスチュアを少しも使へない男なのだ。だからいつも失敗ばかりしてゐる。そんな私に序文を書けといふからには、齒に衣着せない、いや修辭や文法を無視した惡口雜言を、最初から覺悟のことゝ思ふ。そこでもう一遍いふと『こんな序文があるかしら?』なのだ。

啄木! 啄木!

その名の何と洪水のやうに流布されてゐることか!

私はもう食傷してしまつてゐる。下痢をしないのがせめてものみつけものである。そればかりか、最近の氾濫振りにはむしろ一種反感に近いものさへ抱いてゐる。そんな私に序文を書けといふのが大體無理な話だ。白狀すると、最初このゲラ刷をつきつけられた時、また啄木かといふ氣がした。そこへ追つかけて序文を書けといふのだ。何ともはや世の中

は皮肉なものである。世の中が皮肉なら、こちらもいつそ皮肉に出てやれ！こんな氣で引きうけたのが付け目に落ち目だつた。

ところが考へてみれば、私自身も最近啄木に關する愚書を公けにした。それが製本されて手許に屆いた時、しかし私はもう手にとつてみる氣がしなかつた。何といふ淺薄な内容であつたらう。はづかしい話だが、大きなことを言ひながら、一歩退いてみると、さきに本を出版した私がそれほどの貧弱さなのである。かう考へると、俗流に氾濫すればするほど、本當の啄木の姿は沒してゐるのではないのか。

著者和田芳實君といふ人は、どういふ人か知らない。またどんな動機で啄木を研究しだしたのかも知らない。しかし和田君が俗流にお調子を合はせて書きなぐつたものとすれば私はつばをひつかけたであらう。だがザツと目を通してみると、可成り忠實に啄木の足跡を辿つてゐる。してみると著者が俗流に阿諛したものとは思はれない。が、ザツクバランにいふと私はそれほどこの書を高くは買はない。とは言へ著者がこの俗流から啄木をはつきり描かうと努めてゐる眞意は買ひたいと思ふ。その意味で啄木ファンでありながら啄木

を知らない人などには大いに讀まれていゝと思ふ。それと同時に、著者の眞意がさらに第二の段階に及び、より完全な結實を示されんことを期待したいと思ふ。これは、この書をけなすのではなく、むしろ我々が啄木を知らないからなので、この書に對する期待は、却てこの後にこそあると思ふ。

書き了つて三度、

こんな序文があるかしら?

昭和十一年六月十八日

石川正雄

石川啄木――其生涯と藝術――目次

目次　終

緒　　言

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

石川啄木！　この名はいろ〳〵の意味で、われ〳〵の心を衝つ。僅か二十八年の短き生涯、その大部分をしめる痛ましい生活、それを通してわれ〳〵に呼びかける啄木のこゝろは大きく深い。また悲しみに滿ちてゐる。それはたゞわれらの若きこゝろの琴線をゆりうごかして、無限の愛惜と純情とを呼びおこすばかりではない。われ〳〵のこゝろを奮ひ立たせてゆく何かしらの力をも持つてゐるのである。

少くとも、文藝または人生に關心を持つ人びとにとつて、啄木の歌を愛誦しないものはない

であらう。また、新聞雜誌のどこかで彼の歌の一つでも見なかつたといふ人もないであらう。
そしてやがてその生涯を知る人はそこに純眞眞摯なる詩人の魂と、烈々たる人生鬪士としての精神とを見出す。そして啄木の心奧ふかくひそむ時代に對する高度な苦悶と、かてゝ加へて痛ましくおしかぶさる病苦と貧困とに、むしろ敬虔をさへ感ずるに至るであらう。

——長き夜を泣きあかした人ならでは眞に人生を語るに足りず、とは泰西の哲人の語であるといふが、啄木こそは實に長き夜を徹して泣き、短きその生涯を終つた人である。そしていさゝかも歪むことなしに正當に思想的成長をとげた社會思想家であり、時代に先んじて時代の惱みを惱んだ、もつとも高いところの詩人である。もつといへば——自己內部の對立と、世界の矛盾とに、身を以て眞實果敢に惱み、その晩年に於ては、ある打開された世界に立ち得た人であつたといつていゝのである。しかもあくまでも人間的な——強さ、弱さを持つてゐた。だからこそ却つてわれ〳〵に身近く感じられ、またわれらに希望を持たせ、鞭打ち勵ますところの大きな力を持つてゐるのである。

　實に啄木の印し來つた大きな足跡は、いまもつて現實に生きた問題を我々の前に提出して止まないのである。

さうして、その啄木がもつとも人々から共鳴を得てゐるのはやはりその短歌に於てなのである。「和歌といふ封建詩形の肉體の中に入つて行つて」これを中から改革し、「この古い詩形を現世的なものたらしめた點で（啄木は）見事な成功を收めてゐる。その成功は、或は啄木の藝術家としての全評價の、最も主要な要素をなしてゐはしないかと思はれるほどである」と秋田雨雀氏は述べてゐるのであるが、さういふ藝術的成功と共に（それなればこそ）啄木の短歌は、もつとも人びとから親しまれる。啄木には他に尙幾多の著作があるに關らず（特には優れたその詩）大衆のなかに滲み透つて行つたのは何といつても彼の短歌であつたのである。北原白秋でも島木赤彥でもそれに窪田空穗、與謝野寬、同晶子等がすべて新體詩から出發して皆がみな短歌詩人として成功してゐるやうに、啄木も、はじめ明星派の詩人として、浪漫的な作風を以て出發したのであるが、やがては現實にまともにぶつゝかつて一歩もたじろがぬ短歌をものするやうになつて、これらの短歌詩人をはるかにしのぐ親愛と共鳴とを大衆から持たれるやゝになつたのである。

かくして彼の短歌がもつとも人びとから愛され親まれてゐるのであるが、さて然らば何故にかく、前記の大家にもまして唯一人啄木だけ特に大衆から親しまれるのであらうか。

あるひとは最初に啄木の歌を見て「これが歌か？」とびつくりした。所謂長袖者流に「和歌」といふものを概念づけてゐた人はさう思ふかも知れない。しかし、やがて啄木の歌に眞實な人間の叫びを聞いて「これこそ本當の歌だ」と瞠目し、あるひはその短歌の中にまざ〳〵と僞らざる自己の姿を發見してとみに親愛をました者もあらう。あるひとはまたその浪漫性を愛した。そしてまたある人々は啄木の持つ進歩性の故に、正當に彼に學ぶところあらむとするのである。

では何故にかくさま〴〵の人たちによつてわが啄木は問題にされるのであらうか。そしてまた、そのやうな業績はいかなる生活環境と人と僞りから生れたのであらうか。

幼年、盛岡中學時代

出生と澁民村に於けるその幼年時代

石川啄木。名は一。明治十九年二月二十日、岩手縣岩手郡玉山村大字日戸の常光寺といふ寺で孤々のこゑをあげた。父を石川一禎といひ同寺の住職であつた。母を工藤かつ子といつた。もつともこの生年月日は戸籍上のことで實際はその前年の明治十八年十月二十八日に生れてゐたのである。

みちのくの、山ふかい國のさびしいお寺、そこで生れると間もなく、その二月には兩親が同じ岩手郡の澁民村寶德寺といふのに移り住むことゝなつたので、啄木もまた、父母と一緒に寶德寺に移つて行つた。そしてこゝの禪房に閑古鳥のこゑをきゝながら育つたのである。

啄木には二人の姉、さだ子、とら子があり一人の妹光子があつた。啄木は男一人であつたから兩親の愛情を身ひとつに受けることが出來、姉妹に對しても、母にさへも我儘いつぱいに、

自分の好きな眞似をして育つことが出來たやうである。

かにかくに澁民村は戀しかり
思ひ出の山
思ひ出の川

「一握の砂」

今日もまた胸に痛みあり。
死ぬならば
ふるさとに行きて死なむと思ふ。

「悲しき玩具」

かう啄木がなつかしがつた澁民村といふのは、盛岡から靑森街道に沿つて北の方に四里ばかりの所にある。戸數四百戸ばかりの村で前にはがつしりといかめしい岩手山が見え、後にはやさしい女神のやうな美しい姫ヶ嶽が眺められる。その間を北上川の淸らかな水が帶のやうにしづかに流れてゐるところである。

閑古鳥などがよく啼いて、喬木が育つた禪房からその聲をきくことが出來た。さびしいが、しづかな村である。

閑古鳥――

澁民村の山莊をめぐる林の
あかつきなつかし

「悲しき玩具」

ふるさとの寺の畔の
ひばの木の
いたゞきに來て啼きし閑古鳥！

岩手山
秋はふもとの三方の
野に滿つる蟲を何と聽くらむ

「一握の砂」

かつて、(昭和二年)尾山篤二郎氏は此處を汽車で通り次のやうに歌つてゐるが、よくその狀景を表現し得て、なつかしく啄木のことを思ひ出させてくれる。

姫神をやさしみ見つつ桔梗のむらがりさける野を過ぎにけり
秋草の八千草みだれさく見れどこゝに花摘む人影もなし
澁民の村の街道かなたに見ゆ馬一つ通るほかに者ゆかず
岩手のや好摩が驛に汽車はとまれど人降りず乘らず空しく出でぬ

「姫神」がすなはち姫ヶ嶽である。
「好摩驛」は啄木自らも

停車場の
霧ふかき好摩の原の
朝の蟲こそすゞろなりけり　「一握の砂」

と歌つてゐるところで、澁民村から一里ばかりの驛、こゝで降りて澁民村へゆくのであるが「人降りず乘らず空しく出でぬ」いまでもさびしい北山國の小さい停車場である。

馬一つ行くだけの、たゞそれだけの澁民街道、そこに幼年啄木は神童と呼ばれる聰を輝やかしながら昂然と生ひ立つていつたのである。

大形の被布の模樣の赤き花
今も目に見ゆ
六歳の日の戀　「一握の砂」

六歳の年の（明治二十四年）春、啄木はおてびの小さいからだをして澁民村小學校へ入學した

小學校の首席を我と爭ひし
友のいとなむ
木賃宿かな

千代治等も長じて戀し
子を擧げぬ
わが旅にしてなせしごとくに

から歌つてゐるやうに工藤千代治氏（この人は後に村長になつてゐる）と席次を爭ひながら二十八年の三月には小學校をたうとう首席で卒業した。この工藤氏には後、三十九年、再度の上京につまづいて歸郷し、啄木の所謂（故山澁民村の林中生活）がはじまつたとき、厚い心をもつて米鹽の資を受けるやうになつたのであるがそれは後に書く。

その四月に盛岡の町にでゝそこの高等科に入つた。當時未だ田舍の村には小學校切りしかなかつたので。そしてそこで高等科四年生にゐた金田一京助氏（文學博士、アイヌ語の權威）と初めて相識つたのである。これより以後、十七年間啄木がその短き一生を終るまで、氏を措いて啄木の生活を考へることが出來ない程緊接な關係を結ぶに到つた金田一氏と、かうしてはじめて同じ學校に學ぶ奇しき緣が生れたのである。

次に金田一氏が最初に、啄木に會つた折の少年啄木を知る上にもつともいゝ文章があるので少し長いが引用しよう。「最初の印象」といふのである。

「私が、君を始めて見たのは、君が初めてこの美しい家郷（澁民村のこと）をあとに、笈を負つて盛岡市の高等小學校へ上つて來た、君十歳、私十四歳の、幼な同志の頃だつた。指を折ると、それは明治二十八年の春、多分、四月一日の新學年の始の日であつたと思ふ。中津

河畔の市立高等小學の四年級だつた私が、この日、校門の少し手前で、仙北町から通學する同級の澤田恭次郎、阿部哲三、小林喜四郎などの諸君に逢つたが偶々その人達へついて一緒に來る一人の可愛らしい子供を見た。

見たところでは、六つ七つの子供と見違へさうな、如何にも子供らしい、小さな、左右の頰ぺたと、おでこが柔かに盛り上つて、ゴム人形の面立ちそつくりな、併し牛乳色の肌細なくる〳〵つと圓い目をしばたゝく可愛らしい子供だつた。

私は、心の中で、どこかの尋常校へでも上る子供が、途中まで連れて來て貰つてゐる所だらうと考へた。併し、そんな風もなく、何處までも、吾々の校門の方へ近づいて來て、やがて校門を入らうとするから、私は小さい聲で阿部君へ聞いて見た。

『この子は? 高等小學校なの?』

心で『まさか』と思ひながら。

すると阿部君が、大笑ひをして、かう云つたものだ。

『うゝん、この人は幼稚園へ上るのを間違つて此處へ來たの』

私は『道理で』と思つた。が、その子は、首と體を一體に振つて、いや〳〵をして、阿部君

へすねてむづかつてゐた。阿部君は、にや〳〵笑つて面白がりに、から云へた。

『此の人はな、乳母要らず（ゴムの乳首を取附けた牛乳壜のこと）から、やつと放れて來たの』

「やあ！」と私達が笑ふと、その子は、捉まつてゐた阿部さんの腕を引張つたり、胸へ飛びついて顏を打つたりした。

『名は何といふの？』

と、私がはたの澤田君か、小林君かへ尋ねたら、阿部さんが、かゝられ乍ら尙も、

『名前は、石川一ツこ樣、一名ふくべツこ樣』

といつて逃げ出した。怒つてあとを追ひかける一さんは、成程丸々肥えた青瓢簞の可愛い地肌を想はせる所があつたからだ。私達もわあ〳〵笑つて一緒にあとに附いて駈け出した。

「乳母要らずからやつと放れた……」だの、「石川ふくべツこさん」だのと云つて、からかつて逃げるものだから、順々にみんなへ飛びついてかゝつて行く。誰かへかゝつて行くので、私の前をすれ〳〵に横ぎる途端、それまで純然たる傍觀者でゐた私も、何かやぱつりからかひたくなつて、と云ふよりも、私の指がむづ〳〵してさはつて見たい誘惑に乘つて、ぽつちや

りしたその兩頰の上に、おつかぶさるやうに載つかつてゐる白い丸いおでこへちよいと人ヲ指の指頭をさはつた。同時に

『此のでんびこ！』（おでこの意）

と覺えず云つたものだつた。

すると、幼い石川君は、他の友達を追ひかけるのを止めて圓い目をくる〳〵ツと私へ轉じ下唇を嚙んで左右の糸切齒を覗かせながら、蒼然と私へかゝつて來たのだつた。

私の方では勞はる氣があるのに、向うは眞劍なものだから、私はたぢ〳〵となつて、ぐん〳〵あとへ厭されて、大勢の子の見る前で、到頭、溜りの壁まで押されて行つた。背中が壁へぴたりと着いて、もうあとは行けないのに、それでも、拳固をかためて、厭すやら衝くやらすることを止めないものだから、あばら骨やお腹のあたりが拳固で少し痛かつた。

『おや〳〵、赤ん坊の樣な子だが、割りに手齒いところのある子だな』

と、少し興さめたのが、私のその時の正直な印象だつた。而も此が私の、石川啄木に對する第一印象であつたのである。」（金田一京助氏著「石川啄木」）

以上、長文を引用したが、十歳の少年石川啄木の當時の樣子が眼に見えるやうではないか。

盛岡中學時代

さて、三十一年には盛岡中學へ入學する。(十三歳)つぎの年の夏には、はじめて義兄を頼つて東京見物に行つてゐる。

己が名をほのかに呼びて
涙せし
十四の春にかへるすべなし　「一握の砂」

中學生時代の啄木は背も伸びて、小倉服がよく似合ふ、すらつとした、若々しい色白な、たれが見ても、チャーミングな美少年になつた。長目のズボンの先を、ぱつ〱と蹴立てながら颯爽と活歩する少年啄木。

花散れば
先づ人さきに白の服着て家出づる
我にてありしか　「一握の砂」

晴れし空仰げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きてあそびき

夜寝ても口笛吹きぬ
口笛は
十五の我の歌にしありけり

そんな年頃の啄木の希望は、もつぱら若き海軍士官たるにあつたのだ。

軍人になると言ひ出して
父母に
苦勞させたる昔の我かな　「悲しき玩具」

うつとりとなりて
劍をさげ、馬にのれる己(おの)が姿を

胸に描ける

當時、盛岡中學には軍人熱がさかんで、啄木の上級生には、今の米内光政中將（横須賀鎮守府司令長官）原敢二郎中將、八角三郎中將、小森吉助中將、及川古志郎中將（元兵學校長現第三艦隊司令長官）など多士濟々たるものであつた。もし啄木が、その夢のごとくに海軍々人になつてゐたらどうであつたらうか？　われ／＼は空想好きの啄木にならつてさう空想してみるときがあるのである。

かういふ啄木十四歳のときであつた。彼の抑々の初戀の囁きがいと甘くかはされはじめたのは。――

啄木はそのころ、長姉定子さんの嫁ぎ先である田村氏方（盛岡市帷子小路）に下宿してゐた。さうして「夏合せ垣根つゞき」に住んでゐた少女と知り合ふやうになり、その、どこかしつかりしたところのある少女と、やがて戀の美酒の香をかぎあふ仲となつたのである。

わが戀を
はじめて友にうち明けし夜のことなど

思ひ出づる日

少女の名は堀合節子さん（當時十三歳）後の啄木夫人である。

この節子さんは、盛岡唯一のミッション・スクールに入學したのであるが、吉田孤羊氏の記すところによれば、作文が得意で、或るときなどは「ひとりしづかな月光流るゝ林の中を歩いてゐるとどこからともなく優しい口笛の音がする。何氣なく振り返つてみるとそこには一人の美しい青年が佇んでゐた……」といふやうなことを書いて評判になり友達から囃立てられたことや、また、節子さんやその友達と遊民村で隠れん坊をしたとき、啄木と節子さんとが手を握り合つてゐたのが見付かつて騒がれたことなどもあつたといふ。

　茨島の松の並木の街道を
　われと行きし少女
　才をたのみき

と啄木が歌つてゐるのは、さういふ女學生のことであつたらう。茨島といふのは盛岡郊外にあつて、そこへ啄木たちはハイキングに出かけたのであつた。

節子さんはヴアイオリンなどをひいてどつちかといへばモダンなひとであつたらしい。（後に

啄木は詩集「あこがれ」を出版し、それと同時に一家を扶養しなければならないやうな事情になつて東京から歸郷するとき、與謝野寛氏から餞別に貰つた十五圓全部投げだして、節子さんのためにヴァイオリンを土産に買つて歸つた）

わが妻のむかしの願ひ
音樂のことにかゝりき
今はうたはず　「一握の砂」

二人のこのやうな戀は、何事にも熱意を持たずには居られなかつた啄木と、氣持のしつかりした節子さんとによつて、この少年の日の戀も幾多の困難を（特に堀合家の反對を）のり越えて遂に成就することが出來たのである。

かくばかり熱き涙は
初戀の日にもありきと
泣く日またなし

後では

先んじて戀のあまさと

かなしさを知りし我なり

先んじて老ゆ

と嘆息を洩らしてゐるが、しかし若い情熱に滿ち〳〵た初戀は、實に啄木十四歳の少年のとき、もう萠えそめてゐたのであつた。

明星發刊と啄木

啄木がさういふ少年時代を迎へたころ、一方、東京に於ては和歌革新の運動が盛になつてゐた。和歌革新運動といふのは、大體、明治二十六年、落合直文氏が「淺香社」を創立してからのことであるが、この頃になつて、「百花が一時に咲き、群雄一時に起つたごとき壯觀を呈したのであつた」（齋藤茂吉氏「明治大正短歌史概觀」）すなはち佐々木信綱博士の主宰する竹柏會、正岡子規子の根岸短歌會（子規は三十一年二月、「日本新聞」に有名な「歌よみに與ふる書」を發表して、短歌革新に對する火のやう言を吐き、その第一歩を踏み出した。）それから與謝野寛（鐵幹と號した）の新詩社、その外、久保猪之吉のいかづち會、または若菜會などの運動がそれであつた。そしてその中でも、「若々しい高鳴る浪漫的氣分」によつて一時代を風靡し、青年子

女のあこがれの的ともなり、新派和歌運動の主流の觀があつたのは、新詩社より出た雜誌「明星」であつたのである。
その「明星」が發刊になつたのが、明治三十三年四月一日。啄木が中學三年（十五歲）になつたときであつた。
この東京の風潮は、はるかなみちのくの山村の、感激に富んだ少年たちにも及んだ。そしてそのころ盛岡中學校には一方に、今の大衆作家、野村胡堂（當時菫舟）氏を中心として、日本俳句の團體「杜陵吟社」の人々によつて出されてゐた文藝雜誌「六〇五」といふのかあつたがその根岸派の短歌と、この新らしく風靡してきた新詩社の明星派ロマンチツク短歌とが生徒たちによつて激しい論爭を捲き起すといふやうなことにもなつた。
啄木は「明星」を金田一氏から借りて讀んだ。金田一氏はそのとき啄木に「いつたいわかるのか知ら?」と驚いたといつてゐるが、啄木はまだそれほどあどけない樣子が拔けてゐなかつたのであつた。
啄木は、その前にも與謝野寛氏の「天地玄黃」「東西南北」などを及川氏から借りてよんだのであつたが、「明星」を讀むとすつかり影響されてさかんにその模倣歌を作るやうになつた。

そして間もなく啄木は新詩社へ入社したのであるが、その當座は、作る歌も作る歌もみな、字句を眞似たやうな模倣歌だつたのでいつも沒書になつた。それで入社したことも誰にも云はないでゐたのである。

勝氣な啄木は、しかし、沒書になりながら却つて熱心になつた。そしてやがて自分で回覽雜誌を作つたりして（そのときは「翠江」と號した）ます〳〵熱心になり、歌を作り、書（ほん）を讀みはじめたのである。

すると、啄木はほとんど夢中なくらゐであつた。凝り性の彼は熱情を傾けつくすところがあつた。本を讀んで深更に及ぶことも珍らしくなくなつた。そんな翌日は學校から逃げて寝にゆくといふ風で、學業の方はだん〳〵怠りがちになつていつた。

教室の窓より遁げて
たゞ一人
かの城址に寢にゆきしかな　　「一握の砂」

不來方（こずかた）のお城の草に寢ころびて

空に吸はれし
十五の心

城址の
石に腰掛け
禁制の木の實をひとり味ひしこと

節子さんとの戀はます〳〵たかまつて、啄木は、學校へいつても「石に腰掛け」て「禁制の木の實」であるその戀をひとりうれしく味つてゐたのである。

「ユニオン會」とストライキ

「ユニオン會」といふのが出來たのもこのころの事であつた。啄木は英語が好きであつたが、その英語の先生が不足して學課が進まなかつた。それで啄木らが集まつてこの「ユニオン會」を作り、ユニオンリーダーの四を勉強したのであるが、だん〳〵、その勉強が終ると、夜晩くまで、好きな文學藝術を論じたり、人生を語つたりするやうになつた。そしてやがて　それは一

つの勢力となつてクラスの主動力をなしていつた。そこには阿部（級長）小野（副級長）氏などの温厚な秀才が表面に立つて、奇策縦横な啄木は裏面にゐて「ユニオン會」を牛耳つてゐた。それがたうとう、三十四年の二月には校長はじめ全部の先生を辭めさせるやうなストライキ事件を勃發させてしまつたのである。

このストライキは先生間の暗闘に乘ぜられたといふかたちもあつたのであるが、啄木はその先頭に立ち、持前の才智と奇策でさかんに活躍をした。結局、それは成功して、生徒達は一人の犧牲者を出さず、試驗なしに進級することができた。先生の方は校長はじめ全部（書記一人と圖書の先生だけ殘して）免職といふことに結末をつげた。

自が才に身をあやまちし人のこと
かたりきかせし
師もありしかな

この猪川先生といふのは土地の漢學者で、倫理の先生であつた。この先生などが「古い」といふので新しい好きの生徒たちに排斥を食つたわけなのだ。

おどけたる手つきをかしと

我のみはいつも笑ひき
博學の師を

教頭のこの下河邊理學士などは、ストライキに手のつけやうがなく、どうにも困つたらしい。

よく叱る師ありき
髯の似たるより山羊と名づけて
口眞似もしき

富田小一郎先生といつてユニオン會同人級の主任であつた。三十三年の夏休みにユニオン會同人はこの先生と盛岡から一ノ關を經て釜石の方へ旅行に出かけたことがあつて、そのとき啄木等は、亂暴狼籍をはたらいて、溫厚なこの先生を泣かせてしまつた。

夏休み果てゝそのまゝ
かへり來ぬ
若き英語の教師もありき

先生仲間の暗鬪がもとで、英語の先生は夏休みが終へても歸らなかつた。それが「ユニオン會」が生れるそも／＼の原因だつたのである。

後年、啄木は苦しく痛められた生活のなかから想へば、さうした少年時代の氣負ひすら限りなく戀しく、なつかしく省みられてならなかつたのであらう。

ストライキ思ひ出でゝも
今は早やわが血躍らず
ひそかにさびし　「一握の砂」

盛岡の中學校の
露臺(ばるこん)の
欄干(てすり)に最(も)一度われを倚らしめ

と歌つてゐる。

尚、同じころを回顧して詠んだものに、

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

學校の圖書館の裏の秋の草
黄なる花咲きし
今も名知らず

今はなき姉の戀人のおとうとゝ
なかよくせしを
かなしと思ふ

解剖せし
蚯蚓のいのちもかなしけり
かの校庭の木柵の下

などがある。

かういふストライキなどを經て、いよ〲學業の方はおろそかになるばかりである。讀むものは、詩、歌、文學藝術の書、人生、思想に關するものゝみであつた。

師も友も知らで責めにき
謎に似る
わが學業のおこたりの因（もと）

「爾伎多麻」發行

さうしては回覽雜誌「三日月」（三十四年五月）「爾伎多麻」（同九月）を編輯したり、その誌友會を開いたりした。當時どんなに意氣込んでゐたか、次のやうな手紙を金田一氏宛に書いてゐる。

「御轉宅の儀むかしならばお祝ひ申上べきの所に候へども、急はしき世の中、今度より廢し申候。

小生も一昨日轉宅仕候。この度は猪川さんらに近くて嬉しく候。「にぎたま」の一號は來る十五日までに發行の筈、猪川兄の和歌論出る筈に候。公選の結果編輯人五人あり候へども瀬川君の外奮發する人なく、緩方の小生目がまはる樣に候。「六〇五」は十七日に出る由に候表裝の競爭する筈に候。校友會雜誌は十月廿五日原稿締切、今度はなにか出すべいかと考へ

居候。山邊君らの「東雲」昨日出来候。鶴、雛の巻二冊、何れも百二十枚許り、讀んであきれ候。「にぎたま」にて批評せんと思ひ居候。熱心なところ感服と申すべく候。

去る六日誌友會を津志田にて開き申候。南瓜會は二三度やり候。此内に定期演説會ひらく答。落梅集、明星、面白く候。この内に長い手紙差上べく候。亂筆御免。

若し逢ひたらば田子さんへよろしく。

この手紙は十月八日に出したもの。これによつて當時の様子がよくわかるのであるが、その猪川さんといふのは箕人といつて「六〇五」の同人であつた人。瀬川君とあるのは後に啄木らと「白羊會」を組織した草外氏(花鈴)、田子さんとは後の代議士田子一民氏で、氏は金田一氏と同級であつた。金田一氏は當時中學を卒へて仙臺の第二高等學校へ入つてゐたのであつた。移轉といふのは新山小路から田村氏方が四ツ家町二十七番戸へ移つたそれをさしてゐる。尚田村氏は翌月再び仁王小路三十番戸へ移り、啄木も一緒にそこへ住むことゝなつた。

その「爾伎多麻」に啄木は「秋草」と題する晶子調の歌を三十首載せてゐる。少し錄してみる。

さゝかにのそれより細き夢の糸たどるもよしな詫びしれし今
世も人ものろはじさては怨みまじ理想のくものちぎれにし今
見ずや雲の朱むらさきのうすれ〳〵やがて下りくる女神のとばり
聖歌日にほゝゑみうたふ若き二人二十歳の秋の寂しさをいはず
火かげあかき御殿の戸ほそゝとあけて琴ひくみ手をうかゞひよりぬ
二十と廿を懸想になきし人二人江の東に曉の月見る
紅ふくむみ袖やおもきらふたげのたけのくろ髪おばしまの君
ゆりのそのにふと見てゑみし人よその紅絹の袖口たゞ紅かりき

こんな風で、すつかり晶子夫人の模倣にすぎなかつたが例の才氣をもつてさかんに作つたのである。

それ以前、金田一氏が仙臺に發つ時、その別れの歌會を開いたことがあつた。題は「水十首」「藤十首」でそのとき啄木は

あめつちの酸素の神の戀成りて水素は終に水となりにけり

と詠んですましてゐた。みんなはおかしいのでクス〳〵笑つてゐた。ところがその時、啄木は金田一氏に次いで次點をとることが出來て非常に喜んだ。

そして、さういふことによつて啄木は、歌といふものに對して自信を持つことが出來るやうになつたといふことである。

神有りと言ひ張る友を
説きふせし
かの路傍の栗の樹の下

西風に
内丸大路の櫻の葉
かさこそ散るを踏みてあそびき

愁ひある少年の眼に羨みき
小鳥の飛ぶを

飛びてうたふを
かぎりなき知識の欲に燃ゆる眼を
姉は傷みき
人戀ふるかと

その姉、さだ子さんの家に、啄木は知識慾に燃ゆる眼を光り輝やかせながら懸命に文學書類（萬葉集などをも）讀破した。

一方では、節子さんとの戀はますく熱して來て、十間もあるやうな手紙をやり取りするやうにもなつた。そして無邪氣な啄木はさういふことをあからさまに友達に話すので「ユニオン會」の同人なぞはその戀の甘さによく當てられたものであるといふ。

瀬川氏もその一人でその當てられた例を吉田孤羊氏の文から引用してみやう。

――たしか氏が（瀬川氏）が四年生時代のこと、ある日啄木の下宿に遊びにゆくと、啄木は得意滿面で「おい瀬川君、今机をあけて見たらこんなものが入つてゐたよ」といつて眞ツ赤な太いリボンで作つた香水の匂ひのプンくする一枚の栞を大事さうに指に摘みとげて見せた。

それは啄木の講釋に依ると、彼の留守中に戀人の節子さんが訪ねて來て、机の中へこつそりその手帋の束を隱して行つたのだらうとのことだつた。瀨川氏は呆れてポカンとしてゐると、彼は更におつかぶせて「時に瀨川君、僕には戀仇が一人あるんだよ。君も知つてゐる同じクラスのAさ。あいつせつせと彼女に戀文を書くらしいんだが、てんで受けつけないんだよ。その證據にはあいつの書いた極めてまづいラヴレッタアがいつも彼女を素通りして僕へ廻つて來るんだ。どうだい瀨川君！」とまるで自分のことのやうに嬉しくなつてゐる瀨川氏をすつかり煙に捲いたさうである。」（吉田孤羊氏著「啄木を繞る人々」）

瀨川氏は啄木より一年下の級にゐたのであつた。

その年の冬である。有名な足尾銅山の鑛毒事件が起つた。この鑛毒事件といふのは、明治社會史上特筆すべき程の事件なのであるが、銅山から流す鑛毒によつて土地の田が全滅に瀕し、農民死活の問題としてときの議會に田中正造翁などが大奮鬪した事件である。この事の起るや啄木らの「ユニオン會」同人は、すぐに號外賣りをやつて、その金を義金し、これを送つたのである。この時には、たま〳〵、八甲田山に雪中登山をこゝろみた兵士が凍死した事件があり

それで號外がよく賣れた。

夕川に葦は枯れたり血にまどふ民の叫びのなど悲しきや

すでにさういふ社會的な行爲をしてゐた啄木らであつたのである。

白羊會

三十五年一月、啄木は盛岡の水月亭といふ料亭で「文庫」の誌友會をひらいた。(「文庫」は二十八年八月「少年文庫」を改題したもので山縣五十雄主宰、のちに高瀨文淵、田岡嶺雲、久保天隨らが編輯して東京から出たのである。同人に、伊良子淸白、小島烏水、千葉龜雄、瀧江秋曉、鮫島大浪、河井醉茗などがあつて、當時明治詩壇の權威ある投書雜誌をなしてゐたのである。)その頃啄木は「麥羊」と號してゐたが、さういふ活動ばかりしてゐて學課の方はいよいよ怠り放題であつた。それでもこの時は餘り下の方でもなく五年に進級することが出來た。

五年になると、丁度盛岡中學校へ赴任して來た新詩社の大井蒼梧氏を推戴して「白羊會」といふのを組織した。同人に、瀨川深(花鈴)、小林茂雄(花鄕)、岡山儀七(殘紅)氏等がゐた。次にその「白羊會」の詠草と校友會雜誌に啄木が載せてゐた歌を抄してみやう。(啄木は「白蘋」と

いつた)

讀書

夕川に葦に枯れたり血にまどふ民の叫びのなど悲しきや

彫刻

曙に春のなごりののみの香や奈良の木立に人思ひあり

光明

東雲の光に見ずや常春の春の榮の金矢の命

花瓶

赤染ひき花瓶抱きて過ぎにけり弘徽殿春の通廊の背

古城

沼近き古城のほとり草枯れて小笛銹びたり黄昏の宿

日記

わなゝぐに故問ふ君よ情あらば耳かし給へ日記の戀歌

月

夕風に稲穂ゆするゝ芒原芒が葉末に月は出にけり

（以上「白羊會詠草」より）

夕雲に丹摺(にずり)はあせぬ湖(うみ)ちかき草舍(くさや)くさはら人しづかなり

甍(いらか)射る春のひかりの立ちかへり市(いち)のみ寺に小鳩むれとぶ

旅は君、胸のわかきにふさはずよ、みだれて雲の北にとき夢。

しゆる鞭(むち)の亂れ心を琴にふみて朧き響に果敢な雲見る

（「盛岡中學校々友會雜誌」より）

秘めし香のもれ來(く)る音か白鳩の露ふく息(いき)かこの四つの絃(いと)

潔よく我身即ち君かとも相倚る百合(ゆり)ぞ白う咲きし世（ひとへ送れるうち）

（「白羊會十首集」より）

この頃はいよ〳〵交友も盛になつたが、特にこの年の夏休みに澁民村に歸省した啄木の家には毎日毎夜その同人達が集つた。禪房はその送迎にめまぐるしい日が續くといふ有樣であつた。八月五日には小林茂雄氏ら四人を迎へ、（その翌日は瀬川氏も來る）ほとんど夜通し大騒ぎをする。さういふ賑やかな交友が夏中つゞいて、たうとう年末までの豫定の米を殘らず食べ盡し、

禪房の裏の畑を空つぽにしてしまつた。といふやうな笑へない喜劇まで出來たのである。
そのやうに、小林氏が啄木の家へ毎日遊びに行つてゐるうちに、氏は啄木の妹光子さんに、淡い中學生らしい戀ごゝろを感ずるやうになつた。さうして盛岡へ歸つてからは二、三度手紙を光子さんの許へ書いたりした。
だが、この淡い〳〵夕月のやうな少年の戀はそれだけであつた。後で啄木は光子さんからその事を聞いた。

近眼(ちかめ)にて
おどけし歌をよみ出でし
茂雄の戀もかなしかりしか

「一握の砂」

啄木は自分の熱い潮のやうな戀に較べて思つたかも知れない。「茂雄の戀もかなしかりしか」これは悲戀とかさういふ意味ではない。少年時代を甘く懷しんでゐるのである。この小林氏はいまは醫學博士になつてゐる。

さういふことがあつた三十五年の夏あたりまでが――節子さんは友達を尋ねるといふことにかこつけて夏休みには澁民村まで啄木に逢ひに行つたり、白羊會の賑やかな交友が日に夜を次いだりしたこのころまでが、思へば啄木一生の「返らぬ日」若き歡喜の絕頂であつたのである。
何故といふならば、この年の十月、かくまでに樂しかつた中學生々活を、學費が續かなくなつたといふ理由で止めねばならなくなり、止めて華やかな希望を持つて上京するや、そこには、純情の詩人が思つてゐたやうな世界ではなく、もう後年の啄木の痛ましい生活の、その序幕がすでに、そこには待つてゐたのであつたから。
だから、のちに、その痛ましい生活から、啄木はこの中學時代をどんなに戀しくなつかしく思ひ、詮なき思鄕の念にかられたか知れないのである。
歌集「一握の砂」の中

病のごと
思鄕のこゝろ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

にはじまる「煙」一、二、の数十首の短歌は、みんな、このやるせないほど懐しい少年時代への切々たる追慕の情を歌つたものである。

そこで啄木は、師を思ひ、友をしのび、自分の若さを惜んだ。はては

　その昔
　小学校の柾屋根に我が投げし鞠
　いかになりけむ

とボール一つの行方にまで追憶はながれてゆくのであつた。もちろん、その鞠はいまはある筈もない。だがその鞠がどうなつたらうかと、そんなことまでありありと想ひ出してゐるところに、啄木の心はさながら少年の日に返つて限りなきなつかしさに浸つてゐるのである。

また、

　ふるさとの

かの路傍のすて石よ

今年も草に埋もれしならむ

と歌ひ、

わかれをれば妹いとしも

赤き緒の

下駄など欲しとわめく子なりし

とたつた一人の妹、光子さんをいとしがつてゐるのであつた。

まことに、この時代、この若き日こそ啄木にとつては特に忘れ難いものでなければならなかつたのである。

上京――澁民禪房時代

第一回の上京と東京生活

三十五年十月、第三「明星」五號に啄木ははじめて短歌一首が、白蘋の名で載つた。

血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひこゝに野にさけぶ秋

といふのであつた。がこの少年の感傷が、何か啄木の未來を暗示してゐるやうに思はれるのである。啄木はつひに「さすらひ」ながら、一生を「野にさけぶ」人で終つたことをおもへば、この最初に「明星」に載つた歌の感傷は、單に少年の詩的空想とのみは、啄木に限り思はれないやうな氣もするのである。

あの白羊會同人との華やかな一夏を送つた三十五年の秋十月、啄木は卒業を間近にして中學を中途に退き、單身上京する決心をしたのであつた。この間の事情は金田一氏編の年譜をみると、次のやうに誌されてゐる。

『――此月(十月)中學を半途退學して上京を決意す。或は學費が無くなつたから「面倒臭い何も中學位、卒業しなくたつて俺は立つて行ける」と豪語して飛び出したものだつたとも云ひ、或は代數をなまけて落第點をつけられたのに業を煮やし、折柄友人金子君、小澤君などの相繼ぐ出京に促されて飛び出したものだつたともいふ』

恐らくその兩方が原因であつたのであらう。そして啄木にとつて中學生活などは馬鹿らしく思はれまた自分自身の生活ぐらゐ何のことはないと思つたのであらう。それより以上の野心を抱いて居つたのであらうと思はれる。

さういふ野心、聽ては文壇に雄飛しやうとの希望を底に持つて、啄木は十月三十日の朝寒い九時、澁民村の懷しいあの禪房を後にした。その晩は盛岡で「ユニオン會」同人と別れの宴を張り、三十一日には記念寫眞を撮つていよ／＼その夕方盛岡發出京の途についたのである。

その「ユニオン會」の送別寫眞といふのを見ると啄木は紋付羽織袴で悠然と例の肩をそびやかしてやゝ斜めに構へ、その右側に阿部修一郎氏が啄木の方を向いて小倉服の姿でニコ／＼してゐる。そのまた右が小野弘吉氏、その後に二人立つてゐるのが、伊東圭一郎氏と小澤恒一氏である。

阿部修一郎氏は中學へ入るときも啄木を越して一番で入り、その後もずつと首席で通した秀才であつた。さういふ模範生であつたから、のちに啄木が困窮して先輩知友に不義理を重ねるやうになつたとき、阿部氏はこれを憤慨して啄木を「ユニオン會」から除名すべし、さうでなかつたら自分が身を退くと強硬な態度をとつたことがある。これは氏らの立場として是非もないことであつた。

その後に我を捨てし友も
あの頃はともに書(ふみ)讀み
ともに遊びき

小野弘吉氏も秀才で、中學を次席で卒業したが、帝大に入つて、農民生活研究中、急性肺炎で惜しくも夭折した。

伊東圭一郎氏は啄木が盛岡の高等小學校へ入學したときからの同級生である。そして二人は受驗準備に江南義塾にも一緒に入つた。そしてやはり二人一緒に中學に入學したのであるが、そのときの成績は、先にいつたやうに、阿部氏が一番、二番が啄木、三番がこの伊東氏、夭折した小野氏五番、小澤氏が八番あたりであつたといふ。

小野恒一氏は當時樗牛崇拜家であつた。伊東氏は德富蘇峰を崇拜し、啄木はまた上田敏博士を熱心に崇拜したものであつた。そしてお互ひにその感化を受け合つたのであつた。

その小野氏はいま、早稲田高等學院に教鞭をとつてゐる。また氏の夫人は啄木夫人節子さんと、盛岡のミッション・スクール時代、親しい友達でもあつたのである。

(「啄木を繞る人々」による)

さて、啄木は盛岡を出發した翌日、十一月一日に上野に着いた。その晩は細越夏村氏の許に泊り、翌日小石川の小日向臺町三丁目九十三、大館といふ小さな下宿屋に住居を定めた。そして方々へ御禮の手紙を書いた。次の葉書は小林茂雄氏宛のものである。

先日はわざ〳〵御見送被下、誠に難有奉謝候。一昨日は細越兄の宿へ一泊、昨日當家に引うつり候。景色よき所に候。實は今日、親しい人へは後からと思うて書きはじめた手紙がすでに二十幾本になつて、すつかりつかれましたから、この端書には何にも申しません。御手紙下さい。二三日中に私も差し上ます。

旅は君胸のわかきにさふさはずよ、みだれて雲の北にとき夢

霜寒の筆の趣き市にたえずねがはく袖の詩の花たびね

市に入りて名なきすぐせをはづべしや花の高きぞ風つよき者

さすがに獨りぼつちの、東京の空の下では寂寥がすぐ若い胸をついたのであらう。「胸のわかきにふさはずよ」と歌ひ、しかしそれも「花の高きぞ風つよき者」であると自分を元氣づけた。

そしてこれから、この「夢」に富んだ少年歌人と、生々しい人生と現實的な（餘りに現實的な）世間との最初の接觸であつたところの、啄木の、第一回目の東京生活が、はじめられたのである。

この啄木の上京はしかしながら確りした目的があつてのことではなかつた。飜譯でもして、といふ心算であつた。それで圖書館へ通つたり、新詩社の集りに出席したりしてゐた。

この十一月にまた「明星」に歌一首が載つた。

夢はかくて、戀はかくしてはかなげに過ぎなむ世とも人の云はゞ云へ

といふのである。

圖書館（大橋圖書館）へ行つてはトルストイの「わが懺悔」を讀んだ。「即興詩人」を讀ん

だ。イプセンの戯曲「ジョン、ガブリエルボルクマン」を讀んだ。そしてこの戯曲を飜譯して生活費を得やうとしたのである。然しそれも二十二日に圖書館で卒倒してから、身體の具合が惡く仕遂げることが出來ないでしまつた。

啄木は、收入の途があるわけではなく、しかも病氣にかゝつて「病の爲、生計の費を得ん爲に殆んど筆紙に親しむ能はざるを如何にせんや」と慨くやうになつたのである。

別の金の入りやうはなかつたので下宿からはだん〳〵虐待されるやうになつた。窮乏のうちに年も暮れた。東京の華やかな新年の空氣の中に啄木はみじめな年を迎へなくてはならなかつた。

家へも手紙も出さなかつた。

啄木の同じ下宿に、同じ樣に貧しい少年がゐた。同じ年格構の眞壁六郎といふのであつた。この二人はいよ〳〵下宿屋から虐待されて仕舞には啄木は病にかゝり、しかも食事すら與へられない仕末になつてしまつた。仕方なく着物や袴を質に入れて食べるには食べたが、たうとうその家を二人とも追ひ出されてしまつたのである。

着のみ着のまゝで東京の街中に投げ出された十八歲の少年啄木は、さて行きどころもないの

である。その時は二三日さまよひ歩いた擧句、通りがゝりの佐山某といふ人の親切によつて、その人の神田錦町あたりの「薄汚い安下宿」に二十日ばかり泊めて貰ふことが出來た。そんな哀れな生活になつてしまつたのである。それでも勝氣な啄木は家へも知らさずに頑張つたゞが遂に風邪や脚氣など重ねて病氣をするやうになり、性も根もなくなつて、故鄕戀しさの手紙を書いた。

手紙を見て驚ろいた父一禎氏は早速啄木を故鄕へ連れ歸る爲に上京して來た。ひそかに寺の杉を賣り拂ひ、その金を旅費に宛てゝ――。

歸鄕・療養生活

はる〴〵愛兒の窮乏に胸を痛めて上京した一禎氏は啄木を神田の旅屋へ連れて來て、懇々と歸鄕のことを說いた。もうどうにも仕方がなかつた。二月下旬、「まち構へた上野の櫻も見ずに」「その數ケ月の間に他人が五十年もかゝつた初めて知る深酷な人生の苦痛を鋭く胸に刻みつけられて」啄木は懐しい澁民村へ歸ることゝなつた。そしてあの澁民村の山川に、都會で痛めつけられた病骨を養ふのであつた。すべてなつかしい山であり川である。

啄木は盛岡の小林花鄕、瀨川深、岡山殘紅の三氏宛に次の手紙を書いた。

朱絃兄や、白盆兄等へよろしく。

人の世には喜びて泣く事少くして、悲しみて泣くことのみ多く候。若し今の小生に溢れ出る涙ありとせば、そは必ず前者の場合なるべく候。何故ぞといぶかり玉ふな。あらゆる自然と人とは今我が心の巷の塵を洗ひ清め居候。古くして益々新たなる自然の情趣は申すに及ばず友の一諾、父母小妹の一擧手、戀人の一盻……若し生に病者の最好藥劑はと問はゞ、生はたゞちに故郷にかへれと申べく候。種々の事云ひたし、きゝたし。二三日にも出盛するけれど試驗すまば是非共澁民迄杖を曳き玉へ。(三十六年二月二十八日)

啄木は、思ひ出多きふるさとの山川、なつかしい「父母小妹の一擧手」そして戀人のやさしい愛情につゝまれて、心の隅々まで清められ温められていつた。さうすると、しみ〴〵素直に悔悟の涙が流れてくるのであつた。小笠原氏に宛てた書簡にこの心情を吐漏してゐる。

「小生や生れて頑迷、稚きより人の言ふ事に耳だも貸さぬ性質に候ひき。みづから斯うと思ひ極めたる事には父母の言葉さへ馬耳東風にきゝ流して、善かれ惡かれ、我意を通さでは止まぬ程に候ひき。長じては學才等輩に秀で、人に神童などゝ稱へられ益々この性を増長せしめ候ひぬ。友人の言を顧みで、中學卒業に先立つ數月にして飄然都門に入りしも、この性あ

れぱの事也。都門に入りて四ヶ月、人に下るといふ事を知らず、人の常に行く路を厭ひて、僅十七歳の身乍ら自矜獨り高うし、遂に病を得、友の笑を買ひ、默然として故山に病骨を横ふるに至りしもこの性あればの事也」

から、あの啄木が強く自らを責めるやうになつたのである。

このごろは毎日夕方、藥取り旁々醫者の家まで散歩に出かけた。その藥は苦く涙が出る程であつた。そのころの手紙に

「毎日にがい藥をのんで顏をしかめては砂糖こもりを嚙り〳〵日を暮して居るといふ有樣ですから御察しを希上ます。毎日夕刻には藥取旁々醫師の家迄散歩します 銅色な空の處々に彫まれた星の莊嚴な光は何時でも何か秘密な事を私に知らせます」「草の黃なる田の畔は千頃寂として處々にさぶさうな村燈の影が見えて居ります。病みて愁ひて思ひに堪へずしてこの暗黑の路を辿る私の心、云はずともの事であります。然し乍ら決して病の惡い譯ではありません。早く全快させようとの親心に感じて銘じての服藥であります云々」

（花郷氏宛、三月十九日夕）

病氣が快くなつてくると啄木は「哲學的思索の斧を以て、過去の事實を解釋」しようとして

悩むやうになつた。はやり猛つての上京の無慘な失敗は、何としても啄木の自信を粉微塵にしてしまつた。「善かれ悪かれ、我意を通す」ことの自信はくつがへされた。啄木は眞暗な懷疑の中に迷ひ込み「歸鄕後の、猛烈なる回顧」がはじまつたのである。

その思索の果ては「凡ての物の意義と價値とを失つて」生きてゐることさへ無意味に思ふやうになつた。バイブルを讀み、法華經をよんだ。しかし空しいのであつた。

ところが「我考ふ、故に我在り」といふデカルトのこの「我の存在」に觸れてはじめて、啄木自身の言葉によれば「俄然として醒めたるが如く」なつたのである。「生存の意義と價値とはかくして朧ろ氣に我が暗黑なる胸中に一道の光明を投げ」かけてくれたのであつた。そしてまたその時、リヒヤルト、ワグネルの思想「意志擴張の愛の世界」にふれるに及んで、啄木自身の氣持と同一な理想を見出して、そこから大きな敎訓を得たのであつた。そしてはじめて啄木は、心の安定を持つことが出來た。「かくて一切の面目は新しく」成つたのである。

その間の事情を當時の手紙に表はれた啄木の心境に見てみることにする。

「人間が活動の境遇から靜止の狀態に立ちかへつた時は、必ず非常に鋭利な哲學的思索の斧を以て、過去の事實を解釋する者である……さらば生が歸鄕後の、猛烈なる回顧は、生の心

を如何様に司配した乎。

生が若し此處で自分の人生觀とか、何とか云ふものを述べようたらばこれ恐らく、先輩たる兄に對して禮をかくものであらう。たゞ生は生の身體の健康が快復すると同時に、生の心も亦漸く快復して、今では多大の煩悶をもち乍らも猶一縷光明にいたる路を失はずに居ると云ふ事丈を申上げませう。そして其光明の周圍には多くの先輩や友人やの輕蔑した顏付や、嘲笑の眼付などが數限りもなく浮游して居る……初め、僕が歸村してから、杜陵に於ける生の友人はしきりに書をよせて兄や猪川、佐々木の諸氏の事を傳へた。生は頗る冷淡であつた。由來人の嘲弄や誹謗に經驗した事の多い自分であるから世人の噂の如きは生に取つて何ばくの痛痒をも與へなかつた。其後生が日夜の慘澹たる心鬪を重ねて、初めて『我』の何者たるか、果た『人』の如何なるかを探りはじめた時、其冷淡は更に度を進めた。廣汎な同情、根本の愛によつて『自己』の何物たるかを發揮するに於て、世の賞讃誹議は何程の注意に値するであらう。最も自己の本性に忠實なる人は、やがて最も他の人に忠實なる人ではないか。利己主義と個人主義（我が所謂）とは雲泥の差である。眞に自己を愛するものは、又他の者をも一汎に愛すべき者である。然しこれを以て、生の友情に對して冷淡と思うて異れてはこ

まる……。唯生とても恩に酬いるに仇を以てする人間ではない……生は兄に借財して居るが其後本代も何も薬代と變じて相不變、失敬してゐる。誠に面目ない譯である。透谷の句に、『折れたまゝ咲いて見せたる百合の花』と云ふのがあるが、藝術の人の偉大なる執着を現はして遺憾ないと思うて居る。あゝこの執着があつて初めて、不動なる光明が來るのではないか云々。九月十七日。ワグネルの像掲げたる窓に蟋蟀の歌をきゝつゝ。」

「――御情けの程は一々身にしみて讀みかへした。今更僕は何も云ふの要もない。たゞ〳〵向後の友情の『滿足』と云ふ花環に捲きまかれて隔意なからむことを信じ且つ祈るのである。管鮑貧時の交りを思ふ者は必ずまづ人生に最も貴重なる積極的の財産は愛であると云ふことを首肯するであらう……。嘗て僕の保持した『愛』へと云ふことに就いての觀念は『我れ愛するものを愛す』と云ふ大に偏狹なもの であつた。愛は包容である。一體である。融合である。その後から考へて來て、現在の僕は人生と云ふ混亂矛盾の渦中に或る明瞭な光明を認める樣になつた。……『學燈』のワグネル論見たいものだが何月頃から出てますか。病程つまらぬ者はない。萬事に根氣つゞかなくなる。云々。病瘦白蘋拜　九月二十八日夜」

（二通とも董舟氏宛）

人生を「愛」と「我の存在」とに意義を見出した啄木は「この自覺によつて、早く十四歳の頃より續けられし小生と節子との戀愛は、小生に取りて重大なる意義を」持つことを意識した。それは「自己の次に信じうべきものは戀人一人のみ」であつたから。何故となれば「戀人は我ならぬ我」であつた。「我の次に最も明瞭なる存在は戀人なれば也」と啄木はいつてゐる。すなはち啄木の戀愛はこの時から、さういふ氣持と決心とから行はれてゐたのであつた。

その秋も更けて、啄木はしみ〲故鄕の田園の景色を愛しむやうになつてゐた。

「あこがれ」の詩

さうしてゐると、その胸中にぐん〲湧き出るやうな詩情が鬱勃として起きてくるのを感じた。その頃啄木は蒲原有明氏の「獨絃哀歌」をこよなく愛誦してゐたが、十一月の或る日のこと、田圃の畔を歩いてゐて、ふと一つの新調を發見したのである。それは四四四六の韻律であつた。啄木は立ち所に長詩「杜に立ちて」を作つた。あとから〲五篇も出來て來た。啄木は嬉しかつた。再び自信が恢復してきたのである。啄木のこゝろの中のあこがれの感情は今こそその美と愛とを「詩」として迸り出したのである。

以下、その五篇の詩を掲げてみる

杜に立ちて

秋去り、秋來る時劫の刻み受けて
五百秋朽ちたる老杉、その眞洞に
黃金の鼓のたばしる音傳へて、
今日もまた木の間を過ぐるか、こがらし姬。
運命せまくも惱みの黑霧落ち
陰靈いのちの痛みに唸く如く、
梢を搖りては遠のき、また寄せくる
無間の潮に漂ふ落葉の聲。

あゝ今、來りて抱けよ、戀知る人。

海轉の大浪すぎ行く虚の路、
そよげる木の葉ぞ幽かに落ちてむせぶ。——
驕樂かくそ沈め。——見よ綠の
薫風いづこへ吹きしか。胸燃えたる
束の間、げにこれたふとき愛の榮光。

白羽の鵠船

かの空みなぎる光の淵を、魂の
白羽の鵠船しづかに、その青渦
夢なる櫂にて深うも漕ぎ入らばや——
と見れば、どよもす高潮音匂ひて、
樂聲さまよふうてなの霧の帕を
透きてぞ浮きくる面影、(百合姫なれ)

天華の生膚瑲々あけぼの染、
常樂こゝにと和らぐ愛の瞳。
運命や、寂寥兒遺れる、されど夜々の
ゆめ路のくしびに、今知る、哀愁世の
終焉は靈光無限の生の門出、
璃瑠水たゝへよ、不滅の信の小壺。
さはこの地に照る日光は氷るとても
高歡久遠の座こそ導かるれ。

啄木鳥

いにしへ聖者が雅典の森に撞きし
光ぞ絶えせぬみ空の『愛』の火もて
鑄にたる巨鐘、無窮のその聲をぞ

染めなす『綠』よ、げにこゝ靈の住家。
開け、今、巷に喘げる塵の疾風
よせ來て、若やぐ生命の森の精の
聖きを攻むやと、終日、啄木鳥
巡りて警告夏樹の髓にきざむ。

往きしは三千年、永劫猶すゝみて
つきざる『時』の箭、無象の白羽の跡
追ひ行く不滅の教よ。――プラトオ、汝が
淨きを高きを天路の榮と云ひし
靈をぞ守りて、この森不斷の糧、
奇かるつとめを小さき鳥のすなる。

隱　沼

夕影しづかに番（つがひ）の白鷺下（お）り、
槇の葉枯れたる樹下の隱沼（こもりぬ）にて、
あこがれ歌ふよ。——『その昔、よろこび、そは
朝明（あさあけ）、光の搖籃（ゆりご）に星と眠り、
悲しみ、汝こそとこしへ此處に朽ちて、
我が喰み啣（ふく）める泥土（ひづち）と融け沈みぬ。』——
愛の羽寄り添ひ、青瞳（せいどう）うるむ見れば、
築地（ついぢ）の草床（くさどこ）、涙を我も垂れつ。

仰げば、夕空さびしき星めざめて、
しぬびの光よ、彩（あや）なき夢の如く、
ほそ糸ほのかに水底（みそこ）に鎖（くさり）ひける。
哀歡かたみの輪廻（めぐり）は猶も堪へめ、
泥土（ひづち）に似る身ぞ。あゝさは我が隱沼（こもりぬ）。

かなしみ喰み去る鳥さへえこそ來めや。

人に捧ぐ

君が瞳ひとたび胸なる秘鏡の
ねむれる曇りを射しより、醒め出でたる、
瑠璃羽や、我が魂、日を夜を羽搏ちやまで、
雲渦ながるる天路の光をこそ
導きたる幻眩き愛の宮居。
あこがれ淨きを花瓣匂ふと見て、
二人し抱けば、地の事破壞のあとも
追ひ來し理想の投影ぞとほほゑまる。
こし方、運命の氷雨を凌ぎかねて、

詩歌の小笠に紅の緒むすびあへず、
愁ひの谷をしたどりて足惱みつれ、
嶮しき生命の坂路も、君が愛の
炬火心にたよれば、暗き空に
雲間を星行く如くぞ安らかなる。

この新らしい格調と、美しい夢の詩は、すぐに與謝野鐵幹氏の許に送られた。鐵幹氏はそれらの詩を賞讃して、歌よりも優つて詩の天分を認められた。そして向後詩にむかふべきことを云つて來たのである。

　この五篇の詩は『長愁』と題して、その年（三十六年）の十二月號の『明星』に掲載されたのであつた。そしてその中の「啄木鳥」の詩に因んで、鐵幹氏の命名によつて、それまでの號白蘋を「啄木」とこの時から號するやうになつたのである。

　はじめて「啄木」と署名されて『明星』紙上に發表されたこの詩篇はは、やくも人々の心をとらへてやまない美しい韻律をもつてゐた。その次々に發表されるこの無名の詩人、啄木の名

は、その優美なる作風と『更に一段の絢爛たる精彩と氣魄と、それよりも、全篇を成すこの瑰麗と雄渾と、張り切つた高い調べと、冴え切つた清い韻、語句の豐麗さ、表現の縱横さ』（金田一氏）とをもつて高揚されはじめたのである。或る人は啄木をもつて、既成大家の匿名であらうと云つた。ところが、それが、みちのくの年若き無名の一詩人であるにすぎないことを知つて人々はます〳〵、驚異の眼をそばたてずにはゐられなかつたのであつた。かくして一躍啄木の名は「天才詩人」としてあまねく詩壇に響くやうになつていつたのである。

啄木は全く、詩の魂の中に入つてゆくことが出來た。澁民村に病骨を養ふて十ヶ月、その心身の苦鬪を經ていま初冬の禪房の窓の下に、毎日毎夜、詩を思ひつゞけるのである。「杜に立ちて」他五篇が出來たのが十一月上旬のことであつたが、三十日には「樂聲」を、十二月一日には「海の怒り」をそして三日の夜には「荒磯」を、「夕の海」を五日に、といふ風に引つゞいて啄木は、インスピレーションの導くまゝに筆をはしらし、詩を作して行つたのである。啄木自身後に述べてゐる「其頃私には詩の外に何物も無かつた。朝から晩まで何とも知れぬ物にあこがれてゐる心持は、唯詩を作るといふ事によつて幾分發表の路を得てゐた。さうして其心持の外に私は何も有つてゐなかつた。――」

いま、それらの、後に詩集『あこがれ』一卷となつて發刊された啄木の詩のいくつかを拾つて當時の啄木の詩風を見よう。

森の追懷

落ち行く夏の日緣の葉かげ洩れて
森路に布きたる村濃の染分衣
涼風わたれば夢ともゆらぐ波を
胸這ふおもひの影かと眺め入りて、
靜夜光明を戀ふ子が淸歡をぞ、
身は今、木下の百合花あまき息に
醉ひつゝ、古事繪卷に慰みたる
一日のやはらぎ深きに思ひ知るよ。

遠音の柴笛ひゞきは低かるとも
鋤負ふまめ人又なき快楽と云ふ。
似たりな、追懐、小さき姿ながら、
沈める心に白羽の光うかべ、
葉隠れひそみてさゝなく杜鵑の
春花羅綾褪せたる袖を捲ける
胸毛のぬくみをあこがれ歌ふ如く、
よろこび幽かに無間の調べ誘ふ。

（以下略）十二月十四日。

おもひ出

翼陮色水面に褪する
夕雲と沈みもはてし
よろこびぞ、春の青海、

眞白帆に大日射す如、
あざやかに、つばらつばらに
涙なすおもひにつれて
うかびくる胸のぞめきや。

ひとたびは、夏の林に
吹鳴らす小角(くだ)の響きの
うすどよむけはひ裝ひて、
みかりくら狩服人(かりぎぬびと)の
駒竝めて襲ひくる如、
戀鳥の鳥笛(とふえ)たのしく
よろこびぞ胸にもえにし。

燃えにしをいのちの野火と

おのづから煙に酔ひて、
花雲の天領がくり
あこがるゝ魂をはなてば、
小さき胸ちひさき乍ら
照りわたる玉の常宮、
琅玕の宮柱立て、
瓔珞の透簾かけて、
ゆゝしともかしこく守る
夢の門、——門や朽ちけむ、
いつしかに砕けあれたる
宮の跡、霜のすさみや、
礎のたゞに冷たく。——
息吹けば君を包みし
紫の靄もほころびぬ。

ふたりしてほゝゑみ汲みし
井をめぐる朝顔垣の
縄さへも、秋の小霧の
はれやらぬ深き湿りに
我に似て早や朽ちはてぬ。

あゝされど、サイケが燭、
かげ揺れて戀の小胸に
臘涙のこぼれて焼ける
いにしへの痛みは云はじ。
とことはに心きざめる
新創を、空想の羽の
彩羽もてつくろひかざり。
白絹のひひなの君に

少女子のぬかづく如く、
うち秘めて齊き行かたも
もえし血の名殘の胸に。

（十二月末）

いのちの舟

大海中の詩の眞珠
浮藻の底にさぐらむと。
風信草の花かをる
古巣の岸をとめて飛ぶ
海の燕の羽の如、
いのちの小舟かろやかに。
愛の帆章額に彫り、

鳴る青潮に乘り出でぬ。

遠海面に陽炎の
夕彩はゆる夢の城、
夏花雲と立つを見て、
そこに、秘めたる天の路
ひらきもやする門あると、
貢する珠、歌の珠、
のせつつ行けば、波の穂と
よろこび深く胸を搖る。

悲哀の世の黑潮に
はてなく浮ぶ椰子の實の
むなしき殼と人云へど、

岸こそ知らぬ、死の疾風(はやち)
い捲き起らぬうたの海、
光の窓に悠る神の
瑪瑙(めなう)の盞(さら)の覆(かへ)らざる
うまし小舟を我は漕ぐかな。

(三十七年一月十二日夜)

渡米計畫

かういふ美しい傑作をものつしゝ、啄木は、この年の暮に英詩人野口米次郎氏の詩集「東海(フローム・ゼ・イースタン・シー)より」(米國にて出版)を讀むことがあつた。その詩集は山川登美子(白百合)氏より送られたのであつたが啄木は一讀して大いに感激せられ、徹宵して讀後の一文を草した。「詩談一則」として三十七年元旦の「岩手日報」をほとんど一頁埋めて發表されたものがそれである。

(これはまた啄木の書いた評論の最初のものでもあつた。)

啄木はその感想に於て「氏の詩を一貫する特長は云ふまでもなく、其東洋的香氣を歐米の空氣に放散するの偉觀にあり。月光を歌ひ、櫻、松を歌ひ、菊を歌ひ、而して又お花さん、お蝶さん、富士山を歌ひて、深幽の詩韻盡くることなき野口氏の彼國の詩苑に於ける地位は、實に秋花錦綾の如く咲き連なる野徑一望の眺めに、一枝の白百合群叢を拔いて芳芬灼然たる姿にも似たらずや。氏を稱する者皆主として此異香に醉へるに似たり。然れども氏の詩想は一面に於て深くも西の情操を融合し得たるを存ぜずんばあらず……此一卷によつて吾人の感得する所によれば、氏の詩想は高華に非ず、熱烈に非ず、又剛壯にも非ず、常に自家胸中の幻影に醉ふが如き幽深と、自然の闡明し難き神秘に接觸する瞑想とを一團としたる或匂の如き憧憬なり、光明なり、されば、其幼時を追憶しては、淸新可憐春柳の如き姿となり、天地の美觀に打たれては、奧沈漂渺として捉へ難き幽妙の蜃氣樓を現じ來る。たとへば窈窕たる手弱女が一度靈異宏壯なる自然の大觀を仰いで、聲を限りに絕叫して其美を讃ふるとも、天性なる淸き細き聲は遂に彼の劍を撫して豪懷を歌ふ者の如くならざるに似たり。然れども其自然を憧仰するの點に於ては乃ち一なり。氏の歌ふ所は廣からず、又大ならず。されど吾人がカーライルが所謂深く見よ、さらばそこに調和あらんと云へる語を念頭に置きて、一度野口氏の詩を讀み來れば、此詩

人の胸中なる無絃の樂聲を聽くに於て、端然襟を正し、渾身の滿足を以て感謝を捧げざる能はざるなり。「東海より」の一卷は實に此世界的詩人の詩風想像の傾向を代表して、又一面に日本民族の詩的天職の根本的性質を渾圓球上に標榜し出したる者。」と絶賞し。最後に次の如く結んでゐる。

「予が『東海より』を讀みて蓄へたる感懷は略々茲に述べ了りぬ。予は如何なる意味に於ても氏の偉勳に對して感謝の辭に吝(やぶさか)なる能はざる者なり。一旦予が平生の願叶ふの期ありて、洋濤鵬程の大陸に君が手を握るの日、あはれその日、我渾身の脈管を匯する喜悦の波ぞ如何に高まらんよ。予亦近く舊稿なる鹽行の一詩綴を修して、遙かにパシフィック洋の彼岸に吼々の聲を擧げしめんとするに意あり。想ふに、異郷の月明に嘯いて、高名なるヨネ・ノグチの秀容に接するの幸福は、或は甚だ遠からずして我頭上に落下し來らんか。」

啄木は、野口米次郎氏の歐米に於ける華々しい名聲にあこがれて「今や日英米の書肆爭ひて之を出版するに至る。盛事羨むべき哉」と云ひ、自分も渡米したくてたまらなくなつてしまつた。さうしてその計畫を立てたりした。出來るなら自分もあちらで、――とはこの野望に燃える年若き啄木の空想であつた。その空想を實現せしめたく、あれこれ計畫を思ひめぐらし

た。

啄木はこの感想を「岩手日報」に載せると一月二十一日に手紙を野口米次郎氏に宛てゝ書いてゐる。その一節に、

「私は必ずしも安樂な生活と榮華の生涯を願ふ者ではありませぬ。たゞ生活と修養の路にもおのづから難易の度がある。あらゆる希望と、自分の生命なる理想を抛つても、安全な衣食の方の奴隷となる事が、如何にして若き血潮の渾心に溢るゝ我らに滿足が出來ませう。否寧ろ、心死して骸骨のみ生き長らへんよりは、常久の平和を「死」の深淵に求めるかたが優つて居るのであります。あゝ米國！米國！。そこにはた易い方法によつて修養し衣食する道のあると云ふ米國！、現にその國で、その道によつて、未知の一大詩友が嶄然たる成功の樓台を築き上げたのではないか。

私は決して大兄の天才に私の淺才を較べる者ではありませぬが、かく記し來つたなら恐らく大兄は己が希望の奈邊にあるかを御感得なさる事と存じます。げに、洋濤遙かに大兄の擣き出した詩の巨鐘の、哀れむべき一靑年に及ぼした餘響は、單に詩興一面の感化ではなくて、私が幼時より心がけてゐた、米國行の志望に、强く制すべからざる加燃力を與へたのでありま

す。此に至つて、大兄に對する私の敬慕は一層深い感謝と共に胸の中に燃えて居るのです。たとひ如何なる事があつても、私は是非この望みを果たさなくつてはならぬ。或はこれは、自國に於ての學資さへない。いはゆるペニーレス・ボーイの私に取つて、あまりに突飛な、分外、又遂行し難い希望でありませう。突飛か、分外か、それは己が關する所ではない。あたどこの一事が、私の生涯の進路をひらく唯一の鍵ではないか。さらばその鍵を握り、なつかしい大兄の高風に接すべく、如何にして己が渡航の機會――否費用を見附たらよいであらうか。」

「彼方の友は來れと云ひ、我も行かむと思ふ」この渡米計畫が實現されて、十九歲の天才詩人啄木がもし、この時アメリカへ行くことが出來てゐたら、と筆者はこゝで再びかう空想するのである。さうしたら我らは如何なる詩人啄木を持つやうになつたであらうか。

だが、このやうに思ひわづらつたに關らず、渡米のことは所詮、實現されやうもなかつた。それが出來ないとすれば、どうにかして一日も早くこの遊民の寒村を出て東京の空に存分な筆を奮ひたいのであつた。越えて一月二十七日夜、姉崎嘲風博士宛の書簡には次の如く述べてゐる。

「去る頃一論を草して『太陽』に投じ候處、空しく一先づ云々と云ふ愚ろなる言割狀貰ひたる許りに戰敗けたる白鳩の如く舞ひもどり候。これにて小生が出京費の出所も一先づ途絶したる運命に御座候……あゝ先生よ、『時代思潮』は校正なり何になりと、小生が五尺の軀(むくろ)を動かすの餘地無之候べきか。

よしや病弱の骨弱くとも詩興彷彿として一味の慰籍胸にあらば、如何なる健鬪と雖も耐へ難き事あるべからずと存じ候。」

かく、切々たる希望は抱きながら東京へ出ることさへなか〱かなはない。啄木は一心に詩作に耽つた。四四四六の新調の外に、啄木は「五六六を一句とする最新調を發見し」た。そしてその試作として長詩「錦木塚」を作つた。當時啄木が如何に新格調に苦心したか、次の手紙の一節を見てもわかるのである。

「嘗て試みたる四四四六の新調の外に、近來また五六六を一句とする最新調を發見しえたる事御座候。日本の詩に押韻の法の不可能なるは今更申す迄もなく、從つて其吟誦の要約として、音樂的性質を與へんとせば、種々の格調を以て異なる詩想に調和せしめざるべからざる儀と存じ、さてこそ力をこの方面に注ぎ居候。在來の七五、五七等の外に、小生が「鶴飼橋」

に套用したる泣菫氏の八六調その他八七調、七七調、四七六調、五八五調等多々ある先進諸氏の經營に對して、小生は大に感謝致し居候。小生のそれに果して永遠の生命あるべきや否や、小生はたゞ今後必ず出現すべき天才に向つて、材料を作り置かんと存じ候。」(嘲風氏宛)

その姉崎嘲風博士は仙臺の樗牛會のついでに盛岡に來て一夕公演をしたことがあつた。その時の二月一日の夜、啄木は博士を旅館高與樓に訪ねて、折から十五夜の月の、傾くまで、ビールを飮みながら話をすることが出來たのであつた。

日露戰爭と啄木

丁度そのころ、日露の戰雲はいよ／＼急をつげるに至つた。國を蓋ふ劍の響きに詩を書きながら、啄木の胸も昂ぶるのである。啄木は書を友、野村董舟氏に寄せていふ。

「『號外とび、車かける』てふ都の空、あらず、今はこれ闔國の風情皆然り。戰の一語は我らに取りて實に天籟の如く鳴りひゞき候。急電直下して民心怒濤の如し。非役の軍卒は既に老いたる父母可愛き妻子に別れて蹶起召集に應じて行きぬ。そこの辻、こゝの軒端には、農人眉をあげて胸を張り、氷を踏みならし、相賀して Hey! [illegible] の野語勇ましくも語る。醉

漢樽をひつさげてザールの首級に擬し、村兒群呼して『萬歳』の土音雷の如し。愛す可き哉。日東詩美の國、かくの如くして未だ滔天の覇氣死せざる也。小生は、あらゆる不平を葬り去りて、この無邪氣なる愛國の民と共に軍歌を唱へんと存じ候、明日は紀元の佳節、小生は鄕校に村人を集めて、一席の悲壯なる講話を仕るべく候。飛報あり、露艦二隻仁川に封鎖せらると。佩劍戞として空に聲あるの武人、寸筆馳せて彈の如き文客、立たざるべからず、叫ばざるべからず候。小生は近く「愛國の詩」を賦して、唱へんとして歌なき民衆にそなへんと存じ候。我は何故にかく激したるか。知らず、たゞ血は沸るなり、眼は燃ゆる也、快哉。日は暮れて、森の緒、燈光に映じて、色彩の調和益々美しく相成り候。」

後年の社會主義詩人石川啄木は、その時、未だかく浪漫詩人的昂奮に美的に燃え上つてゐたのであつた。

また啄木は「岩手日報」に「戰塵餘錄」と題して日露戰爭に就いての感想を發表した。（三月）この感想はしかし、惜しいことに日報社の火災によつて今は知ることが出來ない。

そしてまた五月、同日報に連載した「澁民村より」の中ではかう述べてゐる。

「近事戰局の事、一言にして之を言へば、吾等國民の大慶この上の事や候ふべき。臥薪十年

の後、甚だ高價なる同胞の貴財と生血とを投じて贏ち得たる光榮の戰信に接しては、誰か滿腔の誠意を以て歡呼の聲を揚げざらむ。吾人如何に寂寥の兒たりと雖ども、亦野翁酒樽の歌に和して、愛國の赤子たるに躊躇する者に無御座候」

そして「戰勝の光榮は今や燎然たる事實として同胞の眼前に互虹の如く」横たはつてゐる。この時に當つて「徒に一時の旗鼓の勝利と浮薄なる外人の稱讃に誑惑」することなく、「如何にして勝ちたる後の甲(かぶと)の緒を締めむとするかの覺悟」を當局並に國民に向つて「叱咤督勵する所」がなければならぬと絕叫してゐる。「嗚呼人よ、東海君子國の世界に誇負する所以の者は、一に鮮血を怒濤に洗ひ、死屍を戰雲原頭に曝して、汚塵濛々の中に功を奏する戰術の巧妙によるか、充實なき誇負は由來文化の公敵、眞人の蛇蝎視する所に候。好んで酒盃に走り、祭典に狂する我邦人は或は歷史的因襲として、アルコール的お祭的の國民性格を作り出だしたるに候はざるか」と徒らに戰勝に醉ふことなく戰後國民の覺悟の愼重なるべきを說いた。

また、「吾人が今世界に發揚した」戰勝の光榮を、「更に永遠の性質に轉じて、古代希臘の尊嚴なる光輝を我が國土に復活せしめ、吾人の思想、文學、美術、學藝、制度、風氣の凡てをして其存在の意義を世界文化史上に求める」ためには「實に時勢を洞觀する一大理想的天才」

を必要とするし、それは例へば「其名獨逸建國の歴史を統ぶる巨人ビスマルクの如き」もので
なければならぬとし、その當時の獨逸に日本の位置を引き較べて次の如く說く。
「嗚呼今や我日本は、時を變へ、所を變へ、人種を變へて、東洋の、否世界の一大普佛戰爭に臨み、遠からずして獨逸以上の光榮と、猜疑と、怨恨と、報酬とを千代田城下に擔ひ來らむとす。而も吾人はこの難關に立たしむべき一人のビ公を有し候ふや否や、あらず、彼を生み出したる獨逸の國民的自覺と、民族的理想と自由の情氣と堅忍進取の覺悟の萠芽を、四千餘萬の頭腦より搾出し得べきや否や、勝敗眞に時の運とせば、吾人は、トルストイを有し、ゴルキイを有し、アレキセーフを有し、ウヰツチを有する戰敗國の文明に對して何等後へに瞠若たるの點なきや否や、果た又、我が父祖の國をして屈辱の平和より脫せむが爲めに、再び正義の名を借りて干戈を動かさしむる時に立ち至らざるや否や、書して玆に至り吾人は實に悵然として轉た大息を禁ずる能はざる者に候。」
もうこゝでは啄木は、たゞ「眼は燃えて」戰爭に昂奮することはなかつた。國民の「アルコール的お祭的」騷ぎを苦々しく思ひ、國を擧げての戰勝の坩堝の中に文化的な反省を忘れはしないのであつた。そして「吾人は我が國民意識の最高調の中に、全一の調和に基ける文化の根

本的發達の希望と、愛と意志の人生に於ける意義を擴充したる民族的理想の一日も早く實現として現はれ來らむ事」を祈り、獨逸の「愛國詩人キヨルネル」に滿腔の熱意を感じ「ゲーテ、シルレル、フエヒテ、モムゼン、ワグネル、ビスマルク等を獨逸民族の根と葉なりとせば、キヨルネルは疑ひもなく彼等の精根に咲き出でたる不滅の花に候。鐵騎十萬ラインを際して南下したるの日、理想と光榮の路に國民を導きたる者は、普帝が朱綬の釆配に非ずして、實にその身は一兵卒たるに過ぎざりし不滅の花の、無限の力と生命なりしに候はずや、劍光滿洲の空に閃くの今、吾人が彼を懷ふ事しかり切なる者、又故なきに非ず候」と述べてゐるのを見るとき、こゝに年齒わづかに二十歲に滿たざる啄木の、激しき軍國的雰圍氣の中に於けるその自由主義的思想と浪漫的精神とを知ることが出來るのである。

當時の詩作態度

さて、そのやうな中にあつて啄木はます〳〵詩に心魂を傾けていつた。啄木はいふ。「生れてより僅かに十有九春をむかへたる許りながら、早くも一家の難を負うて立たざるべからざる

身の、比較的生活の事に遠き藝苑に幼き耕やしをいとなまんは、思ふに甚だ迂に近き事に候はん。たゞ一度そこに凝りては又動かすに由なき性を如何とも致し難く候。」と。また「いかに軍國の秋なればとて、詩の國の事忘れはつるは、我れらの敵のみならず、彼等自身の敵」ともいつてゐる。「みちのくの鹿角」の女政子と村長の子との悲戀を歌つた長詩『錦木塚』「鶴飼橋に立ちて」については前に書いたが、この鶴飼橋について啄木は書簡の中にかういつてゐる。

「鶴飼橋は門を去る十町足らずの畑道のつくる所、水鳴玉を轉ずるの北上河上に架したる釣橋に御座候。右は十丈の崖壁、左は河楊の藪を交へたる一望の河原、下の方、長江岩手の山影を浮べて、四時の眺め云ひ難き風情有之候へど、小生は特に夜半痩影を踏んで月色を吸ふの孤境をこの橋絶好の詩趣と存じ候。川向ひなる一詩友を訪ひてのかへるさは、げに幾度か深更曙近くなるをも忘れてこゝに苦愁を洗ひ、低迷する夜氣に親しみて、超世の靈樂を貪り候ひけむ。或時は稚き心に其沈黙なる崖下を物恐ろしく思ひし日も候ひしかど、たとへば襟を繙いて頁毎にランニングタイトルの先づ目に付く如く、一度この橋を想へば、清冽の灝氣身に泌むの感有之候」と。以て當時の啄木を知ることが出來るのである。

二月十六日には長詩『落瓦の賦』を、翌十七日には『山彦』つゞいて三月十六日には有名な

『曉鐘』『暮鐘』『夜の鐘』の三部からなる『鐘の歌』を作つた。またこの三月には『塔影』を五月には『黄金幻境』『夢の花』『しらべの海』『五月姫』『ひとにゆかむ』続々、六月には『ほとゝぎす』『マカロフ提督追悼の詩』他四篇を作つた。

次に五月に作つた『閑古鳥』の詩をあげてみよう。

閑古鳥

曉迫り、行く春夜はくだち、
燭影淡くゆれたるわが窓に、
一聲、今我れききぬ、しののめの
呼笛（よぶこ）か、夜の別れか、閑古鳥。

ひと聲聞きぬ。ああ否、我はただ、
（悵（いた）める胸の叫びか、重息（おもいき）の
はるかに愁ひの洞（ほら）にどよみ來て

おいづとかへる響か、ああ知らず。）
ただ知る、深きおもひの淵の底、
見えざる底を破りて、何物か
わが胸つける刄ありと覺ゆるのみ。

をさな時も青野にこの聲を
ききける日あり。今またここに聞く。
詩人の思ひとこしへ生くる如、
不滅のいのち持つらし、この聲も。

永遠！それよ不滅のしばたたき、
またたき！はたや、暫しのとこしなへ、
この生、この詩、（しばしのとこしなへ。）
或は消えめ、かの聲消えし如、

消えても更に（不滅のしばたたき、）
たとへばこの世終滅のあるとても、
ああ我生きむ、かの聲生くる如。

似たりな、まことこの詩とかの聲と。――
これげに彌生鶯春を讃め、
世に充つ藝の聖花の盗み人、
光明の敵、いのちの賊の子が
おもねり甘き醉歌の類ならず。

健鬪、つかれ、くるしみ、自矜に
光のふる里しのぶ眞心の
いのちの血汐もえ立つ胸の火に
染めなす驕り、不斷の饗の糧。

我ある限りわが世の光なる
みづから叫ぶ生の詩、生の聲。

さればよ、あはれ世界のとこしへに
いつかは一夜、有情(うじやう)の(ありや、否)
勇士が胸にひびきて、閑古鳥
ひと聲我によせたるおとなひを、
思ひに沈む心に送りえば、
わが生、わが詩、不滅のしるしぞと、
靜かに我は、友なる鳥の如、
無限の生の進みに歌ひつづけむ。

やがて夏が來た。第二高等學校を卒業した金田一氏も盛岡に歸省してきた。啄木は早速金田一氏を訪れると元氣一杯、希望をもつて詩の話をした。その頃啄木は詩を以て自分の宗教、信

仰なりとし「我詩の一篇一句と雖も」決して歴史的信仰個條や「僞宗教家の百萬言の説教に劣るものではない」と信じてゐた。啄木の詩に對する信念はそのやうであつたのである。だからその詩作に於ても興來れば即ち筆をとつて、しかも沈吟途に一句も出來ないでしまふことがあつた。それ程苦しんでゐる。詩作に身を削り骨をそぐ苦しみをするのは偉大なる詩家の常である。啄木もまたそのやうに惱み、困苦した。さうして作つた詩であるから「自己の詩に動かすべからざる信念を持」ち、また日本文學の新生命を荷ふものは自分らでなければならぬといふ信念をも持つてゐたのである。詩語についても啄木は苦心してゐる。日本語が未だ充分新らしい詩として成立する爲には、發達整理されてゐないことを自覺し、その達成を望めばこそ、その格調に苦心し、また言葉の難易、用語の變化、技巧の必要に細心したのであつた。

晩年、啄木は「日記を書くやうな氣持」でその短歌を作つた。しかしそれはただ單に「何でもないこと」を何でもなく所謂「日記風」に書き流したのではなかつた。啄木が「日記をかくやうな」平易な氣持といふ裏には、殊更らしい「短歌的」情趣乃至は趣向を排する氣持、何よりも現實的な感情の眞實を欲求するものであつたのであるが、同時に、さうして「日記風」に表現された短歌そのものの上には、長い間の「詩人啄木」がその詩について惱み、刻苦したそ

の精練な心と技術の網を、知らず知らずのうちに（或は意識されて）もうそれは濾過されたものであつたことを見逃してはならないのである。

婚約成立と北海道旅行

さて、啄木の詩に對する自信、信念の昂まるにつれ、東京へ出たかつた。一月には出京費を得やうと雜誌「太陽」へ文章を書いたがそれが採用にならず、六月の手紙の中では「我も岩崎たをぢさんに持たぬ許りに」上京出來ないことを嘆いてゐるが、いよ〳〵この秋あたりには、是非とも東京へ出たかつた。七月三十一日の手紙では「秋は京に入らん、活動の場に出づべき時期漸く迫り來りたる様に感ずるが故也」といつてゐる。

「明星」九月號には『寂寥（さびしみ）』の詩と一緒に啄木の寫眞が載つた。もはや「天才少年詩人啄木」の名は確にされ、ひいて啄木の自信を增し、出京心を昂ぶらせるのである。

それに、啄木にとつて嬉しくて仕方のないことがこの月（九月）半に起つた。それは戀人節子さんとの仲が正式に認められ、晴れて婚約の成つたことである。

思へば、幼い時からの戀人同志であつた。それが晴れて婚約の成り立つ今日まで隱忍自重、ひたすら啄木を思ひつづけて一歩も讓らず、平素反對だつた兩親を說いて遂に初戀をかち得た節子さんの思ひはさることながら情熱家の啄木もどんなに嬉しかつたらう。さうしてこの月の十五日、縣社の祭りを機會にしてその節子さんは母堂、令妹と一緒に澁民村の啄木の家に遊びに來たのである。その時の啄木の嬉しかつたこと。啄木はあとで書を友に寄せていふに「せつ子さんも甚だ壯健、乍他事御安神被下度候。この夏は、僅か二三日の相逢にて御紹介申す能はざりしは實に遺憾、九月に入りてよりも縣社の祭典をしほに、母なる人や妹等と共に來澁、その間、小生は恰も『愛』の金城鐵壁の中にある樣の思ひ致し候。相別れて第四日目、小生はこの旅に出でたる儀に候。この頃、米國の一醫師、戀愛も亦一種のバチルス作用なるを硏究せりとか。さらば小生の如きは多分全身そのバチルスに化し居る事と存候、呵々。」――「愛」の金城鐵壁の中にゐるといひ、全身戀のバチルスに化して居るといひ、その啄木の喜びやう、飛び上る程の嬉しさを想像することが出來るのである。この時、節子さん達は約一週間程啄木の家に滯在したのであつた。

節子さん等が歸ると間もなく啄木は最初の北海道旅行に發つた。九月二十八日である。「上

京に先立ちて暫らく北海の秋に嘯かばやと、遽かに思ひ立ちては、もとより天下信仰の寂寥兒、旅もよひもソコ〳〵に、午後四時四十分、好摩が原の蟲の音に送られて鐵車窓裡の人と相成り、十有九ヶ月閉居の生活より忽ちに秋風一路天馬の跡を追ふの遊子と」なつたのである。

この旅はその「第一夜を尻内の旅舍に塒を定めて朽欄に凭る惆悵の旅烏、梅の落葉と共に鋭くもさし來る十九夜許りの月光に、人戀ふる胸を照らさせて」啄木は「相別れて四日」ばかりの節子さんにもう愛戀の遣瀨なさを感じてゐる。その翌日は朝早く汽車に乘り「下河原湖上の秋曉に無限の詩歡を貪ぼり、三四時間野邊地が濱に下車して、咲き殘る濱茄子の花を摘み、赤きその實を漁童と味ひ」その夜は青森に冷たき夢を結んだ。

三十日、陸奥丸に乘船して津輕海峽を渡つた。はじめて踏む北海道の土。その晩は函館の谷地勘九郎氏の許に泊り、翌十月一日、獨逸船へレーン號に便乘して函館より小樽に向つた。船中では船員の獨逸人や水夫の支那人と破格な英語で會話を交はして喜んだ。そして「海上二十時間、船首幾度か北轉して、浩洋たる秋光北溟の上に」その夜を明かして翌二日午前十一時姉君の居る小樽に着いた。

その小樽には二番目の姉とら子さんが病氣で臥てゐた。啄木はその姉の病氣を知らなかつた。

幾年も逢はない姉は突然尋ねて行つたらさぞ驚くだらう、どんな顏して喜ぶだらう。啄木はさう思つて家へ飛び込んで行くと、そこには「こは如何に、姉は病床に呻吟して、みとりの人々枕邊に居並び」しんと靜かな病室には秋の光が濕(しめ)やかに漂つてゐたのである。「遙々さすらひ來つて圖らずも姉の病床に侍す」と啄木はその意外なことに驚いた。

小樽では「病む姉の枕邊の睦語りのひま／＼に」小樽新聞社へ訪ねて行つたり、「寄せては碎くる寂浪(せきらう)の岸邊に」さまよつたりした。啄木はそこで北海の空氣、風光、社會の狀態に啄木一流の銳い感じを受けた。

二度目の上京とその東京生活

この旅から歸鄕したのが十月十九日である。越えて二十八日、待ちこがれた上京の途に上ることゝなつた。途中盛岡の姉の家に一泊し、三十一日東京に着いた。今度の上京には啄木も期する所があつた。幾多の好詩篇をすでに世に問ふて「天才少年詩人」の名を背負つての上京である。啄木はその詩集の上梓を計畫してゐたのであつた。その時の樣子は金田一氏の書いたものによると、「石川君の二度目の出京は、仙臺平の袴を着け、頭の毛を分けて、ソフトをかぶり、丸に笹龍膽を大きく染め拔いた木綿の五つ紋の羽識を重ねて、出來るだけ背延びをして歩いた」。その仙臺平の袴は「投げれば立つやうな」立派なものであり、それに南部桐の新らしい下駄を履き、ステッキをつき、上等のタバコをふかして堂々たる風姿であつたさうである。これが十九歲の詩人啄木の姿であつたのである。

この時は向ヶ岡彌生町三の村井といふ家に落付いた。が間もなく十二月八日には神田の養精

館（駿河臺袋町八）といふのに移つてゐる。

詩作は引續いてさかんに行はれ、この十一月には『白羊調』を「白百合」に『秋風高歌』を「時代思潮」に『秋草一束』を盛岡中學校友會誌に發表し、『祐林』『大火盡』『壁畫』『炎の宮』『のぞみ』『眠れる都』『二つ影』等の長詩を作つてゐる。

そしてこの月末にまた轉居した。今度は牛込砂土原町三ノ二十一井田芳太郎といふ家である。この頃になると流石の仙臺平の袴もくしやくしやになつてきた。この袴は啄木は何處へゆくにも着けて出た。よく新潮社の與謝野氏の家へ出かけたが、やはりこの一張羅を着けてゆくし、（そこで大學生の生田長江氏などに會つた）仕舞ひにはその袴をはいたまゝ寢るので折目も何もなくなり「投げれば立つやうだつた」袴もよれよれになつてしまつたのである。

それ位だから金はないのである。この時もこの前の上京の折とこの點では同じであつた。詩では新進として高評さくさくであつたとはいへ、その原稿はとても金にはならないのである。期待した詩集の刊行もはかばかしく進みさうもない。といつて故郷から仕送りがくるではなし。しかし元來啄木はさういふことには平氣であつた。平氣でないにしても大して苦痛とせず、困つても應揚にしてゐた。度々下宿を換へてゐるのも恐らくはこのやうな理由からであらう。金

がなくて氣がくさくさすると蟇口の底をはたいて「大枚十錢五厘」女中に葉書を買つて來させて方々友達の所へ書いた。大隈伯(當時)のところへ會見を申し込んだといふのもこの時の事であつた。この葉書の一枚へ「貴下のやうな世界的大政治家と私如き一小詩人と會つて話したたら面白いでせう」といふ意味のことを書いて出した。これには例の啄木の茶目氣分が大部手傳つてゐる。しかしまた啄木はさういふ有名な人物と逢つてみたい癖といふか何處かそんな氣持があつた。尾崎行雄氏が市長の時も會つて來るとか來たとかよく云つたのである。これがまたさう聞かされる人にとつては何か嫌味な誇大狂のやうにとられてゐたらしいのであるが。――この大隈伯へもこの流儀で葉書をかいた。

ところが、その返事が來た。それにはいかにも大隈伯らしく「面白いから兎に角逢はう」といふことであつた。大隈重信は、さういふ詩人藝術家なぞと話すのが好きであつた。だがつひに十九歳の啄木は逢ひに行かなかつた。行けなかつたのである。――電車賃さへもうその時はなかつたので。――

收入の道がないのであるから、乏しくなるばかりである。このやうな貧しさがつゞいて年の

暮となつた。このときは「生は豫算が違つて誠に哀れなる越年をせねばならぬ事と相成候。詩人や學者、何處も同じの秋の夕ぐれにてトントン算段がつかず。苦境も斯うなつては氣樂な者。笑ふより外無之候」（十二月二十二日）といつてゐたがたうとうどうにも困つてしまつて金田一氏の友情にすがらねばならなくなつた。

「本月太陽へ送りたる稿、〆切おくれて新年號へは間にあはぬとの事、天溪より通知あり、この稿料（?）來る一月の晦日でなくては取れず又あてにしたる時代思潮社より申譯狀來り、これも違算。

かくの如くして違算又違算、自分丈は呑氣で居ても下宿屋が困り、故家が困つては、矢張呑氣で居られず。全く絶體絶命の場合と相成申候。

一月には詩集出版と、今書きつゝある小説とにて小百圓に取れるつもり故、それにて御返濟可致候に付、若しく御都合よろしく候はゞ、誠に申かね候へども、金十五圓許り御拜借願はれまじく候や。」（十二月二十五日）

この手紙を見た金田一氏はその時盛岡に歸省してゐたが、父親に譯を話して早速十五圓貰つて送つてくれた。この金で啄木はやつとこの三十七年の年の暮を越すことが出來たのである。

正月になるとホッとした氣分になつて「お正月にツンとすまし込む奴は、まだ悟り切れぬ連中なるべく、など悟つた風は眞似をして散々急はしく祝ひ廻つた。」丁度旅順が陷落したときで市中は大變な賑はひであつた。啄木はその時初めて花電車に乘つてみた。加留多とりに夜を明かして、餘興のお白粉顔で歸つてきて下宿の女に笑はれたりした。

一月五日には新詩社の新年會に出席した。この會には、上田敏博士、馬場孤蝶、蒲原有明、石井柏亭、大井蒼梧、平野萬里、茅野蕭々、それに山川登美子、增田まさ子の二女流詩人と主人寬、晶子夫妻等が集つて賑かだつた。その女詩人達から皆にお年玉が贈られた。それは各その人の歌に因んだもので、たとへば「平野萬里君へは『み膝に置かん戀しくばつけ』にて美しい手毬一つ。川上櫻翠君へは『み手を知りしは夢かあらぬか』にてうす紅の手袋。蒼梧君へは、『……夜殿に出づる蚊ともなり綾羅の袂玉の手に死なむ』にて淡紅色の木綿にて縫ひ上げたる長い袂一つ」等であつた。この女詩人の思ひつきに、してやられた形の男子側が今度は急拵への「……たま〳〵燭は百にも增さむ」の山川登美子女子に蠟燭十本許りを一束に立てゝ火を付けたのを出すといふ騒ぎであつた。その夜、寬夫妻と山川、增田、蒼梧、萬里、蕭々、啄木の八人で徹宵して百首會をやつた。その時啄木は十六行の詩一つと外に未完の長詩を得て翌朝十

時ごろ下宿へかへつた。
だが、さういふ正月もすぎてしまふとまた生活のことが重く啄木のうへにのしかゝつて來る。

「ユニオン會」離別

啄木は金田一氏に金を拜借してこの年を越す事が出來たことは前にいつたが、この時ばかりでなく氏にはずつと經濟的な厄介をかけるやうになつた。また金錢上のことでは金田一氏のみでなく外にも多くの先輩や知友からも融通をうけるやうになつた。外に收入の途がないので勢ひさうなつていつた。自然、迷惑がその人達に及ぶことになる。啄木は借りても返せる當がない。當はあつてもいつも〳〵その當ははづれる。例へば金田一氏に對しても啄木は

「兄よ。
あゝ我は大罪人となりぬ。我は今この風寒き都を奔走しつゝあり。願くば少しくまたれよ。」

といふ葉書を書いてゐる。これは金田一氏から借りた年越の金のいひわけであらうと思はれるが、やはり當てにしてゐた詩集もまだ上梓されないし、小說も金にはならなかつた。啄木の

「達算」は初めから駄法螺を吹いてゐるとしか人からは思はれないやうであつた。
實際啄木には、啄木がおもふやうに事がはこんでゐたら借りた金も思つた通りに返すことが出來たであらう。その當がすべてはづれるのである。さういふことが度重なるにつれて、その先輩知友間には啄木の評判はだん〲惡くなつていつた。それに啄木には詩人的な怜悧、といふか普通はづれた昂然さがあつた。たとへ貧乏はしても、それ故に却つてどこか虚勢を張つてゐるやうなところがあつたらしい。詩集が刊行されゝばとかこの原稿が出來れば何十圓入るとかさういふことをよくいつた。それがなか〲實現しない。啄木は嘘つきだといはれるやうになる。これらが金錢上の不義理とあはせて惡評を得る原因となつた。
前にも一寸書いた、時の市長尾崎行雄氏を訪ねていつたのもかうした時のことである。
『一握の砂』の中にある

手が白く
且つ大なりき
非凡なる人といはるる男に會ひしに

といふ歌はすなはちこの尾崎行雄氏を歌つてゐるのであるが、啄木は道で會ふ人に——今尾崎行雄に會つて來た——などゝ話す。聞かされた方ではまた例の法螺をいつてると思ふのである。この時は實際に面會してゐるのであるが、（或る時は氏に洋食の御馳走になり、食べつけない料理に啄木は困つたことなどもある）どこか啄木は嘘や法螺を平氣で云ふ誇大狂だといふ風におもはれてゐたのである。

啄木には

あの頃はよく嘘を言ひき。
平氣にてよく嘘を言ひき。
汗が出づるかな。

「悲しき玩具」

といふ歌もあるから血氣にはやる嘘を言つたのもまた本當ではあらうが。

詩集もなか〳〵上梓される運びに到らず、原稿も金にならず、それでゐて啄木のいふことは昂然と煙に卷くやうである。はたからはさう見えたに違ひない。啄木の夢と現實はいつもちぐはぐである。與謝野晶子女史はその啄木のことを「春風のやうな法螺を吹く靑年」と女史らしい言葉で云つてゐるさうである。

このやうにして啄木は郷黨の先輩、親しい友人から離れなければならぬやうになつた。それらの人々にとつて、啄木は度すべからざる不良な人間に見えたのであらう。

だが啄木には仕方のないことであつた。啄木はそれをどうしようともしなかつた。彼には「啄木はあくまで啄木だ――」といふ腹がある。人がさう斥けるならどうにも仕方がない。啄木は自分に惡意のないことを信じてゐる。だが結果に於ては人に不信をいたすやうになつてゐるのである。啄木はさうして、人々から訣別をうけなければならない。かうして、啄木は彼が牛耳をとり、懷しい中學時代の思ひ出の種である力添へでもあつた例の「ユニオン會」同人とも訣れなければならないやうになつてしまつた。これは、われ〳〵としてもさびしいことに思はれるのであるが、啄木の行跡を苦々しく思つてゐた同人間に、「ユニオン會」から彼を除名すべし、といふ議が起るやうなことになつたのである。

これは啄木が結婚して盛岡へ歸つてからのことであるが、この除名問題に關して啄木の氣持を確めるための手紙の返事に啄木は次のやうな手紙を伊東圭一郎氏宛に書いてゐる。

「その後、兄には別にお變りもなかりしや、よし、ありたりとも小生の境遇に比しては何の事もなかるべくと存候。その後、生が親友間に得たる豫想外の地位は、小生の豫て知り、ま

た今も明かに存じ居る所、但し小生は、この事に就いて何事も語るまじく候、啄木は啄木に候、たとへ大江さかしまに流るゝ事ありとも、我は遂に我也。生は或る一の『機會』の必ず來るべきを信ずるが故に、それ迄暫時沈默を守らむと存じ居候ひし處、兄が生の住所を問ふの飛信妻が家に來れりと聞き、兄は矢ッ張り兄なりき（呵々）と思ふて早速この筆を取り上げ候、生は貧乏也、この一事は誤つて生をして普通の人間に伍せしめたり、他に何もあるなし、但し生、今旣に貧乏に安住するをうるの覺悟を得たり、この一念は云ふまでもなく富よりも何よりも尊し。時として生は世の中のアマリに馬鹿くさく、塵塚の樣なるに憤慨する事有之候へども、憤慨するのも馬鹿くさき事故、生は今、最良なる方法として、最愛の友を自己に見出し申し候、而してまた、最高度の『愛』のみ人生のすべてを解釋する事實に於て見るを得候、過去數ヶ月間、小生を司配したる、誰も知らぬ秘密の運命あり、これは他日一夕の茶話として兄にも語るの日あるべきか、人生の趣味と價値とはその平和ならざる事にあり、波瀾洶湧する事にあり、而して生の心がその波の底の千古の岩の如く不變なりと思へば、更に趣味の多きを覺え候、

小生は結婚いたし候、何卒御よろこび下され度候、諸兄にも御傳へ被下度候、天下のロクデ

ナツのゴロツキの小生が、杜陵の青嵐に胸の塵臭吹き拂はせて一家團欒のうちに無上の『愛』の實果をむさぼりつゝあるとは、さても奇妙なる事に候。

而してこの寂光の淨土にありて、休む事なき勇猛心が何かまたおもしろき事を孕みつゝある事を御承知被下度候。

日月の光暗くならぬうちは小生も死に申さず候、云々」

以上の書簡のうちに表白されたやうな啄木の氣持は、しかし同人の氣持を和らぎしめるには足りなかつた。啄木の一方的な氣持はとにかく、同人としては啄木を除名するしかない。たうとう「ロクデナシのゴロツキ」啄木はなつかしい「ユニオン會」からも離別しなければならなかつた。

當時の啄木のさういふ性格はなかなかひどかつたらしい。啄木の「法螺」にあきれて離れていつた親友に上野廣一氏がある。氏は有名な肖像畫家であり、明治神宮繪畫館にも「明治十五年の條約改正會議」の壁畫を書いてゐる。この上野氏は啄木と盛岡の高等小學校からの友人であり、啄木の結婚の時には事實上の仲人役としていろいろ骨を折つてくれた人であるが、その後だんだん啄木から離れていつた。吉田孤羊氏の記すところによると、その上野氏が畫の修業

に外遊する折、たま〳〵啄木の處女歌集「一握の砂」が出てゐたので、昔なつかしく、その歌集を買ひ求めて船中で讀んださうである。するとむかしの親しかつた友人が思ひだされて、永年杜絶えてゐた啄木のことがしみ〴〵と思はれた。しかし讀んでゆくうち、

やとばかり
桂首相に手をとられし夢みし覺めぬ
秋の夜の二時

といふ一首にぶつつかつて、氏は「あゝ啄木はまだこんな法螺を吹くのかなあ」と思つたといふことである。

啄木にはまた、

誰ぞ我に
ピストルにても撃てよかし

伊藤のごとく死にて見せなむ

といふ歌もある。大隈伯に手紙を出してみたり、好んで尾崎行雄に會ひにいつたり、「伊藤のごとく死んで」見せよう、と歌つたり、昂然たる夢を抱く啄木のいふことは、普通の人には何か誇大な、噓つぱちに見えた。勝氣な、自信たつぷりな啄木は、さういふ人物も自分と隔たりのない人間だと思つた。自分と同等な人間である、自分にもそれだけのものはある、と思ひたかつたのではあるまいか。啄木は自分の才能と信念にも關らず、事は遂行せず、ひどく貧乏である。

何としても境遇が惠まれない。反撥して暴れゝば、ます〳〵縛られる結果となる。ひとつはさういふことが彼の性格に反射して、自分の力を信じやうと、かゝる誇大妄相的な言辭を弄させる結果となつたのであるまいか。これは悲しき彼の自慰的な言説だつたといへるのではないだらうか。

寶德寺問題

さて、また砂土原町時代へかへらう。啄木は二月には『落梅』『泉』『青鷺』『小田屋守』『凌霄花』『草苺』等の詩を作ると共に、また詩集出版の企圖もやつと熟して來た。（三月十日にはまた下宿を牛込拂方町にかへた。）

そして待望の詩集の校正も出來てくる頃、彼の故郷に啄木の思ひも設けなかつた事件が突發したのである。啄木はこんどは何でもかでも一家扶養の重責をその若い痩せた、力ない肩に負はねばならなくなり、それがひいて啄木の一生を苦しめ、惱ますやうになつた事件。――それはかうである。

中學を中途にて止し、啄木が上京して四ケ月、窮乏と病苦にやつれた身を、はるばる父一禎氏が迎へに來たことは前に述べた。あのとき、あの旅費は寺の裏山の杉を伐つてひそかに得たものであつたこともいつた。それが問題となつたのである。

寺の杉樹を檀下に無斷で伐り倒し、息子の爲に私用した、これが、檀下のものにわかつて面倒なことになつた。住持である一禎氏が寺を出る、出されるといふまでに惡化した。ではあるが、永年寺に功勞のある住持であるといふので、そこは仲裁に入る人もあり、頑固な檀下を說いて、先づ、そのまゝ無事に濟みさうであつた。

ところが、意外にも石川家の方からそれを壞すやうなことになつてしまつた。といふのは啄木の母堂である。啄木のことには目のない母親は、また啄木を信じることも大きかつた。あの一が、もう大きくなつてゐる。しかも東京で天才詩人としてすでに名をあげた。母親の盲愛の眼には啄木の苦鬪の貧困は映らなかつたのであらうか。間もなく詩集も出版される一を賴らう、なんのこんな田舍の寺くらゐ。――

かつ一途に啄木を信頼し、折角きとまりかけた問題をわれから壞して寺を出ることにしてしまつたのであつた。

このことを知つた啄木は、ことの意外に驚き困惑した。彼は四月十一日金田一氏宛の手紙に、這般の消息、困惑、懊惱を次のやうに述べてゐる。

「その後の御無沙汰は何とも御詫の致し樣も無之候ふ次第、何れ御拜眉の上にてトクと御話も可致候へど、故鄕の事情と、詩集の編輯や校正や、おまけに病氣や、友人の困難やにて殆んど目もまはると云ふ騷ぎ。故鄕の事にては、この呑氣の小生も懊惱に懊惱を重ね煩悶に煩悶を重ね、一時は皆ナンデも捨てて田舍の先生にでも成らうかとも考へた位。結局は矢ツ張本月中には一家上京の事に不止得相纏り申候。幸か不幸かはさて置き、先づ以て乍他事御安

心識下度候。詩集の方は題は『あこがれ』と致し、上田敏氏の序詩一篇有之候。數日前印刷の方も全部出來上りと相成り候へども、和田英作氏の表紙畫未だ出來ざる爲め猶こゝ四、五日の後にさらざれば製本濟とならざるべく候。私事の勞苦に疲れて夜な／＼は人なき孤島の生活など羨むの涙に枕をぬらす小生には、この初兒の誕生を待つこと、心苦しくもあり、いとはしくも有り、この一卷によりて益々この世の中との緣が堅くなる事と思へば、寧ろ火中してしまひたき事も有之候へど、自分で自分の卑怯を叱つて瞑目一番氣を持ち直し居候。」

上京して苦心慘憺、やつとのことであれほど期待をかけ、待ちきれぬ程待つてゐた詩集の、やつと校正の出來かけたとき、この靑年詩人の魂を搖がした故鄕の事件は、全く啄木を懊惱の底ふかく落し込んだ。自分一人ですら口に糊することの出來ない現在、いかに詩人として名が出たとはいへ、兩親の上京を迎へねばならぬといふことは、その若い肩に重荷すぎる、むしろ無謀な重壓であつた。しかしもう寺を出て、啄木を賴つてくることをのみ思つてゐる兩親を思へば、啄木は石に嚙りついても何とかしなければならない。思ひ惱んだ末はあれほどな詩集すら燒してしまひたくなる。やつと思ひ直す、そのやうなことも友達に話せば、啄木が——と一笑に附される。啄木は貧乏が憎かつた。すべて煩悶の因もみな貧なる爲だ、先の手紙の次に左の

やうに書いてある。

「兄よ、天下に小生の恐るべき敵は唯一つ有之候。そは實に生活の條件そのものに候。生活の條件は第一に金力に候。小生は金の一語をきく毎に云ひ難き厭惡と恐怖を感じ申候。小生は少くとも惡人には無之候。然もたゞこの金のために、否金のなき爲め、貧なる爲めに、親に不孝の子となり、友に不義の友と相成るにて候。」

しかも現在の啄木にはその金を得る途がないのだ。詩集を出版したら、と人にもいひ、自分でもさう思つてゐた、その詩集も、高價な原稿料はおろか、やつと自費出版をまぬかれるといふ位なものであつた。啄木はふるさとの事件が、あと二年後に起つたのであるなら、と思つた。そしたら、その時位になれば、何とか切り開く道は立てる自信がある。が何といつても今は。

――彼は方途も知らないのだ。「神よ願はくは余をして生活の條件のために心を要せしむ勿れ」眞實彼はかう思はずにはゐられなかつたのである「それ以上の事は余自ら成就しうるの自信あり。然らざれば、願はくは凡ての人の同情を余より奪ひ去れ。これあるうちは余は永久に惡人たらざらむとして苦悶せざるべからざる也」

新詩社文人劇と「あこがれ」出版

いろいろ氣がもめると、彼は俳優になつたなら、と屢々さう思ふことがある。といふのはこの頃新詩社の演劇會といふものがあつた。その稽古會なども見、自分も、兩國の伊勢平樓でその演劇會が行はれたとき、一役買つて出たのであつた。といつてもそれはたゞほんの端役にすぎないのであつたが、そんな事で少し演劇といふものに關係するとやきもきして焦燥の啄木はすぐ、俳優になつたらと思つたのであらう。

その伊勢平樓の芝居はなか／＼面白かつたらしい。北原白秋氏は未だ白面紅顏の、早稻田大學の學生であつたが、その芝居を見に行つて、そこではじめて啄木の顏を見たのである。「明星」誌上で華やかな詩と共にすでに有名だつた啄木の姿を、白秋はその時はじめて見て、「あれが有名な啄木か」と思つたさうである。

それは高村光太郎氏の戯曲で、天刑病の姉妹が結婚しない約束をする。そこへ一人に戀人が出來て惱む、といふ筋の劇であつたが、それに啄木は學生帽をかぶり舞臺を横切る役をした。「明星」の讀者券を持つて見に行つてゐた白秋はそのときの啄木を見たのである。

この時は、たゞそれだけでこの兩詩人は話もせずに別れた。
また、この劇で、たゞ舞臺を通るだけの役をする少女があつた。この女役は新詩社の同人にゐないので他から頼んだのであつたが、この少女と後に啄木は交渉を持つやうになり、困惑を感じるやうなことにもなつたのである。
この演劇會があつたのが四月の十五日。そして五月十日には、やつと難航をつづけた詩集が出來上つた。啄木の敬愛してゐた上田敏博士の序詩、與謝野鐵幹氏の跋を載せて。しかし表紙は和田英作氏のが出來ず、彼の鄕友、石掛友三氏の裝幀であつた。詩集の名「あこがれ」は鐵幹氏の名づけるところで、「此の書を尾崎行雄氏に獻じ併て遙に故鄕の山河に捧ぐ」と彼の「非凡なる人」として尊敬してゐた尾崎行雄氏にエデイケートした出版書店は小田島書房。
いよいよ處女詩集は出た。がそれによる收入は啄木が思つたほどではなかつた。

仙台の十日間

華やかなるべき詩集の刊行も、故鄕の事件によつて、いまは逼迫した一家の問題が目前に氷山の如く行手を塞いでゐる。父母をいま直ちに上京させ、扶養する事が無理であれば、何はと

もあれ、一刻も早く節子さんとの結婚をすませて、せめて愛人同志の生活を――とは故郷の周圍の人々の思ひであつたのであらう。故郷ではその話が、上野氏らの力によつて具體化してきてゐた。啄木上京の目的もまた、詩集の刊行と、ついでは愛人節子さんとの結婚生活であつた筈だ。さういふ話が熟してくると、啄木は、駒込神明町の吉祥寺の側の「詩らしい靜かな所」に「ヒドクよい」家を探した。そして事實上の仲人としていろ〳〵奔走してくれた上野氏宛の手紙には、「炊事の婆さんも頼んで置き候、兄を迎ふるの時、青葉の中のわが新居、久し振りに書の話しでも可仕候」といつてゐる。この手紙によれば節子さんは上野氏に送られて上京するまでになつてゐたやうである。がしかし、矢張り故郷で擧式することになり二十日上野を出發して歸途についた。

出來れば節子さんを連れてすぐにまた上京したかつたのであらうが、しかしこの間の複雜な生活から啄木の氣持も簡單ではあり得なかつた。だいいち、詩集はだしても金ははいらない。歸郷する汽車の中に、啄木はいかなる氣持でゐたであらうか。複雜した氣持を持つてゐた啄木は、むしろ都塵をはなれて、このまゝわずらはされない旅に出てしまひたかつたかも知れない。

仙臺！そこには「天地有情」の詩人土井晩翠教授がゐる。當時仙臺醫專の學生だつた、小林

花郷、猪狩五山氏らもゐる。さう思ふと、啄木は仙臺に下車して、會つてゆく氣になつた。まつすぐに、盛岡へは歸れない何か氣持のつかへるもの、それが金錢のことか何かはわからないが、とにかくさういふものがあつたのであらう。

そこで一流の宿屋、大泉旅館に宿つた。

そして、ここではじめて啄木は次の葉書を書いた。

孤袖の遊士、黒惆悵として昨夜この青葉城下に旅の第一夜の夢を結びぬ。宿は廣瀨川に枕せる岸の上、欄下の公孫樹葉若く、飼ひたる鶯はよく人に慣れたり、終夜川音を聽きぬ。

二十一日　　　　　　　　　　　仙臺にて

啄　　　木

小　澤　水　心　兄

〇

ふる里の閑古鳥を聽かむと俄かに都門をのがれ來て、一昨夕よりこの廣瀨川の岸に枕せる宿に夢の樣なる思ひに耽り居候。月末までには再び都門に入るつもり。この落人の心のかすく、うさたのしさは凡て故里より申上げむ。

仙臺にて

啄　　木

二十二日

金田一京助様

場合が場合である。故郷へ愛人との結婚式を擧げる爲に歸る人としては「孤袖の遊士、思惆悵として」といふのは、例の啄木の名調子とのみは思はれない陰翳がある。「ふる里の閑古鳥を聽かむとして」といふのにも何か、目の前の結婚に對して、結婚式にゆく、と露はにいへない怯みがみえる。

その複雜な氣持、それには東京での困苦した生活が押し溜つてゐた。故郷のことも重荷であつた。その故郷へ晴れ〴〵と歸ることの出來ないのも無理はない。

だが、一方、一流旅館へ泊つて、土井氏や友人達に待遇されると、啄木はまた、すべてを忘れたかのやうに、すごしてしまふのである。十日の間、晩翠氏におくる詩「くだかけ」を書いたり、「夏は來ぬ」といふ詩を作つたり、土地の新聞へ「わかば衣」を寄せたりしてゐた。

その宿屋の宿料なども土井氏が心配してくれた。それだから持前の應揚さから……その反面

にはまた、故鄕へまともに歸れぬてれくささ、も苦く心にたまつてゐたに違ひないのだが――悠々と遊び廻つてゐた。この氣持は例へば浦島太郎のやうなものであつた。もてなされるままに、現前の氣持の苦さは忘れたかのやうに振舞つた。こんなことも、一途な氣分の趣くまゝに行動をとる、啄木らしいことである「詩人」らしい奔放さといへばいへやう。その奔放さで彼は振舞つた。

「宿泊料のことは心配なく、この序にゆつくり仙臺を見て行き給へなどいふやうな土井教授の御言葉に、すつかりのんびりとなつて、悠遊してゐたのではなかつたらうか、この宿料を土井夫人が支拂ひに出かけられたら、二三人の訪問の學生と、ビールの滿を引いて飮んでゐたので驚ろいてしまはれたといふ。この事を最近に、當の土井教授に伺つたら、莞爾と微笑して肯定された」と金田一氏は書いてゐられる。

また啄木自身かう書いてゐる。

「このたびの我が旅故鄕の閑古鳥聽かむがためとも人に云ひぬ。塵ばみたる都の若葉忙しさ限りもなき陋巷の住居に倦み果ててとも云ひぬ。何はともあれ、素袷さむき曉の風に送られて鐵車一路の旅、云ひがたき思を乘せたるまゝに、小雨ふる仙臺につきたるは五月二十日の黄昏時

なりしが、ただブラ〳〵と都門を出で來し身のもとより心さへ身さへ定まらぬみちのくの放浪兒、古への宮城野の跡の月もはるなる眺め仲々に捨てがたく、若葉衣の袖かろく心もすがすがなるに、たへがたき思ひある身も聊かはなぐさみて、さつき晴なる折々は廣瀨川の畔にもさまよひ青野の涯に海を見る天王臺、むかひ山などにものゝりぬ。尻上りのそこの詩もききなれてはさまで耳に惡からず、晩翠湖畔花郁臥城など親しうする友達の情にほだされて、ついうかうかと十日許りの旅館に打過したり……」（落人ごころ）

盛岡・新婚生活

啄木はこの仙臺を發つと盛岡へ降りずに、こんどは乘り越して澁民村へ行つてしまつた。盛岡では、上野氏が仲人役として今日か明日かと待つてゐた。上野氏は啄木から何日までに歸るといつてきたのでその心算で堀合、石川兩家の仲に立ち何くれと結婚の用意をして待つた。けれども、啄木は上野を發つたきり行衞不明になつてしまつた。もう結婚式の用意萬端出來て花婿を待つばかり、その花婿が皆目わからないのであるから上野氏も困つてしまつた。堀合家からはどうしたと責められる。節子さんには恨まれる。どうにも仕方なくなつて、氏は意を決し

て、花婿抜きの結婚式を擧げてしまつた。

そのころ當の花婿啄木は、故郷澁民村にゐた。なつかしいふるさと。その山、川。結婚式にも勇んでゆくことの出來ない境遇のいまの啄木は、そも如何なる感慨をもつて、この山川に接したであらうか。勢ひこんで去年の十月末、この澁民村を發つて七ヶ月、待望の詩集は出版はしたものの、思ふやうな生活の資が得られる譯でなし、おまけに今や父もこの寶徳寺を出なければならなくなつてしまつたではないか。「ふるさとの閑古鳥を聽かむとして」歸つた彼はいまいかにその聲をきいたであらうか。――

また、何故、戀人兩親の待つてゐる盛岡を素通りして澁民にきたのであらうか。

年譜によれば啄木はその間「澁民の村人の間に何事をか運動してゐる」とある。これについて、金田一氏は「何の爲に殊更に盛岡を過ぎて澁民へ廻つたのか。戻られるものなら寺へ戻らうとする運動の爲？　さう迄でも恐らくあるまい。」とし、やはり、永久に去るとすれば幼少からの馴染の森や池や丘に、道傍の一つの石にも心が殘るであらうから、「本當に、林をめぐつてひそかに閑古鳥の啼く音に名殘を惜んで來たのかも知れなかつたやうに思はれる。」といつてゐる。また吉田孤羊氏は、どんな呑氣坊な當時の彼にしても、寺を出て困つてゐる父母の許へ、

しかも時の自分の結婚式に際して「まるつきり素手では歸れなかつたので」澁民村の知己の間にその結婚費用の調達に奔走する爲だつたといつてゐる。「それは五月三十日附で好摩驛から上野氏に宛てた左の短信が暗々裡にすべてを語つてゐる。

『友よ友よ、生は猶生きてあり、

二三日中に盛岡に行く願くは心を安め玉へ。』

だが、金策のためだつたとしても、啄木には矢張その金は出來なかつた。

そのやうに啄木がぐづ〳〵してゐて花嫁抜きの結婚式を擧げる仕末であつたので、かう啄木が歸らないのは、彼がこの式を好まない爲、節子さんを嫌らふやうになつた爲ではないか、といふやうな噂すら立つやうになつた。これは啄木の愛を信じて疑はない節子さんにとつては非常な苦しみでなければならない。節子さんはその燃えるやうな胸の中を次の如く上野、佐藤兩氏に告げてゐる。

「上野樣並に佐藤樣に

吾れは啄木の過去に於けるわれにそゝげる深身の愛、又は戀愛にたいする彼れの直覺を明にせんとて今此の大書狀を君等の前にささぐ。此の書は三十六年彼れ病をおうて歸りし當時、

ある人の中傷より私外出を止められ、筆をとる事さへ禁ぜられたる時、吾にあたへし處に候、願はくは此の書に於て過去二三年の愛を御認め下され度候。吾れはあく迄愛の永遠性なると言ふ事を信じ度候、岩手館よりの書御參考までにそへ申候。私の決心は今宵くはしく認め參らすべく候。早々。

明治三十八年六月二日　　　　節　　子

御兩兄樣御許に

心亂れ候折柄亂筆御ゆるし下され度候」

節子さんは「心亂れ」て啄木より貰つた長い書簡を示し、啄木のかはらざる愛を信じてゐたのであつた。まことに眞に愛するものは眞に愛するもののみが知るのである。

さうしてゐる中に、やつとその啄木が歸つて來た。すでに結婚式は（花婿拔きで）濟ましてあるので節子さんと兩親、それに光子さん達と盛岡市帷子小路八番戸にさゝやかな、せまく「むさくるしい」ながら啄木にとつては夢を見るやうな嬉しい新婚生活が初められた。それは六月四日のことであつた。

それがどんなに嬉しい、喜びに滿ちたことであつたか。「ここのいぶせき四疊半に於ける三週

あまりの悲歡は、我が生涯に一新時代を劃したる事明か也。二十年の間孤舟漂浪の歴史を續けたる身は、七年のゆめを鏡にしてこの時よりぞ彼が半身と共に樂しき新巣守る主人となりたれば也」といつてゐる啄木のこころを思へば充分である。

その有樣は、彼が當時「岩手日報」に載せた隨筆「閑天地」の中の「我が四疊半」によく窺ふことが出來る。

それには次のやうに書いてある。

「我が四疊半は、蓋し天下の尤も雜然、尤もむさくるしき室の一たらむ。而して又尤も暢氣、尤も幸福なるものゝ一ならむ。一間半の古格子附いたる窓は、雨雲色に煤ぶりたる紙障子四枚を立てゝ、中の二枚に硝子戸嵌まり、日夕庭の若葉の影を宿して倦らず。」しかもその部屋は西向きなので朝々と朝日に照される事もなく安心してゆつくり朝寢の夢を貪ることが出來る。そして十時ごろに起き出して、朝餐と晝餐を一緒に食べるなぞといふことは極く多いことだから、このごろは大抵九時ごろに起されてしまふ。枕の上で新聞をよみ、五六行讀んでは天井を眺め、眺めては又讀みそれが非常に樂しい「かくて三十分位は夢の名殘りのあたたかき臥床の中に過す」のである。

放浪兒、石川啄木はいまこのやうに心和み、おそらく二度とこの後なかつたしづかさを心の上にも生活のうへに感じた。何といつても樂しい新婚生活である。詩人の心はその四疊半の疊の、いぶせき焦茶色なのにさへ「數多の美しき人の眞白き足に擦れて」かうなつたとおもふと却つて面白く感じた。その疊には一尺五寸ばかりの爐が切つてあり、その爐には五合入りの鐵瓶がかゝつてゐる。この鐵瓶こそ啄木の兩親が――今は啄木達がしてゐるやうに、初めて世帶を持つたとき伯父さんの對月老僧から贈られたもの。それからすでに四十年も經つてゐる。その間「一日の障りなしに絕へず樂しき團欒の室に白湯の香を漲らせ、淸閑の韻をひゞかせ」てゐる。そしていまは啄木らの生活にまで及んでゐる。そんなことを啄木は新婚の樂しい心の中に思ひめぐらすのである。啄木にとつて幸福な日日であつた。その幸福感はこまごまと、四疊半の室内の有様を書かせる。妹の机の上にある女學校の教科書から、「水汲むギリシヤ少女」の名畫の寫眞があることから、クミチンキの藥瓶のあること。秘藏の節子さんのヴアイオリンがあり、野茨の花が小瓶に淡紅のゆかしさを見せ、それから「披かば二十間も」あるだらう切手五枚も貼つた古手紙、この手紙には「さすがの我もこの天機だけは洩らしかぬる也」といつてゐる。

一閑張の机の上には「物茂卿の跋ある唐詩選と襤褸(ぼろ)になりたる三體詩一卷」「今より六代の前

報恩寺に住持たりし儘運僧正が淨書したりと云ふ西行法師の山家集」「モウパッサンが心理小説の好作「ピール・エンド・ジエン」をクラヽ・ベルが英譯したる一書」などがある。

啄木は新妻に戀人節子さんを得て、なごやかな四疊半に唐詩選をよみ、自分の詩稿とこれ丈は盜まれたくないといつた山家集を讀んだ。それからまた、そこにある古い變色した帽子から過ぎ來し方の生活の流轉を偲んだ。北海道へ行つたときもこの帽子であつた。――

しかし、このしづかな回想と、なごやかな幸福に滿ちた「四疊半」の生活も、そこで暮した日はいくらもなかつたのである。六月二十五日に、一家は中津川のほとり、林檎苑の近く磧町の家に移つたからである。

詩集「あこがれ以後」の卷頭の詩『琴をひけ』といふのは、この帽子小路の四疊半に新婚の夢まどかな六月十日に作られたものである。次のやうな美しい詩である。さながらに啄木の幸福感の現はれてゐるものである。

琴をひけ

沈の香のそよろぎに

わが魂はあくがれぬ。
二人居の初夏や、
はしけやし黒髪よ。
琴をひけ、沈の香に。

たをやかにうつむくか、
沈の香はゆるぐなり。
手ふれては鳴るものか
わが胸も君ふれて
鳴りにしを、琴をひけ。

水無月の青日射（あをひざし）、
庭の樹ぞみづみづし。
青梅は庭石に、

君が手は夏の詣に、
花あやめかをろひぬ。

歌ひくき爪彈や、
沈の香はそよろぎぬ。
はしけやし黒髮も
そよろぎぬ、風ありて
一室は薫じたり。

またその次の日十一日に作られた『妹よ』と題する長詩は、新らしく啄木の妹となつた、節子さんの實妹、たか子さんといふ少女を歌つたものである。この新らしく妹となつた可愛いゝ少女は朝から啄木たちの部屋を訪れた。啄木はかういふ妹が出來てその姉である自分の新妻の膝によりかゝつてゐるのを見るのにも、新らしい喜びを感じたに違ひなかつた。

妹よ　（堀合たか子に）

涼風吹くや、水無月の
若葉の匂ひ、佗住みの
夢の名殘の跡きよめ。
朝餉はてたる窓の中、
澁茶を啜る興がりに、
香爐の青磁はしけやし、
風上に置く風流や、
佗のおごりはこれのみと
わが手淨めて沈焚けば、
何の香ぞもよ妹よ
君はしづかにほゝゑみぬ。

灰色ひくき町の空、
杉ある寺の南や、

木柾に葺ける屋根の上に
とび交ふ鳩の白き羽を
見よと指さし、清淨の
鳩の行方に目はなてば、
あなやと君も星光る
ひとみたゆげにうなづきぬ。

我にならべる婦人の
やはらの膝によりかゝる
君はをさなき妹の、
姉に似たれば、無花果の
新樹のかげのほのめきに
ほほゑみ見せて、おとづれし
今朝の消息を幸ありと、

あはれ、詩に痩せ文に痩せ
ほほけし我はなぐさみぬ。

世の荒海路、梶も折れ、
捨小舟とぞ流れたれ。
我まつ人の胸ふかく
つきぬ泉の壁ありと
めざめて、こゝに、初夏の
すまひ佗しき家ながら、
さだめの外の惠みにか
清きほこりの日のありと、
吟じて暮らすこの頃を、
秀歌はなけれ、慰さみは
諸手にあまる祝福に、

よし、かしましき騒人の
群にはぐれてありとても、
牢(ひとや)さびたる都より
我世はひろき愛の野の
新苑守。向日葵の
あこがれ映ゆく見てあれば、
野の石抱くさすらひの
悲歌に血吐きし孤兒も、
心の空に雲遊び、
心の枝に風光り。
破牕ひくきこの室(へや)や、
焚くなる沈の香煙に
魂やはらかに包まれて、
あゝ、この愛の聖龕(せいがん)に

我はも若き淨身の
沙門とこそはほこらるれ。

君うら若き妹よ、
よしや深森香木の
朽つる日見るも、あこがれの
法林、愛の枝枝や、
しづかにわたる我が歌に
まどかの夢の調あり。
君たをやめの、年長けて、
髪に香たき、貝摺りの
櫛に黄金の象眼や、
はえ〴〵しさに眩ゆさに
さかえの苑生踏むとても、

忘るる勿れ、身は痩せて
心痩せざるうたびとの
二人、草野の孤家（ひとつや）に、
さだめの外の惠みにか
清きほこりの日を知ると、
缺けし香爐に沈焚きて
吟じて暮らす風流を。
君に書くなるこの歌の
しらべは低き夏ながら、
夏の二人のほゝゑみに
ほゝゑみてこそ綴りたる
八十行の我が心、
我が心こそほゝゑむに
君も笑みてぞうけよかし。

また、明星七月號にはこの新婚を歌つた啄木の短歌が載つてゐる。いやそれは「啄木の短歌」とはいへない。何故なればそれには啄木と一緒に節夫人も「せつ子」と名をつられてゐるからである。

次のやうな、甘い、若い二人の新婚讃歌である。

まどろめば球のやうなる何はあまた胸に蓄みぬみ手をそこに

青梅は青して落ちぬほととぎす聴くと立つたる二人もそに

薄月に立つをよろこぶ人と人饒舌なれば鳥ききそれぬ

宵闇や鳥まつ庭の燈籠に灯入れむ月のほのめくまでを

一瞬も惜しと思ひ思ふの日のあらぬ無聊に君うらみける

夜の鐘を立ちてかぞへぬほととぎす聴かで入りける戸の入口に

中津川や河鹿の月に啼く夜なり涼風追ひぬ夢見る人と

夏の月は窓をすべりて盗むごと人の寝顔に口づけにける

この泉汲めば綠の古瓶の我にしよろし百合咲く苑は

わが愁は春くる岡の花草の雪にも似たり雪消(ゆきげ)すらしも

前にも一寸書いたやうにこの――節子さんは新妻姿も美しく、時折は例のヴァイオリンをひき奏でたりした、――幸福にみたされた「四疊半」の生活はわずか三週日にして、「一家と共にここの中津川の水の音涼しくも終夜枕にひゞく」加賀野磧町へ移つた。啄木はその三週日の思ひ出多い生活を慕ひ、かう書いてゐる。

「……あゝ夢の如くも樂しく穩かなりしそこの三週日よ。それは今や、我と我が古鬪との歷史に、一箇の美しき過去として殘されるに過ぎずなれり。

かの室にて、日毎に心耳を澄まして聞くをえしヴァイオリンは、この新居にても亦聞きえざるにあらず、我が書きたるものに振假名を附くる事と、日毎の新聞より『閑天地』切り抜くを勤めなりけるその人も、亦今我と共にここにあり。老いたる二柱の慈親も小さき一人の妹も、いと健やかにて我と共に移りぬ。剩さへ今迄の住居に比べて、ここは蚊も少なく、余りに喧しかりし蛙の聲もなく、疊も襖も紙障も壁も皆新しくて、庭には二百年も經ぬらしと思はるゝ伽羅の樹あり。薔薇も咲き、紫陽花も咲き、嘈々たる川の音絶えざれば風さへいと

涼けきに、人々も我も居心地こよなく好しと喜び合ひはすれど、しかも我が胸の何處かに猶かくれたる一の心ありて、念々としてかのむさくるしかりし四疊半を追慕しやまず。かしこにて、腹や傷めむと叱らるゝ老母の目を盜んでは、潜かに庭の青梅竿に落して心を洗ふ樣なる其味を賞せし事は叶はずなりたれど、わが幸福の增しこそはすれ。心の富の貧しくなりたるにあらぬを、など斯くは我が心かの陋巷を慕ふや。」

啄木自身このやうに追慕し、惜んでゐるやうに、これはほんとに夢のやうな甘いたのしい詩人の新婚生活であつた。たゞこの束の間だけが落ちついた、しづかな息づきであつた。東京での苦しい生活を經てきて、いまやつと、戀人との結婚に、ともかくも安らかな日々を送ることができた。わずかな間ではあつたけれど。——といふのは又候貧苦が——それに、痔などを患つたりして身體の具合もよくなかつた——ゐがてその樂しい夢を破り去るやうになつたから。

啄木は當時「岩手日報」に文章をかいてゐたのであるが、例の「四疊半」の『閑天地』なども、健康の狀態の良好ならざりし故」に中途で斷絕してゐる。

けれども大して病氣といふほどでは勿論なく、元氣は元氣で帷町へ移つてからの七月十六日午後一時から啄木の家で歌會を催したりした。

また或る夜は、折から訪ねてきた花京氏の主唱でせつ子さん光子さんも交つて楽しい歌會をやつたりした。啄木は「十一夜會の記」として當夜の様子を「岩手日報」に載せた。その最初の部を少し抄出してみやう。

「陰暦水無月の十一夜、月いと美しき夜なりき。夕方たづね來し花京君の主唱にて一燈光あざやかなる下、字を結び、興を探りて、互に吟調を披瀝しぬ。あつまれるは殘紅、花京、せつ子、みつ子、啄木の五人。八時頃より初めて、詠出、互選、評語、終れるは子の刻も過ぎつる頃と覺ゆ。中津川の水嵩減りたる此頃、木の間傳ひの水の聲たえ〴〵なれど、程近き水車の響、秋めいたる蟲の音を織りまぜて、灯影ほのめく庭の紫陽花の風情の云ひがたきなど、珍らしく心地すぐれたる夜なりき。人界に降ること稀なる歌苑の神も、この夜のみは、いといつくしく我が草堂に宿りつらめ、と、後にて人と語り興じぬ」

吾々は親しい友と愛する新妻と妹と、このこまやかなる夏の一夜の集りを、親愛を以つて思ひ浮べることが出來る。だが、岡山殘紅氏はこのころはもう歌を作つてゐなかつたのでその即席歌會に一寸面喰つたらしい。次のやうに氏は書いてゐられる。

「……それは彼が（啄木）が磧町に寓居をかまへて、例の『小天地』發刊を計畫して居た頃

のことだ。あの夏の晩何の氣なしに訪ねて行くと、また歌をつくらうと云ふ案が出てしまつた。聊か困つたけれども仕方がない。頗る稚氣紛々たる處をお目にかけた。何しろ今度は節子夫人までが控へてゐて、御兩人とも本場仕込みの、それこそ場違ひでないところをやるものだから、甚だ恐縮した次第である。しかも啄木はその頃『岩手日報』に原稿を書いてゐたので、その晩の記事も二三日して新聞に出たが、それがまた『全集』にまで採錄さるるに至つて一夜の恥がたうとう永久的なものになつてしまつた。」

また氏は次のやうにも書いてゐる。碩町時代の啄木を知るに便なのでここに掲げる。

「碩町のうちには外にもいろんな人達がやつて來た。(中略) 啄木の机の上には、その頃シヤアロツト、ブロンテイの『ジェエン、エイア』だの、ユーゴオの『ノオトルグム、ド、パリ』の英譯本だの載つてゐた(中略)

知りもしないことを書いて、また誰かに笑はれると困るが、ユーゴオの小說は我國で申さば曲亭馬琴といつた調子のものではないかと思ふ。『レ、ミゼラブル』にもたしかワーテルローの戰の講釋かなんかあつた筈だし『巴里のノオトルダム』の中にも中世紀の文化、藝術に關する長々しい議論が挾まつてゐた。里見義實、龍を見て、忽ち龍の說がおつぱじまるといつた

具合である。

ところが啄木にはこゝよなく嬉しいのである。『ユーゴォあたりの作物になると、第一規模がちがふ。日本の小說なぞ、スケールが貧弱だから駄目だ』とやつたものだ。それから、いつかから云ふものを讀んだことがあるといふので、今から想へば『海の受難者』の荒筋を聞かせて吳れた。

『おしまひに潮がだん〳〵さして來る。ギリアツトがそれでもぢつとして船の行方を見送つてゐる。とう〳〵その泥海の中に沈んでしまふ。――あすこの處は實に莊嚴だ』と、こゝで彼は『莊嚴』といふ言葉をつかつた。

實際、その頃の彼は、議論好きと、そして『莊嚴』好きとで凝り固まつて居たやうに見えた。

よく思ひ出して見ると、あの礦町時代には、色々な小說の話が出たやうだ。ゾラの『ナナ』の結末に、普佛戰爭が始まりかけて群集が『伯林へ！伯林へ！』と熱狂して居るところなど、殊に氣に入つた一齣だつたと見えて、其處のところを何遍も繰返してゐたことを覺えてゐる。

それから丸善か何處かで買つて來たのだと云つてメレジユコフスキイの『神々の死』の英

譯本を自慢にしてゐた。彼によれば、この本はその當時日本に何冊とかしかまだ來てゐない極く〳〵のハシリだと云ふのである。

『野村さん（胡堂氏）に見せたらそんな本は横濱へ行けばいくらもあると云つたが、多分基督教の書物と勘違へしたんだらう。』と中々の氣焔だつた。しかしいくらその當時だからとてそんな仰山な本である譯はないから、矢張り私共を煙に捲いたのだらうと思つてゐる。

ユーゴオに感心して、ゾラに感心して、メレジユコフスキイに感心して、といふと夫等に如何様、啄木の喜びさうな共通なものがあるにしても、少し滅茶苦茶なやうに思ふ人があるかも知れないが、然し之は仕方がない。當時は何でも島崎藤村氏が『破戒』一篇をもつて信州小諸から東京に乗り出して來た頃で、自然主義が漸く文壇を風靡し初めようと云ふ時代、舊いロマンチシズムの殼がまだとれ切らない時分だつたから……（中略）

其處でこの磧町時代には忽ち『破戒』に感心した。長谷川天溪氏だつたか、『破戒』の批評をして、二三枚讀むと厭きが來ると書いたとやらで、それが大分不平だつたらしい。（中略）

その頃詩人岩野泡鳴をも餘程好いて居た。……泡鳴はその頃『悲戀悲歌』と云ふ詩集を出した。啄木は泡鳴の英雄豪傑振りには讃嘆を吝まないがこの『悲戀悲歌』と云ふ辭句の生硬

さをば好まない。そこで彼は忽ち、この詩集の表紙をめくりとつて、手づからクロースの表装に拵へなほし、背の處へ自分で墨黒々と題目をつけた。曰く『三界獨白──岩野泡鳴著』この題は『悲戀悲歌』の中にある一節の名だから啄木の勝手につけたのではないが、何しろ彼にとつては『三界獨白』など云ふ言葉が好きで堪らなかつたのである。

當時の啄木は、どこかしら、例の氣取つた衣裳を脫ぎかけてゐたかとも思ふが、唯今一寸思ひ出したのでは、どうもそんな模様の處は心當りがない。徹頭徹尾美辭麗句が嬉しいのである。だから薄田泣菫著『二十五絃』なんと云ふのは『悲戀悲歌』などとは別の意味で、愛誦措く能はざる詩集であつた云々」

『悲戀悲歌』の表裝を自分でかへたといふやうなことは、いかにも凝り性の啄木のやりさうなことである。

この礦町四番戸に移つてからの詩を集めたものが「江畔雜詩」であつた。收むるところ『さみだれ』（七月四日作）『啄木鳥』に（十一月二十一日夜作）『跡のあと』（十二月夜作）『燕』（十二月五日作）『海邊の春の夜』（同夜作）等。その序に啄木はかう書いてゐる。

「───余はこれより記しゆく作の數を重ぬるに從つて、我が詩風の上に何らかの變化の伴ひ

ゆくべきを信ぜんとす。そは蓋し人の心生涯の起伏はやがてその作物の上に變化高低の斜影を投ずべければ也。(中略)

かくて今年の五月、――杜鵑、閑古鳥など、ふるさとを思ふたづきのいと多き五月とはなりぬ。遂に余は、東都の詩人社會に對する御へがたき厭惡と不滿と、又切實なる人生悽苦の涙とを胸に藏して、とある曉、人知れず都門を脱し、孤雲飄々、みちのくの古巣に流れぬ。あはれ、人知れず！當時の余の、いかによるべなき敗荷一葉の身なりしよ。消えむとして消えもせず、沈まむとして沈みもえせず、飛ばむとして飛びもえせざる冷たきいのちの玉の破片を心に秘めて、かくて今の新しき生活の第一日に、別に心に決したる所もなくて足を踏み入れたり。

あはれ如何に非常なる變化なりしぞや。さきには一人の親縁さへなき客舍の人たりし身が、今はあたゝかき愛の新苑に心の限り甘き慰めを呼吸するなり。さきには塵埃を吸ひ煤煙にはばめる日光を浴びしに、今は些のけがれなき新鮮の空氣を吸ひ、些の遮りなき天日の影を直ちに浴ぶる也。況んやこの杜陵の地は予が十歳の春より八星霜の間學堂に起伏したりし記念の市なるをや。余が身邊のあらゆる事物皆余が亂れ病める心の上に無上の仙藥の如かりき。

更に一家をこの中津川の畔にうつしてより、日夕潺湲たる水の音に耳を洗ひ、それとなき夏痩せの病軀を綠かをる樹かげの緣に安らへては、あはれ、久しく塵に染みし我が心、いつしか再び昔の淨けさにかへれるが如く、一月二月を經るまゝに、漸く靜かに物思ふをうるに至れり。」

——漸く靜かに物思ふをうるに至れり、この落付きは啄木には稀れなものである。彼は久しぶりなる心のしづかさを得ることが出來た。彼は歌つて云ふ——

ああ、二つ星、いとほそく
つつましげなる瞬きに
天に咲くなるほほゑみを
うつす「黃」の花「青」の花、
何の宮居の御燈(みあかし)の
消えぬ色をや染めぬらむ、
「腐敗(くされ)」—「荒廢(すさみ)」の濕沼(しめりぬ)に

見よ「清淨」を宿したる。（「さみだれ」の一節）

世の激しき荒浪の、「腐敗」と「荒膣」の中に傷めつけられてきた啄木は、いま、しづかに節子さんの「つゝましげなる瞬き」のうちに、その「天に咲くなるほほゑみ」のうちにこよなき清淨を感じるのであつた。

「小天地」發刊

このやうな生活の或る月、――それは八月の十一日のことであつたが大信田落花氏が啄木を尋ねたことがあつた。そしていろ〳〵話の末文藝雜誌を啄木と一緒に發刊しようと相談がそのとき出來上つた。啄木は意氣込んだ。この平和な生活の中で何か仕事がしたかつたのである。そしていつそ出すからには、日本の詩壇を刺戟するやうなものを、と啄木は氣負つた。雜誌の費用は大信田氏が出すことになつてゐた。それが雜誌「小天地」であつた。啄木は早速勸誘の檄を八方に飛ばした。

先日は失禮。小天地（月刊雜誌、九月一日一號發行、四六二倍版五十頁）小生が編輯することに相成候に付、何卒

來る十八日までに玉稿何卒々々御惠投被下度願上候。チト御遊びに御出被下度候。今夜は花明兄と語り申候。

これはその八月十一日の夜、小笠原謙吉氏宛に原稿を賴んだものである。啄木は郷土の人達のみならず、東京の知人詩人達にまで手紙を出して寄稿を求めた。啄木は檄文のなかで「我が『小天地』は小なりと雖ども勇んで新文藝の烽火を東北の夜天に打揚げむとする者也」と抱負を述べた。そして例の熱意を以て、初號の表紙は自分で書いたり、また校正が待ち切れなくて自分で印刷工場へ通つたり、節子さんや金田一氏まで一緒につれて行つて、校正や文選などをしたりした。自分が痔が惡るくて行けないと、一圓封入して差上げたから職工諸君にソバか菓子でもおごつてやつてくれと人に賴んだりして、夢中な位であつた。

そして啄木の家には「小天地社」と門札をかけてゐた。自分で「小天地」主幹ともついた。いよいよ九月五日にその「小天地」が出た。それには岩野泡鳴の詩も載せ啄木は長詩『佛頭光』『落日』『大東京』を四號活字で大きく組んだ。

丁度、この「小天地」が出た九月五日に、東京では、例の日比谷燒打事件といふのがあつた。一方にはさういふ人心の亢奮があり、啄木は初めての經驗の雜誌の發刊と、さういふ社會的な

亢奮に心がはづんだ。その前後の事情は次の手紙でよく知ることが出來やう。(燒打事件といふのは日露戰爭後の、ポーツマス媾和條約を國辱として、日比谷公園で國民大會を開き、憤つた民衆が亢奮して、交番を燒き、電車を燒いたりした事件であつた。)

飛電頻りに帝鄕の變を傳ふ。御起居御變りもあらせられず候や、

御高作を飾るの光榮を有したる小天地初號、數日前漸く製本出來上り、早速投函致させ候ひしが、御落手被下候ふ御事と存じ候、由來雜誌の事、初めての經驗にも有之、且つは頗る匆卒の間に計畫せられ、剩さへ小生の就褥、印刷所の不整理等、困厄百出の時に成り候ふ事なれば、誌上の體裁などは申すに及ばず、いたくも發行の期を誤り候ふ事、田舍なればに人の侮りもさこそと遺憾やるせなく候、たゞ兄等の御同情によりて先づ／＼これ迄に漕ぎつけ候ふは鳴謝に堪へぬ所。

二號よりは印刷所を他に移し、一日發刊の期におくれることなき樣いたすつもりに候、編輯上その他御心附きも有之候はゞ何卒御叱責被下度候。

何卒第二號へも御高作御惠み被下度願上候。編輯は勿論、廣告係、賣捌方まで小生殆一人の姿に候へは、何卒御援助願上候。

男一疋、身長五尺三寸あり、雑誌の一つや二つに閉口も致さず候へども、先月も下旬より二週間許り下痢と痔と胃痛と頭痛にて就褥、この二三日また、昨日も今日も枕のたよりの、西向の紙障左右にひかせて秋の雲見るに日を暮らす次第、平生の弱身この旬刻に疲して切に恨多きを覚え候。(中略)

平和成立についての騒動、まのあたり見候はゞ如何によろこばしき事に候ひけむ、小生若し東都に居候なれば、勇ましき放火隊の先頭に白鉢巻はしてけむものと切齒扼腕仕り候。凡そ世に理の有無は兎に角、謀反と云ふこと程花々しく痛快なるは無かるべく候。

當市にては本日市民大會ひらき候が、小生病床にありて如何とも致しがたく、何とも憤懣に堪へず候。

意氣地なき當市人の事に候へば、仲々に太平の事と存じ候。二三時間前に笠舘祝融の災にかゝり候由の號外見候ふが、アレは勇ましき海兵の涙あまり熱くて火となりたる事ならむと存じ候。

秋鴻帝郷の門をも吹きよぎりぬらむ、御近状御知らせ被下度願上候、枕頭の亂筆先づはこゝに思を殘し候草々」

これは九月十三日に新詩社の川上櫻翠氏に宛てたものであり、次の手紙は、二十三日に金田一花明氏にあてたものである。

「君いまさぬ不來方の古城の跡は日にけに寂しき蟲の聲に埋もれゆき申候。やがては淅瀝(せきれき)たる落葉の音、滿城の秋思を戶ぼその三日月にさゝやく時も遠からじと覺え候。

ちり煙立ちのぼろなる部門にも秋の風早や吹きぬらむ。別にお變りもあらせられず候や。

おわかれ致し候てよりも、とかく心地輕々しき日とては無之、さるからに又さびしさに物思ひ暮らすべき枕上の人ながら旦暮何くれとなき匆劇に、暫しの暇もある樣にて無き始末、おたよりも致さゞりし罪は何卒おゆるし被下度候。

すぐる頃のお文うれしき事限りなく拜しまゐらせ候ひしが、さりとは我が小天地にかばかり厚き同情を寄せ玉ふ兄ありと思ふに、事はおろそかに出來ぬ樣、忝さ身にしみ／＼といたし候。御地の書店への發送は意外に遲れ候ひしが多分月の半ば頃よりは本鄉あたり、人氣立つ店頭にさらされ候事ならんと存じ候。小天地の事、幸にして誰も惡く云ふ人は無い樣に候へど、たゞ新詩社の一小部分の人々は、岩野君、淸水君、細越君等の作を載せたる事に就て多少考ふる所あるらしく、小生をして旗幟を鮮明にせよといふ樣な意味の手紙を寄せたる人

も有之候。しかれども、詩は人類の作物にして必ずしも新詩社の專賣特許にあらざる以上、これらの批評はよろしく大人物の一笑に附し去るべき事かと存じ候。小生は第二號卷頭に二十頁計り『鎖門一日』と題する長評論を掲げて聊か自家の主張を天下に公に致したく存じ候。二號には泣菫、有明、月郊、泡鳴諸氏の作も載せる筈に候。先日の國民大會の騷ぎ如何に候ひしや。小生も若し在京中ならば、勇敢なる放火隊の先頭に白鉢卷してかけ廻り勇ましく××の一つや二つは一人でも燒いてみせたきものをと、これは都門の人々うらやましく候。いづれ一生中には一度かゝる千載の快事に逢ひたきものと念ひ居候。

二號以下はさま〴〵の都合にて毎月十日發行の事といたし候。從つて〆切は二十八日に候若し御暇有らせ候はゞ何なりとお惠み被下度願上候。

小生目下は毎日々々胸中に新計畫を成就しては壞し〳〵いたし居候。來年の四月は徴兵檢査の事とて、それまでに一つ思ひ切つた事せねばならぬ譯、男と生れた罰に樣々の事のみ有之候。小生が『小天地』を出したる事について世人は小生今後いかなる事をするやに就いて臆測し居る樣に候が、とにかく小生の行く所、必ず『小天地』てふ雜誌は同伴すべく、よしや休刊する事有之候ふとも小生のいちのある限りは小天地の壽命はつきざる筈に候。凡そ

雜誌の經營位は男子一人の事業としては一小些事にすぎず候へども、とにかく何年かの後には『小天地』社の特有船が間斷なく桑港と横濱の間を航海し、部數三十萬位づゝ發行する樣にやるべく候。斯うなくては雜誌なんてつまらぬ事に候。然らずんば又、瀟民あたりへ小天地活版所を起し、紙數を十頁位にして卵白の鳥子紙を用ひ、自ら書き、自ら印刷し、自ら製本して、一部二圓位のものを百部以上刷らぬことにしてやつても見たく候。呵々。今や秋意滿天下、幷て市塵にまみれし小生の心、杜陵に隱れて茲四閱月、漸やく昔日の小兒の心にかへりたる樣の心地致し候。『秋』と『貧困』とは今の吾身に神の言葉の如く尊とく候。草々。』

「小生の行く所、必ず『小天地』てふ雜誌は」同伴すべしといひ、よしや休刊することが萬あつても「小生のいのちある限りは」小天地の壽命もまた續く筈だといふ啄木の熱意は、非常なものであつたことがわかるのである。そのやうな意氣があつたからこそ、小天地社の特有船が桑港と横濱の間を間斷なく往復するやうになる、などといふ啄木的な大風呂敷なこともいへたのであらう。それほどに血氣に意氣込んでゐたのであつた。

また日比谷事件に對してゞも啄木は持前の反逆氣から、「理の有無は兎も角、謀反と云ふこと

程花々しく痛快なるは」ないといひ、若し自分が東京にゐたなら眞ッ先に立つて××の一つや二つは燒いたであらう、といつてゐる。啄木のやゝな何か鬱勃たる氣力、何物かにぶつつかつて、そこを突き破ることに愉快を感じる、現狀には何といつても不滿足な若さを持つ者は、刺戟的な何ものかを欲するのであつた。それが「理の有無に不拘、破壞とか謀反とかいふものに花々しい愉快を感ずるのであつた。

この浪慢的な性向は、啄木本來のものであり、或はストライキを起し、あるひは北海道の新開社の事件ともなつた。しかし、やがてこの「謀反」を花々しいものと單純に見る見方は、その單純さを打ち越して生長し、啄木に於ては他のいろ〳〵の重要な原因と相まつて社會主義的な反抗の方向をとるに致つたのである。或はさういふ方向をとるに到つた動機の隱微な、原因となつてゐるとみることが出來るであらう。（もちろん、それ丈を重視して他の正當な動因を見まいとすることは大きな誤にちがひないのである。）

「小天地」時代の啄木について歌人の小田島孤舟氏は「小天地時代の啄木」といふ文章を書いてゐる。それによると當時小田島氏は未だ師範學校の生徒で、歌を作つてゐた。それで天才詩人石川啄木が盛岡にゐて、雜誌を出すといふので、氏は、友人と啄木を訪問したのであつた。

「ちやうど中學校の脇の藥屋の門に、『小天地社』と書いた小さな門札を見出して胸をどらせた。『見つかつたか。』『校長の隣だよ』『なか〱門戸を張つてるぢやないか。』おそる〱玄關におとなふと、『はい。』といふ張のある澄んだ男の聲がして、すういと障子があいた。見ると少し肩が張つてそり身になつた白面の青年が立つて居た。例の名刺を出して來意を告げると、愛想よく、『さあ、どうぞ。』といひながら先に立つてずん〲次の部屋に案内した。それは茶の間兼書齋で、小さな火鉢の側には簡素な茶棚をおき、二三冊の本と、手紙類を載せてある。そこに坐るとまた丁重に、『石川です』。と挨拶した。間もなく次の部屋からは若い婦人が出て來た。『新夫人節子さんだな。』と思ひながら、ちらとみるとふさ〱した黑髮を三つ組の垂髮にして赤い帶をしめてゐる。何だか俄に初夏の部屋が一ぱい花やかに明るくなつたやうな氣がした。啄木はと見ると、これはまた漆黑の髮を綺麗に分けて廣い額と、いかにも天才らしいぱつちりとした眼をかゞやかしながら、『今度「小天地」を出すことになりました。どうぞよろしく』ときび〱した調子でよどみなく話しかけた。なか〱如才のないことをいふとおもひながら、それからそれへとうつりゆく話を聞いてをるうちに可なり時刻がたつてゐた。もぢ〱しながら門限のあることをいつて暇乞をすると、『さうですか、ではまたいらつしやい。どうも御粗末でしだ。

これ、おかへりだよ。』次の間からはいそ〳〵節子夫人が出て來てお揃で玄關まで見おくる『さよなら。』『またいらつしやい。』門をくゞりぬけるとすぐ、『ちがつたもんだな。』『何が。』『天才はよ。』いつの間にか夕灯のともつた寮舍についてゐた。」

この文中には啄木の家庭生活の片鱗が見えて面白い。この新婚いくばくもない啄木の夫君ぶりも「部屋いつぱいが明るく」なるやうな節子さんの新妻ぶりも現はれる。

その中に小天地の歌會が啄木の室であつて、その時も小田島氏はいつて見た。「その時集つたのは誰々であつたかはよくおぼえて居ないが、七八人のものであつた。何んでも『雲』讀込みといふ題が出たつたとおもふが『龍は雲を得た』といふ意味のをつくつてそつと出しておくと、互にめくばせをしながら微苦笑してゐる。そのやうすからすると、節子夫人の作と思つたらしい。いよ〳〵發表になつて見ると、意外にも作者は私だつたので、誰かゞ『何のこつた、てつきり節子夫人とおもつて敬意を表したつたのに――。』とくやしがると、啄木も『さうか、K君か。』といひながら節子さんを見て苦笑してゐた。『あら、いやなこと。』さうでなくてさへ艶麗な姿をしてゐた節子さんの、その刹那の表情はたとへやうもなく美しいものであつた。それからは一層人々のこゝろはくつろぎ、批評もはずんでいつて、初夏の明るい青葉若葉の光につゝま

れたさゝやかな草屋にはにぎやかな聲がみちあふれた。いつの間にか庫をぬけてゐた節子さんの手によつて、中食のお膳は運ばれた。」

あれだけ意氣込んでゐた小天地の歌會はいかにも和やかに、親しみぶかく行はれたやうだ。このやうな幸福もしかし、さきに述べたやうにいくらも續きはしなかつた。もうこのころから生活は苦しくなつてゐたのだ。

このころ啄木は獨逸語の勉强がしたくて、金田一氏に、ジャーマンコースと獨和辭典と、獨語の小説か詩か論文の、價の安いのを送つてくれ、なぞと賴んでゐる。だが實際に啄木が獨逸語の獨學をはじめたのはこれから約一年後、澁民村に歸つてからのことであつた。

生活が貧しくなると同時にまた身體の具合も啄木は良くなかつた。そして病床にある日が多くなつていつた。十月十八日、櫻羣氏宛の手紙には、「私、二つの敵あり、貧乏には打勝ちも致すべく候へども、不健康には致し方もなく、この頃また、西日あかるき窓の下、枕の上より天井のフシ穴數への日のみ多きには閉口の至りに候。」とある。「小生の如き性質のものに取りては、健全の時よりも病の天地に高臥して却つて幾多の新らしき事をきくこと、生來の經驗に徵して

も明かに候へど、さりとて、厨に米なくなりゆく日を數へながら、晏然として仰臥[illegible]を學んでも居られず、この苦思慘澹の中に病の眞味殊に深しなど苦笑しては居り候ふものゝ浮世の波穏かならぬものと、毎日々々今更の樣に感じ居候。」とその苦衷を訴へてゐる。

さういふ苦しみの中にあつても「小天地」だけは是非出して行きたかつた。毎月發刊の譯であつたが、さうもいかず、だが、この十一月には二號を出せさうに思つた。原稿も大分集つてきてゐた。

しかしながら こんなに執心してゐた二號も遂に出せないでしまつた。それといふのが經濟的な理由、啄木の不健康、などゝ一緒に、初號に啄木が自分の歌を四號活字で大きく組んでしまつたことなどが人々に、心よく思はれなかつた、といふやうなこともあつた。

泡鳴の詩についての評

この四號活字組なぞも啄木自身では、別に驕つた、思ひあがつたわけでもなかつたのである。「『小天地』に小生の詩を四號活字にしたとて、皆樣が怒つて居られるとのこと、アレハ小生、四號で組んだらさぞ讀心地よからむと思つて居たのを不取敢やつて見た迄に候。先輩を傷つた

譯でも何でもなく候。」と啄木は前田林外氏への書簡の中でいつてゐる。とにかくさういふ事情で啄木の「いのちのある限り」壽命のある筈だつた「小天地」は實際には、初號のみで終る結果となつたのである。

しかし、啄木は決してあきらめたわけではなく、同じ手紙の中で「小生健康克復次第、多分盛岡を去ることゝ成るべく候へど、行先は未定、『小天地』はどこまでも持つてゆくつもりに候」と屈しない意氣を見せてゐるのである。

啄木は前にも述べたやうに岩野泡鳴が好きで、この人の詩を「小天地」へ載せたことも前に書いたが、それが（これも既出の啄木の書簡の中にも書いてあるが）東京の新詩社の同人からはよく思はれなかつた。新詩社の浪漫派からみれば泡鳴は主張を異にする異派の人である。それを啄木がその泡鳴の詩を載せるのは不可ではないか、といふのであつた。これについて啄木は次のやうにいつてゐる。

「……初號に岩野泡鳴兄などの詩を載せ候ふことについて、江戸表の先輩諸先生方の中に御機嫌よからざるお方も有之やに承り候が、萬あるべからざることとは存じ候へども、如何あるべきか、尤も平野萬里兄などよりは、この事に關し、堂々たる反對のお手紙を頂戴いたし候

ひし、乃ち『泡鳴などの詩は詩と思はず』との御言葉に候ひき。この樣の事に關しては小生小癪乍ら少しく云ふてみたき事も有之候へど、當分さしひかへ居候。兄も新詩社の一人、小生も社友名簿を瀆す一人、その小生より兄に申上ぐるも如何に候へども、明星誌上岩野君に對する前後二回の評論は、少くとも、詩壇の或る一黨派のためのみならず、廣く國詩の發達に忠實ならむとする批評家の言としては、多少矛盾撞着したる所なく候ふべきや、小生とても岩野君の『耽溺』の愚劣——少くとも、小生の胸中の理想の詩人が斯ういふ事をしたらと考へての上の判斷によりて、——且つ自巳の品性を傷くるものたることは、敢て公言するを憚らず候、たゞ何故に、初めは詩壇に新らしく造詣する所ありたる詩が、只この一事によりて、詩とも思はれぬ樣のものに急に下落したるべきや、岩野君は或は新詩社の誰よりも言語上の智識について劣り居るかも知れず候。然し乍ら、岩野君の如き性格の人にとりては、自己と他とを比較して見るなどゝ云ふことは出來ざる相談なるべく、またよしや、假りに自己の言語上の知識が淺薄なるを知り居るにしても、一度心柱に天來の聲をきける時、彼は果して、自己の修辭が不完全なりとの理由を以てその興を空しく逸し去ること、よく成しうべきや否や、たとへ修辭に缺點ありとも、既にその内容に於て詩壇に造詣する所ある程のものな

らば、眞に詩を愛するものは、決して、その修辭の一缺點のみを以てその詩の價値を悉皆沒し去る樣の事は無き筈と存ぜられ候。」

そして、かう云つたからとて何も岩野君を極力辯護して、自分の詩業の父たり師たる、また最も親善なる友である新詩社に楯突く譯ではない、泡鳴の詩が未だ完全なものでないのは知つてゐる。しかし現在の泡鳴の地位境遇に對して同情に堪へないものがあるのである――と述べてゐる。(櫻翠氏宛)

こゝに啄木が云つてゐることは、或る藝術の完成した、いへかへればそこの生長の止まつた、行くべき處までは一應行きつくした人だちの、形式至上、表現第一、さういふ主義主張に對しての、これから伸びんとする生々の氣力に燃えた、新らしい(乃至は次の)時代への潑溂たる意志に滿ちた、表現の完成よりは充實した內容を欲する若き意力の現はれであつた。いつの時代でも、完成者は、自らの藝の圓熟を誇り、若き者の潑溂たる內容を、その表現の未熟、生さ加減によつて排すのである。その完成者といへどもかつて自らが出發した時には、その內容の新らしさを以て登場したのに違ひないのであるが。

つまり、啄木は新詩社に籍を置いてはゐたが、たゞにその社風のみでなしに、視野をひろく、

といふよりは自らこれから伸び出でむとする者であつたがゆゑに、「修辭の缺點ありとも、既にその內容に於て詩壇に造詣する所」があれば「眞に詩を愛するものは」これを認めなければならないといふことを身を以て知り、かつ感じてゐたのであつた。

また啄木は一生懸命にあゝして出した「小天地」であるため、その評判や批評やが待たれた。からも言つてゐるのである。「初號の批評、數々あり候ふ中に、新小說にほめられしたんか、チト意外に候ひき、此頃拔萃帳をこしらへ、去年あたりからの新聞雜誌にて小生をひやかしたり叱つたりした記事を貼りつけ居候。白髮を頂いてのち、これを繰りひろげ候はゞ、如何に興多き事なるべきかと、時々一人でニツコリ致し居候」

次に「小天地」に載せた啄木の詩を掲げる。

佛　頭　光

ここは生命の森か、さは、
秀つ樹の枝の葉の色も
神の息をや染めぬらむ。

幾時や經し、幾日經し、
幻心さまよひて
ふとしもここに入りにたる。

見れば年古る樹々は皆、
古き記憶の底にゐて、
呼びいで難き名の如く、
なつかしくして、稚き日
過ぎし事ある故鄕の
古道に似ても目は走る。

鳥はいのちの葉の蔭に
妙音の譜を奏でたり。
黑ずむまでに光る葉は、

ホメロスが世の曙に
吹きしまきなる羽輕き
風に久遠をはためきぬ。

森を横ぎる川ありて、
すぐゆく我の影をのせ、
涯をも知らに流れ行く。
こは朝なりや、夕たりや、
はた二の世にや。――我はただ
わが足にこそ歩みたる。

勇みて輕き足音に、
蛇（くちなは）、這へる羽根蟲も
木の根の穴に隱れたり。

ふとしも見れば『永劫の
わかれ』を刻む石碑(いしぶみ)に
ここは追分――森の辻。

一つの道は、灰白き
鋪石(しきいし)錆びて坦(たひら)かに――
鐘こそ響け、――あはれ、こは
平和の郷の墓の戸に
導き入れり。――人の性
これに迷へる子もありや。

我はためらふこともなく
ただましぐらに進みける。
ゆき、また、ゆけば漸くに、
木の間を少し空見えて、

香(かぐ)の木の實よ、たわわにも
枝に滿ちぬる黄金色。

疲れを知らぬこの旅の
幾時や經し、幾日經し。
倘しもゆけば、葉がくりに、
ものの聲あり。——覗(うかが)へば、
神のやうなる幾人の
人の聲して我招ぐ。

いのちの森に迷ひ入り、
先立ちて來し人ならむ。
『黄金木の實のしたたりの
これは不老の泉ぞ。』と
指さす葉蔭、ふと見れば、

常春の香よ、波に鳴る。
諸手に掬めば、水の面、
こはそもいかに、若き日に
ふたたび逢へる我が影の
瞳に星ぞ宿りたれ。
また指ざされ、手を翳(かざ)し、
ふりさけ見るや西の空。——

空の半ばを金色の
佛頭光ぞ包みたる。
眩ゆさ、——あはれ、光明の
海の返照(へんぜう)、——尊とさに、
これ莊嚴の隨一と
歸依の掌底(たなぞこ)合せぬる。

日

爛々と火の如き日は海に落ちむとす。
大空はおしなべて黄金の光なり。
海原も黄金の焔にぞ燬かれたる。

巖噛み、砂を呑み、戦の詩を刻む
荒磯の砂丘に立ちつくし、涙垂る。
落つる日は我を、また、我は日を見つめたり。

一日の短きも、弛みなきかがやきに、
永遠に動かざる一日となれりけり。
落つる日は、何ぞまた明日の日を思はむや。

劫初より九億日『今』こそは權滅なれ。
いやはてのひと時も生々とかがやきて
落つる日の雄力は『永遠』を則れり。

荒獅子を射んとせば、稍光る目をぞ先づ
十束矢に貫けよかし。『今』こそは『永遠』の
隨なれ、閃々と前に落ち、後に去る。

いやはてのひと時も、輝けば、空の涯、
海の底、黄金に照り入れり。——こを思へば、
人間は小なりき、時にまた、大なりき。

淚のみいと熱く垂ると見て、目あぐれば、
日は既に落ち去んぬ。——我も亦人なりき。
砂丘に立ちつくし、眠るべき暇なし。

東京

かくやくの夏の日、今
子午線の上にかかれり。

煙突の鐵の林や、煙皆、煤黒き手に
何をかも攫むとすらむ、ただ直に矢をぞ射せる。
百千網巷々に空車行く音もなく
あはれ、今、都大路に、大眞夏光動かぬ
寂寞よ、霜夜の如く、百萬の心を壓せり。

千萬の甍今日こそ色もなく打鎖りぬ。
紙の片白き千ひらを撒きて行く通魔ありと、
家々の門や又窓、黒布に皆とざされぬ。

百千網都大路に人の影曉星の如
いと稀に。――かくて、骨泣く寂滅の死の都、見よ。

かくやくの夏の日は、今
子午線の上にかかれり。

何方ゆ流れ來ぬるや、黑星よ、眞北の空に
飛ぶを見ぬ。やがて大路の北の涯、天路に聳る。
層樓の屋根にとまれり。啞々として一聲、――これよ
凶鳥の不淨の鳥。――骨あさる鳥なり、はたや、
死の空にさまよひ叫ぶ怨恨の毒嘴の鳥。

鳥啼きぬ二度。――いかに、其聲の猶終らぬに、
何方ゆ現れ來しや、幾尺の白髮かき垂れ、
いな光る劍捧げし童顔の翁あり。ああ、

黒長裳（くろながも）静かに曳くや、寂寞の戸に反響（こだま）して、
夜の音全都に響き、唯一人大路を練れり。

有りとある磁石の針は
子午線の眞北を射せり。

啄木はかうして「小天地」も二號を出すことが出來ず、天井の節穴を數へながら病床に臥す日が多くなり、北國の秋は寒さの來るのも早く寂寞の日が流れた。さういふ時、大信田氏が訪ねて來て「椿姫」を貸してくれた。啄木はそれを讀み、泣かされることがあつた。その椿姫は節子さんも讀んだ。

さういふ感傷の日もあつたが、また「武俠の日本」などといふのを讀むと、今度は例の「抑へ難い冒險心」がむら〳〵とこみ上げて來て、啄木は病身のやるせなさがひどく齒がゆかつた。

そのうちに節子さんもまた病んで臥たりした。啄木は毎日炬燵にあたり何もなすこともなく寒い冬の日を送りむかへた。岩手山にははや雪が白かつた。生活は貧しくなるばかり。十一月十

八日、林外氏あての書簡には「小生はこゝに二月あまりの間は、殆んど全く何事をなすことをえず、詩も手紙も書かず、一室にとぢ籠りて、愉快なる事少なき病中生活を營み申候、誠につまらぬ事に候、『小天地』もそのため休刊、不平と妄想の中に病惱を埋め居候。この盛岡、蟲の音、落葉の聲、それらつぎつぎに消え去りて、今は岩手山眞白き冬裝、さびしくも美しく見られ候たゞそれのみに候。東北の天地は太古の如く寂しく候。この境に投じたる小生の唯一の所得と申すべきは、比較的多くの事、物、人に就いて靜かに考ふるをえたる事のみに候、」と嘆いてゐる。

かくして幸福だつた新婚生活もわづかの月日がすぎ去るとまたさびしい暮しとなつて行かねばならない。しかし、おなじ困窮の生活、病苦のなかでも、今は身邊にかしづく節子さんがゐた。啄木は次のやうな詩を書いた。

雨にぬれて

梅の老樹に雨降り、
雨に濡れて、

庭石冷ぞまされ、
おち葉を載せたり。
かくして秋來ぬ、限りなさの
かなしみ石にぞ凭りぬる。

愁ひて泣くに、涙の
雨に濡れて、
君に凭るなる我や、
尙こそみ胸の
ときめく溫み、石に散れる
落葉にまさると知る日や。

今は愁のさ中にゐてもときめく溫かな胸に抱かれることが出來たのである。それがたゞ一の慰安であつたであらう。

そも〳〵、啄木のあの新婚の幸福といふものさへ、何ら經濟的にめぐまれたものでは初めからなかつた。あの濕かな、甘い幸福さへたゞ若い氣持の上のものにすぎなかつたのである。少しの時が流れて、また困窮のなかにあへがねばならなかつたのも、また成行であつたのである。

かくして二十歲の年も暮れて行つた。

この十二月に啄木は、次の詩を作つてゐる。その中『鹿角の國を懷ふの歌』は五十五行、『みちのくの神無月』は八十八行の長大詩篇である。『たはぶれ』(四日)『かりがね』(五日)『雨にぬれて』(五日)『鹿角の國を懷ふの歌』(五日)『みちのくの神無月』(六日夜――八日夜)

姉の死

啄木は三十九年の正月を迎へて、元日の「岩手日報」に「古酒新酒」といふ感想を書いた。その中で啄木は日本は日露戰爭に大勝して軍事的には大いに世界に誇るところがあるが、軍事を外にして、未だ一人の民族的代表者、天才的一大人格者を有しないことを嘆き、泣寢入と屈辱を受けざらんとすれば日本の國民的精神を代表する、一大天才の出現を待たねばならぬとし「我このために孤憤し涕泣す」といふやうなことを述べた。

四日には、樂しく皆で歌留多會をやつた。婦人達も會して賑かな夜を更かした。
この一月には『素びらき』『野ばら』『うたた寢』『木屑』などの詩を作つた。さういふうちにも今の生活をどうにか打開しなければならない氣持がしきりであつた。さうすると啄木はまたアメリカ行を心に描くやうになつた。啄木は今迄に幾度か「胸中に新計畫」を企てたことか。しかるに彼が思ふやうにことは一つとして運んではゐなかつたのである。再度の上京にしても、最も心血をそゝいだ詩集の出版にしても、手近では「小天地」の發刊にしても、皆啄木の思ひの通りになつたものはない。しかし、啄木は自らの力を信じてゐる。それに、友人の間にも去年あたりから何か面白からぬことがあつたらしいことはこの元日の岩手日報に載せた「古酒新酒」の中にも出てゐる。それによると、或る人が「親しく我が平生を知り又我が境遇を知るが故に、その間際に倫み入りて、奇巧百出、」そのために啄木は「危く一家を絶たれ、妻を離され、又あらゆる友と絶たれ、孤笠飄然天が下に寄邊なき者」になるところだつたのである。そのことは幸に「神恩身に盡きず」まぬかれることが出來たけれど、啄木の苦痛と迫害とは決して少しとしなかつた。そして何故にさうなつたかといへば要するに、啄木が余りに「小兒の如く」であつたからである。啄木は、しかし「小兒の心乎、小兒の心乎、噫これ我が常に望む所」だといつてゐる。

こんな、あれやこれや、身邊面白くないことづくめで、啄木はいつそ外國へ行つてしまひたいと思ふやうになつたかも知れない。そこで再びアメリカ渡航の思が彼の胸に湧いてきたのであらう、とおもはれる。

とにかく彼はじつとこのまゝではゐられない氣がしてゐたに違ひない。

二月十六日に啄木は、紫波郡の小笠原謙吉氏を訪ねると若干の金を借り、その翌日、その金を旅費にして、青森へと向つた。

青森から函館へ玄海丸に乘船して津輕海峽を渡つた。二度目の北海道行である。海は波が靜かであつた。

四日ばかりを雪の函館にすごしたが、格別面白いこともなく、青森へ引き返してきた。それから當時、父親のゐた野邊地へ立寄り、澁民の方へも寄つて月末近く盛岡へ歸つて來た。

歸つてくると間もなく、啄木は姉の死を聞かねばならなかつた。肉親の最初の死である。それにこの鹿角小坂の姉さんは、啄木の一番上の姉であり、一番世話になつた人である。肋膜炎と子宮病とを患つてゐたのであつたが、その人が亡くなつたのである。「兄弟四人の內最も不幸なりし姉、その不幸なる姉は遂に不幸のうちにあの世の人と相成り申候、私この度初めて身內

の者の死に逢ひ申候、老母並に私の心中お察し被下度候」と彼は三十一才の若さで死んだ姉を悲嘆してゐる。

この姉には十四を頭に五人の子供があつた。啄木はその子供のうち一人か二人を引き取つて養育してやらねばならないだらうと思つた。その爲に澁民へ歸ることになつたのである。

澁　民　村

三月四日、啄木はまた故郷澁民村の人となつた。

啄木は翌五日の葉書に「この頃小生の一身にあつまれる悲喜哀歡頭の中は大に混雜致居候」といつてゐる。

姉の子供の養育のことはその必要はなかつた。しかし盛岡での生活は行きづまつてゐた。その生活の轉換の爲にも澁民村へ歸ることになつたのであらう。

啄木は小學校の近くの東側、南端から十軒目、齋藤佐藏といふお百姓の表座敷を借りた。

そして、ここで啄木の所謂「故山澁民村の林中生活」が此日(三月四日)から始まるのである。

この日、啄木は九ヶ月間の杜陵生活に終りを告げて、老母と若妻節子さんと三人午前八時三

十分好摩驛に降りたつた。父は野邊地に、妹は通學してゐる學校の敎師に賴んで盛岡に殘して來たのである。
その夜のことを啄木は斯う書いてゐる。
「夜。これで遂々遊民へ來たのかと思ふと何かしら云ひ表はし難い感じがした。――悲しくもなくて淚の流れる樣な嬉しくても笑ふ事の出來ぬ樣な、安心した樣な氣が脫けた樣な……枕についてから、寺の眞中に一筋の若松檻の街道、今朝好摩からの途中で巡禮の六部に逢つて、一週前鹿角の天で亡き數に入つた姉を思ひ出し、銅片を喜捨して立ち乍ら祈禱して貰つた時の心地を繰り返して、かの身に沁む振鈴の音さへ猶耳底に潛むかと、何となく穩やかな眠についた。」
（林中日記）
啄木のところへは每日近所の子供らが遊びに來た。村の人人も來ては茶を喫んで行つた。大人は啄木がどんな考で歸つてきたかをそれとなく探るためもあつたが、小供は無邪氣であつた。それに啄木はかういふ子供が好きだ。「彼等は皆我が弟である」とも云つてゐる。彼自身ヴァイオリンを彈いて小供らに歌はせたりした。「何かお譚をしてきかせると、皆おとなしく眞面目に聽いて行く。時として彼等の口から熱心な質問の出る事がある。慥る時常に予は腹を抱へ

て笑はせられる。」

村人達との話は村役場が不統一な事、村會議員の某が藝者買ひに盛岡まで出かけて行つて失策したとか、村に唯一軒の床屋が病氣で不便だ、とか、村には何人の姙婦がゐるとか、誰々の腹の子は私生兒だとか、そんな、他愛ないどこの田舍も同じやうなことであつた。啄木は云つてゐる「――彼等には無事といふ外に不幸が無い。」

啄木は村の小供と接すると、教育といふことを考へた。そして藝術のことを考究し、「美は藝術の條件にして且つ目的なり、或は又、美の目的は美なり」とした。また「藝術の眞境地は美にして且つ眞なり」とした。そして「藝術の內容は人生なり」とし「隨つて人類最高の教育は藝術である。」とした。「教育も亦一の藝術なり。」

さういふ啄木は小學校へ遊びに行く事もある（そして啄木は、自身、四月から母校澁民の小學校の代用教員として務めることになつたのである。）

三月はまだ雪が一尺も深い。この十二日に啄木は綿入を脫いで生活の資としなければならない。「みちのくの三月、雪が一尺もある國で、袷に襦袢で平氣なのは、自分と兇荒に苦しむ窮民のみであらう。」とはやはり「林中日記」のなかの言葉である。同じ日記の三月二十日のところ

には「朝日をさました時から、社會主義について熟々考へた。そして殆んど迷つて居た。」とある。「午後四時過、驛内に火事あり。裏家一軒全燒。大騷動。風のなかつたのが幸ひ。自分も行つて見た。高い足駄を穿いて、懷手で、平生の步調で步いたのは、此時此村で自分唯一人。火――燃ゆる火、熾んな火、勇ましく美しい火――を見て立つて居た時、予は不圖心で呟いた、『然だ、贊成する事は出來ぬ。』

何に？社會主義に。」

生活に追ひ廻はされ、思ひ惱んで火事を見て懷手で普通の步調で步いてゐる、何處か虛無的な心持がわかるのである。

二十三日には、小學校の卒業式に誘はれて行つた。そこで「螢の光」の唱歌をきくと啄木は「唯もう可愛いゝやら昔戀しいやらで」漫ろに淚が出るのであつた。

啄木は暮しも貧しく、それに村での生活も氣持ちのよいものではなかつた。村の人人は何か猜疑の眼を以て啄木を見た。邪魔物をみる眼を以て啄木を窺つた。それに村の混み入つた內情も手傳つて啄木はどことなく白眼視された。啄木の家の前には夜每怪しげな人影が立つた。それは誰が啄木を尋ねてどんな話をしてゐるかをさぐる爲であつた。

啄木は氣がくさくさして來た。いくら田舍とはいへ、故鄕とはかくの如きところであつたのか。

啄木を由井正雪と呼ぶ人が出來て來た。

村の、變にひねくれた人の性質は、いろいろに若い敗慘の身の啄木を惱まして止まなかつた。

　そのかみの神童の名こそ
　かなしけれ
　故里に來て泣くはそのこと

啄木は、なまじつか神童などといはれたために、今却つて故里人から變にあつかはれる、さう思ふと、さすが我と我が身がいとしくもなるのであつた。

「林中日記」の三月二十七日の終りには次の如く記してある。

「……一日の計は朝にあり、と云ふが、予は何らかの希望を抱いて、元氣よく臥床をはなれた事はない。而も偖て起出すのは、何日でも世界中の朝飯が皆終つたころである。そして毎日同じ事を考へる。これは甚だ漠とした、然も針の樣に鋭く腦をさす問題だ。そして毎日同じ樣に

日が暮れる。そして又毎晩同じ様に、世界中の人が寢靜まつた頃枕につく。夢を見ぬ夜は無い。愢て再び目の覺めた時、惱める我魂は、嗚呼今日も亦、昨日と同じ樣に夜が明けたかと呟くのだ。噫。

噫這麼生活！這麼生活が何處にあらう。此生活から、側はなれぬ戀妻と、故鄕に在りと思ふ一念と、一切の追懷とを引き去つたならば、予は或は死なねばならぬかも知れぬ。

今日予は一時間一人泣いた。」

代用敎員

かういふ生活にゐて、この三月啄木が書いた詩は『花ちる日』と題する一篇だけであつた。

四月十二日、生計の資を得るため彼は澁民尋常高等小學校尋常科の代用敎員となつた。手當は月八圓である。

十四日から毎日通つた。

二十一日の月給日になつたが、その日俸給は貰へなかつたのである。これは前年の凶作の影響で村稅未納者が多く、村費皆無、といふわけからであつた。この日を當てにして金を借りて

ゐた啄木は困つてしまつた。

この頃啄木の父は、もとの寶德寺に再住の運動をしてゐた。若し再住出來れば啄木も大いに助かる譯であるが、しかしこれはうまくいかなかつた。

この二十日に徴兵檢査をうけ丙種で兵役は免除された。

この四月、彼は『春日』(十九日)『友藻外に』(二十日夜)『山杜鵑』(二十日夜)の詩を作つた。

啄木は折角勤めはしたが、月八圓の給料では一家五人の生計には如何に當時に於ても足りる筈もない。しかゝその八圓といふ月給すら中々滿足には貰ふことが出來ないのであるから窮乏せざるを得なかつた。一家五人が糊する爲めには、啄木は三錢の切手代にもこと缺き、手紙を書くことの好きな啄木も友人へ通信が疎くなることすらあつた。また春燈靜夏、時に傾天の興趣が湧いて來ようとも、それを書き止める一枚の紙すら無いこともあつた。彼はさういふ時仕方なく苦茗を啜つて遺瀾ない心を落付けるのであつた。

そんな風で寄贈を受ける「明星」と「帝國文學」の外は讀みたくても讀むことも出來ない。

さういふ、慘めな境遇のなかで、彼の唯一の樂しみは、鄕里の子弟を敎化する、といふことであつた。

啄木の受持は尋常二年であつた。朝起きると直ぐに彼は登校した。授業時間の間の十分間の休みには卒業生に中等國語讀本を教へたり、放課後は夕方まで英語の課外教授をした。夜は夜で種々の調査をやり、自分の時間といふものは殆どない位である。啄木はやり出したら徹底的にやる、その熱心さが子弟の教育といふ、次の時代への關心となつていよいよ懸命になるのである。「小生は蓋し日本一の代用教育ならむ」と彼はいつてゐるのである。

また啄木は時々は近隣の女生徒を集めて、作文の教授をした。啄木は課外の二時間の時間に於て、少年たちにルツソー、バイロンを語り、トルストイ、ゴルキーを熱心に話してきかせるのであつた。

さういふことで彼は生徒達の人氣をたちまち得てしまつた。「誰かまた予の如く生徒の心服を買ひうるものぞ」と彼はいつてゐるとほり、啄木の熱心と生徒思ひは生徒たちにもいゝ先生、自分たちの味方の先生として感じられずにはゐなかつたのである。彼の先生振りは普通の教員たちのとは少く違つてゐた。彼はもともといつまでもこの教員生活を續ける氣持はなかつたけれども、その短いであらう期間の中に、十分な人格的な基礎を、善美な感化を故山の子弟らに胸底まで沁み込ませたかつた。それは詩人たる啄木の本能的な要求であり、何らの報酬をも豫

期するものでなかつた。さうしないでは啄木の良心が濟まされないのであつた。

啄木は貧しい生活から却つて精神が鼓舞せられ、その鼓舞せられた精神の火は、彼の紅脣からほとばしつて「神の如く無垢なる子弟の血に燃え移りつつ」あつたのである。

學校の校長は十八圓といふ村内での最高月給とりであつた。鼻下に八字髭をはやした、妻君に頭の上らないこの校長を啄木は好かなかつた。職員といつてはあと檢定試驗上りの古手の首席と一人の女教員と啄木の全部で四人しかなかつた。

この女教員を啄木は前から知つてゐた。上野さめ子といひ、啄木が、この前、上京に失敗して澁民村に精骨を養ふやうになつた時、この村で啄木の話相手になつたのはこの女教員だけであつた。その時、啄木は「上野女史に捧げたる」と註のある『しらべの海』といふ詩を書いたのであつたが、今度また澁民に啄木が住むやうになつて、上野女史はやはり時々啄木の家に遊びに來たりしてゐた。

この上野女史が尋常一年を受持つてゐた。彼女だけがこの學校で啄木の話相手だつた。芳紀やゝ過ぎて今年正に二十四才。自分には三歳の姉である。それでまだ獨身で、熱心なクリスチャンで、讃美歌が上手で、新教育を受けて居て、思想が先づ健全で、顏は？顏は毎日見て居る

から別段目にも立たないが、頰は桃色で、髮は赤い、目は年に似合はず若々しいが、時々判斷力が閃めく。尋常一年の受持であるが、誠に善良なナースである。で、大抵自分の云ふ事が解る。理のある所には乾度同情する。然し流石に女で、それに稍々思慮が有過ぎる傾がある」と啄木は彼女のことをその小說「雲は天才である」の中で述べてゐる。

また小說「葉書」のなかでは、この女敎師が月經が強くて每月一度は休むのであるが、するとその日は啄木も物足らない氣持ちですごして了ふ――といふやうなことが書かれてある。だがそれだけのことであつた。ただ、かういふ村の生活で彼女だけがせめて、啄木の話相手だつたといふことだけであつたが、そのことが彼には、やはり忘れがたいもの となつたのであらう。「一握の砂」の中、ふるさとの思ひ出を歌つた「煙」二のなかに彼はかう彼女を歌つてゐる。

わがために
なやめる魂をしづめよと
讃美歌うたふ人ありしかな

あはれかの男のごときたましひよ
今は何處に
何を思ふや

彼女はキリスト教を信じてゐたから、啄木の惱んでゐる姿に、敎へを說いたことであらう。このしつかり者の一筋な信仰心は、年下の啄木にはなにか「男のやう」な固いものに思へたのであらう。

わが庭の白き躑躅を
薄月の夜に
折りゆきしことな忘れ

そわが村に
初めてイニス・クリストの道を說きたる

若き女かな

この上野女史は十月に他に轉任し、その後へは堀田ひで子といふ敎師が來た。

小説執筆

六月の十日、農繁休暇の期間を利用して啄木は上京した。役場から給料を前借して行つたのである。一つは彼の第二詩集の出版のこととも、一つは前から運動してゐた父親の寶德寺再住問題を曹洞宗宗務局へ運動してみるためと、その他幾多の企畫と希望とを抱いて行つたのであつた。

十日ほど駄木の與謝野氏の家に泊つて、運動をしてみたが、どちらも思ふやうにならなかつた。

啄木はこの上京で、自分の性格は今の東京に適せず、文界の軌道を歩むを以て、彼には此上なき不得策だと、きつく感じて來た。そして「斯くして都門の土を踏める一刹那に於て既に胸中の幾多の企畫を暗中に埋め去」つてしまつたのであつた。

さうして、人間の巣である東京に住んで、大詩人といはれるより、田舍の代用敎員として、

神のやうな兒女より「先生」といはれてゐた方が餘程啄木には滿足に思はれた。さういふ氣持になつて彼は歸つてきた。

しかし、この十日間に彼はいろんな小說を讀むことが出來た。今年になつてから彼は一切新刊書をよんでゐなかつた。さういふ啄木は、ここで多くの小說、詩を讀む好機を得て、感激し昂奮した。

さうして「僕だつて小說を書ける」といふ氣持が油然と湧いて來た。これが上京唯一の土産であつたと彼はいつてゐる。

謙氏へ歸つてまもなく、七月三日の夕暮から彼は異常な勇氣をふるつて、小說を書き出した。それから一ケ月間、彼は書いてゐる小說以外は何も考へなかつた。一週間に三日位は徹夜もした。そして書き上げたのが百四十枚ほどの「おもかげ」であつた。その外にまた、謙氏の學校のことを書いた、自叙傳的な小說「雲は天才である」を半分ほど書き上げた。

この「おもかげ」は小山内薰氏へ送つて、何處かの雜誌へ發表して貰ふつもりであつた。

啄木は暑中休暇が待たれた。啄木はその休みに少くとも三百枚の小說と脚本を一つ書くつもりであつたのである。

啄木は小說について自信があつた。

だが、この八月休みの半ば過ぎても一枚の小說も書けなかつた。

それも、一つは彼の生活の窮乏から來てゐた。彼は「蚊帳も吊らず、袷着て過し候ふは今年の夏が初めてに候」といつてゐる。啄木は岩手山に雪のある寒いうちに綿入を脫いでしまはなければならなかつたり、今度はまた、その時の袷のまゝで暑い夏をすごさねばならない。さういふ生活では原稿用紙すら充分には買へないのであつた。原稿紙の缺乏は彼をして意氣沮喪せしめた。「紙はなく米はなし、本月分の月給は旣に〳〵前借してあり」どうしてよいか彼はわからなかつた。

彼は小山內氏に賴んだ「おもかげ」の原稿料を突賴みに待ちながら一家五人のいのちをつなぐ方法を考へねばならないのである。

代用敎員は啄木には愉快なことであつたが、僅か八圓の給料では仕方がない。意を安んじて小說の書けるやうな、生活の安定する方法を講じなければならない。生活費だけ、それだけどうにかならぬものか。

彼は、さうして、少しでも費用を浮かせる爲に、また一つにはどれだけ自分の意志が保持で

きるかをためする爲に、煙草は刻み煙草だけにした。極度の粗食にも甘んじた。朝は五時に起きて、些細の日常の事まで注意するやうにした。啄木はいつてゐる。――人間は氣の持ちやうにて如何なる事にも忍耐が出來るものなる事を發見致し候――

かういふ生活をして、啄木は勉強した。金田一氏から「ジャーマンコース」とハイネの詩集などを借りて獨逸語を獨習したのである。

また、この八月には珍らしく詩が出來た。十一日に『吹角』を作つてゐる。

十三日には、澁民村愛宕神社の祭りで、盆踊があり、啄木も村の娘や若者らに交つて思ふ存分に踊つた。

ある年の盆の祭りに
衣貸さむ踊れと言ひし
女を思ふ

この頃、節子さんが姙娠してゐたのであつた。そして啄木が若いお父さんになつたのはこの年も押しつまつた、十二月二十九日のことである。これが長女京子さんであつた。

彼はこの十二月、「明星」に小説「葬列」を發表してゐる。これは十一月に作つたもので盛岡

の痴呆なお夏と狂人(ばか)繁(しげる)のことを書いたものである。

啄木が、原稿料を待つてゐた「おもかげ」は遂々どの雜誌にも掲載されずにしまつた。その小說の中で彼は「大に今の小說家を冷罵した」のでそれが雜誌社の「お得意の寄稿家の怒りを買はむことを恐れて」敬遠されたものだといつてゐる。

この原稿は後に、啄木の函館時代に大火に逢つて燒けてしまつたのである。

父の家出

明治四十年の正月を啄木は、生れたばかりの京子さんと迎へた。

そしてこの月、函館から出てゐる文學雜誌「紅苜宿」に長詩『公孫樹』『かりがね』『雪の夜』なぞを發表した。かういふことが機緣となつて、やがて啄木は北海道へ渡ることになつたのである。

二月、三月に相かはらずの苦しい生活であつた。

むかし、小學校時代のとき、啄木と同級生で、首席をあらそつた工藤千代治氏がその時澁民村役場の書記をしてゐた。啄木は食ふ米にすらこと缺く日を送つてゐた。或るときは朝飯も食

べずに學校に行つた。夕めしがないので、食はずに早寢したり、それ位だから午めしも食べずにすごすこともあつた。學校へ行つては、ナポレオンやトルストイの話を小供らの前に昂然と話してきかせる啄木であつたが、その聲は朝飯も食べない腹から迸り出て小供らの胸に食ひ入るのであつた。

米のないさういふ時は幼な友達の工藤氏の所へ敎へ子を使にやつた。啄木から手紙をあづかつてその子供は工藤氏のところへ行く。「これを下さい。」手紙には米のないことが書かれてある。工藤氏は啄木の窮境を察していつも心よく米をはかつてくれた。

小學の首席を我と爭ひし
友のいとなむ
木賃宿かな

工藤氏は役場へ通ふかたはら、知人から引き繼いだ宿屋を營んでゐたのである。

千代治等も長じて戀し
子を擧げぬ
わが旅にしてなせしごとくに

啄木は、學校で元氣に教へてゐたばかりでなく、たとへ、一家夕飯を食はず早寢するやうな時でも表面（うはべ）は平氣に、氣樂さうにヴァイオリンを彈ひたりしてゐた。

この負け惜しみといふか、强がりは、工藤氏のところから米を借りる（實は貰ふ）にしても、彼自身や家のものが行つたりせず、人をやつて、どつちかといへば、たかぶつたやり方だつた。かう云ふ昂然さがまだ脫けてはゐなかつた。

さういふ二月のある雪の晩であつた。この悲慘なくらしを見るにみかねてのことであらう。啄木の老父は、こつそりひとり家出をしてしまつた。翌朝、いつもの寢床に夫のゐないのを知つた啄木の母親は驚いて「はじめ！はじめ！」と啄木を呼ばつた。それではじめて啄木は父の家出を知つた。

啄木は父親の心中をおしはかつて暗然とした。

父親にしてみれば、自身の寶德寺再住が不可能となつてみれば、この貧しい一家に、この上厄介になるのは心苦しい限りであつたらう。

二三日してその父親の消息がわかつた。老父は家出をして奥中山驛で倒れてゐたのであつた。それを見つけた人が偶然、啄木の母親の親戚の鐵道へ出てゐる人であつた。老父は事情を語り、

その人は老父に旅費を與へて野邊地の對月師のところへ行くことが出來たのであつた。

ストライキ

父親の安全がわかつて一家は安心した。しかし、この家出事件が啄木の心に與へたであらう影響は想像することが出來るのである。

啄木はじつとしてゐられない氣持をいよいよ感じなければならなかつた。生活の打解！さういつた氣持と、校長に對する反感などから四月のある日、啄木は生徒達を引きつれてストライキをやつてしまつた。その朝、啄木は運動場に集つた生徒たちを引きつれて、一里ばかり向の、平田野といふ野原へ行つてしまつたのである。

そこで高等科の生徒は三日間休むことを決議した。啄木は自作のストライキの歌をその生徒らに歌はせ、たたまる胸の鬱憤を晴らしたのである。

この「謀反」は啄木の胸の鬱憤を晴らしたとしても、同時に、啄木は代用教員の職を止めねばならなかつた。

——啄木は止めた。

啄木は北海道行を思ひ立つやうになつたのである。

この澁民村の教員生活のことは彼の小說「雲は天才である」「足跡」「葉書」などに描かれてある。どんなに慘めな生活を、ここでしなければならなかつたにしても、詩人啄木の胸にはやつぱり懷しい故里であり、思ひ出多い誰彼であつた。

その思ひ出を歌つた歌。

かにかくに澁民村は戀しかり
おもひ出の山
おもひ出の川

あはれかの我の我へし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づらむ

ふるさとの
村醫の妻のつつましき櫛卷なども
なつかしきかな

明治の、をんな風俗の、ふつくらした繪でも見るやうな歌である。

かの村の登記所に來て
肺病みて
間もなく死にし男もありき

惜しまれることもなく死んでゆく人のあはれさ。

その名さへ忘られし頃
飄然とふるさとに來て

咳せし男

これはまた啄木自身でもあつた。

肺を病む
極道地主の總領の
よめとりの日の春の雷かな

宗次郎に
おかねが泣きて口説き居り
大根の花白きゆふぐれ

誰だつたがこの歌の「口説き居り」といふことを、東北地方では、金のないことをかきくどく、といふ意味につかふとかで、この場合も、宗次郎に、おかねが金のないことをくどいてゐ

る、といふ風に解釋してゐた。

さうも釋れるけれど、實際はこの宗次郎が吞ン兵衛で、妻のおかねが、それに困つて酒をやめて呉れとよく、胸倉をとつてわめき口說いたのであるといふことだ。

「大根の花白き夕ぐれ」の農村の一場面である。

酒のめば
刀を抜きて妻を逐ふ教師もありき
村を逐はれき

ほたる狩
川にゆかむといふ我を
山路にさそふ人にてありき

啄木は食ふや食はずのくらしをしてゐても、盆踊りを踊つたり、螢が出れば螢狩りにも出か

けた。

この「ほたる狩」の主人公は啄木が後に、「螢の女」といつた堀田秀子さんである。前にも書いたやうに、上野さめ子の後に赴任してきた女教師で、上野女史よりは女らしい、感じのやさしい人であつた。上野女史には大して好感も持たなかつた啄木も、堀田女史にはいい感じを持つやうになつた、おとなしい女史は、ひかへ目な態度で、しかしいつも啄木の味方であつた。職員室などで、何事かの時も彼女は常に啄木の意見に贊した。彼女は啄木の「眼が右に動けば、何百の生徒の心が右に行く、（啄木の）眼が左に動けば、何百の生徒の心が左に行く」と信じてゐた。そして彼女自身の心も、何時しか啄木の眼に隨つて動く樣になつてゐるやうな女であつた。

この秀子さんのことが小說「道」には、柔らかな書き振りで親しみぶかく書いてある。

かの家のかの窓にこそ
春の夜を
秀子とともに蛙聽きけれ

この秀子も堀田女史のことであらう。

この女のことは、後になつてもよく金田一氏などにも話したさうで、

誰がみても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたる夕

の歌の、長い手紙もこの秀子さん宛に書いたものであるといふ。

啄木をして「誰がみてもなつかしくなるやうな」手紙を書かせた、そのやうな氣持のふつくらした女性であつた。

見もしらぬ女敎師が
そのかみの

わが學舍の窓に立てるかな

見も知らぬ女敎師を見るにつけても、啄木は秀子さんをなつかしんだかも知れぬ。

北海道流離時代

函館『紅苜蓿』

一昨日の御厚情多謝、

小樽より小妹の旅費まゐり候、明後三日午后二時半に好摩出立致度候間、何卒願上候、

函館の友よりも手紙着、同地に然るべき隱家ある見込也

一日朝

啄木

畠山亨様

御厚志の段々萬謝に堪えざる所、荊妻持つてまゐり候ふ貴書拜見候へども、兵は神速を尙ぶ、

電報もき居候事故、今出發仕候、末長瀨三の方家のアト仕末に充つる見込、宜敷、

四日午后二時七分

好摩局にて

啄　木

畠山　享　様

○

五月四日漇民を發つて啄木は北海道へ向つた。令妹光子さんを連れて二人の旅であつた。北海道で食へるだけの職が見つかつたら、兩親も妻も迎へるつもり、いまは妹一人だけをつれ津輕の海を渡つた。

船に醉ひてやさしくなれる
いもうとの眼見ゆ
津輕の海を思へば

可憐な光子さんは船に醉つて、うつすらとした眼つきをし兄の膝にもたれた。北海道へ、い

はば落ちのびてゆく啄木は、この時位肉親の妹を可愛いいと思つたことはなかつたといふ。
翌五日の朝九時、二人を乘せた陸奥丸は函館に着いた。この光子さんは棧橋からすぐ汽車に乘つて唯ひとり姉さんの嫁ぎ先小樽の山本千二郎氏方へ行つた。

函館には、新詩社の大島經男（流人）を始め、宮崎大四郎（郁雨）岩崎正（白鯨）吉野章三（白村）並木武雄（翡翠）松岡政之助（蕗堂）などの人人が苜蓿（うまごやし）社といふのを結んで雜誌『紅（べに）苜蓿（うまごやし）』を出してゐた。

啄木はこれに澁民村時代から詩を寄せてゐたのであつた。さういふ緣で、函館へ來ると啄木はその『紅苜蓿』を主宰することゝなつた。

苜蓿社の人々は今まで、作品によつて敬慕してゐた天才詩人啄木その人を迎へて大いに歡迎してくれたのであつた。

そして同人の一人澤田信太郎氏の紹介によつて啄木はとりあへず函館商業會議所の雇となることが出來た。が、この商業會議所の雇はほんの少しで御用濟となる。

職が見つかつたと思つたら、すぐまた職に離れた啄木は、近くの小學校からきこえてくる唱歌の聲に澁民のことを思ひだしたりした。澁民村の五六月は一年中でも最も樂しい時だ、彼は

その杜、その川、いまいかにと思ふとそゞろに幻にまでそれが見えて來て涙が出た。

「……他郷に居て職を失ひ候ふ心地は、故里の百姓家の一室にひとり殘り、賃仕事などし給ふ六十の母を思ふにつけて、いや更に深きを覺え候」

と大島氏に訴へてゐる。

またその手紙の中で彼は紅苜蓿入社の辭を印刷するのに小さな活字で組んで貰ふやうにいつてゐる。『小天地』のときは自分の詩を四號活字で組んで問題になつたりしたが、今の啄木は自分の文章を大きく組むことなんかに喜びを感じてはゐなかつた。却つて心苦しくさへ思つた。若し雜誌を賣る爲に「啄木」の名を大きく出すのであつたら「失禮乍ら千古のお心得違ひに候ふべし」ともいつてゐる。

そのうち、(六月)今度は吉野白村氏の世話で函館彌生小學校の代用敎員となることが出來た。月給は澁民よりはよく十二圓であつた。

そこで啄木は節子さんを迎へ、靑柳町十八ラの四號に一軒家を借りた。

節子さんは京子ちやんをおぶつて七月七日故鄕から出向いてきた。苜蓿社の同人はみんな船

まで迎いに出た。

その翌日八日の朝彼は宮崎郁雨氏に次のやうな手紙を寄せてゐる。

「……お蔭にて人間の住む家らしくなり候ふ此處、自分の家のやうでもあり他人の家のやうでもあり自分が他人の家へ來てゐるのか、他人の家へ自分が來てゐるのか、何が何やら今朝もまだ餘程感覺が混雜して居り候、ヘラがない、あゝさうだつた、といふので今朝は杓子にて飯を盛り候、必要で、足らぬものまだある樣に候、否、數へても見ぬがあるらしく候、兎に角一本立になつて懷中の淋しきは心も淋しくなる所以に御座候、申上かね候へど、實は妻も可哀相だし、〇少し當分御貸し下され度奉懇願候、少しにてよろしく御座候草々」

不過な啄木にとつて、一地方文學雜誌『紅苜蓿』に寄せた彼の詩や激勵の手紙が緣となつて、いまは彼自身の生活までこのやうに、その同人の援助のもとに營まれるやうになつたことは不思議の緣といへばいへやうか。その中でもこの宮崎郁雨氏と啄木との交友は奇緣といふべきものであらう。郁雨氏はこの後、斷えざる啄木の援助者となり、啄木上京の後はその妻子の生活を保證し、また郁雨氏の妻として啄木夫人節子さんの妹ふき子さんを娶ることになつたのである。

その友情は啄木をして、「死ぬ時は函館へ行つて死ぬ」といはしめ、啄木の死後は函館立待岬

に立派な石造の墓塋を造つたのである。

啄木は不過な、悲惨な一生を終つた人であつたが、その一面よき友情に恵まれてゐた。金田一氏あり、北海道時代に郁雨氏あり、晩年東京での生活には土岐善麿（哀果）氏があつたのである。

智慧とその深き慈悲とを
もちあぐみ
爲すこともなく友は遊べり

啄木は郁雨氏と交際しはじめた時、から歌つてゐる。郁雨氏はその頃父君の商賣が成功し（釀造業）裕富だつたので、不過な啄木としては羨ましく思へたのであつたらう。「智慧とその深き慈悲とを」啄木は素早く郁雨氏に見出してゐるのであつた。

啄木はまた郁雨氏の戀の惱みを

大川の水の面を見るごとに
郁雨よ
君のなやみを思ふ

と歌つてゐる。（この戀のなやみ、それには複雜な事情があつた。）

尙、紅苜蓿同人を歌つた啄木の歌をあげる。

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく
山に入りにき
神のごとき友

大島流人氏を歌つたもの。氏は函館英語學校や（そこで郁雨氏も生徒だつた）女學校の敎師をしてゐたが、失戀して、故鄕の日高國へ歸つたのであつた。その時啄木達は氏を函館埠頭に見送つた。後に啄木は「人に別れて悲しかりし事は幾度も有之候へど、あの時ばかり淋しかり

し事は無之候」といつてゐる。

目を閉ぢて
傷心の句を誦してゐし
友の手紙のおどけ悲しも

をさなき時
橋の欄干に糞塗りし
話も友はかなしみてしき

おそらくは生涯妻をむかへじと
わらひし友よ
今もめとらず

岩崎白鯨氏を歌つたもの。氏は遂に妻も娶らずさびしく病の爲めに死んだ人であつた。

かなしめば高く笑ひを
酒をもて
悶を解すといふ年上の友

若くして
數人の父となりし友
子なきがごとく醉へばうたひき

吉野白村氏を歌つたもの

こころざし得ぬ人人の
あつまりて酒のむ場所が

我が家なりしかな
さりげなき高き笑ひが
酒とともに
我が腸に沁みにけらしな

若き文學愛好者たちは、啄木の家にあつまつては樂しく——不平ものべて酒を飲んだのである。

啄木は函館に來てから『水無月』『年老いし彼は商人』『辻』『蟹に』『馬車の中』(以上五月)『戀』(六月)等の『ハコダテの歌』七月には小說『漂泊』を書いた。

これらの詩稿に彼のいままでの浪漫的な作風から、やゝ現實的なものに移つてきてゐる跡を見出すことが出來るのである。

花咲かず、雨のふる日の
街をゆく馬車の中なる
年若き我は旅人。
わが泣くをとがめ給ふな。
函館の少女達よ、
煙草吹く年寄達よ、
情ある乘合人よ。
わが泣くをとがめ給ふな。
そそけたる髮に霜おき、
皺ふかく、面瘦せはてし、
貧しげの媼の君ぞ
わが側に坐りたまへる。
よく見れば、さにもあらねど
その頰よ、ああ、故鄕に

ただ一人居給ふ母に
いと似たり。縞目もわかず
褪(あ)せし衣、そもまた似たり。
袖口のきれしも似たり。
など、かく、と、そは我知らず
見れば、ただ、涙し流る。
年若き我は旅人、
わが泣くをとがめ給ふな、
情ある乗合人よ。

戀

板硝子つめたる窓をうつ雨の
糸ほの白く、灯はあはく、夜ぞふけてゆけ。
病心(やみごころ)、寝がへりうてば、黝(くろず)める

赭土(そほに)の壁の床の間に、ああ芍藥の
一輪よ、あでにうつむく。——すさまじき
煙の海の色に似る壁の中より
拔けいでし白斑(しろぶち)の淡紅(とき)ぞほのに燃ゆ。——
寢(いね)らえぬ心つぶ立ちて、君をこそ思へ。

凄まじくか黑き海の人の生(よ)の
前に立つなる我が魂のつかれたる眼に
ふとうきし君は芍藥、——名も知らず、
我こそさめて夢むなれ。——ああ、花萎(しぼ)む
明日は來(こ)め、君も行くらむ、かくてまた、
古銅の瓶に、何の花、咲(え)むとするらむ

○

また

青草の中に熟れたる一粒の苺と思ひ口づけしかな
人妻はいと面惜しくれなゐの木の實の皿をわが前に置く
二十三ああ日の下に新しき事なし我は猶君を戀ふ
といふやうな短歌を作つて『明星』に發表した。

母を迎ふ

そのうち、八月三日彼は母堂を函館へよぶため、迎へに出發した。
この旅は、鐵道へ勤めてゐた並木氏の盡力で玄海丸の一等船室におさまり午前三時函館拔錨青森へ九時に着いた。十一時の汽車に乘つて小湊にゆき、瀬川藻外氏を尋ねた。(氏はこの時岡山の高等學校を卒業してゐた。)二人は燒くが如き八月の炎熱のなかで、ビールを飮んで話し合つた。
夕方再び汽車にのり、野邊地に向つた。野邊地の當光寺といふのは啄木の伯父に當る八十二歳の對月老師の寺でそこにずつと父親がゐたのである。母堂はこゝで啄木と落ち合ふことになつてゐて啄木が行く少し前に着いてゐた。

その晩久しぶりで――あの父親の家出事件以來、はじめて、親子三人顔をあはせて啄木の感慨も無量なものであつた。

翌朝、母をつれて出發、石狩丸の二等船客となつた。海はしづかで午後四時函館に着いた。母堂も、啄木の家へ落ちついた。そこへ小樽の姉のところへ行つてゐた妹の光子さんが、脚氣で轉地するといつてやつて來た。頭散してゐた一家が、はじめて顔を合はせたのである。

一家五人、一つ屋根の下に、久しぶりで賑やかではあつたが啄木には十二圓の給料でその糊口をしのがねばならないことは苦痛である。「十二圓で親子五人は輕業の如く候」

そこで彼は齋藤大硯氏の紹介で函館日日新聞の遊軍記者となつた。この方で十五圓の給料が貰へた。

彼はそこで、日曜文壇や日日歌壇を起し、また「辻講釋」といふ題で評論の筆を執つた。

函館大火

この夏、啄木は生れて初めて、大森海へ行つて海水浴をしてみた。首まで海の水につかると急に體の具合が輕くなつたやうな「健康の心地」が感じられた。

彼は、「紅苜蓿」の編輯者としてその秋季特別號の編輯に骨折り、その發展策についても種々計畫するところがあつた。

ところが、啄木が函館日日新聞社に入り「大いに面白」かつてゐると間もなくはからざる天災にあつて啄木のもくろみも總て畫餅に歸せざるを得なかつた。

八月二十五日の夜のことである。午後十時三十分頃東川町が發した火は、折からの猛烈な山背に煽られて、見る見る全市をなめる惡魔の舌となつた。六時間にして函館の五分の四、一萬五千戸を焼きつくした。損害一億圓にも上つたこの大火で、小學校も女學校も焼け、遊廓も焼け、警察も、郵便局も、英露領事館も、銀行も、郵船會社も、新聞社も總ナメを食つた。家を失へるもの六萬。函館未曾有の大災害であつた。

啄木の家では、公園裏の松林に老母や京ちやんたちが避難し、家財道具も持ち出しはしたが幸に焼けないですんだ。啄木は、狂人のやうに立ち騷ぐ人々のなかで、家族の狼狽を鎭めやうと、火事最中盆踊りをやつてのけたりした。

この大火で、紅苜蓿特別號の原稿も焼けた。もう文學雜誌どころではなかつた。啄木の言葉を借りれば「紅苜蓿は函館と運命を共にして遂に羽化昇天した、實際函館に於ける我らの企畫

はモハヤ一分一厘の希望をもあまさ」なかつたのである。

罹災者の多くは小樽や內地へ移つた。

啄木ももう函館に居られない。「何しろ學校の方はドーと二部教授になるのだから代用はお免にきまつてるし、去る十八日から當分秘密で日日新聞へ行つて月曜文壇を起したりしてゐたがそれもやけた。米屋も炭屋も何もかもやけて通帳全部キカナクなり物價騰貴、燒けぬお蔭で萬事恩典に預からぬし、尻に帆かける外なし、今煙草もロクに飲めぬよ」

彼は札幌へ行くことを決心した。

函館に止まること、四ケ月、ふたゝび流轉の生活がはじまるのであつた。

函館を去るとなれば、こゝも彼れにはなつかしい土地であつた。「一人も知る人なき土地に來て、彼は郁雨、白鯨はじめ多くの親しき友を得た。ともかくも彼はこゝに離散した一家を纏めて生活したところでもある。

その彼がハコダテを憶ふ歌。——

潮かをる北の濱邊の
砂山のかの濱薔薇(はまなす)よ
今年も咲けるや

たのみつる年の若さを數へみて
指を見つめて
旅がいやになりき

函館の床屋の弟子を
おもひ出でぬ
耳剃らせるがこゝろよかりし

わがあとを追ひ來て
知れる人もなき

邊土に住みし母と妻かな

あはれかの
眼鏡の緣をさびしげに光らせてゐし
女教師よ

と歌つてゐるのは、啄木の所謂「蘗の女」橘智惠子さんである。

啄木と同じ渋民小學校の教師をしてゐた啄木より三つ年下の、美しい、おとなしい女性であつた。

家は札幌で大きな林檎園を經營してゐる財産家で、さういふ家に育つた彼女にお孃さんらしい内氣な美しさを持つてゐた。

啄木はこの智惠子さんが好きであつた。

友われに飯を與へき
その友に背きし我の

栓のかなしさ

函館の青柳町こそかなしけれ
友の戀歌
矢ぐるまの花

啄木の住んでゐた青柳町には、吉野白村も住んでゐたのである。

ふるさとの
麥のかをりを懷かしむ
女の眉にこころひかれき

あたらしき洋書の紙の
香をかぎて

一途に金を欲しと思ひしか

函館商業會議所でのエンサイクロペヂア・ブリタニカの紙の匂だ。

しらなみの寄せて騷げる
函館の大森濱に
思ひしことども

その大森濱で海水浴をしたこともある。

朝な朝な
支那の俗歌をうたひ出づる
まくら時計を愛でしかなしみ

漂泊の愁ひを叙して成らざりし
草稿の字の
讀みがたさかな

函館の臥牛の山の半腹の
碑の漢詩も
なかば忘れぬ

むやむやと
口の中にてたふとげの事を呟く
乞食もありき

卷煙草口にくはへて
浪あらき

磯の夜霧に立ちし女よ　（「忘れがたき人々」より）

札　幌　へ　（北門新報記者）

「天下の代用教員一躍して札幌北門新報の校正係に榮轉し、年俸百八十圓を賜はる。
明十三日午後七時、君が立つた時と同じプラットフォームから汽車にのる。

四十年九月十二日　　函　館

キ ッ ツ キ

宮 崎 大 四 郎 様

○

啄木は、九月十三日夕七時燒跡の函館を發つて、ひとり札幌へ向つた。途中小樽へ寄り、翌日の午後一時過ぎ札幌に着いた。(葉書に「君が立つた時」とあるのは、宮崎氏は當時札幌へ兵役に上つてゐたのである。)

函館を立つ時、與謝野氏からは東京へ來てはどうか、といつて來た。彼は迷つた。妻子をつれて行つては困ることは同じだ。しかし、札幌へ來てみれば、こゝはいゝ所だつた。「安全に暮

すことさへ出來れば五六年は札幌に居たい」と思つた位。「札幌は大なる田舍なり、美しき木立の都也、アカシャの並木には秋風吹き、水は冷たし、靜かにして淋しく、しめやかなる戀の澤山ありさうな處」なのが氣に入つた。

彼は同縣人で、北門新報の記者である小國露堂氏及向井英太郎氏の斡旋で、同新聞の校正子となつて入社した。そして宿は向井氏の下宿北七條西四丁目田中方に同居した。月給十五圓で十六日から出社。

啄木より後に殘つた家族はこの日函館を引き上げて小樽の姉山本方へ落付くことゝなる。

彼はいまゝで生活とか其の他のことのために心を勞して、自分の本領をともすれば忘れてゐたことに氣がついた。その自覺が啄木には嬉しいことであつた。「忘られたる文士？　否、自分で忘れむとしたる『誤れる天才』は今はかなき眠りより覺め申候、我が天職は矢張文學の外何物でもなかりき」と彼は一友に書してゐる。彼は節子さんが戀しくなり、京ちやんが見たくなり、友達の顏が目に浮び、橘智惠子（女教師）が茶を汲んで出すときの手つきが思ひ出された。

綱島梁川の死

かういふ日、九月二十日の朝、湯屋で啄木は綱島梁川氏の死を知つた。彼は二年前三十八年の五月中旬、東京を引き上げてくる前、處女詩集『あこがれ』を持つて梁川氏を訪問したことがあつた。「見神の境地」に入つたこの宗教界の先覺者に彼は尊敬の念を持つてゐたのである。――遊民の禪房にひとり淋しく病を養つてゐた折、白蘋の花を浮べた水鉢の前で彼は梁川の文を愛讀したことがある。そのころから一度は親しく逢ひたいと思つてゐたのであつた。

それで『あこがれ』が出來上るとそれを懷ろにして牛込市ヶ谷の奥、當時の東京としては山の中の大久保余丁町に、病床の梁川氏を訪ねたのであつた。

それは、空晴れて温かな日であつた。梁川の弟の建部氏が、慇懃に取次に出られた。病室にてお構ひたくば、と請ぜられて裏庭へ廻つた。五月の陽が庭の青葉に照り、籬にはまだ山吹の花がいくらか咲き殘つてゐた。しづかな、氣持のよい日であつた。

障子のなかで沈んだ咳の聲がする。病室は六疊で、十年病臥の見神の境地のこの人は肉も落ち、骨も枯れて、積み重ねた蒲團によりかゝつてゐた。

その言葉は深い湖の底に沈んだ鐘のやうだ。がその双の瞳の輝！　それはまさに神を見てゐる瞳であつた。慈悲の光であつた。寸前にこの人に接して啄木の心地は異様に亢奮した。

その時の話は主に詩と宗教であつた。氏にとつては、詩と宗教は二物ではなかつた。

それから、氏は最後に、氏の使命について話された。それは、「我今病めり、立つ能はず、行ふ能はず、乃ち唯一管の筆を以て此の使命を世に傳ふべきのみ、これ我が唯一の神に負へる務也。神の恩寵は深く大いにして限りなし、我が心はいと安らかなり」といふのであつた。

その後、啄木は梁川に思ひ餘る惱みの數々を訴へた。氏も同情溢るゝ手紙をくれた。『あこがれ』を詳細に批評した手紙も貰つた。

啄木はいま、梁川の死に接してそれらのことを思ひ出す。氏の死は啄木をして「悲風千里より來るの感」を抱かしめたのである。

彼は北門新報入社の辭『秋風記』につゞいて長文の『綱島梁川を弔ふ』なる弔文を同紙上にのせた。

この梁川を弔ふ文は三日に渉つて掲載されたのであるが、その最後の日、つまり二十七日には、もう啄木は北門新報の人ではなかつた。

僅々、滯在二週間にして啄木は札幌を去つてこんどは小樽へ行くことゝなつたのである。

丁度、當時、山縣勇三郎氏によつて、「小樽日日新聞」が起された。啄木は、北門新報は「貧乏にて駄目」なので、北海タイムスか、この小樽日日新聞か、どちらかへ行きたかつたのである。が、新らしい新聞は萬事面白からうといふので、それに三面の主任といふ役目で、小樽の方へ行くことゝなつた。この方では二十圓の月給を得る筈であつた。

次の歌はやはり「忘れがたき人々」一、函館の次につゞくもの、彼が函館を發つて札幌にゐたわづか二週間の間の憶出である。

　　呿呻噛み
　　夜汽車の窓に別れたる
　　別れが今は物足らぬかな

　　雨に濡れし夜汽車の窓に
　　映りたる

山間の町のともしびの色

雨つよく降る夜の汽車の
たえまなく雫流るる
窓硝子かな

眞夜中の
倶知安驛に下りゆきし
女の鬢の古き疵あと

札幌に
かの秋われの持てゆきし
しかして今も持てるかなしみ

アカシヤの街樾（なみき）にポプラに
秋の風
吹くがかなしと日記（にき）に殘れり

しんとして幅廣き街の
秋の夜の
玉蜀黍（たうもろこし）の燒くにほひよ

わが宿の姉と妹のいさかひに
初夜過ぎゆきし
札幌の雨

石狩の美國（びくに）といへる停車場の
柵に乾してありし

赤き布片かな

この「わが宿の姉と妹との」の歌は、啄木が向井氏と同居してゐた田中方の姉妹をよんだものである。(向井氏は、啄木を北門新報へ紹介した位の人であつたが、同居してゐてみると啄木はこの人物を好まず、顔を見るのも嫌になるやうになつて、啄木の札幌を去りたくなつたのも一つにはさうしたことが氣持の上の原因になつた。)

啄木は身近に親しんだ女性に、「螢の女」だとか「聲の女」だとか名をつけて呼んだが、この女性はさういふ呼び方をすれば「スヰイートピー」の女であつた。

この姉妹のことは小說『札幌』の中にでゝくるが、彼はまた感想「きれ〴〵に心に浮んだ感じと回想」の中で「……スヰトピイーとかいふ花を机の上の瓶にさして、その前で小聲に讚美歌を歌ひながら、針仕事をしてゐる大人しい娘だつた。」と書いてゐる。名はとし子といつた。

四十三年の啄木のノートには

とし子とは君が名なりき十年のち今は我が子につけて呼べる名

といふのがある。もちろん、札幌の時から十年などたつてゐはしないし、とし子といふ子が

あるわけでもない。

小樽日報記者

九月二十七日の夕方五時十分發の汽車に乘つて、啄木は滯在わづか二週間の札幌を發つて小樽に赴いた。そしてひと先、母堂節子さんらのゐる山本氏宅に落付いた。氏は中央停車場の驛長をしてゐられた。

二日の夕方、啄木はその驛長官舍から、驛夫に大八車を牽かせ、花園町の煎餅屋の二階に引を移つた。二階二間、六疊に四疊半、そこに今迄、姉の家に厄介になつてゐた、母、節子夫人京子、と啄木は住むこと丶なつた。ところがその襖一重の隣の奥座敷には賣卜者が住まつてゐた。だから家の入口には姓名判斷の看板がか丶つてゐた「若し小生例の藪醫者めいたる一張羅の紋付羽織きて此家より出つ入りつ致し候はゞ、近隣の人は多分姓名判斷氏の新弟子とや評し候ひなむ」と彼はいつてゐる。しかしこの二間ともに床の間のある部屋を彼は貸間沸底の折、こんな贅澤な家を見付けたのは全く天佑だと喜んだ。

……早速せつ子と共に買物に出かけて洋燈、火鉢、箒、花瓶、炭入など買うて參り候に、程

なく雨ふり出で候、ふり出でたるは秋雨に候、聞ゆるものは隣室の咳拂ひと淋しき雨の音のみに候、行李やら飯鉢やら布團やら洗面盥やら、雜然として堆かき室の中程少し取片附けて、小さからぬ火鉢に御存じの鐵瓶松風の音を立て候、明るき吊洋燈は青柳町にて求め候ひしものより立派に且つ派手に御座候、「わが家庭」といふ云ひ難く安けき滿足は、今名殘もなく小生の胸に充ち居候……

小樽日報社は家屋も新築し、編輯局も本道一位に立派だし萬事整頓してゐた。活字も新らしいもの許り三十萬本もある。資本も潤澤で、資本主は山縣勇三郎、實際の理事者で社長の名義は白石義郎といふ道會議員、この人は財産もあり、又釧路新聞も持つてゐた。一年に萬位は捨てゝもいゝといふ道樂半分の新聞だとて啄木は大喜びであつた。

十月一日に、第一回の編輯會議を行ひ、初號は十五日に出す筈であつた。

編輯會議には主筆の岩泉江東をはじめ野口雨情など七人の記者が集つた。

啄木は雨情氏に好人物疑なし、と好感を持つた。がこの岩泉主筆はみんなから不平を持たれた。啄木は、雨情氏とこの主筆排斥を企てた。

社長はもと福島縣選出の代議士などもやつた人で啄木を信用してくれた。そして雨情氏は三

面の、啄木は二面の主任になる筈であつた。
十五日に新聞の初號（十八頁、北海未曾有なりと啄木はいつてゐる）が出た。啄木はそれに「初めて見たる小樽」を載せた。そして彼は雨情氏と一緒に三面を受け持つた。
二號は二十三日になつて出た。啄木は朝八時に出社し、午飯と夕飯は編輯局で食べ忙しく働らいた。
その中に、雨情氏は主筆排斥のことが洩れて社を去つていつた。
啄木は夜九時十時ごろまで、毎日三百行以上の三面記事を書き、文苑から新刊紹介まで書いた。社内の内紛はなか〳〵おさまらず、紙面も思ふやうに振はなかつた。が社長は啄木の才能を認め彼の意見は全部用ひてゐた。
啄木は江東主筆を排し「社の内部に根本的改革を行ひ以つて全然其方針を變更するにあらざれば社運容易に開け」ずとして社内の廓清を企圖した。
そこで彼は八名の記者のうち、主筆以下六名の記者を社長を說いて辭めさせてしまつた。
江東主筆も大勢の非なるを知つて、十一月十五日「最後の一言」を書いて辭した。
啄木は後任編輯長として澤田信太郎（天峯）を札幌から電報で呼んだ。

彼はこの澤田氏と圖つて彼の企圖を實現するつもりであつたが、事務長との間が今度はうまくいかなかつた。小林事務長は彼の行動を内紛の因とし、社長またその立場上、啄木の意見を全部容認することは出資者との關係もあつて不可能となつた。啄木はかうなると「例の癇癪を起し男一疋居らぬ社はイヤだと駄々をコネ出し」た。

たうとう、さういふ結果は十二日の晩の事務長との喧嘩となつてしまつた。彼は亢奮した事務長に頭をたゝかれて四つ五つ瘤を拵へた。彼はたゝかれながら、あはゝゝ、と笑つた。ゲンコツをふるつてなぐつてくる事務長の顏が彼には可笑しくつてたまらなかつたのである。

それ切り彼は社を辭めてしまつた。

かくして彼は北海タイムスが新に中西高橋兩代議士によつて起される札幌の新聞か、その何れかに行けるあてはあつたものゝこの暮も職を離れて越さねばならなかつたのである。

四十一年の年賀狀に彼はかう書いた。

……御無音御ゆるし下され度候家持たぬ子は流れ〳〵て只今北海の濱にさすらひ居候。

年明けて「さすらひ來し此の濱邊の冬は寒」い。一月十九日彼は白石社長と共に釧路へ立つことになつたのであるが、彼が小樽日報社八十日間の憶ひ出の歌、それは次のやうたものである。

かなしきは小樽の町よ
歌ふことなき人々の
聲の荒さよ

泣くがごと首ふるはせて
手の相を見せよといひし
易者もありき

こんこんと寒い咳をさせる隣室の易者であつた。

いささかの錢借りてゆきし
わが友の
後姿の肩の雪かな

貧した啄木も貧しいのである。

世わたりの拙きことを
ひそかにも
誇りとしたる我にやはあらぬ

しかしながら何とよく職を失ふ自分であることよ。

汝が痩せしからだはすべて
謀叛氣のかたまりなりと

いはれてしこと

いはれて、ひそかに諾ふことだつたらう。

かの年のかの新聞の
初雪の記事を書きしは
我なりしかな

土岐善麿氏の歌に、

りんてん機今こそ響け、
うれしくも
東京版に、雪のふりいづ。

といふのがある。いづれも記者生活の新鮮な感覚だ。

椅子をもて我を撃たむと身構へし
かの友の酔ひも
今は醒めつらむ

喧嘩をした事務長。その争ひも今はしづかに省られる。

負けたるも我にてありき
あらそひの因も我なりしと
今は思へり

殴らむといふに
殴れとつめよせし

昔の我のいとほしきかな

汝三度
この咽喉に劍を擬したりと
彼告別の辭に言へりけり

あらそひて
いたく憎みて別れたる
友をなつかしく思ふ日も來ぬ

過ぎさりしもの丶あはれさ、なつかしさ。

あはれかの眉の秀でし少年よ
弟と呼べば

はつかに笑みしが

かういふ啄木を慕つて訪ねてくる文學少年もあつた。

あをじろき頰に涙を光らせて
死をば語りき
若き商人

これもさういふ文學少年の一人だ。

わが妻に着物縫はせし友ありし
冬早く來る
植民地かな

平手もて
吹雪にぬれし顔を拭く
友共產を主義とせりけり

十一月三十日に西川光二郎が社會主義宣傳に來た。そのときのこと。その人の顏は

酒のめば鬼のごとくに靑かりし
大いなる顏よ
かなしき顏よ

樺太に入りて
新らしき宗敎を創めむといふ
友なりしかな

啄木を函館日日新聞に紹介した齋藤大硯氏。氏は當時やはり大火に燒け出されて小樽へ來てゐた。

治まれる世の事無さに
飽きたりといひし頃こそ
かなしかりけれ

共同の藥屋開き
儲けむといふ友なりき
詐欺せしといふ

啄木が小樽にゐるとき、札幌の兵營にゐた宮崎郁雨氏は、啄木に逢ひたくて演習のひまに啄木を訪ねてきた。啄木はまさかと思ふほど喜んだ

演習のひまにわざわざ
汽車に乘りて
訪ひ來し友とのめる酒かな

かういふ歌を生んだ小樽だが滯在百二十日にして彼は遠く釧路へ立つこととなる。

釧路へ

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

敵として憎みし友と
やや長く手をば握りき
わかれといふに

ゆるぎ出づる汽車の窓より
人先に顔を引きしも
負けざらむため

四十一年一月十九日午前十一時四十分、啄木は小樽を出發した。釧路へ、北海道を西から東へ横斷する長途の汽車の人となつたのである。

啄木の才能を認めてゐた白石社長は、彼を自分の經營する釧路新聞に入社させて、その手腕をふるはせようとしたのであつた。啄木は田舍へ行くのはあまり好ましくなかつたが、當時小さな釧路新聞を、啄木を入れて、大擴張する、壯んにやつてくれ、といふので彼もその氣になつたのである。

それで白石社長と一緒に彼は小樽を立つことゝなつた。驛には節子さんが京ちやんを背負つて見送りにきた。爭つた同僚も見送りに來た。雪がさんさん降つてゐる。

彼はまた、妻子と別れていかねばならないのである。悲しげな瞳をして啄木を見送る節子さんの眉には、吹き込む雪がちら〳〵した。彼は汽車が動き出すといちはやく顔を引き込めた。

彼は負けたくたかつたのだ。同僚にも、悲しげな節子さんの感情にも、そしてまた自分自身の感傷にも。……

啄木は途中、岩見澤に泊り、旭川に一夜をあかした。雪に埋れた白皚々の北海道を横斷することもまた彼には愉快なことである。

みぞれ降る
石狩の野の汽車に讀みし
ツルゲエネフの物語かな

わが去れる後の噂を
おもひやる旅出はかなし
死ににゆくごと

わかれ來てふと瞬けば

ゆくりなく
つめたきものの頰をつたへり

忘れ來し煙草を思ふ
ゆけどゆけど
山なほ遠き雪の野の汽車

うす紅く雪に流れて
入日影
曠野（あれの）の汽車の窓を照らせり

ゆくりなくも落つる涙、千里雪野の旅の感傷！　赤い入日に詩人のこゝろは悲しむ。

腹すこし痛み出でしを

しのびつつ
長路の汽車にのむ煙草かな

乘合の砲兵士官の
劍の鞘
がちやりと鳴るに思ひやぶれき

名のみ知りて緣もゆかりもなき土地の
宿屋安けし
我が家のごと

伴なりしかの代議士の
口あける靑き寐顏を
かなしと思ひき

今夜こそ思ふ存分泣いてみむと
泊りし宿屋の
茶のぬるさかな

水蒸氣
列車の窓に花のごと凍てしを染むる
あかつきの色

ごおと鳴る風のあと
乾きたる雪舞ひ立ちて
林を包めり

空知川雪に埋れて
鳥も見えず

岸邊の林に人ひとりゐき
寂寞を敵とし友とし
雪のなかに
長き一生を送る人もあり

これもまた人生である。

いたく汽車に疲れて猶も
きれぎれに思ふは
我のいとしさなりき

うたふごと驛の名呼びし
柔和なる

若き驛夫の眼衣も忘れず

霧のなか
處々に屋根見えて
煙突の煙うすくも空にまよへり

遠くより
笛なが〳〵とひゞかせて
汽車今とある森林に入る

何事も思ふこととなく
日一日
汽車のひゞきに心まかせぬ

さいはての驛に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき

かくして啄木は二十一日夜九時半、遠く釧路の町に汽車を降りた。遠くも來つるものかな
――街を歩きながらこの感慨が彼にもあつた。

しらじらと氷かゞやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

釧路は雪は五寸位しか積つてゐなかつたが風が寒い。每日快晴で雲一つない空の向うに眞白に雪を被いだ雄阿寒雌阿寒の山々が見られた。下宿の二階の八疊に彼は行火(あんか)を抱いて硯を溫めた。筆も凍り、朝になると夜具の襟まで白く凍つてゐる。

こほりたるインクの罎(びん)を
火に翳(かざ)し
涙ながしぬともしびの下

神のごと
遠く姿をあらはせる
阿寒の山の雪のあけぼの

港には、でも、エキゾチツクな外國船が來ることもある。

波もなき二月の灣に
白塗の
外國船が低く浮べり

釧路新聞の白石社長は曾て河野廣中らと國事犯で獄に下つたことなどもある人でその胸中には若々しい革命思想をまだ持つてゐた。啄木とはそんな風で肝膽相照す、といふやうな所があり、彼もこの社長の下でうんと働く氣になつた。

それに五月の總選擧までに釧路新聞を擴張して釧路十勝二國をその勢力下に置く必要がありその擴張の責任を啄木が持つたわけで、これは彼の氣に入りさうな事業に違ひなかつた。

啄木はそこでは編輯長といつた格で、早速に編輯の體裁を改め、自分で毎日一頁以上も書いた。それが讀者から大受けで感謝の手紙が來るといふ次第。啄木も愉快になつた。それから、二十六日の町の愛國婦人會支部の會合の時は無理に乞はれて彼は「芝居をやる氣で」新時代の婦人といふ題で一席辯じた。またその演說筆記を翌日の新聞にのせたり、二月二日の社の新築祝の宴會には準備委員長となつて新案福引二百本許りを工夫したり、さういふことは彼は得意でもあり、面白くもあつたので大いに愉快に働いた。社長にも氣に入られて、時計を買つてくれたり、若し長く居る樣な場合は、「初めは、社の基礎が出來るまで暫く、といふ約束であつた

が、〇社で家を買つてくれる筈であつた。

啄木はこの一月三十日金田一氏宛の手紙に二白としてかう書いた。

……今日以後の日本は、明星がモハヤ時勢に先んずる事が出來なくなつたと思ふが如何、

自然主義反對なんか駄目々々。

こゝで一寸この當時勃興してきた自然主義のことについて記すと、自然主義思潮といふのはロマンチシズムの「過度に奔放な感情と想像に耽つた結果」の、現實の世界を無視する、といふ態度の反抗として興つたものであつた。なれは先づ十九世紀の後半にフランスに於て叫ばれ、ロシア、スカンヂナヴィア地方、ドイツと、殆ど全歐洲にわたり、その自然主義思潮――人生の眞相を描き出すことによつて藝術が成り立つとする思潮――は一つの世界思潮となつた。この思潮ほど國境、人種を無視して世界中へ浸透して行つたものはないのである。で日本には、歐洲におくれること二十年、明治三十八九年頃から喧傳されはじめたのであつた。(長谷川天溪氏「自然主義思潮」。)

そして、さかんにロシア文學が飜譯された。ツルゲーネフのその小說を啄木が讀んだことは彼の歌にもある通りである。

日本の文壇にも、今、自然主義の黎明が來たのである。國木田獨步、田山花袋（彼の編輯した「文章世界」はその總本山の如き觀を呈した。）長谷川二葉亭（四迷）岩野泡鳴（彼のその「半獸主義」）島崎藤村、德田秋聲等がやがて活躍するときがきた。

さういふ文壇的思潮を啄木は北海の「さいはて」の國にゐていちはやく感じ出してゐたのである。自身は浪漫派の權化『明星』にゐながら、しかも、いたつてロマンチックなこの詩人はすでに自然主義の正當さを、眞實にも感じてゐたのである。

彼はつねに時代の流れに敏感だつた。彼は澁滯はしてゐなかつた。前へ、前へ、これが彼の精神だつた。

そして、さういふ結果は、彼はこゝでもまだその自己の「進步性」に惱まねばならぬことゝなり、遂に意を決して、この釧路新聞を辭し、單身、東都文壇のなかへ飛び込んで行くことゝなつたのである。二ケ月ばかり後には。――

釧路での生活

さて、

顔とこゑ
それのみ昔に變らざる友にも會ひき
國の果にて

二月はじめの或る日、夕方になつていざこれから宿へ歸らうと社の玄關をでると、彼は元彌生小學校の代用教員をしてゐたころの同僚遠藤基氏にバツタリ出逢つた。啄木は吃驚した。こんなところで？　意外、意外。彼は下宿へ連れて行つて晩飯を一緒に食べた。

ところが、そこで彼一流のスバシコイ考へが浮んできた。遠藤氏がいま勤めてゐる學校は成績が惡く、醜聞だらけなので、彼は遠藤氏からそのタネを探らうとしたのである。が一寸では仲々聞き出せない。彼はまた一案を考へた。彼はこの間社長から買つて貰つた銀時計を質に置き五圓五十錢を得た。それをもつて啄木は遠藤氏をつれて釧路一番の料理店、〇コ喜望樓へ出かけた。「此料理店は先日の落成式宴會場であつたからよく案內を知つてゐる。主婦などゝも御懇意だ、此處で一寸說明して置くが、釧路の藝者は約四十人、見番は先月新らしく出來たが極めて不振で、皆料理店には內藝者が抱へてある。〇コには大小十一人のペン〳〵猫が居る。呼ん

だのは其十一人のうちでチョイト名の賣れてゐる小靜といふので、三面先生のノートによると年齡二十四本名尾張ミエ、小樽札幌でやつて居る新派俳優朝霜映水の妹だ、萬歲事件と小樽で一度俳優に奢られた時と、當地へ來てから社長に一度引張られて此〇コへ行つたのと、先日の宴會と昨夜と、僕が生れてから藝者なるものに接したのは僅か此五回に過ぎぬ。そして其第五回目には自分が主人公になつて行つたのだから、或は隨分長足の進步かも知れぬ。茲に至つて石川啄木も天下の滑稽を解したものと云はねばなるまい。サテお銚子は六本許り倒れた樣であつた。僕と客と藝者と、共に大分醉つた。無論醉はぬ先に目的の話は充分聞いて了つた。小靜はよく彈きよく歌つた。客もまたよく飮みよく歌つた。僕はよく笑ひよく醉うた。小靜は僕に惚れたといふ。僕は、宴會以來豆ランプと綽名のついた禿頭を叩いて、モ少しでナツタナツタ節を歌ふ所であつた。君、新聞記者は人から惡い顏をせらるゝ事が滅多にないらしい」。

この小靜は「浮世渡るは唯胸一つ、馬は手綱で舟は舵」といふやうな歌を歌つた。

こんな風で啄木も記者生活をしてゐて藝者遊びをするやうになつた。それには、知人のないこの土地で新聞のタネを得やうとする必要から、この喜望樓の女將を利用しようとすることもあつた。「當地にて一番發達して居るのは料理屋に候ふべし、藝者によいものも少なく候へども

〇コ喜望樓と申す料理店の如きは札幌へ出しても恥かしくない位に候」といひ、また「十日程前より、或る必要のため毎夕淺酌低唱の境に出入致し、藝妓三人許りに少し宛惚れられ申候」（二月十七日夜）ともいつてゐる。

啄木はそのころ頭に禿が出來てゐて（彼は去年の十一月から鬼舐頭病に罹つてゐた。）「豆ランプ」と綽名され、もてるので却つて愉快がつてゐた。「『北海道の人間』は益々面白くなり候、藝者小靜は下町式のロマンチツク趣味の女にて、鏡花の小説で逢つた樣な女也。……『若い時は二度ない』と藝妓小靜が歌ひ申候、これ眞理なり、兩君、釧路に逃げて來られては如何候や、來たなら必ず口は見つけてあげる。若い時は二度ないと小靜がうたひ申候」（武治、紅花兩氏宛）

この小靜といふ藝者の外に啄木の好きな小奴といふそのころ十八九の妓があつた。本名は近江ジン子といつて歌なども作つてみる人であつた。啄木はよく彼女のところへ通ひ、彼女と啄木との交情は日ましに深くなつて行つた。

小奴といひし女の
やはらかき

耳朶(みみたぼ)なども忘れがたかり

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の右手(めて)のあたたかさかな

雪の深夜も二人で歩き、また、

さらさらと氷の屑が
波に鳴る
礒の月夜のゆきかへりかな

寒いこと無類の冬の釧路の月の礒邊も、戀なればさまよひもするのであつた。

舞へといへば立ちて舞ひにき

おのづから
悪酒の醉ひにたふるるまでも

啄木もまた倒れるまで悪酒に醉ふ、そのかなしき心に彼女は

死ぬばかり我が醉ふをまちて
いろいろの
かなしきことを囁やきし人

死ぬ程も醉つた啄木にいろいろ話して聞かせた。
或るときは

いかにせしと言へば
あをじろき醉ひざめの

面に强ひて笑みをつくりき

かなしきは
かの白玉のごとくなる腕に殘せし
キスの痕かな

きしきしと寒さに踏めば板軋む
かへりの廊下の
不意のくちづけ

その歡樂のながで、虛無があるときは啄木の心を襲つた。彼は彼女にむかつて「死にたくなつた」と云つてみた。啄木はこの時或はいく分、ロマンチックな氣持でいつたかも知れない。しかし彼女は自分の咽喉の傷あとを見せていつた。「わたしも以前、自殺しようとした事がありました」だが死ぬことはいけないことだ。

死にたくはないかと言へば
これ見よと
咽喉（のんど）の痍を見せし女かな

彼はさういふ女に何か餘計に心ひかれるものがあつたであらう。（吉田孤羊氏によるとこの女の傷は、自殺の痕ではなくて、腫物を切開した痕ださうである。啄木に死なぬかといはれて突嗟にさういつてみたのであらう。）

醉ひてわがうつむく時も
水ほしと眼ひらく時も
呼びし名なりけり

その女の家へ彼は

火をしたふ蟲のごとくに
ともしびの明るき家に
かよひ慣れにき

社から旗亭へ、旗亭から社へと、通ひ慣れたのであつた。
彼が小奴に「火をしたふ蟲の」やうに通ふにつけ、彼を惡しざまにいふ妓もある。

藝事も顏も
かれより優れたる
女あしざまに我を言へりとか

しかし小奴にどんなに通ひつめても、所詮啄木は啄木だつた。眞に彼が思ひわづらふのは彼自身のことである。

その膝に枕しつつも

我がこころ
思ひしはみな我のことなり

かくして彼はこのアヴァンチュールも終末を告げるにつけ、彼の心には、とほく都に興起する自然主義文學に烈々たる啄木本來の意思が燃え上がるのであつた。

わが醉ひに心いためて
うたはざる女ありしが
いかになれるや

かう彼が歌つてゐる小奴も今では釧路一流の旅館の女將となつてゐるといふ。

尙、釧路の憶ひ出の歌、

酒のめば悲しみ一時に湧き來るを

寢て夢みぬを
うれしとはせし

出しぬけの女の笑ひ
身に沁みき
厨に酒の凍る眞夜中

死にしとかこのごろ聞きぬ
戀がたき
才あまりある男なりしか

十年(とせ)まへに作りしといふ漢詩(からうた)を
醉へば唱へき
旅に老いし友

吸ふごとに
鼻がぴたりと凍りつく
寒き空氣を吸ひたくなりぬ

三味線の絃の切れしを
火事のごと騷ぐ子ありき
大雪の夜に

鄉里にゐて
身投げせしことありといふ
女の三味にうたへるゆふべ

葡萄色の
古き手帳にのこりたる

かの會合の時と處かな

よごれたる足袋穿く時の
氣味わるき思ひに似たる
思ひ出もあり

わが室に女泣きしを
小說のなかの事かと
おもひ出づる日

啄木は、前に書いたやうに、文壇にそのとき勃興してきた自然主義をはるかに望見して、いよいよ彼自身もその渦中に身を投ずべく思ひ惱んだ。三月末には、新聞社もその爲に缺勤してしまふ。彼は一時は白石社長の懇ろなる意見に從つて、一二年はこの釧路に居て、妻子も母も呼び、生活の安定を得、自費出版の金位は拵へるのもよからうと思つたこともあつた。

そして二月ごろには、同じ釧路の競爭新聞、北東新聞を倒すため、宮崎郁雨氏から、その運動資金五十圓を彼らしい機敏さで電報爲替で送つて貰つたりして、大活躍をし、美事に「石川啄木」の顔を立てたと喜び、また「多忙なる生活は確に張合がある」と喜んで活動してゐたが、それらも彼の文學的生活に憧がるる心にとつては、何程のことでもなかつたのであらう。矢張り、啄木には新らしい生々した文學の刺戟が欲しかつたのであつた。「自分だつて小說は書ける」その小說もあれ以來書いてゐない。啄木は今こそ小說が書きたくなつた。創作をもつて身を立てたくなつたのである。

あはれかの國のはてにて
酒のみき
かなしみの滓を吸るごとくに

酒をのみ、藝妓と戀を語つた「國のはて」なる釧路にも、彼は七十日居ただけでそこを去るのである。

北海道を去るまで

四月三日、彼は「飄乎として」酒田川丸にのり、釧路を發つ身であつた。宮古港に途中一寸寄り、七日の夜函館に着いた。彼はその流轉の生活に於て函館より小樽、札幌、遠く釧路と北海道をこの十一ヶ月間に一週したわけであつた。……函館の百二十有餘日、札幌の二週間、小樽の百十日、釧路の七旬余――雪の北海道を横斷して釧路の華氏零下三十何度といふ寒さに首ちゞめたるは今年一月二十一日の夜に候ひしが、氷れる海を初めて見たり、誤つて飲み習ひたる酒は醒めても不平は消えず……そして十四日に妻子のゐる小樽へ行つた。そこに待つてゐた小樽の家の生活の貧しさはまた言葉の外であつた。

家へ着いてみると可愛いい京ちやんは久しぶりの彼に恥しがつて近か寄らうとしなかつた。

老母は――二三ヶ月のうちに白髮が目立つてふへた。彼はたやすくはこの白髮を見のがせる氣はしないのである。

母は頼りに思ふ一人子が、釧路を海路出發するとばかりで幾日も消息がなし、そればかりでない、もう食べる米がない。困つて岩見澤の姉娘のところへ乏しい旅費を苦面して出掛けた。

途中乘客はみんな驛辨當をたべてゐるのに、この母だけはその夕めしを求める金もない。

その母は岩見澤に世話になれたら、と思つて行つたのであるが、「一月二月置く事はどうでもよいが、せつ子と別れてゐては、東京へ呼ぶ時後に殘されるから」といふ譯で斷はられ、啄木が小樽へ着く前日、岩見澤から歸つて來たところだ。

啄木は、小樽引上げに要する出費の明細表を書いて不足の金を郁雨氏に送金して貰ふことにした。

「天馬空をゆく底の外交政策を施して、然も要する所左の如し

七・〇〇（三人汽車賃及辨當代）

三・〇〇（母の羽織など。うけて着なければ行けぬと云ふ質）

約三・〇〇（夜具其他運賃）

二・五〇（貸間料「本月分日割」）

一・五〇（炭一俵代。コレハどうしても立つ時拂はねばならぬ由）

現在懷中十二圓と若干なり。誠に濟まぬけれど、五・〇〇又々御願申上候」

啄木は上京するについて必ず成功するとは思つてゐたが、最初から妻子を連れてはゆけない

ので、とりあへず、函館の宮崎郁雨氏に母と妻子三人の世話を頼むこととなつたのである（母堂一人の費用だけは岩見澤から送金する筈。）

啄木は今は郁雨氏に頼るだけである。氏からは早速七圓の金がとゞいた。

啄木の郁雨氏に對する感謝はいふまでもあるまい。彼はいままでとても重々氏には迷惑をかけてゐるのである。彼は「君が無ければ僕は空しく北海の惡生活に埋るべかりし也、來るべき眞面目の文學生活！　後の世に殘るやうな作を出す事が、君に對する唯一の報恩たりと深く覺悟罷在候。御憐察被下度候。アトハ何も云はぬ〳〵。」と郁雨氏への手紙に云ひ、「宮崎君の好意に對して、僕、全く云ふ語が無い。頼む、願くは僕の居ない時君等から充分御禮をいふてくれ玉へ、自分から、口先で禮を云ふのは、何だか却つて此好意を侮辱する樣な氣がする。考へて見ても呉れ給へ、此度の上京は、實際、啄木一生の死活問題だ――君、泣く程切ない心地は、僕が一人居る時、常に、過ぎる位味はうて居る。どうか、人の前、特に親しい君等の前では、啄木を、聲の高い、口を大きく開いて笑ふ、よく女の話をする……と云ふ風の男にして置いてくれ玉へ、頼む。」と、岩崎、吉野兩氏に宛て書いてゐる。

あの、强がりの、氣の傲つた啄木がかういつてゐる。その胸中は察すべきであらう。

二十二日、彼は家族をまとめて函館へ來た。ここに、しばらく母、妻、京ちやんの三人は郁雨氏の好意によつて啄木が生活の資を得るやうになるまで、待ちつつくらすこととなつた。

啄木は三度、心を決して上京の途に上らうとしてゐる。ひと度は年少血氣の希みを抱いて行つた東京、天才詩人として若冠、詩集『あこがれ』を上梓して名聲を得、しかも極度の貧困にあへがねばならなかつた東京、そして或ときは「自分の性質に會はない」都會だとした東京、そこへ彼は、この度こそは必ず成功しなければならないといふ決心を持つて、文學的創作生活をはじむべく行かうとしてゐる。

北海道の流轉の一年！　顧れば彼には感慨の無量なものがあつた。彼は上京する數日前大島流人に書を寄せてこの上京を決心するまでの胸中を訴へてゐる。

「……血痕はだかなる一年間の記錄を見て、今、多少の感慨禁ぜざるを覺え候。……何と申してよかるべきか、心一つを千々の思ひに碎きて、然も詮ずる所、私は、身も、而して悲しいかな心も、遂に天が下の一浮浪漢に御座候。ヤドカリと申す虫けらにも劣ればや、三界に住むべき家もなく、朝より夜まで、又、朝より夜まで、身邊常に風あり雨あり、穩かなる事とては無之候。現時の生活に適合して生在へむ事は、死よりも何よりも、遙かに逈かに至難の事の如く見え

候。敗れたるを勝ちたりとする。異りたる心を持ち候ふ者は、敗れたるを敗れたりとする人よりも、苦しみの多き事十倍百倍なるを具さに知り候ひぬ。私が自ら勝ち誇りて、獨り超として心天外にゆくの時は、乃ち既に創痍全身に洽ねく、顔と云はず手と云はず足と云はず、血糊腥く塗らざるなき時に御座候。一切を無意義なりとする怖るべき思想、時として雷光の如く私の心を過ぎる事あり。疲れ果てたる心は、かくて一瞬時の安逸を貪らむとす。此境には、責任もある事なし、義務もある事なし、又向上もなく、努力もなし。既にして絶對の「孤獨」てふ云ふべからざる苦痛相接して到る。此時は、全身の血忽ち氷り、惡寒骨に徹するを覺え候。

事に臨んで自ら膽の小ならざるを誇り候私は（インキの斑點にて文字不明）歩を斷頭臺上に移す事あり共、笑を含んで死に就く位（文字不明）は出來うべく候。然し乍ら此一切の虚飾落したる絶對の「孤獨」の前には、一切の空しき如く私自身も亦唯空しく候。

既にして此暗灰色の霧の中に幽かに物の影の動くを見る。この影は、幼時の追憶に似たる、仄かなる「ロマンチツクの影」に候。かくて一葉もつけざる「孤獨」の大樹の枝々に、いろいろなる空想の芽を吹き候。空想は空想を生みて盡くる所なし。然して此空想が一度「慾望」と手を握るに至つて、捕捉し難き空想が漸次實際に近き來る。遂には自己の前途猶多少の希望あ

を言ひ候。

此徑路は私が幾十回となく心中に繰返したる所。

然し乍ら、一切の理想といひ希望といふもの、畢竟不確實極まるイリユージョン——極言すれば人生の虛僞に過ぎざらむとするを覺知いたし居候ふては、矢張平然として路行く人に伍して前に許り進む事能はず、——所詮私は「生活」に適合する能はざる人間にして、人生の落伍者也、身も心も宇宙の浮浪漢なりといふ感じが、一種の暴風的歡喜を伴ひて私の心を荒らし申候。

此暴風的歡喜は、畢竟するに自暴自棄の聲に御座候。一種の狂的發作に御座候。——自暴自棄に疲れたる心は、やがて又「一切虛無」の怖ろしき思想に一瞬の安逸を貪らんとし、やがて又、再び孤獨の寂寞に淚もなく泣かむとするにて候。

之を橫に見たる時、「人生」は際涯なき平面なり。前後左右、唯これ波瀾重疊なる未解決の血の海なり、未解決なり、故に其唯一の結論は「虛無」。

之を縦に見たる時、「人生」は初めあり、而して終りあり……個人全解放の時代は、かくて私の最後の理想の時代に候ひき。

縦はどこまでも縦にして、横はどこまでも横なり。私の心中には此二つの大いなる矛盾あり。遂に相一致せず。既に野心児なるが故に。私は常に革命を欲す。「現狀打破」は私の今迄殆んど盲目的に常に企て來れる所に御座候。

釧路に於ける七十日間の生活は、殆んど生死の大權を提げて私の若き心に威迫を試み候。大兄よ、私釧路に入りて、生れて初めて酒といふもの飲み習ひ候ひぬ。時としては連夜旗亭に沈醉して、また天日の明きを見ず。醉うて歸りて寢ね、覺めて社に行き、默々筆を走らして編輯を〆切れば、足また旗亭に向ふ。吉井君の所謂「おけ〳〵と頭を亂すもろ〳〵のみだらの曲をおもしろと聞く」てふ悲しき事もまた私の自ら經驗したる所。時としては、醉快く發して、白眼世を視、豪語四隣を空しうし、盃を啣んで快を叫び、絃歌を聞いて天上の樂としたる事なきに非ず。然し乍ら、噫然し乍ら、いかに醉ひ候ふとも、我を忘るゝ事なきこそ痛ましく候ひけれ、時としては、飲めども〳〵醉はざる事あり、眼華を盃底に落して、腕を拱き、悵惕として

獨り心臟の鼓動を聞く。云ふべからざる孤獨の感、酒と共に苦く候ひき。銚子を控へて我をして亂醉するを許さゞりし一妓の情に、辛くも慰められたる事あり。又夢なき眠りを唯一つの望みとしたる夜あり。然して遂に、「感情の滿足なき生活」には到底堪へ得べからざる事を、極度まで經驗いたし候ひぬ。

人は矢張昔から情の動物に候ひけり。一切が無くとも感情の滿足さへあれば、心荒まず。これなき生活は、假令他の一切を具備するとも、小生の如きにはとても駄目に候。

人は感情の滿足を、若き女に求め、家庭に求め、趣味に求めむとす。然れども小生は遂に天が下の浮浪漢なり。之を若き女に求めむには我が心老いたり。之を家庭に求めむには我が性あまりに我儘に過ぐ。而して之を趣味に求めむには、我が趣味あまりに自發的なり。所詮は之を自己自らに求むる外に途なきを悟り候ひぬ。

「創作的生活」(專念創作に從ふ生活)はかくて現在の私の最大なる希望、唯一の希望に候ひき。」

いよいよ最後の(彼は再び故鄉の土を踏むこともなかつた。)東京行を、「創作的生活」に彼の

「感情の滿足」と、生活の資とを充たすために、決行することとなつた。

最後の東京時代

上　京

浪淘沙
ながくも聲をふるはせて
うたふがごとき旅なりしかな

おもへば、なつかしくもかなしき北海の旅の一年だつた。

その中で啄木は酒も覺えた。女も――そのうちで忘れられない二人、釧路の小奴と、も一人は函館の「聲の女」橘智惠子と。この智惠子さんとは東京時代まで文通がつゞく。離れてゐればゐるほど、懷しくなる。さういふやさしさのある美しい「聲の人」であつた。

四月二十六日午前七時、啄木はこの北海道をあとに、出京の途についた。

こんどは船で横濱へ行くのである。啄木の乘つた三河丸は荻の濱港に五時間ほど碇泊した。そこには紅梅がひらき、桃が咲き、櫻も綻ぶ、北國の春の賑かな時であつた。船から見える陸の崖の下には椿の花が赤い。鶯がしきりに鳴いてゐるのも聞える。啄木にとつて「今年の春は此の五時間だ。短い春ではないか。」

二十七日午後六時船は横濱についた。その夜、彼は長野屋といふ宿屋に泊つた。北海道から來てみれば、横濱の四月末はもう初夏だ。彼は綿入を着てゐて汗をかいた。……

その翌日、小島烏水氏と洋食を食べ、午後三時新橋ステーションに着く。初夏の雨が都の青葉にそゝいでゐた。啄木は人力車をかつて、豫定の千駄ヶ谷の新詩社へとおもむいた。

そこで逢ふ人たちは皆啄木の上京を喜んでくれ、小說轉向をも歡迎してくれた。

そのころはすでに『明星』の全盛もすぎてゐた。晶子女史も小說を書くといつてゐた。『明星』はこの年の十一月第百號で遂に廢刊されることになつたほどで、すでに新詩社の勢力は衰へかゝつてゐた。ある人は「新詩社との關係は關係として置いて、別に一家獨立の立場を立てなくては損だ」と啄木に忠告してくれる。啄木もまた、文學上の意見もすでに違ふので、たゞ與謝野氏に對する情誼に酬ゆるといふだけで、作家としては獨自の立場でやつてゆくつもりで

あつた。新詩社内の人とのみなつてゐては原稿賣込みにさへ都合悪いやうに時勢は動いてゐたのである。

赤心館時代の啄木

啄木は二十九日、本郷臺の片ほとり、菊坂町赤心館に金田一京助氏を訪ねていつた。ステツキをついて着のみ着のまゝの彼は、そこでそのまゝ、金田一氏と同室に住むことになつた。一に金田一氏の好意によるのであつた。「荷物一つないから、知らぬ下宿では置いてくれまい」とのことで。

そしてこの日から彼は、金田一氏の並々ならぬ好意のもとに、彼の「創作的生活」をはじめたのである。

觀潮樓歌會

丁度、啄木が北海道から上京してくる少し前から、即ち四十年三月から、森鷗外氏の主宰でその居、觀潮樓に毎月、所謂「觀潮樓歌會」といふのが開かれてゐた。それは當時、「アララギ

と明星とが參商の如くに相隔たつてゐるのを見て、私は二つのものを接近せしめようと思ふ」といふ鷗外博士の趣旨から行はれたもので、集つた人々は、上田敏博士、佐々木信綱博士、明星の與謝野寛、平野萬里、北原白秋、アララギでは伊藤佐千夫、長塚節、平福百穗、齋藤茂吉といふやうな人達であつた。

その觀潮樓歌會の五月の集りが、二日午後四時からあつた。

啄木は案内狀を貰ひ、出掛けて行つた。そこで彼は、吉井勇、北原白秋にも逢つた。

彼は東京へ來てから、また〳〵その文學的自負が、まわりの刺戟と共にだん〳〵復活してくるのを覺えた。彼は東京の人が思つたより進歩してゐないのを意外とした。

「どうも東京の人は其日暮しの議論をして可かん。或者は自然主義萬能を說く。或者は自然主義の反動が明日にも起る樣な事をいふ。明後日あたり新ロマンチシズムの代表的作物が出版される樣な事を語る。こゝが東京の面白い所で、そして東京人の思つた程進歩しえなかつた點だ。そこへ行くと僕はどうも豪い樣な氣がする。僕がこの十日間に得た觀察を綜合して見ると、大略次の如き結論に達する。曰く。

自然主義は勝つた。確かに勝つた。然し今其反動として多少ロマンチックな作にあこがれて

居る人は決して少くない。けれども此反動は自然主義の根本に對する反動では無くて（僕の見る所では）唯自然主義が餘りに平凡事のみを尊重する傾向に對する反動だ。今は恰度自然主義が第二期に移る所だ。乃ち破壞時代が過ぎて、これから自然主義を生んだ時代の新運動が、建設的の時代に入る。僕は實際よい時に出て來たよ。そして、第二期の自然主義の時代の半分以上過ぎた時、初めてホントウの新しいロマンチシズムが胚胎するに違ひない。その二つが握手して、玆に初めて、眞の深い大きい意味に於ける象徵藝術が出來あがる。」これは五月七日の手紙である。

創作生活と貧困

さういふ意氣をもつて彼は早速小說『菊池君』を書きはじめた。

金田一氏と同室にゐてはお互に話はかりして仕方がないといふので、彼は、金田一氏から椅子とテーブルを借りて二階の一間に陣取つた。

その椅子の上で彼はこの小說を書きはじめたが、なか〳〵書き進まなかつた。

それは釧路の記者生活、例の小奴のことを書いたのであるが、（啄木はそれについて、人と人とが近づきになる經路を最も自然に書きたい、といつてゐる。）一日かゝつてやつと三枚位しか筆が運ばなかつた。それでも彼は、「才にまかせてズン〳〵書くのなら僕はチットモ困らぬが、努めて簡潔な文を書きたいと心がけてゐる。それが（逬る才を殺す事が）仲々辛いのだ。漱石の虞美人草のゆき方ならアレ位のものを二週間で書けるけれど、川の此岸から彼の岸まで、スッカリ一直線に流を横ぎる事は、餘程疲れる事だ、七十枚になるかと思つてる。」と意氣込み、「うまくゆくと、一枚五十錢にしても三十五圓になる」と得意だつた。

『菊池君』を書いてゐるうちにも彼は金といつては「たつた二十四錢しか持つて」居ないときもあつた。小說『菊池君』が脫稿したら、啄木は今はそれだけが希望であつた。が、それも餘り長くなりさうで中途でイヤになり、『病院の窓』といふ小說を次に書きはじめた。三十日には『母』その次の三十一日からは『天鵞絨』と彼は矢繼早に書き出した。

『病院の窓』といふのは、釧路新聞にゐた佐藤といふ催眠術の先生をモデルにして、肉靈の爭ひ胸中に絕えず、下り坂一方の生活のために廉恥心がなくなり、朝から晩まで不安でゐる人間を描いたものであつた。十八日から二十六日の午後三時半までかゝつてその九十一枚の原稿を

脱稿した。

『病院の窓』を書いてゐる二十四日に、彼は函館にゐる京子ちやんがヂフテリヤで重態だといふ知らせを郁雨氏から受けとつた。

彼は驚いた。どうすることも出來ない。彼はたゞ「胸をさすつて目を瞑つた。何かに祈つて見たい様な氣」になつた。「京子は決して死なぬ」と彼は信じた。――胸の底の底の方で誰か泣いてゐる樣だが、何で泣いてるのか俺にもわからない。君に感謝する。と彼は郁雨氏に書き送つてゐる。

二百里も遠くはなれて、自分の子が今瀕死の病床にゐるとおもふと彼は居ても立つてもゐられない。看護する母の顏、妻の顏が見える。しかし京ちやんは丸々と肥つて可愛い顏だけしか彼には思ふことが出來ない。あの京子が病み細つて死ぬなんて!

彼は遠く離れて獨り思ひ苦しむより、寧ろ側にゐて、その苦しむ病兒をみてゐる方がたゞましな氣さへした。

さういふ中に『病院の窓』を脱稿したのだ。彼はその時「滿足の情よりも疲勞の方が重」かつた。何ともいへない感じになつて妻に、手紙を書いたり、涙ぐみながら歩いたりした。

彼は不眠症となり、毎日二食主義を勵行するやうになつた。一室にとぢ籠つて古日記などを繙いてみたりした。

京ちやんの病氣はやがて癒つた。

しかし、中央公論へ出さうとした『病院の窓』も返送されて、稿料は入らず、『天鵞絨』を懷にして鷗外博士を訪ねては留守で、原稿だけは賴んで置いてきたが、彼の心もやりどころがなかつた。人通り少い高等學校側の砂置場の木柵に寄りかゝつて、片割月を眺めながら苦い淚を彼はしぼつた――

啄木は書くべき原稿紙もなくなつた。ぼんやり坐つてゐるとそれが壓迫となつて頭が馬鹿になるやうに思はれた。

そんな日、彼は六日の夕方二週間振りで千駄ヶ谷に與謝野夫妻を訪ねた。そこには馬場孤蝶生田長江氏がゐた。啄木は長江氏に『母』の原稿賣込みを賴んだ。

七日の午後は金田一氏と上野の太平洋畫會をみに行つた。歸途、救世軍の大道演說の人群のなかから彼を呼びとめた人がある。吉井勇である。その夜十時半頃まで啄木の室で語り合つた。

啄木は、勇の人柄が好きになつた。

小說に專心しながら、それでも彼は五月中に『泣くよりも』『あによめ』『殺意』『揺疏』等の詩を書いて明星六月號に發表した。

彼はこのころ『金星會』といふのを主宰してゐた。會員の歌を集めて彼が添削し選をした。歌二十首に三十錢づゝ添へることにして彼はそれでいくらかの、切手代位は得られたわけであつた。

啄木の知人に賴んだ小說原稿はなか〳〵賣れない。生活費は自然、金田一氏に厄介かけるわけであつた氏はそのころ大學を卒業して何處かの先生をして三十五圓かの月給を貰つてゐた。

啄木は下宿代も拂へない。彼はあせつた。彼は六月十四日の郁雨氏の手紙に次のやうにいつてゐる。

「君少し安心してくれ給へ。

『病院の窓』を春陽堂で買取つてくれた。(森先生の手から)八月の新小說に出ると思ふ。報酬は其時でなくてはとれぬが、然し一枚五十錢位はくれさう故、五、六、七の三ヶ月分の下宿料はそれで間に合ふ事になる、『天鵞絨』と新たに脫稿した『二筋の血』を一昨夜長谷川天溪君へ行つて賴んで來た。

これも今月か來月には物になる。
先月分の下宿料、昨日全部拂つた。安心してくれ給へ。(病院の窓アテコミの融通で)そして原稿紙三十帖許り買つて來た。一圓六十五錢で勸工場から白地の單衣を買つて來た。今夜から大野心(?)を起して三百枚位の長篇を起稿する。月末までに脱稿する見込。これが書ければ、(そして物になれば、)來月の末は家族を呼ぶによいかと思ふ。然しこれはまだ不正確な事だ。兎も角少し景氣づいたから安心してくれ給へ。家族へも知らしてくれ給へ。」
だがこの當てにし、賴りにしてゐた稿料も貰へないでしまつたらしい。そして金田一氏と二人の「生活費」に、金田一氏の月給だけで不足すると、啄木がいひ出して金田一氏の冬服を夏中遊ばしておくのはもつたいない、といつて)質に入れた。
さういふ困つてゐる啄木の所へ一人の女がやつて來るやうになつた。
この女性は以前あの新詩社の伊勢平樓でをやつた演劇會、あの時女の役をした京橋の踊の師匠の娘だつた。
あの時以來、時折文通をしてゐたのであつたが、この啄木の上京を知つてしげしげと訪ねてくるやうになつた。

はじめは啄木も殺風景な下宿住ゐに、彼女の來訪を喜ばないでもなかつたが、やがてあんまりなその女のしつこさに負けてしまつた。彼はそしてつひに最後の一線を越えてしまつたのである。彼はその女の愛情にそこまで引きづられて行つたことが、憤ろしくなり、逢ふのも嫌になつた。が、その女はコテ〳〵と化粧をしてやつてくる。遂に下宿の女將さんを賴んで居留守を使つたり、それでも室に闖入されると、金田一氏を寄んで來てその座に居て貰つたりした。

啄木はその女が淺間しくもなり、うるさくもなつてたうとうきつぱりと話をつけてしまつたのであつた。

しかし、この女性の啄木訪問は、謹直な下宿の女將さんに喜ばれる筈はなかつた。何もしないで、ブラ〳〵し下宿代も拂はず、しかも變な女が訪ねてくる、啄木はいよ〳〵冷遇されざるを得なかつた。

『一握の砂』時代

小說を書いて賣れず、啄木の氣持はあせり生活は苦しい。悶々として彼は夜も机に向つてゐた。彼はいつか金が入つたら思ふ存分飲んで、グデン〳〵になつて街を步いてみたいと思つた。

そのうち小說が書けなくなつた。頭がフラ〲するやうになつた。立つてみたり座つてみたり落付かなかつた。

不思議に歌がそのとき出來た。馬鹿に出來た。滾々として一夜に數十首、或は百數十首も出來た。

六月二十三日に初めて作つたのを彼は明星に寄せた。それは七月號に出た『石破集』と題する百十四首だつた。

そのときに見ゆることなき大いなる手ありて我に力添へにき

我つねに思ふ世界の開發の第一日のあけぼのの空

あな苦しむしろ死なむと我にいふ三人のいづれ先に死ぬらむ

眉をする夜の巷の少女等の千人のなかに入りて歸らじ

西方の山のあなたに億兆の入日埋めし墓あるを想ふ

鳥飛ばず日は中天にとどまりて既に七日人は生れず

千人の少女を入れて蔵の扉に我はひねもす青き壁塗る

津軽の海その南北と都とに別れて泣ける父と母と子

飄然と国を出でては飄然と帰りたること既に五度

われいまだわが泣く顔をわが母に見せしことなし故にかなしき

何ごとも汝にえ言はず妻よただ炊ぎてあれな三合の米

わが父は六十にして家を出で師僧の許に聴聞ぞする

君よきみわれ善く知れり一錢の値（かち）と糧（かて）と涙との味

この明星七月號に載つた彼の歌は所謂明星風な空想歌であつた。が、この終りの方に右のやうな格調は未だ明星風ながら、生活の上に取材したものも見えてゐる。まだロマンチックな「美」の上に於てゞはあるが。（彼はまたこの七月號で懸募歌「風」の選をした。）

彼はつゞいて出來た幾百首の歌を、八、九、十一月の明星に載せた。

またこの四十一年のノートのなかには、彼の京子の病氣を歌つた次のやうな歌もある。

神よ神この日ばかりはただ爾（なれ）に頼むほかなし吾兒は病す

いとおもく病みて痩せぬと文よめど夢にみる兒は笑みて痩せざり

病める兒をこの一心に癒さむといさましくいふ君にまた泣く

おもく病むその兒の母よ君もまた生れざりけむ世をば想ふむや

歌集『一握の砂』はこの時代以後の歌を集めたもので、それに收められた「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」『頰に傳ふ涙のごはず一握の砂を示しゝ人を忘れず」たはむれに母を背負ひてそのあまり輕きに泣きて三歩あゆまず」等の歌も、皆この時作られたものであつた。

彼は必竟詩人であつた。小説を書いて成らず、歌を作り、詩を書いた。（明星七月號には散文詩『曠野』『白い鳥、血の海』『火星の芝居』『二人連』『祖父』を載せてゐる。）彼は歌や詩を否定するやうな事をいひながら、書かないではゐられなかつた。

このころ彼は「すきあるき」と名づけて散歩を好んでした。それは吉井勇や金田一氏などゝ一緒に程近い大學前の大通りを歩くのであつた。そこには毎晩夜店が出た。人が澤山出た。そこへ行つて彼はたゞすきにブラ／＼歩くのである。時には素的な白地のゆかたを着た、團扇をもつた別嬪さんをその人群の中に見つけて喜んだ。そしては涼しい硝子屋の前などに立ち止まつた。そんなことが彼の氣分を生々とさせるのであつた。

すゞしげに飾り立てたる

硝子屋の前にながめし
夏の夜の月

七月四日、彼は觀潮樓歌會へ行つた。五日には正宗白鳥氏を訪問し、その「頗るブツキラ棒な「虛禮といふものを一切用ひない」人柄に感心した。
このころは啄木は朝十二時までねてゐて女中に起されるのが常だつた。――もうお晝でございます――と。

目さまして猶起き出でぬ兒の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

そのかなしい癖はこゝでも拔けない。
夕方は「すきあるき」をして夜は二時頃まで『刑余の叔父』といふ小說を書く。一時にねて

ゴルキイを讀んで感心する。そしてまた十二時に起きる。とそこへ啄木のこのごろの歌の女弟子、築紫の菅原芳子から優しい字で長い〳〵手紙が着く。この人もこのごろ歌がうまくなつてきた……

さういふ彼の生活も內面は行きづまつてきてゐた。貧困はます〳〵ひどくなるばかりだ。そのころの彼の手紙――

――時として死ぬ事を考へる。平氣で、何の恐怖なく考へる。……一週間前に恰度一週間前に、僕は辭世の歌自殺の方法まで考へた。然し矢張り死なゝかつた。あんな時、誰か一緒に死なうといふ見も知らぬ人――たとへば築紫の芳子の樣な――が來たら、屹度死んだに違ひない。親！　子！　ああ、俺一人なら死ぬに苦はないが！　と考へる。然し實際は俺一人でないからこそ死にたくもなるのかも知れぬ。痛ましい譯だ。かなしい譯だ。

兎に角人生は苦痛だ。神など無論ない。あるのは永劫不變の性格の根のみだ。それが何よりの苦しみだ。そして君。人間も遂に動物だ。上等下等の階級はあるが、矢張動物だよ。無いと信ずる「神」といふものに、祈つてみたい樣な心地さへする。泣かず笑はざる「眞面目」の苦

痛！……

……君、僕の現在かく生きてゐる唯一の理由――自分でこしらへた理由は、人間はその一生のうちに、最も大膽に、最も露骨に、最も深く、最も廣く、人生一切の悲喜哀樂のすべてを味つて、――理智では知る事の出來ぬ人生の眞の面目を實地に味ひつくして、そして、死ぬ人が「眞の人間」――英雄（ヒーロー）だ、――少くとも僕の理智だといふ、苦しい〳〵覺悟一つ。……

……處女の戀は皆一樣で、平凡だ。僕は「まだみぬ戀」「逢はざる戀」「ズット年長者との戀」「ズット年少者との戀」「人妻との戀」「無類の淫亂女との戀」（自分の外にも同時に澤山男を持つてる）といふ樣な妙な戀を、時として欲する事がある。……

……然し君、短歌は君も早晩捨てねばなるまい。そして長詩も捨てなければなるまい。日本の新時代の文學は、矢張小說とドラマだ。此間蒲原君に逢つたが、同君でさへ詩を見くびつてゐる。泣菫は勿論死んだ。誰一人時に極力謳歌してる人はない。與謝野氏の樣な頭の古くなつた人だけだ。詩は矢張或る意味に於て遊戲に近い。……（岩崎白鯨氏宛）

……一昨十六日は大雨。千駄ヶ谷の歌會であつた。……八時頃に歸つた。机の上に君の葉書

とせつ子の葉書があつた。

夕方まで寢たが昨夜はしんみりした心地であつた。今もそれがつゞいてゐる。

此頃僕の歌に女といふものが近づかぬ、酒も呑もうとも思はぬ。あるのは生命に倦んだ心と悲哀と死にたいといふ希望だけだ。

どうも死にたくて困る。すべてがつまらぬ。歌なんぞは煙草と同じ效能しかない。何かしらかう僕の心の底の底まで誰かに言つて見たい樣な朝があるが、さてそれを聞く人もありさうにもなし、またそれを云ひ現はすべき言葉もない。死にたいと思ふ考が、執念く起る。然し死ぬ方法に着手しようともせぬ。自分でそれを怪しんでゐる。

母の顏が目に浮ぶと、たゞもう淚が流れる實際淚が流れるよ。昨夜は妻が戀しくて戀しくてたまらなかつた。（七月十八日。吉野白村氏宛）

ひと塊の土に涎（よだれ）し
泣く母の肖顏（にがほ）つくりぬ
かなしくもあるか

燈影なき室に我あり
父と母
壁のなかより杖つきて出づ

啄木は全く收入の道のない生活のなかに喘ぎ、遂に死を思つた。思ひ悩むひとりの室で彼は父を思ひ母を思ひ、壁から拔け出して來る父母の幻影に泣かされた。

飄然と家を出でては
飄然と歸りし癖よ
友はわらへど

彼は思ひあぐねて歩きまわる。次の歌は彼が「死」を思ひつめてゐたころのである。

森の奥より銃聲聞ゆ

あれはあれは
自ら死ぬる音のよろしさ

「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答

ふと深き怖れを覺え
ぢつとして
やがて靜かに臍をまさぐる

「一握の砂」の中「我を愛する歌」はさういふ彼の煩悶懊惱の日々の遣瀬ない氣持を歌つたものである。そこにあるものはいらいらした、救はれがたき吐息であり感情である。そのどの一首にも滲みでてゐる彼の痛ましき精神の姿を汲むことが出來ないものはない。しかしそれらは

またわれ〱にもそつと來て忍んでゐる眞實でもある。
次に『一握の砂』の歌から當時の彼の苦惱を知らう。

何處やらむかすかに蟲のなくごとき
こころ細さを
今日もおぼゆる

いと暗き
穴に心を吸はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ

働きたい！　その仕事のないさびしさ。それは

　こみ合へる電車の隅に
　ちぢこまる
　ゆふべゆふべの我のいとしさ

電車に乗るにも隅の方に縮かまつてゐねばならない。
たまには、

　まれにある
　この平なる心には
　時計の鳴るもおもしろく聽く

こころのしづかな時もあつたが、それもすぐ、

怒る時
かならずひとつ鉢を割り
九百九十九割りて死なまし

ものを打ち壞したいやうな氣持となる。

高山のいただきに登り
なにがなしに帽子をふりて
下り來しかな

何處やらに澤山の人があらそひて
鬮(くじ)引くごとし
われも引きたし

何となく汽車に乘りたく思ひしのみ

汽車を下りしに
ゆくところなし

何がなしに
息きれるまで驅け出してみたくなりたり
草原などを

ぢつとしてゐられない、何かいらいらとものに追はれるやうな焦燥。
彼はふら〱と街に出る。その自分の姿は我ながらみすぼらしい。

鏡屋の前に來て
ふと驚きぬ
見すぼらしくも歩むものかも

それでも外へ出れば溫かい日光がある。

とかくして家を出づれば
日光のあたたかさあり
息ふかく吸ふ

空家に入り
煙草のみたることありき
あはれただ一人居たきばかりに

淺草の夜のにぎはひに
まぎれ入り
まぎれ出で來しさびしき心

淺草の凌雲閣のいただきに

腕組みし日の
長き日記かな

飄然と人群のなかをさすらひ歩くこゝろに淺草の灯のいろのよそ〳〵しさ。
彼は悄然と家へ歸る。

こつこつと空地に石をきざむ音
耳につき來ぬ
家に入るまで

何がなしに
さびしくなれば出てあるく男となりて
三月にもなれり

○

鏡どり
能ふかぎりのさまざまの顔をしてみぬ
泣き飽きし時

なみだなみだ
不思議なるかな
それをもて洗へば心戯けたくなれり

泣いたあとの、あの虚しい、しかし安らかな感じ。

手も足も
室いつぱいに投げ出して
やがて静かに起きかへるかな

百年(もゝとせ)の長き眠りの覺めしごと

呿呻してまし
思ふことなしに

遠くより笛の音きこゆ
うなだれてある故やらむ
なみだ流るる

路傍に犬ながながと呿呻しぬ
われも眞似しぬ
うらやましさに

目の前の菓子皿などを
かりかりと嚙みてみたくなりぬ
もどかしきかな

このもどかしさ。それはまたつきつめて死を思ふこころとなつてゆく。

死ぬことを
持藥をのむがごとくにも我はおもへり
心いためば

死ね死ねと己を怒り
もだしたる
心の底の暗きむなしさ

尋常のおどけならむや
ナイフ持ち死ぬまねをする
その顏その顏

死を思つて死にかねた啄木、「一點のゆるみも隙もない煩悶苦痛」の「暴風」を感じて遂に彼

は生きた。――「兎に角僕は遂に死にかねた。猛烈に戰つて遂に生存慾に敗けた。僕をこの怖ろしき思想から脫せしめむと全力を盡してくれた金田一君に謝する」と彼は宮崎郁雨氏に書いた。

彼は死ぬことを止めた。が、そのかはり七月も宿料を拂へなくて、二十七日には下宿屋から追放される仕末になつてしまつた。彼は半日の間九十三度の炎天下を、見知らぬ町をさまよつた。

この時も金田一氏の盡力によつて、しかしまたその下宿へかへることが出來たけれど。

彼は八月の暑熱を千葉の三里塚へ避けてそこで「盲動」的に書かうとも思つた。そこなら一日二十錢位で生活出來るからである。下宿の半額で一月過せるわけであつた。だが金がないので、啄木の言葉によれば「書肆が無情だから」それも駄目だつた。

彼は暑い八月をその下宿で悶々の中に送り、でも身體は以前よりも丈夫であつた。書く原稿もなか〳〵賣れさうもないので、この二三ヶ月の間に萬一、東京での生活が見込がたゝぬならばやつぱり田舍へでも引つ込んで記者でもするしかないと思つた。

彼は街を步いてゐて電車に挽かれさうになり、運轉手に「馬鹿」と怒鳴られてはじめてはつ

とした。それほど氣持は悶へてゐた。

たうとう下宿料のことから金田一氏と一緒に、といふより氏に連れられて、この赤心館を出ることゝなつた。

蓋平館（「秋風のこころよさに」時代）

九月五日、啄木は例の觀潮樓歌會へ行つて夜遲く歸つてきた。それでその翌日も午ごろまで寢てゐた。

すると彼は金田一氏に起されたのであつた。「今から引越しだ。」と氏にいはれて啄木はその不意に驚き「一緒に連れてつて」といつた。

金田一氏はその前日、自分の月給と、愛藏の文學書を古本屋に賣つた金とで、啄木と二人分の宿料を濟ませ、今朝も一人で新らしい下宿を探しに出かけ、森川町の坂の上の立派な三階立の家に、格構な部屋を見つけて來たのである。

その下宿――蓋平館別莊、――の三階、三疊半が啄木の部屋であつた。

その高臺の、三階の室からは窓をあけると都會の屋根また屋根の向うにとほく富士山が見え

た。啄木はうれしくなつてしまつた。
夜は西片町の谷に霧が立つて、幾萬の蟲のこゑがした。
それにこの蓋平館の主人は下宿料についても應揚だつた。いづれ大晦日には頂けるんでせう、と金田一氏があまりきつく催促しないやうにと話したときにいつた。その言葉はまた啄木を喜ばせた。
息づまるやうな前の下宿住ゐから、いまこの家造りの立派な、氣持よい主人の、三階の富士に面した部屋に來て、彼は何もかも新らしい心持となることが出來た。
彼はこんどこそいゝ小說が書けるやうな氣がした。
それに夜毎の、下の谷からの秋の蟲のこゑはそゞろに彼をしてふるさとの秋を偲ばせた。彼はいつになくしみ〴〵とし、思郷の感懷に浸ることが出來た。

ふるさとの空遠みかも
高き家にひとりのぼりて
愁ひて下る

この歌にはじまる『一握の砂』のうち『秋風のこゝろよさに』はすべて、この私の彼のこゝろの記念だつた。

皎として玉をあざむく小人も
私來といふに
物を思へり

かなしきは
私風ぞかし
稀にのみ湧きし涙の繁に流るる

ものなべてうらはかなげに
暮れゆきぬ
とりあつめたる悲しみの日は

水潦(みづたまり)
暮れゆく空とくれたゐの紐(ひも)を浮べぬ
秋雨の後

秋立つは水にかも似る
洗はれて
思ひことごと新しくなる

新涼の秋、彼の心は、赤心館時代のあのいら〱しさから放たれて、いまは自然の風の行方
雨のおとに耳を傾けうるやうになつた。

秋の聲まづいち早く耳に入る
かかる性(さが)持つ
かなしむべかり

さらさらと雨落ち來り
庭の面の濡れゆくを見て
涙わすれぬ

はたはたと黍の葉鳴れる
ふるさとの軒場なつかし
秋風吹けば

秋の空寥廓として影もなし
あまりにさびし
烏など飛べ

雨後の月
ほどよく濡れし屋根瓦の

そのところどころ光るかなしさ

秋風に、蟲の音に彼の心はとほく故郷の岩手山に、育つた澁民の禪房に思ひいたる。

岩手山
秋はふもとの三方の
野に滿つる虫を何と聽くらむ

神無月
岩手の山の
初雪の眉にせまりし朝を思ひぬ

ふるさとの寺の御廊に
踏みにける

小櫛の蝶を夢にみしかな

一たびふるさとを思ふにつけ、そこの誰彼のなつかしさが胸をつく。

摩れあへる肩のひまより
はつかにも見きといふさへ
日記(にき)に殘れり

その昔搖籃(ゆりかご)に寢て
あまたたび夢みし人か
切になつかし

その彼の故郷への思は、

痕のごと

思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

に初まる『煙』一、二の百首に餘る思郷の短歌となつた。
その「一」で彼は彼の盛岡中學生時代のなつかしき思出を歌つた。その頃はいまの金田一氏を啄木は

見よげなる年賀の文を書く人と
おもひ過ぎにき
三年ばかりは

とさういふ風に思つてゐた。それが今はその人の深い友情のなかで生活することゝなつてゐるのである。そしてこの二人は蓋平館の一室で溢れるやうな虫のこゑをきゝながら故郷のことゞもを亢奮して語るのである。

興來れば
友なみた垂れ手を揮りて
醉漢のごとくなりて語りき

二人がどんなに思鄕の思ひに打ち興じたか、次の金田一氏の文章に手にとるやうに描かれてゐる。

「二人はよく故鄕の秋色を偲んで涙を流した。『桔梗女郎花に埋れる岩手山の裾野!』『ウンそして山肌が油の色を湛へて見るかぎり澄んだ秋の空へ峠つあの岩手山!』『ウンそして、どんと秋草を敷いてそれを仰いでゐると、あの耳いつぱいに入る虫の音!』『ウンそれよりも……』『ウンそれよりも……』と云つて、互に向を遮つて、手を振りながら一語一語、それ以上の私色を思ひ出して云ひ合ふと、互に感動してしまつて、ぼろ〳〵涙が流れて、物もいへなくなり、手が涙だらけになつてゐた。『興來れば友涙垂れ手を振りて、醉ひどれの如くなりて語りき』と云ふのは、私のことを云つたのであるけれど、私から云はせれば、石川君こそさうだつた。そして翌日は、私が勤めから歸つて來ると、あの思鄕の歌が『金の如きノ

スタルヂヤ』だの、『岩手山秋は麓の三方の』だの、幾多の名篇が續々出來てゐるのであつた。」

その「金のごときノスタルヂヤ」といふのは『煙』二におさめてある。

あはれ我がノスタルヂヤは
金のごと
心に照れり淸くしみらに

といふ歌である。この「二」には彼はその幼年時代を、また代用敎員をしてゐたころの澁民村の思出を、すべて限りないなつかしさの情をもつて、そのひとつひとつを歌つてゐるのである。

ふるさとの訛(なまり)なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聽きにゆく

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聴きし雀の鳴くを
三年聴かざり

馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に

わが思ふこと
おほかたは正しかり
ふるさとのたより着ける朝は

田も畑も賣りて酒のみ
ほろびゆくふるさと人に

こゝで、これら回想の歌のついでに『一握の砂』の中「忘れがたき人々」として輯められた彼の北海道時代の思ひ出、流浪の一年のそのとき〴〵を歌つた一連の短歌を見よう。

「忘れがたき人々」一ではさうした函館、小樽の記者時代、釧路への長い旅、それから小奴、と思ひ出の糸は手繰られる。それらの歌はみなその時々掲げてきたものであるからこゝには略すがその中でも啄木に忘れられない人があつた。それは函館時代の女敎員「聲の女」橘智惠子であつた。

「忘れがたき人々」二は實にこの橘智惠子を思ふ啄木のはかない、淸らかな心の中でだけ思つてゐた戀のスーヴニールである。

その智惠子の美しい聲は啄木には忘れられない。「いつか、ふとした所で、行きずりに、家の中の女性の美しい聲が洩れ聞えた時に、ぴツたりと、釘附けにされた樣に、路上に立ち止まつて私を驚かしたり、本郷通りの夜店の花屋の花を見てゐる最中に、誰かの聲を耳にして、突然『あの聲。あの聲。あの聲ですよ、まるで』と云つて私をまごつかせたりしたものだつた」と金

田一氏は書いてゐられる。
その啄木の「聾の女」を思ふ歌。

いつなりけむ
夢にふと聽きてうれしかりし
その聲もあはれ長く聽かざり

その忘れられない聾のひとへ、しかしあらはに彼の心を打ちあけたのでもない。たゞそれは――

頰の寒き
流離の旅の人として
路問ふほどのこと言ひしのみ

であり、そこで交はされた言葉も、

さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聽きつらむ
それだけのこと

だつた。しかしさういふ淡い淸らかな戀情は、例へてみれば、

ひややかに淸き大理石（なめいし）に
春の日の靜かに照るは
かかる思ひならむ

かくも淸淨な美しさである。

世の中の明るさのみを吸ふごとき
黑き蝶の

今も目にあり

人がいふ
髮のほつれのめでたさを
物書く時の君に見たりし

明るい黑い瞳の、髮のほつれも美しい人に、彼はいひそびれた言葉が今心殘りだ。

かの時に言ひそびれた
大切の言葉は今も
胸にのこれど

函館のかの燒跡を去りし夜の
こころ殘りを

今も殘しつ

忘れをれば
ひよつとした事が思ひ出の種にまたなる
忘れかねつも

病むと聞き
癒えしと聞きて
四百里のこなたに我はうつつなかりし

その遠つびとの面影を彼は巷に追ひもとめる。

君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを

あはれと思へ

金田一氏に「あの聲、あの聲ですよ」といつて氏を驚かせたその聲である。

かの聲を最一度聽かば
すつきりと
胸や霽れむと今朝も思へる
死ぬまでに一度會はむと
言ひやらば
君もかすかにうなづくらむか

彼はかう思つて、かすかに心足るのである。

時として

君を思へば
安かりし心にはかに騷ぐかなしさ

石狩の都の外の
君が家
林檎の花の散りてやあらむ

長き文
三年(みとせ)のうちに三度來ぬ
我の書きしは四度にかあらむ

この歌で「忘れがたき人々」二は終つてゐるが、この智惠子さんはのちに四十三年五月にある農牧場主のところへお嫁に行つた。その次の年賀狀には「苗字の變つた」(そのときは北村智惠となつてゐた。)彼女から「お嫁には來ましたけれど心はもとのまんまの智惠子ですから――」

といつて來た。そして自分のところで拵へたのだといつてバタを送つて寄來した。
それは啄木が死ぬ前年のことであつた。
次の歌はそれらのことを歌つたものである。

公園のかなしみよ
君の嫁ぎてより
すでに七月來しこともなし
（「一握りの砂」「手套を脫く時」）

石狩の空知郡の
牧場のお嫁さんより送り來し
バタかな

外套の襟に頤を埋め、
夜ふけに立ちどまりて聞く。

彼には、遂に智惠子が、その聲が忘れられないのであつた。——

「三階の哲學者」

さて、彼は蓋平館の三階の室で、しみ〴〵秋の風を聽き、ふるさとを偲ぶことが出來たが、またそこで自ら「三階の哲學者」を以て任じてゐた。九月九日の手紙のなかで次のやうにいつてゐる。

「……我等は一切の慣習より脱して、眞に新しき心を開いて觀ざるべからず。善、惡、神聖、墮落、淸、濁、これら一切の古きマガヒ物の尺度を捨てゝ、我自ら深く眞面目に思想せざるべからず。思想する事と議論することゝは別なり。思想せざる人も議論す。

僕は自然主義を是認す、然れども自然主義を以て唯一の理想なるが如くいへる人々に同ずる能はず、デカタン的氣風に隨喜するものは痴者なり。然れども又これを以て腐敗呼はりするものも同時に痴者なり。……僕は一切を是認す。然れども輕ゝしく結論するを欲せず。眞の

作家は、人の心理を知悉すると共に、時代の心理を透觀せざるべからず。……すべての存在に必ず理由あり。而して世に一として滿足なる事なし。今迄の學者詩人哲人の作れる結論は多し。然れども世には未だ一の結論なし。人生自らが未だ結論に達せず。三階の哲學者は今何事をかなさむと企てつゝあるものゝ如し。……」

このころ、啄木は生活の苦澁を經てその思想もだん／＼變つてきてゐるのであるが、それについて、日夜顏を會はせて語りあつてゐた金田一氏の「晩年の思想的展開」なる文中には次のやうに記されてある。

當時の君は、自然主義の勃興、新人の擡頭に胸を躍らせながら、言葉の端々には偶像[illegible]主義を包藏してゐた。併し自分の過去の藝術及藝術觀を一蹴して、その興味の重心は、藝術そのものよりも寧ろ實生活殊に社會思想の上に傾いて來てゐるのが目についた。而も新に失業の境遇に落ちた君は何の定職もなく、小說を書き惱んでは、殆ど毎日私と火鉢を圍んで無駄話に日を暮したものであつた。二人は隨分議論もしたが、別後の各自の生活、殊に二人に共通な故鄕の話などになると、果しがなくなり、夜中までも、或は興が湧くと、夜を徹して語り合つたりなどしたのであるが、たゞその社會主義的論調になると、私はすぐに共鳴しかねて、何かと反對

をしてゐたものだつた。……（中略）
石川君は熱した語氣で、下層生活の踰ゆべからざる貧苦の桎梏を描き、眦を決して奢侈階級の徒食を責め、こんな社會組織の不都合を、尙各自の罪として晏如として居られるかと肉薄する。私は、社會組織の欠陥を正視するのはよい。たゞ社會組織の不完全なのも、その造り手が人間だからだ。神でないからだ、と外すと『それでは兎に角、社會組織の不完全を認めるか』とせまる。「認める」と答へると『それなら、それをば人間のせいだとして放置して置くのがよいか、それを是正すべきであるか』と切り込む。「是正すべきだ」と答へる。すると、「然らば」と聲を勵まして、『既に不完全である。故に是正すべきであるとする。だから××が必要ではないか』と三段論法に疊みかけて肉迫して來る。さういふ結論になると私はいつも煮え切らなかつた。

「不完全だ。宜しく是正すべきである――そこ迄はよい。けれども、ただ『だから××が必要だ』といふのは當然歸着する唯一の結論ではないやうに思ふ。××でなしに進化（エボルーション）でも是正されて行けるからだ。二つの場合がある內、自分の思つてる一方のみへ持つて來るのは、性急（せつかち）な結論だ」と論理そのものへ抗議する」

啄木は「性急、性急かな此は！」と大口あいて笑ひ、それから普選の時代が來なくればならないといふやうな話をしたといふ。(三十九年に西川光次郎、樋口傳らの「普通選擧の期成を圖る」「日本平民黨」といふのが出來てゐた)

啄木は自らの極度の貧困を經て來てゐるので、その結果は勢ひ實踐的に社會的××思想へと芽生へてきてゐたのである。この頃はまだその芽生へにすぎなかつたけれど、それはやがて彼をして最も進歩的な社會思想家たらしめるにいたつたのである。

小 説「鳥 影」

十月になつてはじめて彼は「賣れる」原稿を書く機會をやうやく得た。

それは當時島田三郎氏が主筆をしてゐた東京毎日新聞へ栗原古城氏の斡旋で連載小説を書くことになつたのである。

題は「鳥影」六十回位の豫定で稿料は「貧乏社故」一日一圓位だらうといふことであつた。

この小説は毎日連載されて年末に及び「一先づ擱筆」された。彼の故郷のことを書き多分に自傳的な小説であつた。

この小說の稿料は一日二圓位の割で彼は歲末に貰ふことが出來た。はじめて賣れた小說――彼はそれで下宿料を拂つた。蓋平館の主人が大晦日には頂けるんでせう、といつたその大晦日に啄木は自分の金で自分の下宿料を拂ふことが出來たのである。

彼はこの時金田一氏に向つて「借金ッて拂へるもんだなあ――」といつたさうである。借金は拂へる、彼にとつてはながい間、借りたものはもう拂へなかつたのである。「借金は拂へるもんだなあ――」この感慨は微笑ましさを越えて悲痛なものでさへある。

彼は借金を返してさすがに良い氣持がしたさうだ。

この年十一月に明星はその第百號を以て廢刊された。その終刊號は同人社友の寫眞を載せた菊倍版二百五十頁の大冊だつたが、啄木はそれに短歌『謎』五十二首及長詩『わが少女』『物なやみ』『おどろき』を載せた。

また十月三十日から三日間「日曜通信」を書いた。その中で彼はその秋の第二回文展出品、和田三造の「煒燻」といふ大幅を褒め、その繪の前で恍として我を忘れてゐると、年の頃二十許りの丈高き「顏は吾等の所謂近代的にて表情に富み、薄小豆地とも謂ふべき色合のお召の羽織に黑の縫紋もかかりそめならず、髮は大きやかなるマガレツトと幅廣の白リボンを結」んだ美

人が、矢早りその繪を見むとして「彼女も恰も予の左に相並びて美しき眼を畫面に注き候」などと書いた。

「スパル」發刊

『明星』が發刊になつたのでその後繼雜誌發行の議が舊明星同人の間に持ち上つた。それは鷗外博士の言で『スバル』と決つた。『スバル』といふのは金牛星座にあたる七星の名で「マアテルリンクが初めて白耳義で出した象徵主義の詩の雜誌の名も「ラ・プレーヤ」乃ちすばるに候ひき」と啄木はいつてゐる。

でその一號は一月に出す筈で、十二月にはその編輯相談のために吉井勇、平野萬里、太田正雄の諸氏が交る〳〵啄木を訪ねて來た。啄木もその編輯者となつてゐたからである。そしてその相談をしながら毎日午前中彼は『鳥影』を書いた。

明治四十二年一月雜誌「スバル」は初號を出した。啄木は二十四歲の春を迎へた。

「スバル」一號に彼は小說「赤痢」を發表した。

その八日には與謝野、平出(修氏、號露花『スバル』の出資者)その他十氏が集つて二號の

相談會があつた、その結果啄木が一人で二月號を編輯することゝなつた。

彼は蓋平館の三階の例の室でそれを編輯した。またその二號に載せるため『足跡』と題する小說をも書いた。

この『足跡』は『スバル』二月號へ發表されたが彼はその附記にかう書いてゐる。

「予が今までに書いたものは、自分でも忘れたい、人にも忘れて貰ひたい。そして、予は今予にとつての新らしい覺悟を以てこの長篇を書き出してみた。他日になつたら、また、この作をも忘れたく、忘れて貰ひたくなる時があるかも知れぬ。」

これによつて、この小說に對する彼の意圖をも知ることが出來るのであるが、この小說で啄木は、澁民村小學校時代の彼自身のことを書いた。ストライキをやつて村を飛び出すといふ「自敍的のつもりで自分を書いたもの」であつた。

さう彼が意氣込んで書いたにも不拘、この『足跡』は「早稻田文學」の批評で「あれは誇大妄想狂だ」と片付けられてしまつた。これは彼に大變應へたらしい。彼は未完のまゝ續稿を書くことをしなかつた。

彼は以前から、短歌、詩から小說へ、とこの願望に燃えてゐたので、この自分で編輯した『ス

バル』二號も、その短歌欄を全部六號で組んでしまつた位であつた。彼によると歌なぞはそれで澤山だ、といふつもりらしかつた。それで他の同人間に問題になつたりした。

それ位小說に身を入れ、まして「新らしい覺悟を以て」書いた『足跡』が「一詩人の發狂」の一言でこき下されては彼も意氣消沈してしまつた。

彼は文學では、小說を書いただけでは、どうしても生活してゆくことが困難である。『スバル』の平出氏は啄木にだけ特別に編輯料を出してくれてはゐたが、それとて生活費には足りる筈もない。

白秋との交友

この『スバル』を編輯してゐたころ彼の三階の部屋へ北原白秋氏なども遊びに來た。後年の酒斗白秋も當時は未だ酒の味もよく知らなかつた。

啄木は自分と同年輩の、やはり當時詩壇で新進詩人として名のある白秋が、まだほんのお坊ちやんで、世の中の事何ひとつわからないのが、自分の酒も女も知つてきたことゝ較べて、いかにも子供つぽくみえ、彼は年上の經驗者らしい氣持ちになつた。

そしてその世馴れぬ、遊びをしらない白秋を連れては淺草邊のいかゞはしい路次などを歩き廻つた。彼には白秋が目を圓くして珍らしがるのが面白かつた。

啄木は白秋をつれて、さういふ細露路などを引きまわし、或る銘酒屋へ上つた。啄木は得意になつて女を呼んだ。白秋は——もう顏を眞赤にしてしまつて戸棚の中へ隱れてしまつたさうである。

そんな風にして白秋は啄木に「酒と女」を敎つたのであつた。

或る日、啄木は小使錢があつたので白秋を誘つて淺草の蕎麥屋へ上つた。そして三味線の音がするので、自分らも藝者を呼ばう、といふので彼は、自分の知つてる藝者がゐるからといつてその女を呼んだ。

その藝者といふのが、あの、伊勢平樓の文人劇へ出、のちには赤心館へ啄木を訪ねて來て困らせた、踊の師匠の植木といふ女、あれの妹であつた。啄木はその女から妹が淺草で藝者にでゝゐるといふことを聞いて、知つてゐたのである。

さう話すと、では姉さんを呼びませうといふことになつた。これは啄木も意外だつた。まさかあの女が藝者をしてゐるとは思はなかつたのである。彼女は啄木と別れてから妹のでゝゐる

淺草へ來て矢張り藝者をしてゐたのであつた。
その姉藝者も來た。
この奇遇に若い白秋はあてられてしまつた。
なんでも白秋はその腹癒せに？　石川は貧乏だとかなんとか云つて、大いに啄木を惡口してやつたさうである。――と、これは白秋氏の自ら語るところだ。

またこのころ、彼は平野萬里氏に何やら壓迫されるものを感じてゐた。彼ははじめ吉井勇に壓迫を感じてゐたがそれを「蹴つた」のち今度は平野氏にそれを感じ出したのであつた。氏の頭腦や才能に啄木は壓されるものを感じてゐた。
啄木は貧乏のなかに困難して、さういふ自分よりみて上の人に反抗する氣があつた。負けまい、負かしてやらう、その氣持があつた。そしてそれを「蹴つて」自信を得たかつたのである。
『スバル』に載つた啄木の歌には
何時見ても金の無さ相な顔ならむいかにいかにとつめ寄る男
春ゆふべ若き男はものずきに玻璃の管もてアルコホル吸ふ

君が隣は萬年筆の仕掛にや絶えず涙を流して居給ふ

なぞといふのがあるが、これは、故意に、平野萬里氏に反抗する心算で、かういふふざけた歌を作つたので、それは『スバル』調でもなんでもないものである。と白秋はいつてゐる。

そして彼はたうとう平野氏をも「蹴つた」。そこで彼は「上京以來八ヶ月かかつて、僕は今迄なくしてゐた自信を見つけ出した。僕は正月になつて、急に何といふことなく中心に賴むところが出來た」

パンの會

この白秋、太田（木下杢太郎）吉井勇、畫家の石井柏亭、山本鼎の諸氏が「パンの會」（パンは牧羊神の名）といふのを作つて旺んに飲みかつ談じたのもこのころであつた。啄木もまたその一人であつた。三月二日郁雨氏に宛た彼の手紙には兩國でひらかれた「パンの會」のことが次のやうに書いてある。

「……夕刻からは兩國でのパンの會。集つたのは太田と僕と石井柏亭君山本鼎君とモ一人矢張畫家話題は藝術上のムーヴメントといふこと、結婚問題、社會改革問題……酒の勢ひで皆氣焔

をあげた。そして十時頃に打揃ふて淺草に電車を驅つたが、活動寫眞が濟んでゐたので、また或家でビールをのみ、歸りに太田と二人で妙な汚ないところでスシを食つて歸つたのが十二時半、明日九時頃來てくれといふ北原のハガキが來てゐたので直ぐ寢たが、ヒドク神經が昂奮してゐて二時過ぎまで眠れなかつた！」

この「パンの會」はこれらの若き情熱の藝術家達が、その若さのゆゑに何處か虛無的な陰をひそめて飮みかつ歌つた「狂飈時代」だつた。これらの人々は白秋の

ころがせ、ころがせ
ビール樽
赤い夕陽のなだら坂

とめてもとまらぬものならば
ころがせ、ころがせ、
ビール樽

といふ即興詩を唄ひながら酒を飲んだ。

いつも來る
この酒肆(さかみせ)のかなしさよ
ゆふ日赤赤と酒に射し入る

白き蓮沼に咲くごとく
かなしみが
醉ひのあひだにはつきりと浮く

彼のこれらの歌は、恐らくかういふ時のものであらう。
啄木はしかし、「パンの會」へもやがて行かなくなつた。「飮む會」どころか生活の重壓がまたしても彼を悶々の情に苦しめてゐたのであつた。
啄木は小說『鳥影』を鈴木皷村といふ人の紹介で大學館といふ店から出版する話が九分通り

縋つた。が、それも結局は駄目になつてしまつた。また春陽堂から「無理やりに」一原稿料二十二圓七十五錢を貰つてきた。これは去年渡した『病院の窓』の稿料で、登載前は拂ふことが出來ないといふのを無理に賴んで一枚二十五錢の割で貰つて來たのであつた。啄木の二月の收入といつてはこの二十二圓七十五錢だけだつた。

彼はその中から、「上京後初めて」傘を買ひ、「パンの會」の會費を拂ひ、そして十圓だけ下宿料を拂つた。下宿料は三四ヶ月もたまつてゐたのである。それから彼はオスカーワイルドの「藝術と道德」といふ本を三圓五十錢出して買つた。

彼はこの本を買つたことについて次のやうな涙ぐましい思ひを書いてゐる。これによつても彼のかなしい日常生活の一端を知ることが出來るのである。

「……この本のことを白狀しよう。二十六日に太田から來てくれといはれて（これはスバル三號の編輯をすることになつてゐた太田氏が不馴なので啄木に手傳つて貰ふためだつた）三秀舍にゆく時、懷中に五圓札が四枚あつた。これをこまかくしなくては電車にのれぬ、何を買つてこまかくしようかと路々方々の店や勸工場を見ながら、何でも最も必要な、安い物を買ふつもりで、とう〳〵神田まで歩いてしまつた。

……そしてフラリと中西屋――書肆――へ入つた。君、背皮の金文字が燦然として何千冊の洋書の棚に並んでゐる前に立つたとき、僕は自分の境遇を忘れ、函館を忘れ、（そこには母、妻子が啄木からの便りを待つてゐる――筆者註）下宿屋のツケを忘れ、三秀舍を忘れ、……何もかも忘れた。忘れたのではない、それらを壓倒する或新しい氣持に今が今までの堅い心を破られた。オスカーワイルドが最近英國詩人中の異彩であつたこと、その思想の世紀末的空氣に充ちてゐることは多少聞いてゐた、そのワイルドの思想を覗ふべき一冊の紫表紙の本が鋭く僕の目を射た。『高いに違ひない。馬鹿な、止せ〳〵』と胸の中で叫びながら、僕は遂に番頭に云つた――

『これはいくら？』

『三圓五十錢で御座います。』

『それその通り高い！』と僕は胸の中で言つた。その癖、殆ど本能的に僕は財布を出して五圓札一枚を番頭の手に渡した！　君、許してくれ。既に何年の間、本といふ樣な本を一冊も買ふことの出來なかつた僕の、哀れな、憐れな、愍れな慾望は、どうしても此時抑へることが出來なかつたのだ。『止せ』と思ひながら財布を出した。

『馬鹿』と心で叫びながら買つて了つた。僕はその時、函館の商業會議所でエンサイクロペヂア、ブリタニカの臭ひを嗅いだことを思ひ出した。
そして何か惡事でも働いた時のやうな氣持で中西屋を出たのだ——
そして其本を晦日の晩に讀んで了つた。そして、昨日五月一日、朝のうちに近所の古本屋へ行つて一圓三十錢に賣つて來た。とう〳〵僕は二圓二十錢の損をして了つた。——これは滑稽ではない、僕にとつて最も眞面目な悲しみだ」（三月二日郁雨氏宛）

朝日新聞社入社

啄木はかうして「小說」の稿料では到底生活出來難いのを知つて何が定收のある職をと思つた。そこで思ひついたのが同鄕の先輩佐藤北江（眞一）のことであつた。
佐藤氏は當時、東京朝日新聞の名編輯長として知られてゐた。啄木は氏を別に個人的に知つてゐたわけではなかつた。同國人の名編輯長、それだけを緣故にして啄木は佐藤氏に突然履歷書に手紙を添へて就職のことを賴んでみた。「私はこれこれの履歷の者ですが、使つて頂きたく、生活費として三十圓だけ欲しい」といつて。

佐藤氏からは、兎に角會つて見やうといふ返事が來た。で啄木は氏を京橋瀧山町（當時朝日新聞社はそこにあつた。）の新聞社に氏を訪ねた。その結果校正係として、月給二十五圓、夜勤手當一夜一圓、都合三十五圓を貰ふことが出來るやうになつたのである。

啄木は佐藤氏の好意で、「アキの無いのを無理に」入社させて貰ふことが出來、夜勤は三日に一度位、平日は午后一時半から五時半――第一版の刷上るまで――四時間位しか出なくとも可いとの事で、「これで金を貰つては濟まぬ」と思ふ程であつた。「朝日は東京の各新聞中でも時事報知と共に最も基礎の固い大新聞だ、そして佐藤氏は、腰掛けでなく長くやる積りでこゝ一二ケ月だけ薄給でも我慢してくれと言つてゐた。僕の『有望』も古いものだが、今度こそは最も有望だ、朝日では、惡い事さへしなければ決してやめさせぬ社ださうだ、そして三年以上勤めると年金がつくとの事だ、これで先づ、僕の東京生活の基礎が出來たと云つてもよい。安心してくれ給へ。」（郁雨氏宛、三月二日）と彼は喜んだ。

さうして彼は三月一日、正午から朝日新聞社へ出勤することとなつたのである。

それに、その頃彼は吉井、平野兩氏に對する壓迫もすでに「蹴つて」ゐた。文學上の自信もさうして出來てゐたので、同じく三日の郁雨氏宛の手紙にはその心持を次のやうに述べてゐる。

「八ケ月かゝつてオクレを取歸した僕は、この二ケ月の間、思想的に武裝して過した。そして今こそ一個人としても、作家としても立派な自信を得た。君、これからだ。これからこそ初めて僕はすべてに戰ふ勇氣と自信がある 。……かうなつたのも君のおかげだ。多謝する。僕は今初めて僕の思想を統一し、アラユル物に對して直視することが出來る樣になつた」

彼はかうして生活上にも、思想上にもやゝ平安がきさうであつた。

ところで、啄木が勤めが出來て出勤するやうになると函館にゐる母堂が、いち早く啄木のところへ來たがつた。離れて暮す幾月、母親は何よりもその愛子(まなこ)の膝下に來たかつた。それに――後の節子さんとの不和が、そのころから母堂との間に釀されてきてゐた。不足がちな母堂、節子、京子の三人暮しで、何時か彼女らの感情もむつかしくなつてゐたのである。母堂はさういふ函館の家を出て一日もはやく東京へ、愛子の家へ來たかつたのである。が啄木には、さういふ母のこころも充分わかり、またはやく呼び寄せるつもりでもあつたのだが何といつても金が思ふやうにさせなかつた。四月十六日付の郁雨氏への手紙は、さうした

彼の心苦しさを訴へてゐるものである。

「……何といつてよいか解らぬ、皆が死んでくれるか俺が死ぬか、二つに一つな樣な氣がする。母のいふ事、妻のいふ事、君の言つてくれる事、皆無理は少しもないと知つてるので苦しい悲しい。ヒヨツトすると(例へば母でも突然やつてくれば)僕が短氣を起してどんな事をするか知れぬ樣に君も妻も思つて心配してくれるが、僕は悲しい。今迄も僕はよくそんな風な事を言つたり、したりして家族をおどした。おどしたのだ。母などの言ふ事に少しも無理はないと思ふけれど、三歳半に居る所へ來られたりしてはどうする事も出來ないから、さうしておどしておくより外はないのだ。僕たつて何んでそんな事にしたいものか。

先月末に呼ぶ樣に云つてやつたのもウソではないのだ。ところが「鳥影」は大學館にも到頭賣れなかつた。察してくれ。それから家を持つだけの金の方を貸してくれる筈だつた北原は「邪宗門」の方が意外に金がかゝつたので矢張駄目だつた。(君、アノ本は易風社から出たが、實は本屋の名前だけ借りたので自費出版なのだ。)

今迄の滯りで下宿屋がイヂメる。先月は入社早々前借して入れた。今月もあまりイヂメられるので、モウ十五圓だけ前借して入れた。そして僕は毎日の電車賃を工夫して社に通つてるとい

ふ有様だ。が二十五圓といふ基金さへあれば、家族が來てもどうかかうか暮せる。たゞ、家を持つ金、旅費、それから下宿屋に納得させる金、それだけが問題だ。それさへあれば、僕はこんな——

實狀はこの通り。何の秘密もない。たゞ苦しい。花はさいたが、僕には何のこともわりなしに散つてしまつた。

とにかく基本だけは出來たのだから、も少し待つ樣に母や妻へ言つてくれ玉へ。賴む。何とかいたら可いか解らぬので手紙もやらずにゐた。

何日の間やらう〳〵と思ひつゝ、手紙をかくのがおそろしさにそのまゝにしておいた、一圓ある。別封、どうか母へやつてくれ玉へ。君の健康?あゝそれに僕はちつとも責任がないか!」

いまは彼は割に寛大だつた下宿屋からもいぢめられねばならない。母の、妻の貧しいくらしを思へば、はやく呼び寄せたいのであるが——彼のこころは泣きたくなつてしまふ。

そのやうにして五月もすぎた。

弓町時代　家族上京

たうとう六月になつて、彼は母と妻子を呼ぶこととなつた。

彼は六月分の月給を全部前借し、友人からも借りた。そして下宿屋へ拂つたが、尙その大分殘つた殘額は毎月月賦といふことに、金田一氏を保證人にたてて して貰つた。

そして本鄕弓町二ノ十六、臺之床といふ床屋の二階二間を借りた。

六日、母堂、妻せつ子、京子の三人は宮崎郁雨氏に送られて函館を發つた。そして弓町の二階に流離の一家が一緒に顏を會はせたのはそれから數日ののちであつた。

久しぶりで會はした顏と顏！　母の髮にも、妻の口許にも久しい生活の困窮を越えてきた疲れが見えた。

こんどこそ、一つの家に暮らす家族だ。貧しくとも、この生活に幸あれ。——

たが、この新らしい生活もすぐに波紋に滿たされねばならなかつた。

喜之床に移つた啄木は、郁雨氏に貰つた十五圓でその費用に當てた。何やかと、遂に晦日は一文なしで送つた。

七月になるとまた月給の前借り。「並木君の時計をかりて質に入れておいたのを受けるのに約十圓、それから小借金を拂ひ米を買ひ、醫者（一日に社のかへりに電車から飛下りをしそくな

つて左の手と膝に負傷、昨日漸く繃帶をとつた）に拂ひ、電車の回數券を買ひ、安物の僕のヒトへを買つてもう無い。下では今月分の家賃を前拂ひにしてくれといふ。米はまだ三四日あるが、炭は明日から無いとよ。イヤになつちやつた。）

そんな暮しだつた。

でもその彼はかう思ふやうになつてゐた。

「――このまんまが即ち我々の人生だ！　かう僕は考へてゐる。そして時々『このまんま』な我々の人生の底がどこまで深いのか解らぬのに驚く。實際驚く。」と。

母と妻との不和

彼は少しでも原稿料を得やうとして何か書きたかつたが書けなかつた。

母と妻との氣まづい感情はこの弓町へ移つても少しも和らぎはしなかつた。啄木を間においてそれは却つて惡い氣流となつた。

啄木は堪らなくなり、二人を前にして小言を言つてみた。それでも不愉快で仕方なく十時頃フイと家を出てしまつた。「淺草に行くにしても宿屋へとまるにしても金がない。こんな時金の

ないのが一番癪に障るよ。そして回數券だけはあるから一時間半許りアテなしに電車に乘つて方々廻つて歩いた。しまひには日比谷公園へ行つて、雨の降る眞黑な中で小便して來た。」のであつた。

そしてこの頃から節子さんは今までの苦勞がたたつたか、身體をわるくして毎日眞砂病院へ通ふこととなつた。藥瓶を下げて咳をしいしい暑い街を歩いて通つた。

七月十八日から二十四日まで、彼には暑中休暇があつた。毎日九十度以上の暑さであつたが彼はこの間に「汗に濡れつつ」を書いて廿五日から九回に渡つて故鄕の「岩手日報」に發表した。

節子さんと母堂との感情の不和、それはどれだけ啄木の心を痛めつけたか知れない。

解けがたき
不和のあひだに身を處して
ひとりかなしく今日も怒れり

そして彼はたまらなくなると、自分だけ先のやうに下宿住居でもしてしまひたかつた。さう

すれば書けるかも知れない。

俺ひとり下宿屋にやりてくれぬかと
今日も、あやふく
いで出でしかな。

女同志のはなればなれの感情の冷たさは、

猫を飼はば
その猫がまた爭ひの種となるならむ。
かなしきわが家　（「悲しき玩具」）

だつたのである。

そのやうな不和に、——その姑との感情の對立に惱み拔いた節子夫人は遂にどんづめの家出

をしてしまつたのである。

妻の家出

十月の二日、啄木の留守の間に、夫人は近所の天神様へお詣りに行つて參ります、と母堂に言ひおいて、京ちやんを連れて家を出た。それ切り彼女は歸つて來なかつた。

日暮れて社から歸つた啄木はそれを知つて失神するほども驚いてしまつた。泣き沈む母堂の前で讀んだ妻の書留には「私ゆゑに親孝行のあなたを御母さんに叛かすのは悲しい。私は、私の愛を犧牲にして身を退くから、どうか御母さんへの孝養を全うして下さい」と書かれてあつた。

啄木は彼女なしには生きて行けなかつた。彼の懊惱は察するに餘りある。彼は六十三になる老母を叱つてみた。何はとりあへず、蓋平館に金田一氏を訪ねて、その仔細を語り「何と書いてもいい。自分のことなどは馬鹿と書いても、阿呆と呼んでも構はない。」何でもいゝから是非歸つてくる樣に取なして呉れと賴んだ。

金田一氏も驚いて早速、情理を盡した長い手紙を盛岡にゐる彼女の許へ書いた。

親友のために金田一氏は「長い手紙を、仕舞には、自分の妻でも逃げたやうに、自分でぽろ〳〵涙を落しながら書いて出した。文句は忘れたけれども、これなら歸らずに居れまいと思ふ樣な名文を書いた積りだつた」（金田一氏、「弓町時代の思ひ出」）

啄木は夜も眠れなかつた。飲めぬ酒も苦しまぎれに飲んだ。社も休み、飯も通らなかつた。金田一氏に頼んで待ち切れなくなり、自分でも「あらゆる自尊心を傷くる言葉を以て再び歸り來」るやうに頼んだ。若し彼女が歸らないといつたら、彼は盛岡へ行つて彼女を殺してしまはうとまで思ひつめた。

彼はいつてゐる。「……御存じも候はん如く私は非常に反抗心の強き男に有之候。それが今度は反抗どころか、全く妻の爲に意久地なき限りの手紙をも書き候」

彼は返事が待ち切れなかつた。十月七日の左の金田一氏に宛た手紙はその悶々の情の、よく察せられるものだ。

「まだ返事は來ませんでせうか。私は私から手紙を出したことを、若しやあなたに全幅の信任を捧げることが出來なかつた爲と思はれはしないかと心配してゐます。歸るでせうか、歸らぬでせうか。

私には新しき無言の日が初まりました。私はこの、一寸のひまもなく冷たい壁に向つてゐるやうな心持に堪へられません。然しこの心持をそらすやうないかなる方法もとりたくありません。誰とも話はしたくないが、あなたには逢ひたい。」

彼がそのやうに待ち望んだ返事は、やがて、身體が弱つてゐるから、病氣をなほしてから歸る、と金田一氏と啄木へ同時に來た。

やがて、十月二十六日朝、節子夫人は盛岡からふたたび、啄木のところへ歸つて來た。この歸京を彼女は、もうどんなことがあつても堪へ忍ばう、といふ決心をもつて、してきた。そしてそのやうに忍從の日を送るのであつた。

啄木は社へもその翌日から出た。

そして「嵐」のすぎた家庭は、節子さんの忍從によつて、しづかに營まれて行つた。

「食ふべき詩」その他

と同時に啄木も、今は少いが定收入もあり、落付いて思索を續けることが出來た。彼は經てきた、苦き生活の實踐を通じて、眞實の藝術、人生に對し彼の鋭い思索を向けた。そしてそれ

らの彼の批評をいろいろ書くことが出來た。

彼は十一月に先づ詩論「食ふべき詩」を書いた。これは從來の「詩」についての觀念に對し彼の抱懷する新らしい理論を彼の經歷、境遇を語りながら、述べたものである。

彼はそこで次のやうに述べる。曾て十七八歲の詩作の外何ものもなかつた。そのころの詩作態度は、實感を詩に歌ふまでには煩瑣な手續――一寸した空地に高さ一丈位の木が立つてゐてそれに日があたつてゐるのを見てある感じを得たとすれば、空地を廣野とし、木を大木とし日を朝日か夕日にし、それを見た自分を詩人か旅人にする――といつたやうなことにした上でないと當時の詩の調子に合はなかつた。

二三年たつとその「手續」に慣れてきて、同時にその手續を煩はしく思ふやうになつた。その頃は「興の湧いた時」には書けなくて、却つて、自分で自分を輕蔑するやうな心持の時か、雜誌の締切といふ實際上の事情に迫られた時でないと詩が作れないといふ奇妙な事になつた。で、月末になるとよく詩が出來た。それは、月末になると自分を輕蔑せねばならぬやうな事情が彼にあつたからである。といひ、また「食ふべき詩」とは「兩足を地面に喰つ付けてゐて歌

ふ詩といふ事である。實人生と何等の間隔なき心持を以て歌ふ詩といふ事である。珍味乃至御馳走でなく、我々の日常の食事の香の物の如く、然く我々に『必要』な詩といふ事である。――斯ういふ事は詩を既定の或る地位から引下すことであるかも知れないが、私から言へば我々の人生に有つても無くても何の増減のなかつた詩を、必要な物の一つにする所以である。詩の存在を肯定する唯一の途である」と述べた。

彼は曾て、詩作に於てその格調をいろ〳〵苦心してゐたが（四四四六調發見の如き）その彼は今、用語の問題でも必然と口語の新詩語たるべきを主張した。「『あゝ淋しい』を『あな淋し』と言はねば滿足されぬ心には、無用の手續があり、回避があり、胡魔化しがある。其等は一種の卑怯でなければならぬ。」とした。

彼はまた「詩人」といふ特殊な人間の存在を否定した。「詩人は先第一に『人』でなければならぬ。第二に『人』でなければならぬ。第三に『人』でなければならぬ。さうして實に普通人の有つてゐる凡ての物を有つてゐるところの人でなければならぬ。……即ち眞の詩人とは、自己を改善し、自己の哲學を實行せんとするに政治家の如き勇氣を有し、自己の生活を統一するに實業家の如き熱心を有し、さうして常に科學者の如き明敏なる判斷と野蠻人の如き率直なる

態度を以て、自己の心に起り來る時々刻々の變化を、飾らず僞らず、極めて平氣に正直に記載し報告するところの人でなければならぬ」といふことを述べた。

これは確に、その當時に於ては革命的な詩論であつた。彼は「藝術の爲の藝術」を排して、「人生の爲の藝術」を主張する。彼のこの詩論は（彼はその主張を、その短歌に於て試みた）やがて生長して、歌壇に於ては生活歌、口語歌、となつていつたのだである。即ち、後にその主張は雜誌「生活と藝術」に引繼がれ、ひいては、プロレタリア短歌の發生をうながした、その母胎ともなつたのである。

●

またこの十一月に感想「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」を書いた。

そのなかで彼は田山花袋氏の言説につき「田山氏も亦、嘗て『自然主義を單に文藝上の問題として考へて見たい』といふ意味のことを何かで述べられた。氏の立場としては諒とすべき言葉であるが、一方からみれば、其處に『或物』を回避した態度がないと言へない。……私は田山氏と人生との間に、常に一定の距離が保たれてゐるやうな感じを不滿足に思ふ。田山氏は文學を人生に近づかしめた。さうして遠ざからしめた。」と書いてゐる。

十二月には評論「一年間の回顧」「卷煙草」を書いた。さうしてだんだん自然主義を批判し、

そこから一歩踏み出して行くやうになつたのである。

この月の初旬、彼は風邪をひいてなかなか癒らなかつた。

父の上京

二十日前後のこと、野邊地で別れた切り、逢はない父がそこから上京して來た。あの雪の夜の父の家出後、かうして一緒に宗族のものが暮すのは初めてであつた。

啄木は兩親を迎へ、妻子と共に久しぶりで、平和な四十二年の暮を送るのであつた。

彼は父を迎へ次の葉書を宮崎郁雨氏に書いた。

「その後の晝夜間斷なき努力は、僕をして今度初めて歳暮らしい歳暮、新年らしい新年を迎へることを得せしめるらしい。目下家内に病人なく二三日前野邊地にゐる老父も上京した。正月以後は毎號スバルと新小說で評論も發表する。いづれ少しひまになつたらくはしく消息しよう。夫人へよろしく。」（二十四日夜）

かくて彼は四十三年の正月を「初めて新年らしく」迎へることが出來たのであるが、次に朝日新聞へ入つてからの短歌と思はれるものを掲げてみやう。

人氣なき夜の事務室に
けたたましく
電話の鈴の鳴りて止みたり

こころよき疲れなるかな
息もつかず
仕事をしたる後のこの疲れ

目さまして
ややありて耳に入り來る
眞夜中すぎの話聲かな

見てをれば時計とまれり
吸はるるごと

心はまたもさびしさに行く

朝朝の
うがひの料の水薬の
罎がつめたき秋となりにけり

ひとならび泳げるごとき
家家の高低の軒に
冬の日の舞ふ

京橋の瀧山町の
新聞社
灯ともる頃のいそがしさかな

はたらけど

はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢつと手を見る

よく怒る人にてありしわが父の
日ごろ怒らず
怒れと思ふ

久しぶりで一緒に暮す父、その父は老いて、もう怒ることもない。久しい間の父の憎みも思はれて彼にはそれがさみしい。

あさ風が電車のなかに吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る

夜おそく戸を繰りをれば

白きもの庭を走れり
犬にやあらむ

あはれなる戀かなと
とひり呟きて
夜半の火桶に炭添へにけり

水のごと
身體をひたすかなしみに
葱の香などのまじれる夕

氣弱なる斥候のごとく
おそれつつ
深夜の街を一人散步す

皮膚がみな耳にてありき
しんとして眠れる街の
重き靴音

氣がつけば
しつとりと夜霧下りて居り
ながくも街をさまよへるかな

母と妻との不和に家を出て歩いた折の歌であらう。

「性急な思想」

啄木は生活も安定し、家族も無事に、彼の思想も穩健なものになつていつた。一月九日彼が大島氏へ寄せた手紙に這般の氣持を傳へてゐる。

「函館にゐてお世話になつた頃を考へるとボーッとしてまゐります、あの頃私は實に一個の憐

れなる、卑怯なる空想家でした、あらゆる事實、あらゆる正しい理を回避して、自家の貧弱なる空想の中にかくれてゐたにすぎません、私の半生を貫く反抗精神、その精神は然し乍ら、つまり自分で自分に反抗してゐたに過ぎません、それと氣がつかずに、唯反抗その事にやりどころなき自分の感情を託して、咨嗟し、慷慨し、自矜してゐた臆病な無識者は、遂に內外兩面の意味に於て「破產」を免かれませんでした。自然主義は、私のこの思想上の破產へ對して決して救濟者ではありませんでした。寧ろ執達吏のやうな役目を以てあらはれました、上京後一歳有餘の私の努力――その空しき努力は、要するにこの破產が一時的の恐慌から起つたのでなく長き深き原因に基づいたものである事を明らかにしたに過ぎません、最近昨年秋の末私は漸くその危險なる狀態から、脫することが出來ました。私の見た夢はいかに長かつたでせう、…………遠い理想のみを持つて自ら現在の生活を直視することの出來ぬ人は哀れな人です、然し現實に面接して、其處に一切の人間の可能性を忘却する人も亦憐れな人でなければなりません、……人生――狹く言つて現實といふものは、決して固定したものではない、隨つて人間の理想といふものも固定したものではない、我々は時々刻々自分の生活（內外の）を豐富にし擴張し然して常にそれを統一し、徹底し、改善してゆくべきではないでせうか、あらゆる思想、あら

ゆる議論の最後は、然して最良の結論は唯一つであります、乃ち實行的、具體的といふ事です（と私は思ひます、）私は惣上の意味に於て新らしい個人主義を力强く把持して行かうと思ひます、同じ理由から私は、機會があつたら新日本主義といふものを說かうと思つてゐます。現在の日本には不滿足だらけです、然し私も日本人です、そして私自身も現在不滿足だらけです、乃ち私は、自分及自分の生活といふものを改善すると同時に、日本人及日本人の生活を改善する事に努力すべきではありますまいか、……自己とか個性とかいふものは、流動的である、自らそれを推し進めて完成すべき性質のもので、そして生きてゐる間――精神的活動のやまぬ間は形を備へぬものである、と私は思ひます、そして、前申上げた自己の生活の改善、統一、徹底といふことは、やがて自己を造るといふのでありますまいか、」

この手紙にもあるやうに彼はいま落付いて「自己の生活の改善、統一」そして日本人の生活の改善をもそれから望むやうになつてゐる。さういふ彼はまた二月には「性急な思想」なる評論を書いて「破壞の爲の（建設を忘れた）破壞」「目的を失つた」性急な思想を反省してゐる。曾つて、蓋平館の下宿で、金田一氏に「それは性急」だといはれた啄木はいまここでその「性急な思想」を自省してゐる。

啄木はこの二月に小說「道」を中島孤島氏の紹介で春陽堂で金に代へた。去る十一月からかかつてゐた二葉亭全集（これは朝日新聞社で出版するもの）の校正も三月に入つていよいよ出來上つた。この仕事は自分で「割に合はぬ仕事をしよひ込んだものだ、」といつてゐるほど彼は懸命に、圖書館へ通つたり、自宅へ借り出したりして原本でいちいち校正したのであつた。

この三月に郁雨氏に當てた手紙で彼はますます現實の複雜を感じて「——確乎とした事ではないが、僕は新らしい意味に於ての二重の生活を營むより外に、この世に生きる途はない樣に思つて來出した。——無論二重の生活は眞の生活ではない、それは僕も知つてゐる、然しその外に何ともしようが無いのだから止むを得ない、」といつてゐる。

彼のやうな純眞な精神にそれは悲しいことだ。「生活それ自身がワナだ！」とも彼はいつてゐる。しかし、現實はそれより仕方ないとすれば……「途に逃出すことの出來ないワナだと思つた時から、」啄木は「今迄より強くなつた、」のである。

四月には、金に代へておいた『道』が「新小說」に發表された。また朝日新聞、東京毎日新聞に短歌を發表した。去年の夏以來これははじめての作歌だつた。

彼はこのころ上京以後の今までの歌を一先つあつめて歌集を出したいと思つた。それで、清

書した歌の原稿を持つて春陽堂へ行つた。それで十五圓位の稿料を貰ふつもりであつた。そのころは金子薫園なんかさへ稿料なしの出版だつたのだが、啄木は金が無いので稿料が欲しかつた。その時は掛りの人がゐなかつたので番頭に原稿を渡して歸つて來た。歌集の名は「仕事の後』とするつもりだつた。また郁雨氏と金田一氏（二人の恩義に報いるために）デヂケートするつもりである。

そのころ新聞社で西村醉夢氏が辭め、そのため二葉亭全集の仕事が總て啄木にかゝつて來た。啄木は忙しい日を送つた。でも主筆の池邊氏は啄木を信用してそのいふことを、直捌方法から筆耕の雇入れまで——彼も氣持よく働らいた。

節子夫人は二度目の姙娠をしてゐた。

彼は五月に「我が最近の興味」を書き、小說『我等の一團と彼』を草した。それにはその題名の暗示するごとく民衆といふもの、それへの關心が、その記者生活を題材としたもののうちに現はれてゐる。

彼はそれについて次のやうなことをその手紙でいつてゐる。

「先月の末からかゝつて『我等の一團と彼』といふものを書いてゐる。もう六十枚書いたが、まだ三十枚位はかけさうだ。書いて了つて金にかへるまでに、若し僕にも一度これを書き直す時間が有るとすれば、これは僕が今迄に於て最も自信ある作だ。「道」は僕が或る目的を置いて書いた小說の最初のものであつたが、後に至つてその目的の置き處の誤まつてゐたことを發見した。從つて全然失敗してゐた。今度の作では、僕は「道」に於て單に一般的に老人と青年の關係に置いた目的を、もつと極限して現代の思潮に置いた。——昨日までは袷を着て汗を流しながら書いたが、今日は單衣を着て三枚許り書いた。」

×　×　事　件

六月には評論「硝子窓」を「新小說」に書いた。

このころ、未曾有の重大事件が世に知れ渡つた。その時、啄木が受けた大きな衝動！「恐らく最も驚いたのは、かの頑迷なる武士道論者ではなくて、實にこの私だつたでせう。

……それが恰度、知らず知らず自分の歩み込んだ一本路の前に於て、先に歩いてゐた人達が突然火の中へ飛び込んだのを遠くから目擊したやうな氣持でした。」と後に彼は書簡に書いてゐ

る。彼の思想も大きく轉向して行つた。

そして、それから後彼は××主義の本を漁つて讀んだ。古本屋から讀む人のなくなつて安くなつたそれらの本を探してきたりした。

赤紙の表紙手擦れし
國禁の
書を行李の底にさがす日

賣ることを差し止められし
本の著者に
路にて會へる秋の朝かな

「朝日歌壇」選者

八月には感想「紙上の塵」を書いた。またこの年の二月に上梓された土岐哀果氏の歌集「NAKIWARAI」の批評「NAKIWARAI を讀む」を八月三日の朝日新聞に書いた。これは「大

木頭」といふ匿名で書いた新刊批評であつたが、このローマ字三行書の土岐氏の作品は啄木に影響をあたへた。つまり彼の新短歌の詩形たる三行書はこの土岐氏の影響だつたのである。(だから『一握の砂』の初めの方の歌はその作歌された當時は普通の一行書であつたのである。)

月末には評論、「時代閉塞の現狀」を同じく朝日新聞に書いた。彼はそこではつきり「自然主義を揚棄し、明日の考察！これ實に我々が今日に於て爲すべき唯一である。さうして又總てゞある。」といつてゐる。

また九月になつて吉井勇の歌集「酒ほがひ」の批評「吉井君の歌」を同樣朝日新聞に書いた。この九月の十五日から朝日新聞に「朝日歌壇」といふのが出來て啄木がその選者となつた。その歌壇の選者となるに當つて彼は次のやうに述べてゐる。

「……近半世紀間に於ける激甚なる文化の混淆は、直接に間接に絶間なき強い刺戟を我々の精神に與へた。そして其の混淆は已に漸く頂上に達した樣に見える。我々は今其の紛然雜然たる事物に對して我々の民族的特性と我々の社會及び我々自身の必要とによつて取捨選擇の自由を有する價値判斷の時代に到達した。——假令へば、三十一字詩といふ極めて窮屈なる、而してやがては滅ぶべき一小詩形に自己の零細なる感想を託せむとするに當つても、我々は最早萬葉

の諸詩人の如く無意識的放膽的であることは出來ない。其の詩形の上に設けられた無用なる制約には元より隨ふ理由を持つてゐない。而して又現時の歌人、詩人、乃至其の他の文學者の多數が抱いてゐる樣な不條理なる文學的迷信を認容することも出來ない。彼の文學の「偶像」を擁立して、其の前に跪拜(きはい)し、讃仰し、文字の戯れをこれ事として得々たる人々と我々とは、おのづから立場を異にしなくてはなるまいと思ふ。

歌壇を設けるに當つてこれだけの事を言つて置く。要は、自分自身が今後に於て、自分の歌なり此の歌壇なりに就いて何等かの誇張した考へを抱くことを、みづから戒めて置くのである。

啄木は自分の信ずるこの態度を以て「新聞歌壇」に望んだ。「文學の偶像」を破壞して、それは別段「他の人間の諸活動よりも立優つた、意味の深い、尊貴な物」ではなく、詩や歌を作ることは要するに「いくら考へて見ても、書きたいから書く、作りたいから作るといふ外に」ないのであるといつた。それは恰も人間が生存の價値を知つてゐるから生きてゐるのでないと同じに、文學的努力をすることもそれに特別の價値を認めるからでないとした。

この「文學」の衣冠束帶をかなぐりすてた、裸身でぶつつかつて行く文學論、「作りたいから

作る」外にない彼の創作態度、そこから生れたのがすなはち彼の短歌であつた。文學に特別の立優つた價値を認めないからといつて文學を無價値なものと思つてはいけない。彼は詩や歌を蔑視し、「歌を作らなくてもいゝやうに」なりたいといひながら尙彼には「作らなくては」ゐられなかつたのである。

長男眞一の出生とその死

彼の歌集は前に春陽堂から上梓する筈であつたがうまく話がつかず、東雲堂から十一月上旬に出版されることになつた。歌集の名も『一握の砂』と改められた。

その原稿を東雲堂に二十圓で渡した日、十月四日にかねて身ごもつてゐた節子さんが大學病院婦人科分室で男の兒を生んだ。お產も輕く「大きいには看護婦もたまげる」程の兒であつた。啄木は佐藤北江氏の人柄が好きだつたのでその人の本名をそのまゝ「眞一」と名づけた。

十月の朝の空氣に
あたらしく

息吸ひそめし赤坊のあり
十月の產病院の
しめりたる
長き廊下ゝゆきかへりかな

この「息吸ひそめし赤坊のあり」は、初め「息吸ひそめしすこやかの兒よ」と出來たものであつた。また外にこの時左の一首が出來た。

眞白なる大根の根こころよく肥ゆる頃なり男生れぬ。

「一握の砂」では「十月の產病院の」の歌の次に左の公園の歌がのつてゐる。

むらさきの袖垂れて
空を見上げる支那人ありき

公園の午後

孩兒の手ざはりのごとき
思ひあり
公園に來てひとり歩めば

ひさしぶりに公園に來て
友に會ひ
堅く手握り口疾に語る

晴れし日の公園に來て
あゆみつつ
わがこのごろの衰へを知る

公園のかなしみよ

君の嫁ぎてより
すでに七月來しこともなし

この「ひさしぶりに公園に來て」會つたのは白秋氏であつた。二人は木馬館へ入つてメリーゴーラウンドに乘つた。前の木馬に乘つた啄木は暫くして後の白秋の方を向いて「何か面白いことはないかな。」といつた。この「何か面白いもの」を求める氣持、焦いらした不滿な氣持、それについて啄木は「硝子窓」の冒頭に次のやうにいつてゐる。

『何か面白い事は無いかねえ。』といふ言葉は不吉な言葉だ。……或時は人の顏さへ見れば、さう言はずにゐられない樣な氣がする事もあつた。

『何か面白い事は無いかねえ。』
『無いねえ。』
『無いねえ。』

さう言つて了つて口を噤むと、何がなしに焦々した不愉快な氣持が滓の樣に殘る。丁度何か拙い物の食つた後の樣だ。そして其の後では、もう如何な話も何時もの樣に興を引かない。好

なき煙草さへ甘いとも思はずに吸つてゐる事が多い。……

何か面白い事は無いか！

それは凡ての人間の心に流れてゐる深い浪漫主義の嘆聲だ。……」しかし、彼は「これから『何うしたら面白くなるだらう。』といふ事を、眞面目に考へて見たいと思ふ。」といつてゐる。――ここでも啄木は一歩つきつめて物の根本を究めやうとしてゐるのであつた。

さて、看護婦も驚くやうな大きな赤坊だつた眞一は間もなく二十七日の夜半に死んでしまつたのである。

啄木はその夜、夜勤で十二時過に歸つてみると、二分許り前に息を引取つたといふ所であつた。さはつてみるとまだ身體には溫みさへあつた。「醫者をよんで注射をしたがとう〳〵駄目だつた。眞一の眼はこの世の光を二十四日間見た丈で永久に閉ぢた」のである。

その愛兒の葬儀は二十九日午後一時出棺淺草永住町了源寺で營まれ、その夜火葬に付し、翌三十日、室を借りてゐる床屋――新井といふ――の墓地を借りて埋葬した。

愛兒を失つた哀しみ。その情は今出版せんとしてゐる歌集『一握の砂』の中に次のやうに歌

はれた。

夜おそく
つとめ先よりかへり來て
今死にしてふ兒を抱けるかな

二三こゑ
いまはのきはに微(かす)かにも泣きしといふに
なみだ誘はる

眞白なる大根の根の肥ゆる頃
うまれて
やがて死にし兒のあり

男兒出生を喜んで友達に書きしるして送つた歌は、いまは哀しみの歌として「生れてやがて死

にし兒のあり」と訂正されねばならなかつたのである。

おそ秋の空氣を
三尺四方ばかり
吸ひてわが兒の死にゆきしかな

死にし兒の
胸に注射の針を刺す
醫者の手もとにあつまる心

底知れぬ謎に對ひてあるごとし
死兒のひたひに
またも手をやる

かなしみの强くいたらぬ

さびしさよ
わが兒のからだ冷えてゆけども

この哀しさ！

かなしくも
夜明くるまでは殘りゐぬ
息きれし兒の肌のぬくもり

この哀しみの中に、せつ子さんも體が惡く服藥をつゞけるやうになつた。時々は臥たり、――このやうにして彼の生活は年の暮の迫るにつれてまたも逼迫して行くのであつた。
十一月八日には野邊地の對月老師が九十歳の高齢で亡くなられた。

歌集「一握の砂」の出版

難産に難産をつゞけた歌集、そして愛兒の出產費となつた「一握の砂」は、その愛兒の火葬の夜に見本刷が出來上つて、いよ〳〵この十一月に出版された。

彼はこの歌集の組み方や製本について、いろ〳〵細かい注意を拂つた。土岐氏の『泣き笑ひ』が彼には氣に入つてゐて（それに歌の傾向も似てゐるし、同じ三行書きであつたから、）それと同じ大きさ、表紙も『泣き笑ひ』と同質同色と指定し、その他「製本は背角、背には何も書かざること……包紙は白紙へよき程のところに赤色に横に」歌集、一握の砂、石川啄木著、東雲堂版、と書くことなどを東雲堂主の西村陽吉氏に賴んだ。

序文は朝日新聞の社會部長だつた籔野椋十（澁川玄耳氏）が書いた。氏はまた啄木を朝日歌壇の選者としてくれた人でもあつた。その序文は次のやうに結んでゐる。

…………

…………

よごれたる足袋穿く時の
氣味わるき思ひに似たる
思出もあり

さうぢや、そんなことがある、斯ういふ様な想ひは、俺にもある。二三十年もかけはなれた此の著者と此の讀者との間にすら共通の感ぢやから、定めし總ての人にもあるのぢやらう、然る處俺等聞及んだ昔から今までの歌に、斯んなすなほに、ずばりと大膽に、率直に詠んだ歌といふものは一向に之れ無い。一寸開けて見てこれぢや、もつと面白い歌が此の集中に滿ちて居るに違ひない。

そも〳〵、歌は人の心を種にして言葉の手品を使ふものとのみ合點して居た拙者は、斯ういふ種も仕掛も無い誰にも承知の出來る歌も亦當節發明に爲つて居たかと、くれ〴〵も感心仕る。新派といふものを途方もないものと感ちがひ致居りたる段、全く拙者のひねくれより起りたることゝ懺悔に及び候也

この澁川氏の評は短いが、よく啄木の歌の長所を指摘したものであつた。

この歌集は豫ての彼の言葉どほり「函館なる郁雨宮崎大四郎君、同國の友文學士花明金田一京助君」の兩氏に捧げられたものであつた。「——予はすでに予のすべてを兩君の前に示しつくしたるものゝ如し。從つて兩君はこゝに歌はれたる歌の一々につきて最も多く知る人なるを信

すればなり。――」

この歌集の出版は歌壇からは毀譽相半ばした。定型派からは排せられ、進歩派からは大いに褒められたのはこの歌集の性質上當然なことである。翌年一月の「讀賣新聞」では「去年の前半期は牧水、夕暮二人の歌が歌壇の中心だつたが、年末に近づくと共に我々の頭は哀果、啄木二人の歌に司配されるやうになつた。」（楠山正雄氏）といふやうにいはれた。勿論『泣き笑ひ』『一握の砂』によつてこの二人の歌人が認められたのである。

歌壇の毀譽とは別にこの歌集に收められた「忘れがたき人々」北海道に於ける評判はすばらしいものであつた。郁雨氏は三月にも渡る長文の批評を書いた。

函館の新聞なぞは「頼みもしないのに」二段拔きの廣告を二週間もしてくれた。小樽でも札幌でも釧路でも特に署名した批評をのせた。

さうしてこの『一握の砂』は民衆のなかに却つて多くの共鳴者を得ていつたのである。

「歌のいろいろ」

啄木は十一月の『創作』に短歌論「一利己主義者と友人との對話」を書き、十月號の同じ雜

誌には次のやうな歌を載せた。彼の興味が××事件以後何處にあつたか、この歌でわかるのである。

何となく顔がさもしき邦人（くにびと）の首府の大空を秋の風吹く
つね日頃好みて言ひし革命の語をつゝしみて秋に入れりけり
今思へばげに彼もまた秋水の一味なりしと知るふしもあり
この世よりのがれむと思ふ企てに遊蕩の名を與へられしかな
秋の風我等明治の青年の危機をかなしむ顔撫でて吹く
時代閉塞の現狀を奈何にせむ秋に入りてことに斯く思ふかな
地圖の上朝鮮國にくろ〳〵と墨をぬりつゝ秋風を聽く
明治四十三年の秋わが心ことに眞面目になりて悲しも

十二月には朝日新聞に「歌のいろ〳〵」を書いた。新聞歌壇の投書の感想などを書いたものであるがこの文の最后は次の章句を以つて終つてゐる。こゝに啄木の思想をよく汲みとること

が出來やう。

「○こんな事を考へて、丁度秒針が一回轉する程の間、私は凝然としてゐた。さうして自分の心が次第々々に暗くなつて行くことを感じた。――私の不便を感じてゐるのは歌を一行に書き下す事ばかりではないのである。しかも私自身が現在に於て意のまゝに改め得るもの、改め得べきものは、僅かにこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置とそれから歌ぐらゐのものである。謂はゞ何うでも可いやうな事ばかりである。さうして其他の眞に私に不便を感じさせ苦痛を感じさせるいろ〳〵の事に對しては、一指をも加へることが出來ないではないか。否、それに忍從し、それに屈服して、慘ましき二重の生活を續けて行く外に此の世に生きる方法を有たないではないか。自分でも色々自分に辯解しては見るものゝ、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、知識賣買制度の犠牲である。

○目を移して、死んだものゝやうに疊の上に投げ出されてある人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。」

また郁雨氏への十二月二十一日の手紙では「油！油！油？君、僕はどうしても僕の思想が時代より一歩進んでゐるといふ自惚を此頃捨てる事が出來ない。」とも述べてゐる。

これでも解るとほり彼の思想は、はつきり社會主義的になつてきてゐる。

そして彼の現實の生活は、愛兒の葬式や何かで暮の二十九日に「日一日苦しくなりぬ頭いたし、君のたすけを待つ身となりぬ」と電報で郁雨氏に送金を頼まねばならぬほどであつた。

ちりぢりと、
蠟燭の燃えつくるごとく、
夜となりたる大晦日かな。

青塗の瀬戸の火鉢によりかかり、
眼閉ぢ、眼を開け、
時を惜めり。

何となく明日はよき事あるごとく
思ふ心を

叱りて眠る。

啄木は郁雨氏からの送金を受けてこの年も越すことが出來た。その御禮の手紙の後に彼はかう書いた。

「僕は然し來年は屹度いい年だらうと思つてゐるよ、御弊をかつぐやうだが今年は後厄だつたからなア――」

かくして啄木は四十四年の「屹度いい年」を迎へた。

四十四年の正月

何となく、
今年はよい事あるごとし。
元旦の朝晴れて風無し。

年明けてゆるめる心！

うつとりと
來し方をすべて忘れしごとし。

昨日まで朝から晩まで張りつめし
あのこころもち、
忘れじと思へど。

腹の底より欠伸(あくび)もよほし
ながながと欠伸してみぬ、
今年の元日。

戸の面には羽子(はね)突く音す。
笑ふ聲す。
去年の正月にかへれるごとし。

いつの年も、
似たよな歌を二つ三つ
年賀の文に書いてよこす友。

正月の四日になりて
あの人の
年に一度の葉書も來にけり。

世におこなひがたき事のみ考へる
われの頭よ!
今年もしかるか。

過ぎゆける一年のつかれ出しものか、
元日といふに

うとうと眠し。

それとなく
その由るところ悲しまる、
元日の午後の眠たき心。

ぢつとして、
蜜柑のつゆに染まりたる爪を見つむる
心もとなさ！

「悲しき玩具」

「その因るところ」深い生活の疲れに、啄木の正月はうと〳〵と眠氣を催し、腹の底から欠伸をしてみるのであつた。そんなことすら平常は、生活の壓迫が彼にはさせないところのものであつたのである。

格別の嬉しさも、樂しみもある譯ではない。しかし正月といへば氣持の上で、欠伸をし、眠

氣を催すだけのゆとりはあつた。それもほんの正月の中だけ、すぐにまたもとのきびしい生活にかへるのである。

いつしかに正月も過ぎて、
わが生活（くらし）が
またもとの道にはまり來れり。

さうして松の内もすぎ、一月九日の書簡では彼は次のやうに云ひ得るやうになつてゐた。「……僕は石川一である。……僕は一新聞社の雇人として生活しつゝ將來の社會×のために思考し準備してゐる男である。……（中略）さうして僕は必ず現在の社會組織經濟組織を××しなければならぬと信じてゐる。これは僕の空論でなくて、過去數年間の實生活から得た結論である。僕は他日僕の所信の上に立つて多少の活動をしたいと思ふ。僕は長い間自分を社會主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない。無論社會主義は最後の理想ではない、人類の社會的理想の結局は×××主義

の外にない。……然し×××主義はどこまでも最後の理想だ、實際家は先づ社會主義者、若しくは國家社會主義者でなくてはならぬ、僕は僕の全身の熱心を今この問題に傾けてゐる、……僕は今の一切の舊思想、舊制度に不滿足だ……」

彼のこの思想は、クロポトキンの著書を讀んで、一層自分の思想を確固と感じてゐたのであつた。

そこへ彼は××事件の辯護士、「スバル」の平出修氏から、その事件の書類を借讀することを得て、一層思想的に影響されるところがあつた。

「樹木と果實」

「泣き笑ひ」の著者土岐哀果氏と啄木がはじめて會つたのはこの年明治四十四年一月十三日であつた。その前日、哀果氏から、逢ひたい旨を電話で朝日新聞社にゐる啄木のところへかけて打合せておいたのであつた。

啄木はその日約束の如く讀賣新聞社に哀果氏を訪ねていつた。（當時土岐氏は讀賣の社會部記者をしてゐた。）

二人はすぐ連れ立つて弓町の啄木の家へ行つた。そのときの事を哀果氏はかう歌つてゐる。

夜はじめて訪ねてゆきし
わが友の二階ずまひの
冬の九時かな

その夜二人は一合五勺ほど酒を食み、掛蕎麥を食べた。この二人の脩籍出身の（哀果氏の家は淺草のお寺等光寺であつた。啄木が死んだとき葬ひをしてくれたのもその淺草のお寺た。）同じく新聞記者にして、同じく進歩的な歌人の間には、「その時二人で雜誌を出さうぢやないかといふ相談が起つた。」（郁雨氏への手紙）

この相談はたちまち二人の間に一致した。翌日細かい計算をして啄木はその費用の援助を郁雨氏に賴んでみた。郁雨氏からは承諾の返事がきて啄木を喜ばせた。

はじめは「大分遊戲的な意味の多きパンフレット」でも出さうかといふことだつたが、例の啄木の凝り性から、「すつた揉んだの末、小さくともよいから」そして「表面は歌の革新といふこ

とを看板にした文學雜誌ですが、啄木の考へでは「保證金を納めない雜誌としての可能の範圍に於て『次の時代』『新しき社會』といふものに對する青年の思想を煽動しよう」とするのであつた。婦人問題なども取上げたく、婦人の讀者なども――成るべく前金豫約で――募集したりした。北海道や故郷の岩手縣ではすぐ讀者も出來るやうに思へた。

雜誌の名は「樹木と果實」といふのであつた。

が、啄木が大いに張り込んだ「樹木と果實」も遂に出ることは出來ないでしまつた。それは啄木の病氣、入院、それに印刷所三正舍の不信などが原因だつた。そして印刷所の方へは金も渡し、原稿も行つたのであるが遂に出ることが出來ないでしまつたのである。

晩　　年

發病――入院

啄木の病氣といふのは、去年の秋ごろからで下腹が大きくなつてきたのである。啄木は『一握の砂』の中でも

　　晴れし日の公園に來て
　　あゆみつつ
　　わがこのごろの衰へを知る

と歌つてゐるが、それがだん〳〵腹のふくれやうがひどくなつてきた。しかしはじめは却つて、それが腹に力がたまつたやうな氣がして、

おほどかな心來れり
歩くにも
腹に力のたまるが如し

などゝ喜んでゐたのであつた。がその黄いろく青つぽい皮膚のいろの「太つた腹」の具合が普通ではないらしいことに氣付き、太田正雄（木下杢太郎）氏の好意で青大三浦内科の青柳といふ醫者に診て貰つた。醫者ははち切れさうにふくれた腹を一目見て「あゝいけないいけないこれあ可けません」といつた。

「すぐ入院しなくてはいけません。遲れては可けません。今日處方を書いてあげてもいゝが上げずにおきませう。一日や二日藥をのんだつて何ンにもならないから……」

それでも啄木は別段痛みもしないので仕事をしながら治すことは出來ないものかきいてみた。すると「そんなノンキな事を云つてゐたら、あなたの生命はたつた一年です」といはれた。

『腹膜炎ですか』

『さうです。慢性ですから痛みがないのです。何しろ一日も早く入院する外途はありません。

毎晩夢を見るでせう？　さうでせう、內臟が非常に壓迫されたるから、かうして十日も經つと飯も食へない位ふくらんで來ます。そして餘病を併發します。』
『どうも大分おどかされますね。』
『おどかしぢやありません。痛くないからあなたは病氣を輕蔑してゐるらしいが。腹膜炎は、腹に起ると胸に起るだけの相違で肋膜と同じやうなものです。兄弟です。肋膜から肺になるやうに腹膜からもなります。腦膜炎も起します。』
『入院したら何ケ月かゝるでせうか？　一月もかゝるでせうか』
『串談ぢやありません。とても何ケ月などゝ言ふことは出來ません。すつかり治るにはマア五年間ですな。五年間は醫者のいつた通りにしてゐないと再發します。』
『しかし五年間入院してゐるんぢやないでせう。社の方へ屆けておく必要もあるんです。マア何ケ月と言つたらいゝでせう？』
『さう！　とてもはつきり言へないが、それぢやマア三ケ月と言つたらいゝでせう。』……
かういはれて歸つて來たが、それでも僕はまだ可笑しかつた。『腹がふくれただけなんだもの』そんな氣がした。然しまた『一年だけの生命』といふことが妙に頭を壓迫した。』（郁雨氏

への書簡）

そして四日の午後、青山内科第十八號に施療患者として僅かの藥代位の入院料で入院した。同室者は二人とも若い人であつた。

七日に手術をした。腹からはウイスキーのやうた水が一升五合も出た。まだ殘つてゐたが貧血を起してそれなり中止したのであつた。經過は良かつた。十三日から門內散步の許可が出た。

それで十五日には五號室へ移された。これは同室十二人だつた。

ドア推してひと足出れば、
病人の目にはてもなき
長廊下かな。

重い荷を下したやうな
氣持なりき、

この寢臺の上に來ていねしとき。

そんならば生命が欲しくないのかと
醫者に言はれて、
だまりし心！

眞夜中にふと目がさめて
わけもなく泣きたくなりて
蒲團をかぶれる。

話しかけて返事のなきに
よく見れば
泣いてゐたりき、隣の患者。

病室の窓にもたれて、

久しぶりに巡査を見たりと
よろこべるかな。

晴れし日のかなしみの一つ！
病室の窓にもたれて
煙草を味ふ。

夜おそく何處やらの室の騷がしきは
人や死にたらむと、
息をひそむる。

脈をとる看護婦の手の
あたたかき日あり
つめたく堅き日もあり。

病院に入りて初めての夜といふに
すぐ寝入りしが、
物足らぬかな。

ふくれたる腹を撫でつつ
病院の寝臺に、ひとり
かなしみてあり。

目さませば、からだ痛くて
動かれず。
泣きたくなりて夜明くるを待つ。

びつしよりと盗汗出てゐる
あけがたの

また覺めやらぬ重きかなしみ。

ぼんやりとした悲しみが、
夜となれば、
寢臺の上にそつと來て乘る。

病院の窓によりつつ
いろいろの人の
元氣に歩くを眺む。

もうお前の心底をよく見屆けたと、
夢に母來て
泣いてゆきしかな。

思ふこと盜みきかるる如くにて、

つと胸を引きぬ——
聽診器より。

看護婦の徹夜するまで、
わが病ひ、
わるくなれともひそかに願へる。

病院に來て、
妻や子をいつくしむ
まことの我にかへりけるかな。

廻診の醫者の遲さよ！
痛みある胸に手をおきて
かたく眼をとづ。

醫者の顏色をぢつと見し外に
何も見ざりき――
　胸の痛み募る日。

病みてあれば心も溺るらむ！
さまざまの
泣きたきことが胸にあつまる。

寢つつ讀む本の重さに
　つかれたる
手を休めては、物を思へり。

いつか、是非、出さんと思ふ本のことを
表紙のことなど

妻に語れる。

胸いたみ、
春の霙の降る日なり。
藥に噎せて伏して眼をとづ。

あたらしきサラドの色の
うれしさに
箸とりあげて見は見つれども――

「悲しき玩具」

この二月の三日の日だつた。若山牧水氏がはじめて啄木を訪ねていつたのは。そしてこの牧水氏こそ啄木が臨床の折に居合せた友人のたゞ一人でもあつたのである。

啄木は、その牧水氏の雜誌「創作」一月號に『方角』(短歌九首)二月に『都合わるき性格』(二十首)三月にはその病床吟『寢臺より』十八首を發表した。

この「創作」といふのは、四十三年三月東雲堂から發行されたので、最初は前田夕暮、尾上柴舟、相馬御風、太田水穂、土岐哀果、の諸氏に牧水等が書いてゐた綜合雜誌であつた。それがこの一月から牧水氏の機關雜誌となつたものである。この「創作」の發行以後新詩社の正系だつた「スバル」は衰へていつた。啄木もまた、すでに「スバル」と主張を異にし、彼の作品もこの「創作」に發表されるやうになつたのである。

それは歌壇的にいへば、「明星」「スバル」の浪漫派唯美派がすでに衰へ、自然主義的な「創作」によつた前記の人々の世となつてゐたのである。一方には子規のあとを繼ぐアララギが確固たる地位を占めてゐた。伊藤千夫、長塚節等の歌人が續々傑作を發表してゐたのである。

そこへ新らしき生活態度の啄木、哀果の二人が所謂「短歌」に對して新らしい意義と、革新とをもたらしたのであつた。そしてこの新らしい自由律的格調はやがて他の自然主義思潮と共に「創作」の牧水氏らの一頃の字餘り短歌時代に影響するところともなつたのである。

啄木は病院で、集つてくる「樹木と果實」の原稿をみたり、クロポトキンの英譯自叙傳をよんだりした。

九谷喜市氏から議會傍聽の話をきいて、議會無用論――改造論を唱へてみたいなどゝ亢奮して考へたのもこのころのことだ。

珍らしく、今日は、
議會を罵りつつ涙出てたり。
うれしと思ふ。

自分よりも年若き人に、
半日も氣焔を吐きて、
つかれし心！

病院生活の無聊に、彼の精神は餘計にうづうづしてゐたのである。
そのうちに深呼吸をすると、右肺の底の方が少し痛くなるやうであつた。肋膜炎を起したらしかつた。そして三月のはじめに肋膜にたまつた水をとつた。一時は熱が高くて一週間許りは

新聞を讀むことも禁じられたほどであつた。

退院・療養・詩作

それでも、三月十五日午後退院して弓町の二階で靜養することゝなつた。しかしながら發熱がつゞき、不眠症にかゝつたりして不快な日々を送り迎へた。

もう春も櫻が咲くころとなつてゐた。病床に退屈してしまふと本鄕三丁目あたりまで散步に出かけ靑木堂のコヽアを喫んでみたりした。四月になつては上野の櫻をみに人力車に乘つて出かけもした。

腹膜の水もほとんどなくなり、幾分か元氣づいた。さうした四月のある日、それは七日の夜だつたが啄木は土岐氏と丸谷喜市氏の三人で淺草まで電車で出かけた。米久で三人して牛肉を食べた。出かけてみたくて、行つてはみたが、彼の病氣にはいゝ事ではなかつた。歸つてくるとまた熱が出た。「あの晩——もう大分前だが——は少し熱が出たつけ。しかし翌日はもう何ともなかつた。爾來淺草がすつかりイヤになつちやつた。」彼はかう土岐氏に打ちあけてゐる。(四月十六日。)

このころ「樹木と果實」の計畫は前に書いたやうな理由から遂に發行することが出來なくなつたのであつた。

啄木は長びく病苦に心を痛めた。四月二十七日の土岐氏の書簡に

「あの時も失敬、その後も失敬、歌が時々新聞に出るので喜んでゐる、僕は依然として變りなしだ、矢つぱり毎日熱が出る、それが平均して見て三週間前と少しも變らないので此頃は少々ばかり悲觀してる、何とかして早く健康になる工夫はないものかしら、……もう少し病氣がよくなつたら借りてゐる本を持つて遊びに行きたいと思つてゐる。この頃はもう養生する金もなくなつたし、何か書きたいにも書く程の勇氣も出ないし、實に下らない世の中になつた、仕方がないから獨逸語の研究でも始めようかと思つてゐる。早く直りたい／＼、さよなら」

早く直りたい、直りたい、しかし衰へた身體は思ふやうに快くならず、しかも金もない。物を書く元氣もない。彼は週刊平民新聞に出てゐるトルストイの日露戰爭論「爾曹悔改めよ」の筆寫をはじめてみた。そして彼は初めてトルストイのこの論文を英文で讀んだ八年前十九歳の時と現在再びよんだ讀後の感想の相違などを書いてみた。「トルストイ翁の日露戰爭論に就て」がそれである。その文章の最後に彼は斯う結んでゐる。

「……予も亦無雜作に戰爭を是認し、且つ好む『日本人』の一人であつたのである。

その後、予が故に初めてこの論文を思ひ出し、さうして之を態々寫し取るやうな心を起すまでには八年の歳月が色々の起伏を以て流れて行つた。八年！　今や日本の海軍は更に××戰爭の爲に準備せられてゐる。さうしてかの偉大なる露西亞人はもう此世の人でない。

然し予は今猶決してトルストイ宗の信者ではないのである。予はたゞ翁のこの論に對して、今も猶「偉い。然し行はれない。」といふ外はない。但しそれは八年前とは全く違つた意味に於てゞある。

この論文を書いた時、翁は七十七歳であつた。」

彼は燃えるやうな社會意識の昂りを感じながら、しかも病氣のどうにも遣瀬ない境遇にあつて、物を書く元氣も失せがちな悶々の日を送らねばならない。

しかも一家の柱の頼む啄木が病臥して家庭生活はます／＼困窮するばかりである。

月に三十圓もあれば、田舍にては、
樂に暮せると——！

ひよつと思へる。

そんな苦しい中にあつても彼の思ふことは新らしき社會であつた。

友も、妻も、かなしと思ふらし、――
病みても猶、
革命のことロに絶たねば。

そしてその遣りどころない憤懣は、時には子供まで叱りつける。

子を叱る、あはれ、この心よ。
熱高き日の癖とのみ
妻よ、思ふな。

しかし、あまり病氣が長びくと、却つて慣れてしまふやうになる。どうにでもなれ、とも思

ふやうになる。

かかる目に
　すでに幾度會へることぞ！
成るがままに成れと今は思ふなり。

病みて四月——
　そのときどきに變りたる
くすりの味もなつかしきかな。

病みて四月——
　その間にも、猶、目に見えて、
わが子の脊丈のびしかなしみ、

すこやかに、

脊丈のびゆく子を見つつ、
　われの日毎にさびしきは何ぞ。

可愛いくてならぬ子供、その子には親として思ふ存分のこともしてやれない。それだのに子は丈夫に、すく〳〵と何の苦も不平もなく育つてゆく。それを見るにつけても、あはれさびしき親心なのである。そのやうな彼のその子を自分の側に坐らせてみる。

　まくら邊に子を坐らせて、
まじまじとその顔を見れば、
　逃げてゆきしかな。

ぱた〳〵と逃げてゆく子は、いつのまに大きくなつたのだらう。――

　いつも、子を
うるさきものに思ひゐし間に

その子、五歳になれり。

その子供にだけは自分達のやうな苦しみはさせたくない。

その親にも、
　親の親にも似るなかれ――
かく汝が父は思へるぞ、子よ。

かなしきは、
（われもしかりき）
叱れども、打てども泣かぬ兒の心なる。

さういふ子はまた啄木の口眞似もする。

「勞働者」「革命」などいふ言葉を

聞きおぼえたる
五歳の子かな。

時として、
あらん限りの聲を出し、
唱歌をうたふ子をほめてみる。

まじまじと見られゝば逃げる子供も、「父」の側に素直に心を和ませるときもあつた。

何思ひけむ——
玩具(おもちゃ)をすてておとなしく、
わが側に來て子の坐りたる。

お菓子貰ふ時も忘れて、

二階より、
町の往來(ゆきき)を眺むる子かな。

啄木は愛兒を思ひ、かういふ自分を頼りにしてゐる父母を思ひ、さては、遠い故郷の閑古鳥を偲んだ。

いま、夢に閑古鳥を聞けり、
閑古鳥を忘れざりしが
かなしくあるかな。

閑古鳥!
澁民村の山莊をめぐる林の
あかつきなつかし。

今日もまた胸に痛みあり。

死ぬならば
ふるさとに行きて死なむと思ふ。

六月には熱も七度五分位になつてゐた。

いつしかに夏となれりけり。
やみあがりの目にこころよき
雨のあかるさ！

さうして啄木には、また詩の創作欲が湧いてきた。そして作つたのが有名な長詩『はてしなき議論の後』『ココアのひと匙』『書齋の午後』『激論』『墓碑銘』『古びたる鞄をあけて』『家』『飛行機』などの詩である。特に『はてしなき議論の後』『激論』『墓碑銘』等は我が國社會主義詩のそも〳〵のものであり、またその傑作でもあつた。『家』『飛行機』はまた啄木の詩人的な感情と人間的な温かさのよく出てゐるものである。

次にそれらの詩をあげてみやう。これらの詩こそかつての浪漫詩人啄木をして、完全にいま

は社會主義詩人として、その第一人者たらしめたものなのである。

はてしなき議論の後

われらの且つ讀み、且つ議論を鬪はすこと、
しかしてわれらの眼の輝やけること、
五十年前の露西亞の青年に劣らず。
われらは何を爲すべきかを議論す。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたゝきて、
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。

われらはわれらの求むるものの何なるかを知る、
また、民衆の求むるものの何なるかを知る、
しかして、我等の何を爲すべきかを知る。
實に五十年前の露西亞の青年よりも多く知れり。

されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて
'V NAR'OD!' と叫び出づるものなし。

此處にあつまれる者は皆青年なり。
常に世に新らしきものを作り出だす青年なり。
われらは老人の早く死に、しかしてわれらの遂にわれらの勝つべきを知る。
見よ、われらの眼の輝けるを、またその議論の激しきを。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NAR'OD!' と叫び出づるものなし。

ああ、蠟燭はすでに三度も取りかへられ、
食料の茶碗には小さき羽蟲の死骸浮び、
若き婦人の熱心に變りはなけれど、
その眼には、はてしなき議論の後の疲れあり。

されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。

ココアのひと匙

われは知る、テロリストの
かなしき心を——
言葉とおこなひとを分ちがたき
ただひとつの心を、
奪はれたる言葉のかはりに
おこなひをもて語らんとする心を、
われとわがからだを敵に擲げつくる心を——
しかして、そは眞面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり。

はてしなき議論の後の

冷めたるココアのひと匙を啜りて、
そのうすにがき舌觸りに、
われは知る、テロリストの
かなしき、かなしき心を。

書齋の午後

われはこの國の女を好まず。

讀みさしの舶來の本の
手ざはりあらき紙の上に、
あやまちて零(こぼ)したる葡萄酒の
なかなかに浸みてゆかぬかなしみ。

われはこの國の女を好まず。

墓碑銘

われは常にかれを尊敬せりき、
しかして今も猶尊敬す——
かの郊外の墓地の栗の木の下に
かれを葬りて、すでにふた月を經たれど。

げに、われらの會合の席に彼を見ずなりてより、
すでにふた月は過ぎ去りたり。
かれは議論家にてはなかりしかど、
なくてかなはぬ一人なりしが。

或る時、彼の語りけるは、
「同志よ、われの無言をとがむることなかれ。

われは議論すること能はず、
されど、我には何時にても起つことを得る準備あり。」

「彼の眼は常に論者の怯懦を叱責す。」
同志の一人はかくかれを評しき。
然り、われもまた度度しかく感じたりき。
しかして、今や再びその眼より正義の叱責をうくることなし。

かれは勞働者――一個の機械職工なりき。
かれは常に熱心に、且つ快活に働き、
暇あれば同志と語り、またよく讀書したり。
かれは煙草も酒も用ゐざりき。

かれの眞摯にして不屈、且つ思慮深き性格は、

かのジュラの山地のバクウニンが友を忍ばしめたり。
かれは烈しき熱に冒されて、病の床に横はりつつ、
なほよく死にいたるまで譫語(うはごと)を口にせざりき。

「今日は五月一日なり、われらの日なり。」
これかれのわれに遺したる最後の言葉なり。
その日の朝、われはかれの病を見舞ひ、
その日の午、かれは遂に永き眠りに入れり。

ああ、かの廣き額と、鐵槌のごとき腕(かひな)と、
しかして、また、かの生を恐れざりしごとく
死を恐れざりし、常に直視する眼と、
眼つぶれば今も猶わが前にあり。

彼の遺骸は、一個の唯物論者として、

かの栗の木の下に葬られたり。
われら同志の撰びたる墓碑銘は左の如し、
「われには何時にても起つことを得る準備あり。」

古びたる鞄をあけて

わが友は、古びたる鞄をあけて、
ほの暗き蠟燭の火影の散らぼへる床に
いろいろの本を取り出だしたり。
そは皆、この國にて禁じられたるものなりき。

やがて、わが友は一葉の寫眞を探しあてて、
「これなり」とわが手に置くや、
靜かにまた窓に凭りて口笛を吹き出だしたり。
そは美くしとにもあらぬ若き女の寫眞なりき。

家

今朝も、ふと、目のさめしとき、
わが家と呼ぶべき家の欲しくなりて、
顔洗ふ間もそのことをそこはかとなく思ひしが、
つとめ先より一日の仕事を了へて歸り來て、
夕餉の後の茶を啜り、煙草をのめば、
むらさきの煙の味のなつかしさ、
はかなくもまたそのことのひよつと心に浮び來る——
はかなくもまたかなしくも。

場所は、鐵道に遠からぬ、
心おきなき故鄕（ふるさと）の村のはづれに選びてむ。
西洋風の木造のさつぱりとしたひと構へ、

高からずとも、さてはまた何の飾りのなくとても、
廣き階段とバルコンと明るき書齋……
げにさなり、すわり心地のよき椅子も。

この幾年に幾度も思ひしはこの家のこと、
思ひし毎に少しづつ變へし間取りのさまなどを
心のうちに描きつつ、
ランプの笠の眞白きにそれとなく眼をあつむれば、
その家に住むたのしさのまざまざ見ゆる心地して、
泣く兒に添乳する妻のひと間の隅のあちら向き、
そを幸ひと口もとにはかなき笑みものぼり來る。

さて、その庭は廣くして草の繁るにまかせてむ。
夏ともなれば、夏の雨、おのがじしなる草の葉に

音立てて降るこころよさ。
またその隅にひともとの大樹を植ゑて、
白塗の木の腰掛を根に置かむ――
雨降らぬ日は其處に出て、
かの煙濃く、かをりよき埃及煙草ふかしつつ、
四五日おきに送り來る丸善よりの新刊の
本の頁を切りかけて、
食事の知らせあるまでをうつらうつらと過ごすべく、
また、ことごとにつぶらなる眼を見ひらきて聞きはるる
村の子供を集めては、いろいろの話聞かすべく……

はかなくも、またかなしくも、
いつとしもなく若き日にわかれ來りて、
月月のくらしのことに疲れゆく、

都市居住者のいそがしき心に一度浮びては、
はかなくも、またかなしくも、
なつかしくして、何時までも棄つるに惜しきこの思ひ、
そのかずかずの滿たされぬ望みと共に、
はじめより空しきことを知りながら、
なほ、若き日に人知れず戀せしときの眼付して、
妻にも告げず、眞白なるランプの笠を見つめつつ、
ひとりひそかに、熱心に、心のうちに思ひつづくる。

飛　行　機

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを、

給仕づとめの少年が、

たまに非番の日曜日、
肺病やみの母親となつた二人の家にゐて、
ひとりせつせとリイダアの獨學をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

このうち『家』の詩は彼の長い貧しい生活のなかで、せめて思ふことの出來る一つの啄木らしい空想であつた。「はじめより空しきことと知りながら」彼はその空想を樂しんだ。土岐善麿氏は啄木忌にはいつでもこの詩を朗唱するといふことであるが、「はかなくもまたかなし」い、啄木の氣持のさながらにうかゞはれるものである。

金田一氏訪問

啄木の病氣は六月に入つて氣候が惡くなると一緒にまたいけなくなつた。左の胸が痛みだし

た。これは乾性肋膜炎だつた。その痛みが無くなつたとき、彼は久しぶりで湯に入つてみた。それから運惡く風邪をひいて、咳が出たり、その度に少し痛みを感じた。それが十二日頃には突然四十度三分といふ高熱に冒されてしまつた。それが七八日續いて、八度三分位に下るやうになつても、もうすつかり疲れ切り、食慾も無くなつてしまつた。

啄木はかう惡くなる前、七月のある日、杖をつきながら弓町から歩いて森川町の金田一氏を訪ねていつた。それは啄木自身の思想上の轉機についてわざ〳〵金田一氏に話しに來たのであつた。——今自分の到達した思想の傾向は、強いていへば、社會主義的帝國主義（こんな反對の言葉を結付けておかしいが）——といふのであつた。一切の現實を此儘肯定しようとする、さういふやうなことであつた。

彼は激烈な社會主義的革命の思想を經て、ふたたび現實をありのまゝで肯定しようとしてゐた——と、この彼の思想は、後に、啄木の七回忌に當つて金田一氏が時事新報紙上に「石川君最後の來訪の追憶」と題して書いた。（大正八年四月十二日）そのことが意外の波紋を生ずることとなつた。

この啄木の思想の展開を以て「啄木は遂に變節したか」とするものもあつた。それについて金田一氏はその詳しい事情を昭和二年一月の「改造」誌上に「晩年の思想的展開」として委細を發表した。

この金田一氏訪問の、彼の思想告白はいろいろ問題になる。しかし、その「社會主義的帝國主義なる表現のあらゆる不完全さにも拘はらず、正に何を指すかを明瞭々と示唆してゐる」と中野重治氏は述べてゐる。そしてこの見解はまた左翼の人一般の考へでもある筈である。

久堅町移轉

さて、啄木のからだも弱り、その上、節子さんも咳をするやうになつてゐた。近所の醫者に診て貰ふと氣管と胃腸が惡いといふことであつた。どうも思ふやうな容體でないので、大學病院へ行つて診て貰ふと左の肺がカタール症を起してゐることがわかつた。

啄木もせつ子さんも臥たり起きたりの容體なので老母一人で炊事萬端をやらねばならない。それやこれや、二階借りでは不便なので一軒の家を借りたかつた。啄木はその旨を函館の郁雨氏のところへ云つてやつた。郁雨氏からは早速電報爲替で四十圓送つて來た。

買ひおきし
薬つきたる朝に來し
友のなさけの爲替のかなしさ。

その金で、節子さんの探してきた借家へ引越すことが出來た。八月七日、少しばかりの家財道具を纏めて、喜之床の二階から、小石川區久堅町七十四番地の日當りのいい家へ移つた。喜之床では二ヶ月たまつた家賃をまけてくれた。

引越しの朝の足もとに落ちてゐぬ、
女の寫眞！
忘れゐし寫眞！

古新聞！
おやここにおれの歌の事を賞めて書いてあり

二三行なれど。

久堅町の家は庭もあり、樹もあり、あたりも靜かであつた。三疊の玄關、八疊六疊の二間あつて、そこには椽側もあつた。彼はその椽側に坐つてみて、久しぶりに蒼空や樹木を眺めしみじみするのであつた。

枕邊の障子あけさせて、
空を見る癖もつけるかな、――
長き病に。

この久堅町の家へ移つて啄木は食慾なども出てやゝ調子もいいやうであつた。が、まだまだ一時間とは起きてゐられなかつた。そのうち神經衰弱氣味となり、夜は葡萄酒を飮んで寢なければ眠れないやうになつた。そんな心の疲れた單調な日日を送つてゐる彼の　眼に入る顏は、父の顏、母の顏、妻の顏、妹の顏、子の顏――この五つの顏の外にはゞなかつた。妹の光子さん

は、名古屋の聖心女學院に行つてゐたのが、七月十八日に上京しすぐ旭川へ歸つたのであつた。
が、また啄木の家へ手傳ひや看護に來てゐるのであつた。友人も來ない久堅町の單調な生活の中で彼が讀んだものは「芭蕉、蕪村の句集と古詩韻範」位のものであつた。その外には朝くる四種の新聞と、夕方郵便でくる三種の地方新聞だけ。

おれが若しこの新聞の主筆ならば、
やらむ――と思ひし
いろいろの事！

と歌つてゐるやうに新聞好きな彼は、これらの新聞だけは眞面目に讀んだ。そこからは「毎日々々同じやうで變つた記事や論說の間から、時々時代進轉の隱微なる消息が針のやうに」彼の頭を刺すのであつた。このころは丁度桂內閣總辭職のあつたころであつた。
啄木には七度五分の熱が每日つゞいた。それがいつまで治らないのやら、咳は少くなつたが――

かなしきはわが父！
今日も新聞を讀みあきて、
庭に小蟻と遊べり。

若父は啄木のところへくる多くの新聞に讀みあきると庭などにぽつねんとしてゐた。その姿を見ると彼はいよ〳〵自分が切なくなつてくるのである。

ただ一人の
をとこの子なる我はかく育てり。
父母もかなしかるらむ。

茶まで斷ちて、
わが平復を祈りたまふ
母の今日また何か怒れる。

「母の今日また何か怒れる」——この母はまた妻との間に何か面白くないことがあつたのだ。母堂と節子さんとの間は表面はともかく、裏では打ち解けがたかつた。

家出以來、節子さんは「眉一つ動かさず」總てを耐へしのんでゐたが、それでも久堅町へ移る前、それは六月はじめであつたが、一時離縁問題などが起き上つて彼をまた悩ましたこともある。あの「解けがたき不和の間に」の歌も「猫を飼はばその猫がまた爭ひの種となる」歌もその時作られたものである。啄木にとつてこれは病苦以上の苦しみであつたに違ひなかつた。

やまひ癒えず、
死なず、
日毎にこころの險しくなれる七八月かな。

母堂と京子病む

そのうちに今度はその母堂が病氣になつてしまつた。八月二十日前後から元氣なく下痢してゐた母堂は、二十四日の夕方には三十九度一分の高熱になつてゐた。驚いた啄木は妻を醫者へ

馳らせ、妹に氷を買ひにやつた。醫者はすぐ來て腸カタルだといふことだつた。

「母はそれ以來寢てゐる人になつた。」重湯と玉子の外は何も食べられなかつた。啄木はフラ〱するからだで氷を買ひに行つた。その晩は母堂の熱が三十九度も出、節子さんは氣持が惡いといつて寢てゐた。妹も晝の疲れでグツスリ假寢してしまつてゐた。彼は「やるせない氣持で母に氷嚢を取かへてやつたり熱をはかつてやつたりした。」母の熱はやがて下つた。

母の病もよくなつてきて、新秋九月となつた。そのころの彼の歌——

　兒を叱れば、
泣いて、寢入りぬ
　口すこしあけし寢顔にさはりてみるかな。

八月三十一日の手紙に「京子は毎日隣近所へ遊びに行つては喧嘩をして困る。一町四方聞えるやうな聲をして泣くのが手にとるやうに聞える。それでも歸つて來た時、『今日も泣いたナ』といへば、泣かないと强情をはつてゐる」(あの、打てども泣かぬ兒の心なる、の京子ちやんだ)

何かなしに
肺が小さくなれる如く思ひて起きぬ——
　秋近き朝。

秋近し！
電燈の球のぬくもりの
さはれば指の皮膚に親しき。

ひる寢せし兒の枕邊に
人形を買ひ來てかざり、
ひとり樂しむ。

クリストを人なりといへば
妹の眼が、かなしくも、

われをあはれむ。

線先にまくら出させて、
ひさしぶりに、
ゆふべの空にしたしめるかな。

庭のそとを白き犬ゆけり。
ふりむきて、
犬を飼はむと妻にはかれる。

九月になつて光子さんも名古屋の學校へ歸つて行つた。するとその翌日十五日にこんどはあんなに元氣だつた京子ちやんが晝頃から大變な熱が出た。その熱は夜になつてます〳〵ひどく四十度六分まで上つた。醫者を呼ぶ。夜明けまで眠らずに氷嚢とり換へをした。風邪が因で肺炎を起したのであつた。二日ばかりすぎると夕方からまた四十度に上つた。頭や心臟を冷した

り、彼は「どんな犠牲を拂つてもよいから殺したくないと思」つた。
京子ちやんの病氣は游踪性肺炎で何度もブリ返し〳〵月末ころにはだん〳〵よくなつて行つた。

啄木は相かはらずの容體で十月にたつてからクロポトキンの「戰爭の恐怖」を筆寫したりした。十一月には支那の革命のことが新聞に出て、彼はその記事を讀む度に刺戟され、こころは鬱勃として遂に支那へ行きたくなつた。支那へ行きさへすれば病氣などはすぐ癒つてしまひさうに思へた。はかない彼の亢奮であつた。まだ感想『平信』を書いたのもこのころであつた。かうして「何かよいことのあるやうに」思へた明治四十四年も、却つて不幸なことつゞきで終らねばならなかつた。
「年末といふ鋭い爪を持つた怪物が毎日朝から晩まで頭の底を引掻いて困る。その引掻き方が一日一日烈しくなるのだから弱つちやつた」(十二月二十八日、土岐氏宛)その「鋭い爪」にさいなまれながら病身の彼は苦しい年を越さねばならない。しかも彼にはこれが最後の「年の瀬」を。——

死の年

今も猶やまひ癒えずと告げてやる文さへ書かず深きかなしみに

「深きかなしみ」に明治四十五年の正月を迎へた。正月といつて、樂しいことのあつたためしとてないが、わけて一年病氣で送つたあとの正月である。しかもその病氣が未だに快くならないのである。

「今年ほど新年らしい氣持のしない新年を迎へたことはない。といふよりは寧ろ、新年らしい氣持になるだけの氣力さへない新年だつたといつた方が當つてゐるかも知れない。からだの有様と暮のみじめさを考へると、それも無理はないのだが、あまり可い氣持のものではなかつた。」と彼はこの年の一月一日の日記に書いてゐる。「――『元日だといふのに笑ひ聲一つしないのは、おれの家ばかりだらうな。』かう夕飯の席で言つた時には、さらでだに興のない顔をしてゐた母や妻の顔は見る〳〵曇つた。隣近所の廻禮は、今日から六つといふ京子に口上を教へて、午前のうちに名刺をくばらした。向うからも玄關まで來た。」(同上日記)

このさびしい正月に土岐氏からザボンを貰つた。貰つた晩に半分食べ、殘りの半分を壹晩出してみて、啄木は思はず聲を出して喜んだ。その「厚い皮の內部の柔かい所が何とも言へない程なつかしい薄紅い色をして」ゐた。彼にはザボンの日本の果物らしくない味もおいしかつたが、その見た美しさにも喜んだのであつた。

また金田一氏の去年生れて間もない赤ちやんが死んだのもこのころであつた。その赤ちやんが生れた時、啄木は

生れたといふ葉書みて、
ひとしきり、
顏をはれやかにしてゐたるかな。

と喜び、

そうれみろ、

あの人も子をこしらへたと
何か氣の濟む心地にて寐る。

と早く父となつた自分に引き較べて何か安心したやうにも思つたのであつたが、いまその子の死んだことを知つて驚いた。しかも去年の秋京子ちやんが患つたと同じ肺炎で死んだのである。彼には餘計に金田一氏の悲しみがわかつた。

母の死

さうしてゐる中に母堂が死の床につくやうになつた。彼は自身佐藤北江氏から入院（施療患者として）を進められてゐたのであつたが今は自分の體の騷ぎどころではなかつた。母の病氣はそれほど切迫してゐたのであつた。一月二十二日附の彼の手紙にはその悲慘な有様が目に見えるやうである。

「……老母は此頃ひどく健康を害して寢てゐるのです。さらでだに六十五年の過勞で、とても直視するに忍びない程骨と皮ばかりになつたからだが去年の夏一月許り腸加答兒をやつて以來

めつきり衰へてゐたのでしたが、それが實は四日許り前から三十八度以上の熱があり、日に何度も／＼咳と一しよに血を吐いたのです。もう今迄に御飯茶碗に二つ位は吐いたらうと思ひます。それですつかりまゐつてしまつて、平生寢てゐるといふ事のきらひだつたのが、昨日から床を離れません。吐いた血は肺から出たのか、それとも豫てから惡かつた心臟や胃に關係してゐるのか、それは醫者ならぬ私には分りませんが、兎も角も極めて不祥事ですから或は今度の打擊で再び起たない事になりはすまいかと、心配してゐるので御座います。何しろからだがからだなものですから、少し音がないと心配でならず、夜などは二度も三度も妻に生きてゐるか否かを確めさせる位です。……」

母堂の病氣はやつぱり胸が惡かつたのであつた。しかもそれは「何年前とも知れない痼疾の肺患」であつて左の肺が殆ど駄目になつてゐた。啄木は悲しんだけれども、「金があつても恢復は出來ない」程母の病氣は惡かつた。そして彼には金もない。啄木はもうあきらめねばならなかつた。そして出來るだけ慰め、出來るだけ滋養物を攝らせたいと思ふだけだつた。

啄木は「母の病氣の事が分ると共に、去年からの一家の不幸の源も分つたやうに」思はれた。啄木の病の長びくのもやはり結核性の體質だつたからだ。妻の病氣も、母の病氣を知らずにゐ

た結果としか思はれなかつた。
その節子さんはツベルクリンの注射をしてから、血色もよくなり體重も增してはゐたが、病院へはずつと通つてゐた。

啄木のからだはいけなかつた。熱が三十八度以上もある。解熱劑を日に三度も飮んでも下らない。——「一體誰がかう僕をいぢめるのかな。いくらいぢめたつて仲々降參なぞする僕ぢやないのに。」と土岐氏に訴へてゐるは一月二十七日の夕であつた。
母堂は弱り切つた身體を橫へて、二月もすぎ、三月となつてます〳〵衰弱を加へるばかり。そして三月一日の午後からは、すでに危篤の狀態になつてゐた。
たうとう母堂が死ぬ日が來た。あんなに心配し、夜中に二度も三度も起きて「生きてゐるかどうか」を見に行つてゐたにも不拘、その母の死の際は誰も知らないでしまつたのである。
啄木は母の死を次のやうに妹光子さんに知らしてゐる。
「……俺も母の死ぬよほど前から每日三十九度以上の熱が出るが床に就いて居たため同じ家に居ながらろく〳〵慰めてやる事も出來なかつた。お前の手紙は死ぬ前の晚についた、とてもあ

れを讀んで聞かせても終ひまで聞いて居れる樣な容態ではないので節子が大略を話しするとお前から金が來たといふ事だけがわかつたらしかつた、それからその晩何時頃だつたかはよく記憶しないが「みい、みい」と二度呼んだ、「みいは居ない」と言ふと、それ切り音がなくなつたけが、この外に母はお前に就いて何も言はなかつた、翌る朝、節子が起きて見た時にはもう手や足が冷たくなつて息はしてゐたがいくら呼んでも返事がない、そこで俺も床から這ひ出して呼んで見たがやつぱり同じ事だ、すぐ醫者を迎へたが、その醫者の居るうちにすつかり息が切れてしまつた、お前の送つた金は藥代にならずにお香料になつた、……」

なんといふ、さびしい臨終、悲慘な一家の有樣であらう、かうして、六十有五歳を一期として啄木の母は、筆を持つ力すらもう無くなつた啄木を病床に置いて、さびしく此の世を去つていつたのである。春まだ寒い三月七日のことであつた。

そのとき、彼女の夫は——啄木の父一禎氏はすでにこの家にはゐなかつた。悲慘な家の樣子をみかねて、一人でも糊する口を省かうと去年の九月三日二度目の家出をしてゐたのであつた。

母堂の葬式は、土岐氏の好意で氏の生れた淺草等光寺で營まれた。さうしてそこの墓地へ埋

葬された。

臨　終

母思ひの彼にこの悲慘な母の死は大きい打撃を與へずにはゐなかつた。彼はます／＼元氣がなくなり衰弱が目立つてきた。

四月。――世の中はもう春だつた。櫻が咲いて人の心もウキ／＼するころだつた。啄木はすつかり衰弱し切つたからだを横たへ、暫く往き來が絶えてゐた金田一氏に逢ひたくなつた。久しぶりの顏も見、話もしたかつたのだ。彼は金田一氏に手紙をかいた。

金田一氏はすぐやつてきた。櫻が滿開の日だつた。

「……石川君はその時、『ひよつとしたら自分も今度はだめだ。』と云つた。『醫者は？』と聞くと『藥代を滯るものだから、藥もくれないし、來ても吳れない』といふ。また『いくら自分で生き度いと思つたつて、こんなですもの』と云つて、自分で夜具の脇をあげて腰の骨を見せた。ぐつと突立つた骨盤の皿、髑髏の兩脚を誤つて發いたやうな恐ろしい驚きに、私は覺えず恐い物に蓋をするやうにして『是ぢやいけない、何よりも、兎に角まづ好きなもので滋養にな

るものを食べて、少し太る樣にしなくちや』と云つたら『好きなどころ！米さへ……ない』と顏を歪めて笑つた。私は二の句が出なかつた。『どれ、ちよつとお待ちエんせやは(お待ちなさいよ)と國訛りの挨拶をひとつ殘して、眞驀地に私の家へ引つ返した。道々原稿(金田一氏著『新言語學』の)處置を考へながら。

……原稿はその日すぐ金にはならなかつた。……丁度この日は三十日に貰つた俸給が、仕拂ひをすましたばかりで、あとにまだ十餘圓あつた。それが一個月の私の家の經濟だつた。本の原稿から、二十圓はひるが、それは明日だ、明日までは待てないから、それを融通するのだと家の者へ話して、その十圓を出さして手に握つて馳けて行つたのだつた。

途でドンが鳴つて、午さがりの滿都の花が見頃に咲きみだれ、ばら〳〵と吹雪の樣に顏へかゝるのを、私は額へさがる毛と汗と、一つ手で拂ひながら、馳け馳けして行つたことを記憶する。……」(金田一氏、「石川啄木」)

「ほんの少しですけれど」金田一氏がその金を差し出した時に啄木も節子さんもただ、だまつてゐた。――啄木は目を塞ぎ「片手を出して拜むやうな手眞似をし」節子さんは下を向いて疊の上へぽたりと涙をおとし」た。――

それから數日たつて、死ぬ前々日、牧水氏もまた啄木を訪ねた。飲みたい藥も、食べたいものも食べられない事情を聞き、「助かる命も金のないために自ら殺すのだ」といふやうなこともきゝ、氏は驚いてそのことを土岐氏に話した。土岐氏は早速、啄木の第二歌集出版のことを東雲堂に交渉し、その稿料二十圓を持つて啄木のところへ行つた。それで藥劑を買つて啄木は飲んでみたが、それも半分飲むか飲まないうちに彼はもうこの世の人ではなかつた。

容態はわるくなつてゐた。電報を打つて、家出して室蘭にゐた父一禎氏を呼んだのは四月七八日のころのことだ。

明治四十五年四月十三日。櫻は滿開をすぎてもう散り際だつた。冷え冷えする朝の三時ごろから啄木は昏睡狀態に陷つてゐた。その夜中から彼は金田一氏の名をしきりに呼ぶので夜が明けると節子さんは迎への車を氏の家まで走らせた。氏は「車屋にひどく門を叩かれて出て見ると、「小石川の石川からです、すぐこれへ乘つて」といふ迎へだつたのである。この日は土曜で私が學校が早いので、前夜枕元へ置いて寢た洋服を、寢床の上から着て起きて、すぐ其の車で馳けつけた。

上つてすぐ隔ての襖をあけると、仰向けに此方を向いて寢てゐた石川君の顏、それはすつか

り甕容が來て、面がはりしたのに先づ吐胸を突かれたが、同時に、洞穴があいたやうに、ぱくりと其の口と目と鼻孔が開いて『たのむ』と、大きなかすれた聲が風のやうに私の出ばなへかぶさつて來た。私は死靈にでも逢つたやう、膝が泳いで、のめるやうにそこへ坐つたばかり、いふ所の言葉を知らなかつた。」（金田一氏前揭書）

そこへやはり車夫が迎へに行つた若山牧水氏もきた。三十分もたつと啄木は元氣になり、雜誌の話などをするやうになつた。

やがて金田一氏の方をむいて「學校は遲くなりませんか」といふので、この分なら、とさう思つて氏は學校へ行つた。

金田一氏が部屋を出ると間もなくであつた。啄木の容態が急變した。隨のいろがあやしくなつて來たのである。節子さんと老父とにその場を賴んで牧水は電報を打ちに行つた。歸つてきてみるとやはり昏睡狀態をつゞけてゐる。節子さんは、口うつしに藥を注いだり、唇を濡らすやらした。

——京子ちやんがゐない。牧水氏が探しに戶外へ出てみると、無心な京子ちやんに折から吹雪と散りかゝる櫻花を一心につんで遊んでゐた。……

牧水氏が引つ渡うやうに彼女を抱いてきたとき、もう啄木の息は切れてゐた。――丁度九時をすぎる三十分だつた。

かうして一代の情熱家、詩人啄木は何から何まで苦しみのうちに死んでいつた。そこにはもう彼をいぢめる貧苦もなければ病苦もなかつた。啄木は死んではじめて安らかさを得たといふのだらうか。それにしては彼は未だ〳〵齡二十八歳の若さだつた。彼の企圖し、意圖するものは總て「これから」だつたのである。

彼の總ては――少くともその大部分は未完のものであつた。彼が若くして死に、それによつて殘された諸問題は、それゆゑに、多ければ多いだけ彼の死後の問題であつた。そればかりではない。實にそれは現在以後の大きな問題でもあるのであつた。

葬式と節子さんの轉地「悲しき玩具」

翌、十四日、遺骸は荼毘に付された。そしてその翌日十五日に、葬式は母堂の時のやうに、土岐氏の好意により淺草等光寺で營まれた。土岐氏の令兄土岐月照氏によつてねんごろな法要が濟み、會葬者も二百人を越えた。さびしかつた彼の生前に較べてこの葬ひは、質素だつたが

盛大に行はれた。

遺骨は、等光寺の墓地の中央、大きな柿の木の根もとに埋められた。

啄木は遂に北海道の流浪の生活に出たきり、あれほど懐しんだ故郷の土を二度と踏むこともしないでしまつた。

百姓の多くは酒をやめしといふ。
もつと困らば、
何をやめるらむ。

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

「消ゆる時ない」かなしみと、思慕の情を故郷に寄せて、つひに、ふたゝび團古鳥を聞くこともなかつたのである。

初七日も濟んだ。やがて父一禎氏はふたゝび室蘭へ旅立つて行つた。今は未亡人の節子さんも久堅町のかなしい家を疊むことにした。

そして四月末、いざ出發しようと纏めた荷を玄關に出し、車を呼びに出たあと、何といふこと！、空巣ねらひがすつかり荷造りが出來た行李を浚つていつてしまつたのである。

節子さんは當時身籠つてゐた。それでその養生もあり、海岸へ轉地しようと思つてゐた矢先のことだつた。幼い京子ちやんを連れ茫然自失したであらう様子が思はれる。

それでも土岐氏らの好意と盡力によつてその翌日は靈岸島の梅屋旅館に泊り更にその翌五月一日築地の聖路加病院で身體を診て貰ひ、そのまた翌日東京灣汽船で房州北條へ行くことが出來た。そこでは妹の光子さん（この人は宣教師になつた）の關係から、教會のコルバン夫人といふ人が親切に世話をしてくれた。

やがて六月十四日、この土地で生れたのが二女房江さんだつた。

その同じ月の二十日に、啄木の最後の藥餌の料となつた歌集『悲しき玩具』が出版された。土岐氏によつてその題名は彼の言葉の中から選ばれた。

その『悲しき玩具』は彼の處女歌集『一握の砂』に較べると、その內容も形式もずつとよく

なつてゐる。『一握の砂』ではまだ、「明星」風な空想的、ロマンチツクなところが殘つてゐたが、この『悲しき玩具』に至つてもはやそれらの殘滓を少しもとゞめてゐない。そこには例へば卷頭の

呼吸すれば、
胸の中にて鳴る音あり。
凩よりもさびしきその音!

のやうに、生々しい現實にまともに嚴肅にぶつつかつてゐる。少しもたじろがないリアルな態度が示されてゐる。そこにはあの『はてしなき議論の後』のやうな積極性はないにしろ、多分の感傷を持つてゐるにしろ、感傷(センチメンタル)こそ詩だともいへやう。悲しき人間のつく吐息が、まざまざと表白されてゐる。

遺族

房州北條で二女房江さんをあげた節子さんは大正元年八月十五日北條を發つて函館に移り住

んだ。二人の幼い女兒を抱へて公園の側のさゝやかな家であつた。かつて大火に會つた思ひ出の地、函館――。この函館に移り住んで、しかし、永くはない節子さんのいのちであつた。やがてこの未亡人もまた啄木の後を追ふ日が來た。

大正二年一月から節子さんは病が重り、函館市豊川病院に入院したが、五月五日、たうとうそのはかない生命の絆を斷つた。

「五月五日、夫人臨終、母堂、宮崎氏夫妻みな枕頭にあつまる。夫人、鉛筆で『京子の事をよく賴む』と書き、また與謝野さん、金田一さん、土岐さん、森さん、夏目さんと名を列擧して、『知らせてあげて下さい』と云つて、そして『京子の事をたのんで』それから宮崎氏を顧みて『(妹 氏の令室)を可愛がつてやつてください』と云ひ、そして目をとぢて、『もう死ぬから、皆さん左樣なら』と云つてから、二三分してまた目を開き『仲々死なないものですねえ』と云つた時は、もう皆が泣いてゐた時だつたといふ。それから、もう一度『皆さん左樣なら』と云つて目をとぢた。(年譜)

熱烈に啄木を愛し、嫁してその貧困に苦しみ、姑との不和に惱み、啄木に先立たれた節子さんはかうして北海の濱邊にさびしく死んで行つた。

遺された京子、房江の二女。
京子さんは長じて、大正十五年四月十七日函館の青年記者須見氏と結婚する。石川正雄氏がこの人。
そして二人の間には昭和二年四月長女晴子さんを同四年には長男玲兒君を擧げた。
房江さんは、やはりからだが悪かつた。昭和五年には茅ケ崎の南湖院に入院する身となつた。
この年の十二月はまたかなしい月である。三番目の子を懷姙中の京子さんは幼い二人子をおいて急性肺炎で、六日に亡くなつてしまつた。
その十九日には、房江さんが、南湖院で、この人もまた亡くなつた。
——今は、啄木も死に、節子さんも逝き、その二人の愛兒も同じ運命の人であつた。

墓塋と歌碑

淺草等光寺の柿の木の下に埋められた啄木の遺骨は、その翌年の三月函館圖書館の岡田健藏氏によつて函館の濱邊の墓地に運ばれた。
『あの邊一體が大森濱です。啄木の歌にもありますね』と話しながら岡田君はさつさと歩いて

ゆく。

やがて我々の眼の前には蕭條とした墓場の廣い地域が展けた。蒼白い墓石や朽ちかけた墓標がブチ拔けたやうにちらばつて、人の影もない。

『こゝです』と岡田君の立ちどまつたところは、一ぽんの朽ちかけた墓標の前で、寫眞で見てゐたその啄木の墓がこれだ。墓標は六尺ばかりの角材で、消えかけた正面には『東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる』といふ一首が墨の跡だけ殘つて、すこし高く、木地には風雨のあとがはつきりと刻まれてゐる。我々の足のさきには月見草がひよろ〳〵と莖をのばして、黄ろい花が二三輪潮風にうごいてゐた。

石川　一　明治四十五年四月十三日歿

石川カツ子　明治四十五年三月七日歿

石川　節子　大正二年五月五日歿

石川　眞一　明治四十三年十月廿日歿

僕は墓標の四面にある文字を一々讀んだ。『皆死にましたねえ』と僕は思はず聲に出して言つたが、岡田君は默つてゐた。……

『骨を埋めたところは何處らですか？』

『君のその靴の下あたりです』

『…………』

僕はさう言はれて、なんだかゾッとした。この靴の下にみんなの骨が朽ちつゝある！『骨をうづめたときも、やはりこんなガス（濃霧）のひどい日でね』と岡田君は時々獨語のやうなことをいふ。」（土岐善麿氏著『啄木追懷』）

この土岐氏の文章は、まだ京子さんも房江さんも存命のうちのことである。それがいまは二人ともこの世の人ではない！「皆死んでしまつた」といふこの感慨は、たゞに土岐氏のみの感じだらうか。

啄木のこの立待岬の「一ぽんの朽ちかけた墓標」はその後堂々たる石造の一大塋域に改められた。そこには『啄木一族墓』と大きく横に書かれてある。日本の文學者として恐らくはこれほ

どの墓塋は他にあるまいといはれるほどの豪壯さは、それがあんな一生を終つた啄木にふさはしいかどうかは暫くおいて、たゞこの土地の人々の啄木を追慕するこゝろの如何に大きいか、如何に深いか、それはこの事一つでもわかるのである。

啄木の故鄕澁民村では、今、村の靑年達（その人達は皆かつての啄木の教へ子達だ。）の眞心によつて、北上川のほとりに大きな歌碑が建てられてある。

大正十一年十年忌に村人總出で建てられたこの大きな花崗石の歌碑には、啄木の左の一首が刻まれてある。

やはらかに柳あをめる
北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

啄　木

―了―

後　記

ことしは、啄木が、あの櫻の花の散りしきる日に死んでから、丁度二十五年になる。

その二十五年經つた今日、啄木の名の喧傳されやうは全く驚くばかりである。一般的に現はれたところだけでも、映畫に、レコードに、それから啄木浴衣といふものさへ出來たとか出來るとか聞いてゐる。

このやうなことは、生前啄木のいさゝかでも豫想したことであらうか。

啄木がこのやうにもてはやされるのは、主に彼の哀韻をつたへる短歌の感傷性によるものであらうか。

彼の短歌はわが國和歌史に一つの革命塔を築いたに違ひない。どうして彼がこのやうな革命を爲し遂げ得たか。

情熱の詩人、ロマンチツクな詩人ともつぱら稱せられ、また、社會主義詩人と謂はれてゐる啄

木の本質はどんなものであつたらうか。

――しかし本書は啄木の新らしい『研究』ではない。少しでもこの詩人の本當の姿、ありのまゝの生活、または成長の跡を見出したかつたのである。私をして本書を草せしめた素人書房主の意圖もまたそこにあつたのである。

本書で私は彼の短歌をその生活と結びつけて見、『短歌』をその價値のものとしてはみなかつた。

もつぱら彼の生活を說明するためにその歌を引用したのである。

前にも書いたやうにこの書は啄木の生涯を知るために、いさゝか役立てたいためのものである。總ての『有名な』人の生涯といふものが案外に知られてゐないやうに啄木の生涯もまた知る人が少いのではないかと思はれるが故に。でなかつたら新らしく啄木に親しまふとする人びとのために――。

終りにこの書の爲めに序文を寄せて下さつた石川正雄氏に感謝の意を表したい。

尙、本書をなす爲に參考とし、または引用させていたゞいた著書を茲に記してこれまた感謝したい。

金田一京助氏著　『石川啄木』
吉田孤羊氏著　『啄木を繞る人々』
土岐善麿氏著　『啄木追懷』
中西悟堂氏著　『啄木の詩歌とその一生』
渡邊順三、矢代東村共著　『啄木短歌評釋』
遠地輝武氏著　『石川啄木の硏究』
楽浪書院版　『石川啄木硏究』
石川正雄氏著　『父啄木を語る』
改造社版　『石川啄木全集』
新潮社版　『啄木全集』

昭和十一年六月

和田芳實

昭和十二年二月二十日印刷
昭和十二年二月二十五日發行
昭和十二年五月十五日再版
昭和十二年八月二十五日三版

石川啄木
其生涯と藝術
【定價壹圓八拾錢】

著者　和田芳實
東京市淺草區藏前三ノ七
發行者　神谷潤一
東京市淺草區淺草橋二ノ十三
印刷者　太島豊作

東京市淺草區藏前三ノ六
發行所　三芳屋書店
電話淺草(84)六六六三番
振替東京一一一一六番